
Star-line Second Season

北野 鉄露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Star-line Second Season

【Nコード】

N07110

【作者名】

北野 鉄露

【あらすじ】

重機（CMD）と呼ばれる有人搭乗式人型作業用大型機械が普及した近未来世界。——五年前、国内外に雷名を轟かせた私設警備会社『Star-line』だったが、もはやかつての陸離光彩たる姿は喪われていた。専属するグループ企業が衰退の一途を辿るとともに、刻々と近づいてくるチーム消滅の足音。孤立していく美貌の若き女性隊長・シヨコに手を差し伸べたのは、昔の仲間達だった。固くつながれた絆は新たな力を紡ぎ出し、滅びかけたStar-lineは起死回生の鼓動を打ち始める。都市権力を蝕む凶悪テロ組

織を駆逐し、崩壊しゆく都市を護るために――。
【掲載予定です】

【再生編4は10

落日編 1

背反（前書き）

筆者註）本作品は前作の続編です。

落日編1 背反

突然、秘書室のドアが乱暴に開けられた。

「——私だ、ロゼルだ！ デイゼン知事はいらっしゃるかね！？」
今日は公務による外出予定はない筈だが？」

飛び込んでくるなり怒鳴っている人物が副知事だと知るや、その場にいた秘書達は一斉に緊張した。

入り口の一番近くのデスクに向かっていたメガネの若い女性がおずおずと立ち上がり

「はい、デイゼン知事はただ今、知事公務室にいらっしゃいますか……」

上目遣いになって恐る恐る告げた。

相手が相手だけに他の女性秘書達も立ち上がって話を聴く姿勢を見せたが、ロゼルが何をそんなに興奮しているのだろうといった不可解な表情を隠さない。普段は温和で笑みを絶やさず、末端の職員にまで人気のある副知事なのである。

よほど興奮しているのか、彼は肩で荒く息をしている。

メガネの女性秘書に刺さるような視線を向けたまま大きく一つ頷くと

「……わかった。今から、私が入る」

開け放たれたドアから出て行こうとして振り返り

「出るまでは誰も入れるな。——いいな？」

言い終わるなり、バーン！ と勢いよくドアが閉められた。

思わず身をすくめたメガネの女性秘書。

（何を考えているのだ、あの方は。この都市を賊の手に売っておつものか……！）

絨毯敷きのやや華美な廊下をつんのめるように歩きながら、ロゼルはむらむらと腹が立って仕方がなかった。

が、相手はこの州のトップたる知事である。

面と向かって罵倒する訳にはいかないが、場合によってはそれもやむを得ない——と覚悟しつつ、木目の美しい扉の前に立った。

大きく一つ息を吸って心気を静めると、コツコツ、と扉をノックし「知事、いらっしゃいますか？　ロゼルです」

「——ああ、君か。入りたまえ」

中からの返事を確認したロゼルは、扉の取っ手に手をかけた。

「失礼します……」

入室して正面に視線をやると、大型の高級なデスクに向かっている一人の壮年がいる。

かっちりとした身体を品の良い高級スーツで包み、肩幅からすればやや大きめな、しかしある程度均整のとれた容貌をもっている。

頭髮は両側面と後頭部を残すようにして失われているから、五十六歳という年齢にしては多少早すぎるかも知れない。

壮年は瞬間的に、特徴ある、刺すような鋭い眼差しを入り口に立ったロゼルの方へ向けた。

が、すぐに微笑を浮かべつつ口を開き

「……ロゼル君か。ちょうどいいところに来てくれた。私も、用件があったのだよ」

ファー・レイメンティル州知事、ディゼン・ヴァドラーク。

一週間ほど前に実施された州知事選挙で、保守派の古参議員を大差で破って当選した。目に見えて衰退していく州経済に危機感を抱いた市民達から、徹底改革を公約に掲げる彼が圧倒的な支持を得たのである。いつまでも変わり映えのしない既存の保守派がいよいよ愛想を尽かされたものらしい。

ロゼルはこれまで州都市統治機構にあって篤実な仕事を続けてきたが、そこに目をつけたディゼンから指名を受け、州議会の承認を得て副知事に就任した。

この国家——ヴィルフエイト合衆国——の憲法では、三十五歳以上の男女は誰でも被選挙権を有すると定めている。つまり、副知事は州都市統治機構職員でいて、かつ州知事の指名を受けねば望んで

もなることはできないが、州知事は市民の支持さえ得られれば誰でもなることができるのである。

若くして大手金融機関重役に昇ったディゼン。だが彼の野心はその座に留まっている我が身に満足することなく、やがて早々に退職。すぐに彼は、自ら一企業を立ち上げた。

電子機器製造を主とした彼の会社は大胆な海外拠点拡張戦略によって瞬く間に急成長を遂げ、現在では隣国カイル・ヴァーレン共和国をはじめ国内外に百箇所以上の事業所を擁するに至っている。その後新たに設立した関連企業等を含めれば、その事業拠点はゆうに五百を超える。恐るべき経営手腕といつていい。

ただ、この男の巧妙さは、自分の膝下であり企業グループの本拠地たるファー・レイメンティル州への配慮というものを常に念頭に置いていた点にある。大規模な製造・流通ラインを同州に構築して大量の雇用確保をはかり、かつ他資本との提携によって市民生活に有益な各地域単位の中規模商業圏構築に尽力した。計画が軌道に乗るには十年もの歳月を要したが、これによって同州の失業率上昇は頭打ちとなったほか、州経済流動の円滑化促進によって少なからぬ経済効果を生む主たる要因となった。

計画推進の背景には、いかにもディゼンらしい野心が垣間見えている。しかしその実効性については誰も非難あるいは否定する余地がなかった。

具体性と高い実績に裏打ちされたディゼンの企業的社会貢献施策が、市民感情に響かぬ筈がない。大衆とは、常にこうした即物的な奉仕を欲する。折しも前知事の辞職に伴う州知事選挙実施の運びとなるや、市民の間で彼の出馬を望む声が高まっていったことは言うまでもない。

そして、多少の紆余曲折は得たものの——大勢の予測通り、当選。まるで千里眼をもって時流を見通し、そして機を外さず都市権力をその手につかんだかのようなディゼンの成功ぶりに、国内外の政財界には波紋が広がっていた。将来的に彼が国家統治機構議会の演

台に立つ姿を想像した者も少なくない。

その彼から、名指しで信任を受けたロゼル。

篤実な彼はその胸中、身命を賭して職務遂行に邁進していく決意を固めていた。

この知事の下でならば、停滞しきつたこの都市を変革へと導いていけるかもしれない――。

責任の重大さに、不安は決して小さくなかった。が、むしろそれすら凌駕する勢いで湧き起こってくる希望と期待を、ロゼルは抑えかねた。

それだけに――その事実が意図的に秘匿され続けていたことを知った瞬間、彼は愕然とした。

（これは……！ 国家と市民への裏切りも同じことではないか！）期待と希望は、一瞬のうちに怒りへと変わっていた。

副知事として冷静な対処を自らに課すべきであつたが、もはや激しい怒りをどうにも鎮めることができなかった。この上は直談判に及ぶよりないと思い、こうして公務室まで乗り込んだのである。「公務でご多忙のところ、申し訳ございません。……お時間少々、よろしいでしょうか？」

曇りのない大きな窓ガラスを通して差し込んでくる日光がことのほか目に痛い。

書類にサインするペンを走らせていたディゼンはつと手を止め

「第四期都市再開発計画の件かね？ ついさつき、国家統治機構財務局からの回答が届いたところだ。ミリイ君の想定通り、予算要求調書の――」

「いえ、今私がお邪魔したのは、その件ではありません」

ディゼンの言葉を遮りつつ、懐の内ポケットから一枚の紙片を取り出して示した。

「都市開発計画云々よりも先に、詳らかにしておかねばならない事案があります。――これは一体どういうことでしょうか、知事」

すっかり古くなった新聞記事の切り抜きであつた。

文章が異国の言語で綴られている。その新聞が海外のものであることは一目瞭然である。

記事の中央に、小さく写真が掲載されていた。

奇妙な紋様がプリントされた大きなタペストリーの前で、カメラの方を向いて握手している二人の男。

片や白いフードを頭から被って顔だけを露出、身体もやはり白く大きなマント風な装束で包んでいる。奇装といつていい。顔の面積からすれば大きすぎる眼球が、不敵な鋭さを湛えた視線を放っている。

そしてその男と握手している人物もまた、同様の衣装を身につけている。

が、相貌だけは覆われていないから、カメラはそのまま記録してしまっていた。

誰が見ようと、その男の名前を一発で言い当てるに違いない。

——ディゼン・ヴァドラークだ、と。

切り抜きを示された当人はちよつと片眉を上げただけで、

「……どうということも何も、これは私がカイレル・ヴァーレンに足場を移して事業拡大をはかっていた頃の写真ではないかね。懐かしい。現地の有力な鉱物採掘業者と提携を結んだというので、地元の新聞がちよつとしたニュースだといって記事にしたのだよ。かれこれ、十年と少し前かな……こんな新聞、よく入手したものだ」

淡々と説明しつつ、感心したように微笑を浮かべた。

が、ロゼルは苦い表情を崩さない。

「そのようにお思いだとすれば、記憶違いであると申し上げましょう。ここに写っている、知事と握手しているこの男は、鉱物採掘業者などではない、と」

「これはこれは、君も不思議な事を言う。私もあと数年で六十を迎えるが、これでもまだ衰えていないつもりだがね。脳も精神も肉体も。当時のことは、今でもはっきりと覚えているよ。記憶違いなど——」

「……お二人の背後に写っているタペストリーの紋様が何であるか、私が見らないとお思いですか？」

不必要に言葉数が多くなっていたディゼンは、そこで黙った。

一歩前に踏み出たロゼル。射抜くような視線をディゼンに向けつつも、その相貌は心持ち青ざめている。

「アミュード教、教典原理回歸・選民思想主義、ゴルバ派が掲げるシンボルマークでしょう。——蛇足かも知れませんが知事と握手しているその男、当時のゴルバ派における事実上の指導者ガヴァ・ロー・エンドウ。記憶違いでは済まされない人物です。……随分、物騒な人間とお知り合いだっただようですが」

アミュード教。

中立海峡を挟んだ海向こうの隣国、カイルル・ヴァーレン共和国において国民の実に半数以上が信奉する古来土着の宗教である。

同国は豊富な地下鉱物資源の採掘によって非常な経済的發展を遂げると、強大な軍事力を背景に周辺地域の領土統合に乗り出した。この拡張政策における「万族調和」なる目的は響きこそ良かったが、実際には地下資源採掘権拡大を狙ったものであることは誰の目にも明らかであった。その強引ともいえる方法によって一部地域の住民や民族から反発をかい、後C M D——有人搭乗式人型作業用大型機械——の普及によってその抵抗運動はさらに激化することとなった。カイルル・ヴァーレン国民にアミュード教徒が多いという背景には、そういった歴史的経緯が伴っている。

アミュード教徒は「神の土地を侵す者達」としてカイルル・ヴァーレン並びにその親交国に対して敵意を持ち、抵抗運動が武力によって鎮圧されるや、活動は地下組織化してテロ行為に発展、治安は泥沼化の一途を辿っていった。間もなく、各地に点在するアミュード教徒が連合の上組織化して独立を宣言、これを「アミュード・チエイン神治合州同盟」と呼ぶ。

そして、カイルル・ヴァーレン国外でも反政府運動に携わっている者達が彼等に呼応し、連携を強化し始めた。それらの組織は思想

上の理由あるいは政治的意図によって完全な一枚岩とはならなかったものの、最も巨大で有力な集団が「リン・ゼール」を名乗り、世界各地でテロ行為を行う急先鋒的な存在となった。

こうした経緯を経て、世界各地では「アミュード教」「テロ組織」という認識を持たれるに至っており、当然その強固な関連性を否定することはできない。

ただし、アミュード教には幾つもの分派が存在する。

穏健主義の和平派からテロ組織同様に他民族排撃思想を戴いた過激派、あるいは独自のコミュニティを形成して他派との接触を断絶し自分達だけが神に召されると信じる一派など——正確な統計は存在しないものの、思想の相違から枝分かれた分派は数百にのぼるとされている。

そして写真の中でディゼンが握手している独特な雰囲気をもった男——この人物・ガヴァこそはアミュード教各派の中でも特に狂信的な他民族排撃思想を抱いたゴルバ派の中心者であった。もはや宗教者とは名ばかりの、神の名を語るテロリストとして各国治安当局に認識されている。彼等ゴルバ派が引き起こしたとされる凄惨なテロ事件は枚挙に暇がない。

そういう反社会思想を抱いた人間と握手しておきながら、知らぬ存ぜぬでは通らない。

穿った見方をしなくとも、テロ組織を支援しているのと同義である。

この記事が新聞に掲載された頃というのはディゼンが自ら口にした通り、彼がカイル・ヴァーレンで事業拡大に力を注いでいた時期と一致する。異国の文字で綴られたこの新聞記事が何を報じたものかまでロゼルは確認していなかったが、推測するに——ゴルバ派に対し、多額の資金提供もしくはそれに類する支援を約束した会見であると断じたところで誤りにはならないであろう。

もっとも、ガヴァは自らが襲撃されることを恐れる余り、公に顔を晒すことは滅多になかったと言われている。過激派の首領であり

ながら我が命を惜しんだというあたりに拭い去れない滑稽さが垣間見えるようである。しかしながら彼はこの記事から二年後、組織の内紛に巻き込まれて殺害されている。

ディゼンはそういう事情も加味した上で、態とぼけてみせたのだらうと、ロゼルは踏んでいた。

「いかがでしょうか？ 何か特別な事情をお持ちということならば、この際は非伺っておきたいものです。放っておけば、知事の政治生命に影響しかねません」

「……」

政治的急所を抉るその問いかけに対し、ディゼンはまず沈黙をもつて応えた。

口を噤み、目を閉じている。

それから知事公務室に訪れた静寂は、ほとんど時間が止まったかのように長かった。

彼をじつと注視しているロゼルは直立不動のまま、身じろぎ一つしない。

この状況下にあつて知事・ディゼンがなおも偽りを口にする余地はもはやないであろう。

やがて日の光が厚い雲に遮られ、室内が一瞬暗く陰った。

と、いい加減ロゼルの脚がくたびれてきた頃である。

「……いいだろう。君には、話しておいた方がよさそうだな。私が見込んだ通り、隠し事の通用する相手ではなさそうだ」

ディゼンの低くしかし太い声によって、沈黙は破られた。

「……」

彼はチェアに深く腰掛け直して居住まいを正しつつ、デスクの天板に両肘をついた。

ロゼルに向けられたその眼差しが不敵な光を醸えている。

「……私は、アミュード教徒だよ。その写真が物語っているように、ゴルバ派さ。何せ、サウス・レム出身なものでね。もっとも、今ではゴルバ派と呼ばれていないが」

瞬間、ロゼルは顔をこわばらせた。

「ゴルバ派……！？ 知事、あなたという人は……！」

彼が緊張したのも無理はなかった。

ディゼンが、自分はテロ組織の一員だと認めたにも等しいからである。

かつて、州都市統治機構職員に成り済ました工作員が潜入していたという事象はあった。が、一州のトップたる知事自らがテロ組織と密接な関係を有しているなど、前代未聞といつていい。

しかも、ロゼルの驚愕には別の事情が絡んでいる。

実のところ、現在ゴルバ派なる分派は存在しない。

ゴルバ派は思想見解をめぐって内部闘争に及んだ挙げ句ほとんど潰滅の体となり、他派によって吸収されてしまったのである。指導者ガヴァ・ロー・エンドウが殺害されたのは、この騒ぎの渦中であつたらしい。教徒らの支持を失った上、不正蓄財を逞しくしていたことが露顕したためといわれている。

この時、ゴルバ派に与していた者達の一部は分離独立を宣言、新たに「ニール派」を名乗ったが、ひと月後に彼等は突然の襲撃を受け、所属していた教徒のほとんどが殺害されてしまう。

内部粛清とも受け取れるこの惨劇を演出したのは「ゴザ・ディミニイ」なるグループであつた。

通称・ゴザ派。

現地の言葉で「神の代理」という意味であるらしい。

アミユード教徒の中でも極端な排他思想を持つ者達によって組織された宗教結社だが、その活動はもはや宗教の名を冠するに値するものではなく、世界でもっとも凶悪なテロ組織として認知されるに至っている。その独自の宗教観というのは、他民族、他宗教の排撃こそが神から与えられた崇高な使命であり、目的を達するためには身命を厭わず投げ出すべきというものである。アミユード教の系譜を引く集団のうち、過激思想を抱くグループは決して少なくないものの、彼等をして「聖なるアミユードはついに狂える犬を世界に解

き放ちたもつた」と言わせしめるほど、ゴーザ派の行動は常軌を逸していた。

神に変わって罪の存在（これは自分達以外の人間全てを指すのだが）に裁きを加え、我が命を納めた報いとして神の救いを得るという思想が根底にあるから、ほとんどが捨て身の自爆テロである。ゆえに、起こりうる事件は常に酸鼻を極める上に犯人がもろともだから、世界中の当局も組織の有り様を偵知する術をもたなかった。

弱体化したゴルバ派を内部から切り崩し、四分五裂させたのはこのゴーザ派の仕業であった。

多数のゴルバ派教徒が潰滅後にゴーザ派へとなびいたのは、その根底に脈打つ極端な排他思想という点で一致していたこと、そして同派に属して工作員を志願した者には生活の保証が約束されていたことに因るといわれている。

つまり——現在では「旧ゴルバ派」「現ゴーザ派」という構図が成立するといって過言ではないのだ。

ディゼンの「今ではゴルバ派とは呼ばれていないが」という発言は、そのことを意味している。

ロゼルが思わず震撼したのは、この事情を認知していたからである。

彼はしばらく、直立不動の姿勢を保ったまま呆然としていた。

口を利こうにも、利けなかった。

州の知事が、よりによって世界最悪のテロ組織の関係者であったとは——。

心気朦朧とするほどに驚き、そして恐れたが、平然としているディゼンの姿をあらためて見つめた時、激しい怒りに揺さぶられる胸中をどうすることもできなかった。

度を失おうとする我が身を必死に宥めるロゼル。

ようやく、振り絞るような声で

「あ、あなたは、自分が何をなさっているのか、わかっているのですか！？」
これではまるで、ファー・レイメンティルの都市はアミ

ユード教、もといゴーザ派に乗っ取られたようなものではありませんか……」

身を振るわせつつ、やつとの思いで抗議した。

そんな彼をディゼンは侮蔑するかのような口調で

「少し落ち着きたまえよ、ロゼル君。私がアミユード教徒だからといって、頭ごなしにテロリスト呼ばわりされるのは不快の極みだよ。君とて、私のこれまでの社会的貢献を知らぬ訳でもあるまいに。――それとも、君もあれかね、誤った政教分離の概念に取り憑かれた妄想論者かね？」

政教分離。

この言葉の意味はしばしば誤解されやすい。

本義としては国家主権による宗教団体、宗教活動への干渉、介入を戒めるという意味をもつものであり、ひいては国民の思想、信条、信教の自由を保護するために不可欠の理念といってもいい。国家主権がその権力体制を護持するために宗教をその支配下におこうとした例は無数にあり、そのために人類は数限りない悲劇を演じてきた。そうした過去の教訓からうまれたのが政教分離の概念であって、現代にあつては限りなく普遍性を帯びた不可侵のものである。

が、政治的に宗教組織を利用せんと企てる者達はこの言葉の意味を意図的に反転させ、宗教組織による特定の政治団体への支持、協力行為を禁じたものであると主張して止まない。強力な組織力を有する宗教組織に、敵対する政治団体や政党を支持されてしまつては、自分達の立場が危うくなるからだ。その証拠に、政教分離議論が噴出してくるのは決まつて国家ならびに州統治機構議会議員選挙の時期のみであり、平素にあつてこの議論が新聞紙上やマスコミを賑わせた試しは皆無に等しい。

ディゼンが「誤った」と形容したのはロゼルが逆転された意味での「政教分離」を唱えたものという前提による。ただし、それは逆上しつつある彼を揶揄してそのように皮肉つたに過ぎない。

しかし、動揺を隠せないロゼルは実のない政教分離議論を真に受

けてしまった。

ディゼンに真っ向から反論する姿勢を見せ

「政教分離の概念については、私も正しく認識しているつもりです。何も、政治の主体者は宗教タブーであるなどと申し上げているわけではありません。——しかし、今のあなたじゃ話は別だ。よりによって、テロ活動を行動方針に掲げたゴーザ派のアミュード教徒であることをひた隠して州知事選に出られたとあっては、市民を欺いたも同じではないのですか？ 今彼等がこのことを知ったならば、どのような事態を招くか」

半ば抱えるようにして説いた。

が、すでにその議論はディゼンにとって興味がない。

「……私を知事を選んだのはその市民達だよ、ロゼル君。市民は私という人間をして知事たらしめるに相応しいと判断したのではないかね？ 宗教は人間性を形成するいわば骨格に等しい。宗旨がどうであれ、属人が信奉している宗教を否定するのは人格を否定するにも等しいと思うがね。——そういう意味において、民意を軽視するのはいかなものかな？」

「……」
詭弁ではないか。

ロゼルはそう口に出しかけたが、ぐつと呑み込んだ。

ディゼンの主張に一理あると思うからではなく、何を言おうと彼の心には届かないだろうと思ったからだ。

「そもそも、私がアミュード教徒であるからといって、テロ活動を行う人間だとレッテルを貼るのは極めて遺憾だがね。繰り返すが、私はこの州の知事なのだよ……」

傲然と言い放ち、ロゼルをあざ笑うかのように冷笑を浮かべているディゼン。

その姿に、ロゼルはもはや我慢がなくなっていた。

「そうですか。わかりました……」

俯き、唇を噛み締めている。

が、すぐに意を決したように顔を上げると、正面からディゼンを睨みすえながら

「——そういうことならば、あなたの元では副知事の役割を勤められそうもない。あなたの知事として最初の仕事は、私の後任を探すことだ」

思いがけないタイミングでの離反表明に、ディゼンは一瞬驚きの色を浮かべたが

「君も天辺まであと一歩、だというのに。私見にしがみつくあまり、これまでの努力を水泡に帰させるなど、なんともつたいない……」

「やむを得ません。あなたの言っていることは支離滅裂だ。州政府に属する人間ならば、それ相応の倫理と道徳、そして正義を矜持するのが当然でしょう。私は何も、アミュード教を否定しているのではない。ゴーザ派などという殺人集団との関係を維持しているご自分を憚るうともしないあなたが信じられないだけだ。あなたがそのつもりなら、私には私なりの考えがある。——もう、お会いすることもありますまい」

渾身の怒りを込めて思いのたけを一気にぶちまけたロゼル。

くるりと背を向け、部屋の出口へ大股で歩いて行く。

すると、彼の背にディゼンの声が飛んできた。

「一つ、大事なことを言い忘れていた」

立ち止まって振り返ったロゼルの眦が、大きく見開かれる。

大きな窓を背負っているディゼンの姿は逆光ではつきりと見えなかったが、いつの間にかその手に物騒な凶器が握られていたことだけは理解できたからだ。

ディゼンは口元に微笑をたたえたまま、その表情を変えることなく

「……副知事の役目、ご苦労だった。ゆっくりと休むがいい」

「な、何を……！？ 正気なのですか！？」

「なに、秘密を守ってもらいたいだけさ。……君の休養も兼ねてね」
パンッ——

乾いた炸裂音が一つ、室内に反響した。

落日編2 寂夜

重いブルーの間接照明がつむぎ出す、青と黒だけに染められた店内。

その暗さを縫って、甘いメロディーのBGMがゆるやかに流れていく。そういうシチュエーションのせいか、かもし出されている雰囲気はどこか卑猥で淫靡であった。

見回せば、暗い位置に設けられたテーブル席はどこも男女のカツブルで埋まっている。週末の夜だけに、時間を気にせず楽しめるといふ浮ついた開放感が空間のあちこちに漂っていた。

店内で唯一照度が十分なカウンターの奥では独り、マスターが静かにワイングラスを磨き続けている。

黒のカラーリングで統一されたカウンター席には一組の男女。

男性の方はポイントでデザインに趣向を凝らした品のいいジャケット、それに細身のジーンズを穿いている。年の頃は二十代半ばといった感じだが、もの優しげな表情と大人びた落ち着きのせいか、やや老成した風がある。ともかくも、全体的にスマートでスタイリッシュな好青年であった。

片や、長い髪をアップにまとめ、首筋から肩、背中まで大胆に露出している女性。

スタイルがほっそりしている上に軽くフォーマルなデザインだから、性的な主張を全面に表現しつつも淫らな印象はない。切れ長の目とすっと通った鼻筋をもった容貌が、画に描いたように美しい。やや斜め上から落ちてくるスポットライトの創り出す陰影が、彼女の美貌を一層引き立たせて見えた。

二人とも、手元に氷と琥珀色の液体の入ったグラスを置いている。「——この前、新聞で読んだよ。ステイレーングループ、今度は南ダステニア諸島の油田開発に大規模な投資をするんだってね。この時勢だっていうのに景気がいいじゃないか。……ということは、

シヨールコのところも大分忙しいんじゃないか？」

グラスを傾けていたシヨールコは、それをコースターの上に静かに戻すと

「そうでもないのよ、マイク。逆にね、ヒマが増えそうなの。——今の会長が合理化大好きで、あたしのチームは人間も仕事も大幅に減らされちゃって、今じゃほとんど業務らしい業務もしていないし。このままいけばSTR警備保障と統合されて、あたしも隊長の御役御免でしょうね。……給料の代わりに、自分の時間が与えられるってトコかしら？」

くすりと笑った。

そついう言い方をしたのは、いわば甘えのつもりである。というて建前でもなく、ほぼ事実であった。

が、そこを逆手にとつて、これからは二人で会える時間を豊富にとれそうだと暗にほめかしたのだが——マイクは正面を向いたまま小難しい顔をしたままにいる。

もしかすると仕事上の不安でもあるのかと勘繰ったシヨールコは

「……どうかしたの？」

尋ねてみた。

すると、マイクは水割りのグラスに口をつけてから、目線だけをシヨールコに向け

「いや、しばらくさ、会えなくなりそうなんだ」

「……」

シヨールコの動きが止まった。

マイクは掌中のグラスを左右になぶりつつ、液体が揺れ動く様をじつと見つめて続ける。

「……君も知っていると思うけど、あのネガストレイト・コレクションに僕らも参加させてもらえることになったんだ。初めての大事なことから、オーナー以下みんな気合いが入っていてさ。ここで上手く注目を集めることができれば、僕らのブランドがファッション界にデビューできるんだ」

「……」

「それで明後日からしばらくの間、ネガストレイトに行かなきゃならなくてさ。あ、シヨコに早く伝えなかったのは申し訳ないと思ってる。審査に通ったのがつい先日でさ。——でも、僕らにとっては願ってもないチャンスだし……君には寂しい思いをさせてしまふと思うけど、何とか辛抱してもらえないかな……？」

この州の隣に位置しているネガストレイト州では、毎年大規模なファッションシヨールが開催されている。

国内外の一流有名デザイナーが一堂に会する権威あるイベントとして、その名を知らぬ者はいない。ここで注目を浴びたデザインが、翌年のトレンドを左右するとさえいわれている。

シヨコは内心で落胆していく自分を感じたが、仕事だというからにはどうすることもできない。

「ふーん。そうなんだ……」

めっきりと声のトーンが下がっている。

話題を宙に浮かせたままカウンターのキズを丹念になで続けているが、ふと

「ネガストレイト・コレクションって言ったわよね？　ずいぶんと急な話じゃない。あれだけのスケールでやるイベントだったら、もっと早く声がかかるんじゃないの？」

何気なく、思った疑問を口にしたに過ぎない。

が、そう尋ねられたマイクは

「あ、うん、マイナーズ・ブランド・コンペティションっていう部門があつてね、お、俺達はそこに参加するのさ。正直、メインの方じゃないのが残念なんだけどね……。でも、俺達みたいなマイナーブランドにとって登竜門であることに代わりはないし、やってみる価値は十分にあるのさ」

急に早口で喋ってから、ぐいっとグラスをあおった。

嘘の下手なヤツ。

シヨコは思った。

大抵の男はいざという時、嘘が顔か態度に出てしまう。そうならないのはよほどの悪人だとどこかで聞いたような気がするが、かといって男女の間に嘘が持ち込まれる時点で、それはすでに関係の何事かが破綻していることを意味している。

おそらくは所属のモデルとでも出来てしまい、自分と別れたくなつたのではないのか。そんな気がした。

仕事上の云々は彼女を遠ざけるための口実に過ぎないであろう。ネガストレイト・コレクションといえば、来年の流行を示唆するといわれる一流のファッションショーである。そういう大舞台のどこに、マイクのようなり損ねデザイナーのささりこむ余地があるというのか。

シヨールコは知っている。

そもそも「マイナース・ブランド・コンペティション」などというのは、各都市ではそぼそとやっている二流以下のマイナーブランドの中から優れた作品を発掘しようという、いわば主催者側の気まぐれに近い企画である。彼のいう通り、一級のオーナー達の目に止まればあるいはそこからファーストブランドに躍り出るようなこともあながち皆無ではない。が、それは万に一つ以下の幸運でしかなく、千載一遇のチャンス求めて国内外から何千何百という数のマイナーブランドが集まってくるのだ。当然、出展者が許されるPR活動など限られてくる。仮にもデザイナーの端くれを気取るマイクが、そのことを知らぬ筈がない。長期間にわたって会えなくなる訳がないのである。

マイクは内心穏やかでないのか、目線を合わせようとしなない。

不愉快であった。

別れたいのなら、はっきりそう言えいいではないか。

むらむらと腹が立ってきたが、そこはぐつと堪えた。

思い切り罵倒してやってもいいのだが、それをやってしまえばこのスマート気取りの情けない男は泣いて許しを請うに違いない。気持ちが一気にクールダウンしてしまった以上、シヨールコとしては彼

が泣こうが死のうが知ったことではない。ただ、そういう愁嘆場を演じたが最後、今後この店に顔を出しにくくなってしまふ。高級な酒が手頃な値段で揃っているから、それだけは避けたかった。

シヨールは苛立つ気持ちを何とか抑えようと、グラスをぐっと傾けて琥珀色の液体を飲み干した。

寄り添って座る二人の間に、微妙な沈黙が流れていく。

もう一杯飲んでしまおうかと思ったが、オーダーするために口を開くのが億劫でやめておいた。

こういう場合、気の利いた店のマスターは機敏に客の雰囲気を感じる。不躰に「代わりは？」などと声をかけたりしないのだ。

「……」

ひたすら口を閉ざしているシヨール。

彼女が無言で発しているただならぬ雰囲気を感じたマイク。さすがに不安を覚えたらしい。

「ね、ねえシヨール。怒っているのかい？——ま、無理もないよね。君も仕事が多々大変な時だと思うし、辛いこともたくさんあるだろうし」

急に機嫌を取るような態度を見せ始めた。自分のついた嘘がばれていることに気付いていないらしく

「……でもさ、わかってくれよ？ 僕だって、君を傍から離したくない。出来ることなら一緒にネガストリートへ行きたいよ。だけど、そういう訳にもいかないだろ？ 君も職場ではそれなりの立場なんだし」

心にもないことを――。

そう思った瞬間、決定的な一言が、つい口をついて飛び出していた。

「じゃあ、あたしが仕事を辞めて一緒について行くって言ったらどうするの？ 連れて行ってくれる？」

「え、あ？ そ、それは……」

シヨールの質問に対する彼のリアクションが、全てを物語った。

今まで饒舌だった筈のマイクが、急に黙り込んでしまったのだ。
シヨークはふっと一つため息を漏らし

「……もう、いいわ。それ以上、嘘をつく必要はないから」
ハンドバッグを手に取ってカウンターチェアから下りた。

くるりと背を向けて立ち去りかけたが、彼女はつと足を止め

「要するに、あなたはあたしに言っただけで済んだんでしょ？ ——
さよなら、って」

マイクは沈黙している。

そのだんまりが、いかにも「そうだ」と認めているように、シヨークには思えた。

自分でさよならも言えない、つまらないヤツ。

そう吐き捨てたかったが、そのつまらないヤツを一時でも好きになつたのは自分である。口に出してしまえば、自分をもつまらないと言っているに等しい。

だから、代わりに言っただけだ。

「……あなたが自分で言えないなら、お望み通り私から言っただけだ。——さよなら」

そうしてシヨークの露わな白い背中が、溶け込むようにして暗がりへと消えていった。

独りカウンターに残されたマイク。

身じろぎもしない。

「また独りかあ……。ま、あんまり長続きするとは思えなかったけど」

夜空を圧するかのようにそびえ立つ高層ビルの足元を、ぶらぶらと歩いていくシヨーク。

きついウイスキーを一気におおったせいか、多少酔いが回っている。

露わな胸元や背中の中にあたる夜風が冷たい。

今夜の彼女は露出面積がやたらと多い、リゾートドレス風な服を着ていたからだ。

多少冷静になってみると、気負いこんでそういう衣装を身につけた自分がいささか滑稽に思えなくもない。が、相手の男が取るに足らなかったといってもそれは結果論であって、ほんの少し前まではその男のためにこんな格好をすることすら厭わない自分がいたのだ。といって——本当にマイクのことを愛していたのか、今ひとつ自分に自信が持てない。

切実な現実から目を反らすための退避口として、彼の存在を求めていただけのことではなかったか。

気持ちに余裕を欠いた人間の恋愛は常に「一方的に求める」形になりやすい。マイクと過ごしているその時間だけは、自分の心身を絶え間なく締め上げてくる日常の煩雑から、僅かでも逃れられるような気がした。実際、彼女に対するマイクの態度はどこまでも大らかで、決して不愉快なものではなかった。

が、それはあくまでも「逃避」に過ぎなかったのだ。だからといってショーコを取り巻く根本的な懸念を何一つ解決させることが出来た訳ではない。

現実現実で心がカサカサになってしまった女と、夢ばかり追いかけたがる現実認識に乏しい男。

——上手くいかない男女の典型的なパターンであるという。

何かの雑誌に載っていた恋愛記事の一文をふと思い出し

（あーあ、やつちゃった、ってカンジね……。恋愛なんてホント、焦ってやるモンじゃないわね。自分の本心を見失ってしまうだけだわ）

まさか自分に当てはまってしまつてしまうとは、思いも寄らなかった。

今年で二十六歳。

考えてみれば、十代の最後に短期間付き合つたきり、恋愛らしい恋愛などしてこなかったような気がする。

こつも恋愛下手になってしまっている我が身がつくづく嫌になる

ものの、かといってそれを仕事のせいにするつもりはない。どんな理由を論おうとも、そういう行き方を選んだのは誰でもない、自身である。

とはいってもやはり、年齢を重ねると共に次第に独り身が堪えてきているのも否定できない事実である。勝気な性格が災いしているのかどうか、年少の時代から仲のいい男性が傍にいたという記憶はない。このままいけば——その可能性を十分に秘めていることに気がついていて自分が悲しかった。

情けないような侘しいような、心に言い知れないうやむやを抱えたまま、シヨークは夜道をひた歩いていく。胸のあたりが妙に寒く感じるのは、何も衣装のせいだけではなかった。

地区中心部に造成された中央公園のあたりに差し掛かると、暗がりの至るところに酔い覚ましの風にあたっている男女をしきりと見かけた。すっかり二人きりの世界にはまってしまっているカップルもいる。

(ちっ)

酔いも手伝って思わず舌打ちしなくなったが、やめておいた。つい数日前まで、同じ事をしていた自分の姿が脳裏にある。

気まずさから逃れるように、足を速めて通り抜けようとした。

ほとんど駆けるようにして最寄り駅の方角へ向かって急いでいると「……ねーちゃん、そんなハダカみたいな格好して夜道を歩いちゃ、危ないぜ? あんたあ、べっぴんなんだから気をつけるよ……」

行く手の道端に座り込んでいたホームレスのオヤジが、不意に声をかけてきた。

普段はそういう輩を相手にしたりはしないのだが、今夜に限って多少酔っているうえに気持ちの収まりどころが定まっていない。

そういう時に見知らぬ人間からいきなり言われた「べっぴん」の形容が妙に嬉しくなったシヨークは

「ありがと、おじさん。……ほい」

ポケットの中から五百エルコインを一枚取り出し、指で弾いてや

った。

そのまま足も止めずに通り過ぎて行くと、背後から

「……あんた、きつといいことあるよ。間違いない。——諦めるなよ！」

思いもかけない言葉が飛んできた。

あたかも、瞬間的に彼女の胸中の何事かを見抜いたかのようである。

一瞬ドキリとせぬでもなかった。

が、シヨークは構わずに歩いて行く。

立ち止まったり振り返ったりするような習慣は持ち合わせていないつもりである。

いつだって、向くべき方向は——前しかない。

振り返ったところで、未来のために得られるものなど何一つありはしないのだ。

（いいこと、か。……本当に、そんな日がくるのかしらねえ——）

心の内で呟きつつ何気なく見上げた夜空に小さく、一筋の流れ星が見えた。

『——ロゼル氏が感情的になっている姿を見たとき複数の関係者が証言しており、警察機構本庁では事件との因果関係について捜査しています。後任については現在のところ未定とのことですが、ディゼン氏と以前から交友関係があったとされる都市再開発計画室副主任を勤めるゼルド・ガンス氏の副知事昇格が有力視されています』
点けっぱなしにしていたテレビから、思わぬニュースが聞こえてきた。

画面の中で男性キャスターが、州副知事ロゼル・ハイマン急死の報を淡々と伝えている。州知事公務室で倒れているところを秘書に発見されたが、すでに亡くなっていたという。胸部に銃撃を受けており、銃弾は心臓を貫通していた。

——ファアー・レイメンティル州中心部・L地区にある警備会社『Star-line』本部舎オフィス。

室内にはショーコが一人きりである。

彼女はデスクに向かって書類を書いていたが、その手をつと止めた。

（なんてこと！ ロゼルさんが殺されるなんて……。立派な人だったのに）

直接の面識があった訳ではないが、前知事の下にあって幾つか相応な実績を上げているから、その存在はよく知っている。一般の市民にしてもそうであろう。特に、五年前の大規模テロ事件で疲弊した州経済が再び持ち直すに至ったのは、彼の卓抜した手腕によるところが大きい。

突然の急死というのは残念というよりないが、それ以上に、犯人に対する怒りを禁じ得なかった。どんな事情があったにせよ、殺人を犯すなどというのは人間として風上にもおけないではないか。

ショーコは食い入るようにニュースを見ている。

やがて画面は切り替わり、頭髮が薄く目つきの鋭い男が映し出された。

大勢の記者からマイクを向けられたその人物は、ファー・レイメンティル州新知事ディゼン・ヴァドラークであった。一斉にカメラのフラッシュを浴びせられている。

『ディゼン知事、ロゼル副知事が殺害された一件について、まずは率直なコメントをお願いいたします』

女性記者から早口で質問されたディゼンはやや視線を落としながら『正直、怒りが収まりません。これは市民社会への重大な挑戦であると認識しています。テロ組織は市民の総意によって委ねられている筈の政治に暴力と恫喝をもって臨んできた。彼等に対しては、断固たる態度をとるものであります。いかなる妨害工作がなされようとも、我々は断じて屈しません』

今度は別の男性記者が

『亡くなられたロゼル副知事に対して、知事ご自身はどのように思っていますか？』

『ロゼル副知事の急逝は我が州にとって最大の痛手です。とは申せ、我々はここで立ち止まっている訳にはいかない。彼の功績を土台として未来に向かって進まねばなりません。——ロゼル副知事の冥福を祈るとともに、市民の皆様には、彼が在職中に賜ったご支援に対し、謹んで御礼を申し上げる次第であります』

いかにも厳粛な面持ちで述べている。

そのニュースはそこで終了し、替わって海外で起きたテロ事件について報じ始めた。

濛々と黒煙を上げる建物の映像が流されている。

『——今回のテロ行為に対し、カイル・ヴァーレン政府はジャック・フェインの犯行であるとの見方を強めています、当のジャック・フェインからは関与を否定する声明が出されています——』

思わずアナウンスに聞き入っていたシヨコは、ハッと我に返ってテレビを消した。

のんびり眺めている場合ではない。

明日までに片付けておかねばならない書類がデスクの上に山積している。

（やばいやばい。ちゃっちゃんとやっとなないと寝酒が飲めなくなっちゃう……。明日は出勤予定があるのをすっかり忘れてたわ）

再び忙しく手を動かし始めた。

少しして、オフィスのドアが開いた。

入ってきたのは、紺色の制服に身を包んだ六人の隊員達。彼等はショーコに向かって横一列に整列したあと、一人の女性隊員がすつと前に進み出てピツと敬礼した。

「機体のメンテナンスとステイリアム研究所への動作実績報告を完了しましたのでご報告いたします。——それでは隊長、本日はこれにて失礼いたします」

「はい、お疲れ様。明日は夜勤体制をとるからよろしくね？ 1700にS地区へ出勤だから、それまでに準備をお願いね？ 出勤後は緊急発報に備えてSTR指令に管制を移譲します」

微笑して見せると

「かしこまりました。では、失礼します」

機械的に一礼してオフィスを出て行く若い隊員達。

ショーコはつと笑みを消し、彼等の背中をじつと見つめている。

やがて一人になると、はあっと大きく溜息をもらした。

（あればっかりは慣れないわあ。オフィスにいる時くらい、もう少しだけでもいいのに）

隊員達の真面目くさった堅さが、どうにもやりきれない。毎度のことだが、息の詰まる思いがする。

いずれも年の頃は二十歳を少し過ぎたくらいで、学卒の秀才ばかり揃っている。ゆえに、普段の業務においては大したミスもなく、勤務態度は至って真面目で勤勉なのだが——しかし、それを美德と呼ぶのはどうであろう。独裁政権の権力者が好みそうな労働者のあるべき姿というだけのことであり、人としての面白みがまるで感じ

られない。

職場という特殊な環境化において個性の発揮を躊躇するような人間が管理者になったとしても、社員の統率を全うすることはできない。理由は単純明快で、人間関係の構築に甚だ支障が生ずるからである。職場が人間の集まりである以上、関係を保てなければ秀才ばかり集めたところでいずれは破綻をきたす。

シヨークはかつての経験で、そのことを身に沁みて理解している。であるから、隊員達と業務外でも接点を見出せるよう極力努力してきたつもりである。

が、以前と比較して業務量はまるで減ってしまったというのに、彼等と一緒に飲みに行ったことすらほとんどなかった。皆、勤務時間が終了すると各自の趣味なりプライベートに没頭し、それを理由に会社の人間との業務外での接触を一方的に遮断してしまう。仕事は仕事、という立て分けも理解できないではない。が、勤務時間だけで満足な人間関係を構築できる筈がないではないか……と思うのだが、若い隊員達はそういう発想ができないらしかった。独りを楽しめる手段なりツールが世の中に氾濫してしまったせいでもある。また、幼い頃からそういうものを与えられて育ってきたという事情もあるかも知れない。かつての子供達は、友達と遊ぶ以外に時間を消す術を知らなかったのだが。

かといってその事をどうこう言えるような筋合いではないものの、一方でシヨークはそうした傾向を独り寂しく思っている。

（昔はなあ……よく朝まで飲んだくれたっけ。酒を飲みながらコミユニケーションをはかったものだけど）

酒好きの管理者というものは、どうもそういう発想になりやすいが、何も寝酒の友がいないことだけを嘆いているつもりはない。時の流れと共に新しい世代の性質が変わっていくのは仕方のないことだと思う。

何とか受け止めていかねばならないと思うのだが——本音の部分で、どこか納得し切れていない自分がいる。

そんなわだかまりの原因がどこにあるのか、シヨークはわかっている。

——以前の頃のStar-line。

隊長以下激しく個性的な面々ばかりが揃い、何かと対立も多く、しかも業務は現在の比ではない程に過密であった。今の隊員達に同じことをやらせたならば、三日と経たず音を上げるに違いない。

それでもその時代を楽しかったと思えるのは、当時の誰もが「都市を守る」という自分の仕事に誇りを持ち、常に向上心を抱いて業務に邁進する姿勢を保っていたからではなかったか。そしてその原動力となったものは何を隠そう、チームワーク以外の何物でもない。真面目一筋だったにも関わらず、Star-lineの中で柔らかな女性へと変貌していった隊長サラ。

他者への恩を忘れず、仕事熱心で人望篤かったドライバーのサイ、そして恋人のナナ。

最年少ながらも仕事にひたむきで、最後は反対する両親の心をも変えたユイ。

不幸な過去に真っ向から向き合い愛する人の死をも乗り越えた、隊きつての美女・リファ。

そのほか、シェフィ、ティア、ミサのセカンドグループ仲良し三人娘、酒好き整備長リベルに事務担当ブルーナ。のちにリファの親友で美人科学者のイリスも何を思ったか志願の未入隊してきた。

皆、五年前と三年前の人事異動で部隊を去った。

現在はそれぞれ、自分の道を歩んでいる。

あの頃のStar-lineはもう——ない。

（楽しかったなあ……。みんな、元気でやってるかしら？）

今もなお個人的に連絡を取り合う者もいなくはないが、ほとんどは多忙に紛れて音信不通になっているか、さもなくば他州や海外に渡ってしまっている。

全盛期メンバー達の喜怒哀楽する姿を思い出し、つい呆然としてしまったシヨーク。

が、自分に気合いを注入するようにぶんぶんと首を振って
（やあね、私ったら。感傷に浸っている場合じゃないわ。大変なのはセレアさんも一緒だものね）

壁の時計を見やると、十九時を少し過ぎている。

さて、と立ち上がった。

そろそろ来客がみえる場合である。

——かつて共に戦った、上司であり盟友が。

顔を出しかけたその瞬間。

背中を預けているコンクリートの柱が機関銃弾の嵐を浴びて原型を失っていた。

想像以上に敵の火器は強力である。

このまま同じ位置に留まって機会を窺い続けるのは冒険すぎる。

そう判断すると、その場を捨てて後退に移った。

時々外れ弾が壁にあたって跳ねたが、そんなものはそうそうこちらへ飛んでくるものでないことは経験上わかっている。遮蔽物は豊富だから、姿さえ晒さなければ銃撃が激しいといっても恐るるに足らない。

それよりも、あまりの暗さに閉口した。

自分の周囲の空間は辛うじて目が利くものの、数メートル先になると茫漠たる闇でしかない。

公的治安組織の追跡から逃れて潜伏するための地下アジトだから、満足な照明設備などはないのだ。

かがんだままの姿勢で床を這うように歩きつつ

（他の同志達は無事なのか？ まだ奥までは踏み込まれていないようだ……）

と、いきなり背後から何かが肩に触れた。

「……！」

振り返りざま銃口を向けつつ、トリガーを引こうとすると——

「私よ、レヴオス！ 撃たないで」

正面から、慌てたような女性の声が飛んできた。

闇に浮かぶ相手の白い小顔を目にするなり

「……ケレナか。焦ったぜ。思わず撃ってしまうところだったよ」

さつと短銃を下ろし、手の平で顔をこすったレヴオス。

その指に、滴るほど汗がついている。

「何か、情報はつかんでいるか？ 入口付近を張っていた同志達は全員やられてしまった。野郎、不意を衝いて急襲してきやがって！」

思わず激昂しかけた彼に、ケレナは宥めるような口調で

「落ち着いて、レヴオス。ガルバがギリギリまで接近して調べてきてくれたわ。相手はどうもカイルル国軍陸団歩兵の連中じゃなさそうよ。改造八十六式機関銃を手に行っているのが見えたって」

「八十六式？ すると、今俺達を襲ってきているのは――」

ゴーザ派か。

レヴオスは確信していた。

今時、そのようなアンティークに近い小銃をカスタマイズして使っている組織など、出会う方が難しい。ただ、ゴーザ派はその手の改造技術に長けた人間の集まりだけに、殺傷力だけはアンティークどころか最新兵器並みに飛躍している。

彼の確信を理解したかのように頷いたケレナ。

「この前からおかしいとは思っていたのよ。私達とは何の関係もない破壊行為がみんな何故かジャック・フェインの犯行として報道されるんだもの。嵌められたのよ、ゴーザの奴等に！」

周囲の気配を察しているレヴオスは沈黙で答えたが、その通りだと思っている。

最近、急激に勢力を拡大しつつあるアミュード教組織「ゴーザ派」。

彼等の辞書に「共闘」「協調」の二文字は存在しない。

自分達以外は全て「神の敵」であり、殲滅すべき対象であると公言して憚るところを知らない。狂信者、あるいは狂人の集団といってもいい。

レヴオスら『ジャック・フェイン』もアミュード教の系譜を引くテロ組織であり、これまで世界各国でテロ行為に及んできたが、彼等は一般の民間人を標的にしたことなどただの一度もない。その活動目的はアミュード教徒迫害政策を続けるカイルル・ヴァーレン共和国と協力関係にある各国政府組織の攪乱ならびに弱体化であるからだ。それら国家の支援によってカイルル政府は「民族融和」の名の下、先住民族への圧迫を推し進め、今もなお多数のアミュード教徒が信仰と祖先の地を追われつつある。難民となった彼等に手を差し伸べる者もなく、飢餓のため死んでいく老若男女が後を絶たない。いわば、ジャック・フェインはアミュード教徒のために活動を続けてきた。神の名を語って平気で同士討ちを起こすようなゴーザ派とは、まるで行き方を別っている。

そのゴーザ派。

ケレナが言う通り、彼等の活動はここ最近急激に活発化していた。テロ組織が突如として行動を起こすような場合、その理由は常に二つしかない。

自分達の主義主張に有利となるような世界的、政治的情勢の変化。もしくは、組織それ自体が著しく衰退し、その存在が危機的状况に追い込まれた場合。

ゴーザ派は、世界各地で暗躍する凶悪犯罪組織がシンパとなって常に支援を受けている。であるから、後者であるとはいかにも考えにくい。レヴオスは周囲の気配に注意を注ぎつつ、そのことを口にした。

「――狂った奴等さ。連中、自分達が世界中の闇組織の頂点に立つ事しか頭にないんだ。そのために今、邪魔な俺達を潰そうと動き出したに違いない。あいつらには五年前にも煮え湯を飲まされているからな」

「そうだったわね。あれさえなければ、ウイグさんだって……」
顔に悲壮な色を浮かべたケレナ。

「ゴーザ派の奴等の中に元々神なんかいやしないんだ。自分らがそ

の神だと思っている」

吐き捨てるように言って、レヴオスは黙った。

大切な人を喪った悔恨が胸の奥で虫歯のように疼き、やりきれない思いがしたからである。

ふと、絶え間なく聞こえていた機関銃の射撃音や着弾の残響がふつりと止んだ。

荒れ果てたコンクリートの迷路がたちまち黒い沈黙に支配された。拳銃の残弾を数えていたレヴオスは目だけを動かして向こう側を窺い

「……？ 奴等、前戦を詰めてくるつもりか？」

「さあ？ 撤収するとは思えないけど……」

首を傾げつつケレナが呟いた時である。

カン、コン、カココン――

空き缶でも放り投げたかのような軽い金属音が反響した。

瞬間、レヴオスは顔色を変えた。

「まずいぞ！ 伏せるんだ、ケレナ――」

が、その叫び声がケレナに届くことはなかった。

間髪を容れず、鼓膜を裂くような轟音と紅蓮の爆炎が、狭隘な空間を満たしていく。

地下の廃墟である。あがいても逃れる術はない。

押し寄せた灼熱のプレッシャーに呑み込まれて意識を失う寸前、ケレナの華奢な肉体が真っ赤な業火に取り込まれていくのをレヴオスは見た。

「――すっかり、変わっちゃったわね。あの頃が嘘みたい」

しみじみと呟いてから、オフィスをぐるりと見回したサラ。

サラ・フレイザ。

二十一歳という若い身で、Star-line初代隊長を務め上げた。もっとも大きな功績として、第二次ジャック・フェイン事件

という都市全体を破滅の危機に追いやった大事件を解決へと導いている。その優秀な指揮指導能力をかわれ、五年前に都市治安組織である「治安維持機構」へ抜擢され、Star-lineを去った。代わって隊長を引き受けたのがショーコである。ゆえに彼女は二代目隊長であつた。

そんなサラももう二十六歳。今や治安維持機構Bブロック中隊を束ねる統括長として、その名は各方面に知れ渡っている。

激務に追われるあまり、かつての職場には五年間一度も足を踏み入れずじまいになっていた。

それが今夜、時間をこじ開けるようにしてわざわざやってきた。ショーコは彼女の用件をそれとなく察していたが、口には出さずにいる。先回りして言い当てたりするのは野暮だという気がしたからだ。

変わってしまった、というサラの感慨を本部舎のことだと思い「ボロボロでしょう？　ろくに手入れもしてないから、あちこち傷みがひどいのよ。グループ内経費節減プロジェクトとやらで、改修の予定も無期限おあずけ。もう少ししたら雨漏りでもするかもね」冗談めいた言い方をしつつ、確かにこの本部舎も傷んできたものだと思つた。

が、サラはかぶりを振って

「違うの。変わった、って言ったのはショーコのことよ。今でも五年前みたいにエネルギーだだ漏れにして歩いているのかと思つていたら、すっかり大人しくなってるじゃない。驚いちゃったわ」

「え？　私？　そんなに変わったかしら？　あの頃のままにいるつもりだけど、ね」

無論、本音ではない。

大きく変化してしまった自分の姿に驚いているのは誰でもない、自分自身である。

積極的に恋人の存在を求めるようになっていた自分の気持ちに気が付いた時、ショーコは自分のとある部分がもはやすっかり変質し

てしまった事実を嫌でも認めざるを得なかった。肉親との死別以来
当たり前のよう存在していた筈の孤独への忍耐というものが心の
どこを探しても見つからないのである。

その意味においてマイクと別れた日、彼に見せた甘えはポーズで
も何でもなかった。

が、そういう内面のドロドロを表に出すまいとする一面をして、
まだ自分が自分を失っていないと確認しているまでのことである。

だから、いくら相手がサラだとはいえ、先日の失恋の一件を口に
するつもりはなかった。

笑い話に仕立て上げられるだけの割り切りが完了したとは言い難
い。

「でも、どうして今の今まで残ろうって思ったの？ 三年前の第二
次改変でサイ君もナナちゃんも、リファもブルーナさんもリベルさ
んも、あの頃のメンバーは誰もいなくなってしまったのに。ようや
く、あなたも動くつもりになったかと思ったのよね。……それでも
名前が残っていたから、不思議に思ってた」

「……そりゃあ何度も思ったわ。そろそろ引き際かな、って」

シヨークは慣れた手つきでカップを持ち上げると、ずずつとコー
ヒーを啜りつつ

「みんながいなくなったこの隊で、あたしがいる意味なんてあるの
かなって、ずっと考えていた。でも、そういうことじゃないのよね。
自分の存在価値は、自分が見出すものだから」

正面からじつと見つめているサラは、思うともなしに思っている。
シヨークも苦労したな、と。

出会った頃の溢れ出すエネルギーから発される光芒というものが
完全に鳴りを潜め、冷静になったといえれば表現はいいが、悪く言え
ば情熱が枯渇して冷め切ってしまったような観がある。

最初の部隊改変が五年前。この時にサラはStar-lineを
後にした。

それから二年後、次の部隊改変があつてシヨークを除く第一期メ

ンバー全員が姿を消した。

これには、故ステイレーングループ会長・ヴォルデの意図が濃厚に反映されている。

第二次部隊改変と同じ年に彼はこの世を去ったのだが、逝去する少し前、体調を崩して病床についてからの気がかりは何よりもStar-lineにあつたらしい。この都市、そして国家におけるステイレーングループの榮譽と誇りを守り抜いたのは、彼が肝煎りとなつて設立したStar-lineだったからである。この優れた専属警備会社の存在がなければ、ステイレーングループはテロ組織の魔手にかかつてとうの昔に瓦解していたであろう。それは国内外政財界関係者の誰もが認めているところである。

「そろそろ、残りの隊員達も、激務から解放してやらねばなるまい。セレア、頼んだよ」

彼は唯一信頼できる孫娘のセレア——Star-line代表取締役兼総指令長——に、何度も頼んだという。

ヴォルデの意を受けた彼女はその通りに組織改変の手続きを進めた。

人事異動リストには当然、ショークの名前も挙がっている。ステイレーン系列のCMDメーカーへ、技術開発部研究主任という決して悪くない肩書き付きでの異動である。

だが、思わぬ故障が出た。

そのショークが、異動を蹴ってStar-lineに残ると言い出したのだ。

「しかし、ショークさん。いつまでもこのような不規則で危険な業務に携わっていただくのは、本意ではありません。私もさることながら、お爺様が……」

セレアはそう諭したが

「いいんですよ。あたしはまだ、ここでやり残したことがあるような気がしてるんです。それに、Star-lineから第一期メンバーが誰もいなくなってしまうたら、誰が同期会の仕切りをやるん

です？」

同期会云々は冗談としても、シヨークはそのような言い方で残留を固持した。

結局主張は容れられ、半月後、彼女はまたも本部舎前に立ってメンバー達を見送った。

隊を去った誰もが、シヨークの胸中を量りかねた。もっとも彼女を慕ってくれたサイなどは率直に動機を問うてきたりしたが、シヨークは曖昧に笑ったまま答えずじまいであった。

独りStar-lineに残った本当の理由。

それというのは、さほど複雑なものではない。

（あたしまでStar-lineから消えたら、本当に辛いのはセリアさんじゃないよ。ヴォルデさんがもう保たないっていう時に……）

表面的にはたった一人の上司であるセリアへの気遣いだだったが、さらに踏み込めばヴォルデへの恩返しであったといっている。ヴォルデが最後の最後に案じるのは孫娘の彼女であるからだ。

ヴォルデには個人的なものも含め数限りない恩を受けたと、シヨークは思っている。が、それを返せぬまま彼の命は尽きようとしている。ならばせめて、彼にとってかけがえのない存在を支える姿勢を見せてやれば、多少なりとも安心できるのでは、と考えたのだった。

実際、ステイレーングループの繁栄には早くも陰りが見え始めていた。

一金融機関からスタートして気が付けば巨大な組織に成長したステイレーングループも、会長であるヴォルデが病床についてからというもの次第に一体性を失い始めていた。ヴォルデと共にやってきた古参の同志達が次々とリタイアし、代わって若手が台頭してきたまでは良かったが、彼等には進むべき道を明確に示してくれる統率者が必要であった。残念なことに彼の後継者に相応しい人材はなく、ずっとヴォルデを傍で支えてきたにせよセリアはまだまだ若す

ぎた。求心力を欠けば、組織が巨大であればあるほど瓦解は加速度を増していつてしまう。彼なりに、自ら丹誠込めて育てた組織が思わぬ方向へと変質してしまつていくことに気が付き、心を痛めていたであろうことは想像に難くない。増してや、引き続きその組織を堅持していかねばならないという重大な責任がセレアの両肩に否応なく押し掛かつてくるのだ。ヴォルデとしては、居たたまれなかつたであろう。

それから三年。

ヴォルデ亡き後替わつて着任した新会長は稀に見るワンマン主義であり、スティーレイングループはたった一人の独裁者に振り回され始めた。彼は系列会社には秋霜のごとき酷烈さをもつて臨み、実績の振るわない会社には片っ端から業務規模縮小、あるいは解散を命じた。あまりの強引さに嫌気のさした社員達は一人、また一人と会社から去つていった。

そして、ショーコ率いるStar-lineがそうした合理化の波を被るまでに、そう時間はかからなかつた。

活発化していたテロ事件が次第に沈静化していくにつれ、各企業専属警備会社が活動するタイミングも失われていったといつていい。そこに目をつけた新会長は、容赦ない合理化の刃でStar-lineの切り崩しを断行。ファースト、セカンド二チームでの運用体制を一チームに縮小させ、余剰となつた人員を一顧もせず解雇した。総指令長セレアはせめてグループ内での雇用継続を、と会長に直訴したが、それすら一蹴された。そうして突然路頭に放り出された隊員達は呆然としたが、やがて団結して血も涙もない会社への復讐に踏み切つた。その訴訟がなお進行中だったが、スティーレイン側の弁護士は敗訴しない方がどうかしているといつてさつさと匙を投げた。会長が勝手に始めた肅正の先棒を担がされたセレアは事態打開のために今夜もあちこち駆けずり回る羽目になつている。

新会長が辛うじて解散を命じなかつたのは、代表取締役である創業者ヴォルデの孫娘に遠慮したのと、優良警備会社の名声が世間に

根強く残っていたからである。ただし、新会長のそうした配慮も長続きしないであろうと、グループ内では実しやかに囁かれていた。必ず近いうちにStar-line潰しにかかるであろうことは誰の目にも明らかであった。

それらの噂は当然シヨークの耳にも入ってきたが、彼女はどのような不平不満も漏らさなかった。

事ここに至った以上、Star-lineが消滅するその日まで、自分の責務を全うするまでだと思っている。

それよりも、首の皮一枚でつながっている隊員達をヒマに晒してしまつては、会長に解散の口実を与えてしまう。そう睨んだシヨークは、無理矢理業務の体裁を装うべくグループ会社への巡回を徹底させていたのであった。

そんなステイレイングループ内部の動向を、サラは手に取るようにわかっている。公私両方の治安組織が一堂に会する「都市治安委員会」のメンバーとして会議に出席するたび、セラと顔を合わせていたからである。

崩壊していくStar-lineの現状を聞いて彼女なりに心を痛めていたが、シヨークが何も語らない以上踏み込んではいけなような気がした。もうサラはステイレイン所属の人間ではないのだ。

代わりに、かつてのメンバー達の情報について知っている限りの情報をあれこれと話したり他愛もない世間話を持ち出したりしたが、シヨークのテンションは水平なままである。

ふと、

「……髪、伸ばしたのね」

シヨークは唐突にそんなことを言った。

かつてはショートカットだったサラだが、今では背中に達するくらいのレストランヘアになっている。大分印象が変わったようにシヨークは思った。そんなシヨークも、ひと頃に比べれば髪が長く伸びている。

「それでも、何度か切ったのよ？ 長いこと会ってなかったから、わからなかったでしょう？」

微笑んだサラ。

とても都市の治安部隊を率いる隊長とは思えないほどに柔らかく、女性らしさに満ちあふれている。

「そうだったわね。最後に会ったのは確か、みんながいなくなった時だったから、もう三年も経っているのね。お互いに忙しくて、会おう会おうって口ばかりになっちゃった」

ようやくシヨコも相好を崩した。

「他のみんなとは会ったりしてるの？ サイ君とナナちゃんなんか、割と近くにいるでしょ？」

創設間もないStar-lineの名を一躍国内外に知らしめる役割を果たした天才ドライバー・サイとその幼馴染みで恋人のナナ。二人は第一次組織改変の際に残留を希望した。シヨコがいるから、というただそれだけの理由である。彼女は誰よりも二人を弟や妹のように可愛がり、サイもナナもそんなシヨコを慕ってやまなかった。ちなみに、二人はこの時に結婚して所帯をもっている。

が、三年前に第二次組織改変が行われたのを機に、ついに二人もStar-lineを去る決意をする。

ナナが出産を控えていたため、彼女はこの時に退職、サイはステイケリア重工G地区ラボにある技術開発部へ異動となっていた。父親になる予定の彼としては、これ以上危険と隣り合わせの職場に身を置いて妻子を不安にさせたくないという気持ちがあったらしい。二人が去っていく現実を目の当たりして、初めてシヨコは心の内に空洞ができていくのを感じた。

いつかはそうなるものと覚悟していたから笑って送り出しこそしたが、この時ばかりは自分を支えるのに精一杯だった。組織が新体制に移行して間もない時期ゆえ寝酒の世話にもなれず、彼女にとつてずいぶん辛い日々が続いた。

ほどなくナナは元気な女の子を出産。

産後のあれこれが落ち着いてしまうと、二人はシヨークの身辺が心配になってきたらしく

「あのコ達、なかなか会えないけど連絡だけはまめにくれるのよ。なんだか、あたしっいたら年老いて目の離せない肉親のように思われているみたいね」

「シヨークつたら。……生まれた女の子、確かりノちゃんっていうのよね？ 二人から手紙がきていたわ。私、うっかりお祝いもあげてなかったから申し訳なくて」

サイとナナは元のメンバー達へ律儀に出産を報告する手紙を出していたようである。

「どのくらい前だったかしら？ この前リノちゃんに会ったのよ。大きくなっていて、ナナちゃん似でとっても可愛いんだから。どういふつもりなのか、あたしに懐いてくれるのよねえ。また会いたいわあ」

懐かしそうな表情をしたシヨーク。

いつの間にやら時間は過ぎ、気付けば二十二時を回っている。

話がひと段落したのを見て取ったサラは腰を浮かしかけたが

「それから、シヨーク。一つだけ、話しておこうと思ってたことがあるの」

つと表情を真面目にして真っ直ぐに視線を向けてきた。

シヨークは微笑しつつ

「大体、わかってるわよ。——結婚、するんでしょ？」

事も無げに言っただけで、サラはあつ、と驚いて見せた。

「どうしてわかったの？ 何も言っていないのに」

「わかるわ、それくらい。すっかり綺麗になってるんだもの」

髪を伸ばし、まるで感じの変わったサラを一目見た時から、シヨークはそんな気がしていた。

電話で済まそうとせずわざわざ報告にやってきたところはいかに、性格的に几帳面なサラらしい。

「シヨークも大変でしょうから、スケジュールが決まったら真っ先

に連絡するわね。披露パーティは多分半年後くらいになっちゃうと思うけど、Star-lineのみんなとか親しい人達だけをお招きするつもりだから」

幸せな連絡事項を言い残し、サラは帰っていった。

本部舎入り口前で、遠ざかって行く車を見送っているシヨーク。

（とうとうサラも結婚、ねえ……）

赤いテールランプを見つめつつ、無意識のうちに呟いていた。

羨ましい気持ちがないといえば偽りになるが、といってそういう機会に恵まれない自分を惨めに思ったりするのは間違いだと信じている。

誰だって、やらねばならないことへの集中を余儀なくされる時期の一度や二度、あるものだ。

そうした試練を乗り越えてこそいい女になれるのであり、いい女になればこそいい男が寄ってくる——誰かが言っていたのを思い出した。

それもそうよね。

自分で自分に言い聞かせつつ本部舎に戻ろうとして、ハタと気が付いた。

「やだ、マイクの台詞じゃないよ……」

言葉の価値と発言者の重みは、必ずしも一致するものではないらしい。

「——メイファ」

「はい。なんでしょう、エド先輩」

ハンドルを握っているエドは前を向いたままどう言ったものかとしばらく考えているようだったが

「……死体、見たことはあるか？」

いきなりそんな質問をぶつけてきた。

唐突に何を言い出すのかと、メイファは思わずエドのほっそりした横顔を見つめた。

「そ、それはまあ、ありますよ？ 三年前に祖父が亡くなったので、その時に——」

「じゃなくってね」

胸ポケットからタバコを取り出してくわえたエド。

「……無理矢理命を奪われた人間の死体のことだよ」と言ってからちらとメイファを一瞥し「さすがにそれはないだろう？」

あつてたまるか、メイファは咄嗟に思った。

そこら中で惨殺死体を見てしまうような環境に生まれ育った覚えもなければ、そういう趣味の人間とお近づきになったこともない。

「あ、ありません！ 当たり前じゃないですか！」

怒ったように返事をする、エドはタバコに火をつけて

「なら、覚悟しとけ。商売柄、これから山ほど見なきゃならないよになる。——早速だが、十分後に」

ぷーっと煙を吐き出した。

たちまち、暗い車内に白い煙がたちこめていく。

「えっ!？」

その言い草に驚いたメイファ。

再びエドの顔を見やると、彼の目が物憂げな光を放っている。

「だけど、これだけは言っておいてやる。できることなら、俺だっ

て見たくはないよ」

あとは物思いに耽るようにして、黙りこくってしまった。

その相好に鬼気迫るような尋常ならざる雰囲気を感じたメイファ。何かあったのかと尋ねたかったが、話しかけるのは憚られた。

——程なく、エドは車を停止させた。

そこは古びた中層建築物が建ち並ぶ、かつての繁華街の一角であった。

以前はバーや風俗店が軒を並べネオンのカラフルな明かりが毎夜通りを染めていたのであるが、今となっては当時の名残などほとんどない。両脇の店はどこもシャッターが下ろされ、看板や電飾は朽ち果てて外れかけている。様相はあたかもゴーストタウンであり、街灯も切れたまま放置されているから一帯は普段限りなく闇である。

が、二人が車から降り立った時、その闇は回転灯が規則的に放つ鋭い光に切り裂かれていた。

すぐ近くに数台の警察機構車両が無造作に停められており、警察機構職員達の慌ただしく動き回る影が地面を行ったり来たりしている。

「エド先輩、これは……？」

容易ならぬ事件の現場に連れてこられたと察したメイファは、思わず先輩の顔を見た。

その先輩はいえば、くわえタバコのまま車にもたれかかり、じっと目の前の光景を眺めている。彼女の問いかけが聞こえているはずだが、何も言わない。

やがて、意を決したように姿勢を直すと

「……じゃ、行くぞ。一つだけ言っておくけど、メイファ」

「はいっ」

「頭の中を空っぽにしておくんだ。余計なことを考えてしまったら、それまでだよ。特に君は女性なんだし」

言い捨てておいて、先に立って歩き出した。

何を言いたいのかまったく理解できなかったが、今はこの先輩の後についていくしかない。彼に倣って立入禁止ラインの傍に立っている巡査に敬礼し、ロープをくぐって現場へ足を踏み入れた。

先着して動いていた制服姿の職員の一人が二人に気付き、駆け足で近寄ってくる。

「どうも、お疲れ様です。Bブロック所轄F地区西署所属のトマスです」

名乗りつつピツと敬礼をした。まだ若い巡査である。

エドもまた口からタバコを外すと敬礼を返して

「お疲れ様です。州警察機構本庁捜査課のエド・リーゲルです。こっちは新米の――」

「同じく捜査課のメイファ・テアです！ げ、現場はこれが初めてです！ よ、よろしくお願いいたします！」

いかにも新入りらしい畏まり方に、トマスは僅かに微笑して見せた。

「これはまた、期待のルーキーですね。こちらこそよろしく」

好意的に声をかけてくれたが、すぐに真面目な表情に戻ってエドと向き合い

「詳しい状況はまだお聞きになっていないかと思えます。ご説明しましょう」

そう申し出てくれたが、エドは返事をせず黙ってトマスの背後に目線を走らせた。

彼の後ろには廃墟と化した商業用ビルが並んでおり、そのうちの一軒に警察機構職員達がしきりと出入りしている。表通りから直接上階へと通じる階段の入口で、元々なのか朽ちて外れてしまったのか、表戸はないようであった。

「……現場は、あの中でしょうか？」

「ええ、遺体は二階で発見されました。第一発見者はこの界限をうつっている不良少年グループの一人です。どうも隠れて」煙草を吸う手つきを見せ「やろうとこの建物を選んだようです。こ

ういう場所ですから、彼等が発見しなければ誰にも発見されないままだったかも知れません。不幸中の幸い、といいたいところですが、事が事なのでそうも表現できないかと……」

トマスが遠慮がちに説明した。

つまり、少年達は隠れて麻薬を吸おうと建物に入り、死体を見つけてしまったらしい。

動？して警察機構に通報したまでは良かったが、イコール自分達も捕まると考えている余裕はさすがになかったであろう。笑い話のようだが、殺人被害者が出ている以上笑う訳にいかない。

ただ、それ以上に笑えない理由が、エドにはあった。

「……とりあえず、現場を見せてもらいましょう。その上で、詳しい状況を伺うことにします」

彼はトマスをかわす様にしてビルに近づくと、そのまま中へ入っていた。

ぱたぱたと後を追っていくメイファ。

階段は真っ暗で、何年も滞留しているような埃っぽい匂いがした。足元が見えないためメイファは何度も足を踏み外しそうになったが、階段自体はコンクリート製でしっかりとしており、軋んだりするようなことはなかった。

上りきったところで突き当たり、左手に狭い廊下が続いている。

やはり、暗い。

すぐ手前に小さなカウンターらしき残骸があり、あとは個室が幾つも連なっている。エドはそこがかつて売春施設が連れ込み用簡易ホテルであったのだろうと推察したが、若くしかも女性のメイファにはそんなことはわからない。親を慕う子供のように、エドの後についていくだけのことである。

廊下は長かった。

構造から見てそろそろ突き当たるというあたり、一室だけ明かりの漏れている個室がある。

その入り口で、エドは足を停めた。

メイファは彼の背後からそうつと中を覗くようにしたが、ほとんど同時に

「……うつ」

両手で口を押さえ、ばたばたと元来た方向へ駆け出して行ってしまった。

彼女と入れ違いにやってきたトマスは苦笑している。

「やはり、いきなりはきつかったようですね。まあ、無理もない……」

……

同情するような口振りで言った。

が、個室の中をちらと一瞥するなり不快な表情を露わにした。

「……」

エドは身じろぎもしない。

無言で個室の床を見つめている。

シングルベッド一つに通路がやっと、というだけの狭いスペース。埃をかぶっていて穴だらけになったマットの上には――男が一人、仰向けの姿勢で倒れていた。

よれたスーツ姿で死んでいるその男は胸から腹にかけて真っ赤に染まっており、ワイシャツの前が引き千切れたようにボロボロになっている。右腕の上腕付近から先が失われているほか、左腕や右太股からも多量の出血があった。

窓のない壁には凄まじく血飛沫が飛んでいて、コンクリート剥き出しの床に目をやればペンキの缶を倒したように赤い大きな水溜りができている。

「……」

誰もが瞬時に目を背けなくなるような凄惨な惨殺現場だったが、エドの眼差しは注がれたままである。

彼が黙っているから、傍にいるトマスも沈黙を守り続けている。

ややあって、エドがふうつと大きく一つ、息をついた。

「……人間一匹殺すのに、ずいぶんと大量の銃弾を使ったものですね」

そんな表現で、この殺人に対する感想を漏らした。

トマスは、その横顔になんともいえない表情を見てとった。

「そうですね。私も殺人現場には何度も立ち会っていますが、ここまでののは初めてです」

彼が言うのももつともであろう。

生身の人間など、一発の銃弾をくらっても致命傷になりうるというのに、何を理由としてここまで激しく銃撃しなければならなかったのか。それも、ほんの僅かな時間に、である。夥しい量の流血と遺体の傷跡が、そうした残虐きわまりない殺害の瞬間を物語っている。

エドの視線は、再び男の遺体に向けられた。

五十代を過ぎたであろう、中年の男性。が、初老といってもいいほど頭髪には白髪割合が多い。

小柄な身長割に体つきはがっしりしている。

こちらを向いている革靴はすっかり傷んでいて、底がほとんど真っ平らに近い。

ふと、自分の足元に何かが転がっているのに気付いた。

よく見れば、激しい銃撃を受けて吹き飛ばされた男の腕であった。軽く握られた状態のその手はほどほどに大きく、そして妙にこつこつとしていて無骨さを感じさせる。親指の付け根に、大きな縫った痕が見てとれた。その縫い痕を、エドはかつて何度か目にしたことがあった。

彼はゆっくりとした所作でトマスに向き合い

「……いや、大体わかりました。これで十分です。ありがとうございます」

軽く頭を下げてから、廊下を歩き出した。

その背中に向かって、トマスが

「もう、よろしいのですか？」

呼びかけると、エドは足を停めて肩越しに振り返り

「ええ、十分です。確認は取れました。後のことは、鑑識の皆さん

にお任せしましょう」

と言ってから、さらに付け加えた。

「当件の被害者はファー・レイメンティル州警察機構本庁捜査課所属、メグル・アード警部に間違いありません。まずはその確認をします、ここまでできたのですよ」

念を押すような口調でそう告げると、彼は四角い闇の中へと消えていった。

後に独り残されたトマス。

彼は見逃してはいなかった。

エドが最後に瞬間的に浮かべた寂しげな表情を。

（無理もないか。同じ職場の先輩がある日突然殉職したとあっちゃ、な）

複雑な思いに駆られたまま、しばらくその場に佇んでいた。

——そのエドが階段を下りきつて外に出ると

「す、すみませんエド先輩。まさか、こんなに酷いものだったなんて……」

彼を待っていたメイファがぺこりと頭を下げた。

顔色が優れない。なおもハンカチで口を押さえている。

そんな彼女の姿を目にしたエドは仕方がなさそうに笑いながら

「だから、言っただろう？ 頭の中を空っぽにしておけ、って。ああいうのはちょっとでも妙な想像力を働かせてしまったらもう駄目さ。それに慣れないとこれから先、いつまでも現場でゲロってなきやならなくなるよ？」

歩き出した。

が、今夜のところはそれで良かったのかも知れないと、エドは何気なく思った。

配属されたての新米刑事。

そんな前途ある若者に殉職した先輩の遺体などまじまじと見せた日には、即刻退職願を書かれてしまうであろう。まかり間違えばお前もそうなるという、せぬでもよい脅迫になりかねない。

何せ、かくいうエドとて、本音を言えば見たくはなかった。

——新米の自分を一から鍛え上げてくれた、恩ある先輩の変わり果てた姿などは。

ファー・レイメンティル州D地区北エリア。

都市中心部から遠く離れているため、夜の帳が降りると同時に辺りはすっかり闇に包まれていた。

盆地状の地形を人工的に整形したその現場は、大きくえぐり取られた中央部分にのみ不必要なまでの照明が点されており、遠目には巨大なスタジアムに見えなくもない。が、平らかに地均しされたスペースに搬入された土木作業用の大型重機や建設資材にライトが当てられている光景は、スタジアムというよりも夜間営業のアミューズメントパークと形容した方が相応しいかも知れなかった。

それら全ての重機は稼働を停止し、偶像のように静まりかえっている。

ただし、唯一中へと通じる工事用車両入口に番兵よろしく佇立している一機のCMDだけは頭部のメインカメラをグリーンに発光させ、時々思い出しように首を左右に動かした。完全な人型を模しているその機体は全身真っ白にカラーリングされており、遠くからでも闇に映えて見えた。左肩の装甲前面には、流れ星を模したシンボルマーク——警備会社Star-lineのマーク——がペイントされている。

足元では紺の制服を身につけた隊員達が数人、携帯端末の画面を覗き込みながら打合せをしている。

と、程なく作業現場の反対側、南の方角にヘッドライトの光が見え、こちらへと近づいてきた。

それに気が付いた男性隊員の一人は

「——こちらアデン。間もなくセンター、インします。各自、配置について警戒にあたってください」

衿に取り付けた小型マイクを口元に寄せて指示を発した。

徐行しつつやってきた車は三台。いずれも黒塗りの高級車である。Star-lineが固めている工事用車両入口を通り抜けて作業現場の中へ進んでいこうとしたその時、急にそれらの車が停止した。

間髪を容れず

「――Star-line、何をやっている！？ その機体は飾り物か！？」

突然の罵声。

何事かと声が飛んできた方を見やれば、声の主はなんと会長のサントスであった。

二台目の車の後部ドアが開くなり、彼は大股で隊員達に詰め寄ってきて

「なぜ、私を警護しない！？ この私はテロリスト達から狙われている身であるという事情を、君達だって知らない訳ではないだろう！？」

若い隊員達は固まっている。

触れているのはまがりなりにも、ステイレーングループトップの逆鱗である。対人関係に斟酌する習性を持たない現代の若者といえども、さすがに畏まらざるを得ない。

困惑している隊員達を相手取って、なおもがなり立てているサントス。

「よって、1835以降は東側の通用口付近に機体を回しますのだから――あら？ ちょっと待ってください」

少し離れた位置で特殊装甲車の無線を用いて通信していたショーコ。

様子が妙なのに気付き、一度無線交信を打ち切った。

よくよく見てみれば、こともあるうちに自分の部下達が会長のサントスに罵倒されているではないか。

何か仕出しかしたのかと疑いつつ、ショーコはつかつかと歩み寄っ

て行くと

「……うちの隊に何か失態でもありましたでしょうか？」

呼びかけた。

彼女の声に、サンテスは罵倒するのを中断してそちらを一瞥した。

「君は、誰だ？」

「Star-line隊長、シヨーコ・サクですが」

救いの神が現れた、といわんばかりの顔をしている隊員達。

彼等に「持ち場に帰りなさい」と小声で促しておいてから、シヨ

ーコは難物と向き合った。この男の現場嫌いは有名なもので、Star-line本部舎に足を踏み入れたことすらない。ゆえに、隊長の彼女といえども直接言葉を交わすのはこれが初めてであった。

ステイレーングループ会長サンテス・オーティン。

上背があり、シルエットはスマート。顔立ちも端正で、稀に見るハンサムな中年とっていい。聞くところによれば、まだ五十歳になっただけだということ。

が、どこことなく澱んだ陰を帯びていて全体の雰囲気は決して明るくない。

初対面であるというのに、早くも強烈な嫌悪感を覚えたシヨーコ。先日来煮え湯を飲まされっ放しということもあったが、それだけの理由ではなかった。彼女が最も忌むところの倨傲、傲岸、陰険、陰湿ついでに癪癢持ちといったいわば男らしからぬ要素を人の形にまとめて服を着せたような印象を受けたからである。こうなると、例えどれだけ札束を積まれようとシヨーコは絶対に打ち解けることはできない。

その難物であるサンテスは彼女の顔から下、そしてまた顔へとなめるように視線を動かしたあと

「君が隊長かね？ 何だ、この様は！ なぜ警備行動の指示を出さない！？ 隊員達は皆、遊んでいるではないか！ 何をしにここまで出動して来ている！？」

「警護なら、今この通り全隊員を充てて実施しておりますが」

「そうではない！ 君は馬鹿か！ 私はあつちから来ているのだぞ！ ただでさえこんな辺鄙で暗い地区だというのに、黙って私にくるのを待っている警備チームがあるか！ テロリストにでも侵入されていたらどうする気だ！」

言つに事欠いて馬鹿ときた。

業務上罵声を浴びるのには慣れているからまだいいとしても、彼の言う意味がよくわからないというのはどうしたものであるう。言葉の内容が感情に任せて断片的になってしまっているから、主旨が伝わってこないのである。こういう類の人間は、大会社の肩書きを渡されるには不適當であるといつていい。

シヨーコはだんだん面倒くさくなってきた。

サントスが咆え続けるのに任せ、合間を縫つて

「つまり、機体を会長の車にぴったり随行させると？」

適当に訊いてみたところ、彼は声を一段と励まし

「だから、さつきからそう言っている！ 置物のように立たせておくために君達の部隊に配備したのではない！ Star-line は実効性のない金食い虫だとグループ内で批判されているという事実を知らんのか！」

あんたがその急先鋒でしょうが。

口には出さねどシヨーコは思った。

営業費用削減のために設備縮小人員整理が目に見えて手っ取り早いなどという理屈は子供でもわかる。逆に、そういう企業運営が常套手段であるなら、企業トップは子供でも務まるという論理が成立するのではあるまいか。

今日の前で眉間にシワを寄せている男には言いたいことが山ほどあるのだが、子供以下の人格しか形成されていない人間に物を言うだけ無駄である。

「……お言葉ですが、会長」

あんたバカじゃないの、と口先まで出掛かっている一言をぐっと飲み下し

「増速歩行中のCMDを並走させるなどというのは、会長が自殺願望をお持ちだというのと同義です。これだけ足場が不安定な地形にあつては、いつ対地加圧振動によって路盤が崩欠し、機体がバランスを失わないとも限らないのです。つまり、テロリスト機がやってくる前に身内の機体に潰されかねません。会長の警護には百人以上のSTR隊員達が全力であたっていますから、ご心配は無用でしょう」

半分は出任せだが、半分は事実である。

重心の高い完全人型機が稼働するための絶対条件として、足場の問題がある。下重心安定仕様に設計された土木作業用CMDなどは異なり、地盤の不確かな場所では足をとられて転倒する危険度が跳ね上がる。いかにコンピュータによるバランス制御システムが進化しようとも、物理法則に完全に逆らいきすることは不可能だといつていい。佇立させているだけでも場所を選ばねばならないというのに、駆け足なんかさせたならば最悪の場合死人が出るであろう。十代の半ばからCMDに関わって生きてきた彼女は、経験則でそのことを知っている。

さらに言えばショークは、この出勤自体決して快く思つてはいない。ろくに舗装も整地もされていない路面を歩かせただけでも、下半身の間接可動部に内蔵されたモーターなりシャフトに要らぬ負荷がかかつて摩耗を起こしてしまう。重量が重量だけに、人間が泥道を歩くのとは訳が違うのである。

どだい、会長自らこの地域を「辺鄙」と罵っているのだ。

わざわざここまでCMDを運んできてサントスを襲うような物好きなテロリストがいると本気で考えているのかと言つてやりたいくらいであつた。CMDによる襲撃への警戒と銘打つてみたところで、周囲に不審な機影があるかどうか、対CMD感知センサーをオンにしておけば済む話である。

以前のショークであれば「じゃあ、どうなつても知りませんよ?」と啖呵をきつた挙げ句、本当に並走させていたに違いない。

が、五年という歳月を経て、彼女自身も変わった。

今や、後先を考えずに余計なことを口走ったりするようなシヨークではなくなっている。

「どうぞ、安心して視察を続けてください。我々も今は何の仕事をしなければならぬか、重々承知しているつもりですから」

「……」

忌々しげに睨んでいるサントス。

が、やがて肩を怒らせながら公用車に乗り込んでいってしまった。彼の背後では先ほどから美人の秘書が一人、見事なプロポーズを誇示しながら立っている。彼女もまた会長に続けて車に乗りかけ、そこでシヨークの方をちらと見てウィンクした。

リファ・テレシア。

彼女もまた、かつての仲間である。

ウィンクは「会長がいろいろごめんね」という意味であろう。

苦笑しているシヨーク。

以前は天真爛漫なのと強運だけが手柄で、何一つ仕事ができない無能な女だった。が、五年前の事件で愛する夫——テロリストの——を喪ってから、彼女は百八十度の変貌を遂げた。今や、サントス会長が抱える秘書グループの中でもずば抜けて優秀、かつスタイル抜群の美女である。

あのバカ女も、そういう配慮ができるようになったか——。

なんとなく万感の思いが胸に込み上げてきて、会長に罵倒された不快感などすっかり忘れていると、ポケットの中の警備班用携帯端末が鳴った。

屋外での会長現場視察が実施される場合、警備チームの連携強化と迅速な情報伝達のために会長側近、STR、そしてStar-lineの責任者が持たされることになっている。もともとSTR側からステイレーングループ上層部へ意見具申されていたのだが、当初サントスは黙殺した。

が、そんな態度がある日突然一転、不必要なまでに多彩な機能を

搭載した立派な携帯端末がシヨークの手元に郵送されてきた。どうやら、代表秘書のリファが言葉巧みに了承させたいという話を、シヨークはあとで耳にした。

個別メール受信。

開いてみると、送信してきた相手はたった今ニアミスしたばかりのリファであった。

『シヨークちゃんへ。胸、見せすぎだゾ！ 今の会長はスケベなんだからね！』

「……」

忘れていた。

昼休みに仮眠をとった際、シャツの前を開けっ広げにしたままだった。

目の前で忙しく上下左右に動いているナイフとフォークをぼんやり眺めていると

「……あれ？ メイファってば、食べないの？」

それと気付いたリナが尋ねてきた。

彼女は分厚い高級牛ステーキをいかにも美味そうに平らげていく。若い女性ながら素晴らしい食いつぶりである。スレンダーな体型と知性的な美貌の持ち主のそういう姿を目にしてしまえば、節食によるダイエットなど本当は無意味なのではないかと思われてくる。

——捜査課ベテラン警部殺害事件から二日後のこと。

メイファは旧友のリナから夕食に誘われ、都市中心部まで出かけた。

社会人歴が一年長いこの友人は仕事が忙しく、ここしばらくまとまらなかつた。電話をもらったメイファは、珍しいこともあるのねと何気なく口にしたところ、

『うん、あたし、急だけど異動になるの。グループ系列の子会社だつて。あたしが言うのもなんだけど、これって左遷なのよねえ』

リナは事も無げな調子で言ったが、聞かされたメイファの方が慌てた。

慣れない仕事の疲労が大きく、誘いを断って自宅でゆっくりくつろぐつもりであったのだが、ここは友人として彼女の憤りなり悲しみを受け止めてやるべきだと思った。

「わかった、付き合う！ で、いつ、どこにするの？」
そして今日。

久しぶりに再会したのだが、左遷などどこ吹く風といった様子のリナ。

いつも通り明朗かつ食欲が絶好調で、左遷に至った話やら愚痴など一言も口に出さない。

むしろ、メイファの方が元氣不十分であった。

高級ステーキを勧められた彼女は「はあっ」と大きくため息をつき「食べたいよ。食べたいけど……ダメなの」

目線をすぐ下へ落とした。手のついていない、リナが食べているのと同じ料理がそこにある。一人づつのコースを注文しているから、二人に同じものが出されてくるのである。

「へ？ なんて？ 食べればいいじゃん。なんかあったの？ ダイエット中？」

話を聞いてやるつもりでやってきた筈が、いつの間にか立場が逆転してしまっている。

質問に答えてやったものか、どうか。

聞かせたが最後、自分と同じ悲惨な状況になりはすまいかという不安がメイファにはある。一昨日は人気のない廃屋だったからいいものの、今のこの場所はそれなりに格調高いレストランなのだ。周囲を見回せば、カジュアルな服装に身を包んだ客ばかりである。ラフなスタイルでやってきているのは、どう見ても自分達二人しかない。

が、無邪気な顔で咀嚼を繰り返しているリナの顔を見ているうちに気が変わってきた。

彼女の太くて柔軟な神経ならば、話してやっても問題ないのではあるまいか。

「あ、あのね、実はさ——」

一昨日の夜、身の上に起こった不幸な一件を詳しく話して聞かせたメイファ。

「——っていう理由なの。あんなの見ちゃったら、しばらく肉なんて食べられないよぉ……」

「ふーん……」

凄惨な殺人現場の生々しい状況を耳にしながらも、リナの手が止まることはなかった。気が付けば皿の上には付け合わせの野菜しか残っていない。まだ食べ足りないのか、リナはフォークをくわえている。

彼女は目線をまっすぐメイファに向け、少しの間黙っていた。

ややあつて

「……ひどいね、それ」

あっさりした調子で言った。

「でしょう？ 新人をいきなりそういう所に連れて行くなんて、あんまりじゃない？ 殺されたのが同じ警察機構の職員だし、身元の確認とかしなくちゃいけなかったのはわかるけど……」

不愉快な思いが込み上げてきたメイファは、ここぞとばかりにぐずぐずと愚痴を口にしまじめた。

うんうんと聞いているリナ。

ところが。

「……メイファ、ちょっと待った！」

急に手の平を見せてストップをかけた。
えらく真剣な表情をしている。

彼女のアクションを、せっかくの食事の最中に仕事の愚痴などこぼすな、という意味に受け止めたメイファは甘えるように鼻を鳴らして

「えー、そんなコト言わないで聞いてよぉ！ 私だって、そりゃあ

大変な組織だつていうのは理解して入ったつもりだし、色々見たくないものを見なくちゃいけないこともあると思うのよね。けどさ

——」
ガタン。

メイファがまだ何か言っているというのに、いきなりリナが立ち上がった。

そのまま、物も言わずに勢いよくバタバタと走っていつてしまった。

「……」

何が起こったのかわからず、後に残されたメイファは茫然としている。

——十分後。

「いやーごめんねえ！　なんか、じつくりと想像してみたら、急に気持ち悪くなっちゃった！　あはは」

ようやくトイレから戻ってきたリナ。

何事もなかったかのように、頭を掻きつつへらへらと笑っている。愚痴を聞いていたというよりも、惨殺現場の光景がどんなものか頭の中で描いていたらしい。

「そんなに想像力豊かなら、小説家にでもなれるわよ……」
呆れているメイファ。

自分のイマジネーションで気分を悪くするような人間がいたものだろうか。

思ったが、それはまあいい。

この友人が変わり者であることを、付き合いの長いメイファは知っている。変わり者とはいっても他人を不愉快にさせるような変人ではなかったから、これといって気にしたりしたことはない。

そのリナ、吐いてきたばかりだということにもう次の料理に手をつけている。

「あら、これ美味しい！　メイファも食べたら？　肉じゃないからいけるでしょ？」

「あー、まあ……」

メイファも仕方なくフォークを手に取り、目の前のサラダをつつき始めた。

幸せ一杯な笑みを浮かべて物を食べているリナの顔を眺めていたら、少しは食欲が出てきたような気がせぬでもない。

リナは恐ろしい勢いで生野菜をひよいひよいと口の中に放り込むと「……で？　メイファってば、いきなり殺人現場を見せられたのよね？　毎日新聞とかテレビで報じられているけど、殺人事件ってそんなに多いの？」

また話題を元に戻してきた。

せっかく食欲が出てきたところだったのに、とメイファは瞬間的に恨めしげな目つきをしつつも

「多いなんてものじゃないわあ。毎日都市のどこかで人が殺されて、殺人犯が誕生しているのよ。日々大なり小なり発生件数が報告されるんだけどね、そりやもう凄い数なの。ま、私達のところに殺人事件全部が持ち込まれる訳じゃないし、担当として受け持たされるのはごく一部なんだけど。私の先輩は優秀だから、一人で幾つか抱えているみたいよ。よく身が保つよね」

他人事のように言った。

警察機構に入る前はそういう敏腕刑事になる将来の自分を夢みたものだが、今は早くもあり得ないと思っている。新人の夢を挫いたという点では、先輩のエドは大きな失敗を犯したかも知れない。

が、リナはやはり同じ想像をしたものらしく

「へえ！　でも、すごいじゃない。凶悪犯を追い詰めていく刑事さん、憧れるよねえ。あたしも最初から警察機構を受けておけば良かった。天下のステイレーングループに入れたと思って喜んでたけど、前会長が亡くなってからはもうダメだったのよね。今の会長つてば行き先のわからないワンマンバスだし、とにかく合理化合理化だもの。あたしの会社だって、そのうち潰されるかも知れない。絶対そうよ」

「民間企業の方がいいって！ 警察機構なんてね、外からみるほど綺麗な組織じゃないのよ。実はね——」

メイファは声のトーンを落とし、友人のために一昨日の一件にまつわる裏の話を聞かせてやった。

殺害されたメグルがここ十年以上にわたってテロ組織を追っていたことは警察機構本庁捜査課の人間なら誰でも知っている。巨大な犯罪組織に関わる捜査の場合、小さな証拠を積み重ねつつ外側から徐々に切り崩していくだけが常套手段ではない。必要とあらば敵対する裏社会の組織、あるいは情報屋と呼ばれる正体不明の職業人と極秘に取り引きを行い、捜査上不可欠な情報を得ることもある。そうして入手された情報それ自体は当然正当な証拠として採用されたりしないものの、それをちらつかせて犯罪組織に揺さぶりをかけることで、結果として決定的な証拠を得ることにつながるっていく場合がある。

「それがどうもねえ、メグルさんは陰でそういう取り引きをかなりやっていたみたいなのよね。警察機構本庁の上層部が知っていることもあれば、報告されていなかったケースもあるんだって。メグルさんの自宅とか使っていたパソコンとか調べてみたら、色々出てきたらしいよ。——だから、都市の治安を守る警察機構っていうけど、実際はダークなこともやっているんだよね。私がちょっとモチベーション落としているのはそのせいもあるの。いきなり死体を見せられたことだけじゃなくって」

赤い液体の入ったワイングラスに口をつけた。

あまり好きではないから、軽く口に含んだだけである。店の雰囲気とワイン好きのリナに引き摺られてオーダーしてしまったのだ。

リナはもう何杯目になるかわかったものではない。よほど酒に強いのか、顔つきが平素のままである。

グラスに残っていたワインをぐいっと飲み干し

「あらま、そうだったんだ。公的でも民間でも、大きな組織って何かしら表には出せないことをやっているのね。——うちだってそん

なものよ」

心底同意するように頷いてくれた。
そこまでは良かったが

「トップの会長からしてそうだもの。メイファも知ってるでしょ？
サントスっていう、うちの会長。創業者ヴォルデ会長が亡くなら
れてその後任なんだけど、これがひどいエロ親父なの！ ヴォルデ
会長の二十本の爪の垢を煎じて飲ませてまだまだ足りないわ」

突然、穏やかならぬ話を口にしました。

驚いて呆然としているメイファを相手に、リナは喋り続ける。

「あたしさあ、ステイレーン・セントラル・コーポレーションの
本社総務部に配属されたんだけどね、職種柄若い女の子が多いのよ
だけどそこって離職率がすごく高い職場だって先輩から聞いてたか
ら何かあるのかと思ってたの。そうしたら、ついこの前のことよ」

仕事中、急に会長のサントスから呼び出された。

会長室は総務部フロアのすぐ上にある。現在、ステイレーン・
セントラル・コーポレーション——通称SCC——がステイレイ
ングループの親会社だからだ。

これといって報告が遅滞している業務などない筈だが、と不審に
思いつつサントスのいる会長室を訪れたりナ。

入室してみると、彼は応接ソファに腰掛けており、自分の隣にリ
ナを座らせ

「……私の女になる気はないか？ 無論、それなりの手当は約束し
よう」

と、切り出した。

啞然として固まっていると

「君は実に素晴らしい容姿を持っている。私は、君のような女性を
未だかつて見たことがないのだよ」

口説き始めたではないか。

しかも、口では齒の浮くような世辞を並べつつ、こともあるうに
片腕を彼女の腰に回そうとした。

その瞬間、

パーン！と、見事な平手打ちがサントスの頬にお見舞いされていた。

リナは憤然として立ち上がり

「見損なわないでください！ あたし、そんなに安い女じゃありませんから！」

言い放ったという。

「ほお……」

世紀の偉業でも聞いたかのような顔をしているメイファ。

理由はどうあれ大企業の会長に平手打ちを食らわすなど、今どき珍しい武勇伝ではないか。

が。

リナの話には続きがあった。

「でさ、あたし、言ってやったのよ。——あたしを買ったのなら、このステイレーインググループの一切合切全部寄越しなさい、って。

そうしたらサントス会長、固まってたわあ。ケチな男はイヤよねえ」

さも当然のように言い切った。

「……」

ようやく、メイファは理解した。

なぜこの友人が突然左遷されるに至ったのかを。

平手打ちの報復もさることながら——会長のサントスは、触れれば想像以上に火傷するという危険性を、リナ・フィットナーという女に感じたに違いなかった。

都市中心部N地区にあるSCC本社ビル四十三階、特別会議室。ちよつとした運動場ほどの広さを持つその部屋では、先ほどから怒号の応酬が続いている。

「いい加減にして貰えませんか!? これは決定事項なのですよ! グループの将来を見据えた長期経営計画に基づくプランとして、会長のご判断をいただいたのであって——」

部屋の奥手中央には立派な木製の演壇が置かれ、三十代とおぼしき一人の男性が立っている。

彼の眼前には、何十人もの社長連——スティーレイングループ系列会社の——が居並び、皆敵意に満ちた刺すような視線を男性に向けている。雰囲気は険悪といつていい。

男性は顔を上気させながらマイクが壊れんばかりの勢いで喋りかけたが、最前列にいた社長の一人がそれを遮るように

「馬鹿も休み休み言え! るくに提議も寄越さないでおいて何が会長の判断だ! 全てはお前達海外派の企てだということはわかってるんだぞ!」

凄まじい罵声を浴びせた。

すると、その斜め後ろの席に座っていた中年男性の社長が頷き「私もそう思う。州経済はおろか国家レベルでの不況下だというのに、どこの馬の骨ともわからぬ海外企業のプロジェクトに多額の投資など、自殺行為としか言いようがないだろう。傘下グループ企業はどこも悲鳴を上げているのだが、君達の耳には聞こえていないんじゃないのかね? ……そーいやイゲル君、こしばらく、我が社が位置するE地区で、君の姿を見ていないような気がするのだが」

口調こそ静かだが、それだけに批判としては痛烈である。るくに系列企業に顔も出していないだろうと露骨に皮肉っているからだ。それを聞いて嘲笑を浮かべた者が何名かいる。

が、イゲルといった演壇の男性は怯んだ様子も見せず、その社長の方に身体を向けると

「だから、申し上げたではないですか！ ナツシュ・マテリアル社はカイレル・ヴァーレン国内においてナンバーワンの実績を誇るエネルギー資源開発企業なんですよ！ どの馬の骨ともわからぬ、などと仰るようなリユード社長こそ、少し認識が甘いと申し上げざるを得ますまい」

語気を強めて反駁した。

系列とはいえ一企業の社長に対する物言いとしては甚だ無礼なようだが、これには理由がある。

彼が立つ演壇の左側に設置されている簡易デスクに、数人の男達が社長連と向き合うようにして横一列に並んで着席している。

その中央、眉間にシワを寄せ神経質そうに身体を揺すり続けているのは会長・サンテスであった。

つまり、イゲルは会長側の人間であり、会長の威光を借りて発言している。この場の中ではもっとも若いと思われる彼が強気に出るのも当然であつたろう。

しかし、リユードといった男もタダ者ではないらしい。少しも顔色を変えることなく

「実績ナンバーワンは結構だが、事実を隠蔽したまま強引に事を押し通そうとするのは天下に響いたステイレーングループのあり方として、いかななものかと思うがね。——ロット社長、例の話を」と言つて、ちらと左隣の人物を一瞥した。

目線に気がつくや、ロットなる男性は軽く頷きつつやおら立ち上がった。

若い。一見、イゲルよりもさらに年若である。小柄ながら全身から精悍さを漂わせており、侵し難い威厳すら感じさせる。しかしながらよく整ったその容貌は至って柔和であり、若者にありがちな戦闘的な雰囲気というものが微塵もない。彼にあるのはむしろ、老成されたそれであつた。

ロットはイゲルに正対しつつピツと背筋を伸ばし「ストレイア工
作所のロット・ソーンです」と名乗ってから、よく通るキレのいい
声で話し始めた。

「ただ今イゲル氏が仰ったナツシュ・マテリアル社について、お尋
ねしたいと思います。——同社は五年前、アルテミスグループが組
織ぐるみで引き起こした我が社への業務妨害事件に内々で関与して
いた疑惑が濃厚です。これはヴォルデ前会長存命の時点で既に州警
察機構本庁から我が社へもたらされていたものですが、今お揃いの
グループ経営幹部の方々はご存知でしたでしょうか？」

広い会議室内にたちまちどよめきが起こった。

大手企業グループ、アルテミスによるスティーレーングループ業
務妨害事件。

スティーレーン系列会社に籍を置く者なら誰でも知っている、聞
くも忌まわしい出来事である。

他州に本拠地を置く同社は各産業分野において短期間のうちに目
覚しい業績を上げ、やがてファー・レイメンティル州へと進出を果
たしてきた。政財界からその成長振りを注目されたアルテミスグル
ープだったが、彼等の台頭と時を移さずしてスティーレーングルー
プ系列施設に対しテロ組織による襲撃が頻発するようになる。その
対応にStar-lineは忙殺されたのだが、行く先々で常にア
ルテミスグループ系CMD専門警備会社「Moon-lights」
が出没し、Star-lineの警備業務を陽に陰に妨害し始めた。
Moon-lightsの行為は次第にエスカレートし、遂には出
動してきたStar-line部隊を闇に紛れて襲撃、負傷者を出
す事態にまで発展する。

業を煮やした時の会長ヴォルデはあらゆる手段を講じてMoon
-lightsの犯罪性を立証、警察機構の協力も得て彼等をSt
ar-line本部舎へ誘き出した末、主要メンバーの身柄を確保
することに成功した。

のち警察機構の捜査により、アルテミスグループは最大のテロ組

組織である「リン・ゼール」と連携していたことが判明し、会長ガルフォは逮捕されるに至る。直後、アルテミスグループは瓦解し、同時にファー・レイメンティル州におけるテロ組織の活動も収束を迎えたのであった。アルテミス社はテロ組織の資金的シンパであったことが、この時知れた。

イゲルが激賞して止まない「ナツシュ・マテリアル社」は当時、そのアルテミスグループと水面下で手を組み、スティーレーングルーブ妨害に関与していたという。

ロットがそこまで端的に説明を加えた時、居並ぶ経営幹部の一人が話の腰を折るように叫んだ。

「ま、待ちたまえ、ロット社長！ それならばだ、なぜ同社は警察機構の摘発を受けないのかね？ 矛盾しているじゃないか！ この重要な会議の場で、いい加減な発言は遠慮したまえ！」

隣席の幹部が同意するように激しく頷いた。

アルテミス社は警察機構の摘発を受けている。関与していたというなら、ナツシュ社もまた当局に押さえられて然るべきであろう。

この点、誰もが突き当たる疑問に過ぎない。

が、ロットは少しも動じた様子を見せず

「まあそう慌てずに、とりあえず私の話を最後までお聞きいただきたいものです」ニヤリと笑ってから先を続けた。「——よろしいですか？ ナツシュ社が警察機構の摘発を受けずに済んだのは、まず第一に当社への妨害行為が間接的なそれであつたからです。同社は資源採掘事業に加え、鉱物加工技術の研究にも長年取り組んでいる。Star-lineを襲撃したMoon-lights所属のCMDは軍用機と同等とっていい驚異的な運動性能を有していました。が、この機体の可動部素材を極秘に提供したのがナツシュ社です。どうやら、この取引をめぐって莫大な金が動いた形跡があります。

……これが国内であるなら公安機構も動いたでしょうが、残念なことに機体の製造は海向こうだった。だから、物理的な証拠があるのに摘発に至らなかった訳ですよ。肝心のカイレル警察はアルテミス

社を恐れ、証拠不十分を理由に捜査協力を渋ったんです」

なかなかの雄弁である。

言葉に少しの澱みもない。いちいち挙げる事実が仔細に及んでいく上に、要点を簡潔かつ的確に衝いている。

いつしか、会議場内は水を打ったように静まり返っていた。その場にいる者は皆、彼の弁舌に引き込まれてしまっていたのである。

ロットはそこまで喋ってから一呼吸の間をおいた。

聴衆の関心は自然と次の言葉に向けられている。

「警察機構の捜査の手を逃れた理由はもう一つ。これも今の話と状況は被りますが、要するにナッシュ社とリン・ゼールあるいはテロ組織を関連付ける決定的な証拠が得られなかったのです。これもさっきの話と状況は被りますが、要するにカイル警察ならびにカイル政府に原因があるといってよしい。稀少鉱物であるダイラルド鉱石が埋蔵されているノース・レム地区開発にあたって、カイル政府は土着テロ組織の反政府活動に手を焼いた。ですが、ナッシュ社が政府から同地区開発事業を請け負うに及び、手もなく成功してしまった。なぜか？」

経営幹部はじめ、系列会社社長連の視線がロットに集中している。「——ナッシュ社からテロ組織に内密に莫大な金が流れたからですよ。しかもその金の出所はどうやらアルテミス社のです。カイル政府にしてみれば、喉から手が出るほど欲しかったダイラルド鉱石を確保してもらったものだから、ナッシュ社が裏で行った闇取引に勘付きこそすれ目を瞑らざるを得ない訳ですよ。アルテミス社は資金が豊富になったテロ組織に武器弾薬を売りつけるから、結果的に懐は傷まない。とんだ三者三得ゲームです。いかにヴィルフエイト国家公安機構がテロ組織撲滅を合言葉に協力を呼びかけたところで、どうにもならなかったのですよ。……こういうことです」

「……」
サントス以下グループ経営幹部の誰一人、ロットの発言に抗弁しようとはしない。

その筈であつた。

なぜなら、ロットはヴォルデの秘書兼側近としてごく近くにいた人物であり、ヴォルデは州警察機構はじめ国家公安機構上層部の人間にまで顔が利くだけの力を持っていた。たつた今ロットが喋った内容はヴォルデが生前、その筋の人々から直々に得た情報であるという推測は簡単につくのである。であるから、信憑性は限りなく高い。

それに引き換え、リユードの前に座る社長某が指摘した通り、サントスや現在の側近達は「海外派」と呼ばれ、長く海向こうにいた者達ばかりである。ヴォルデは国内にあつて政財界での存在感とパイプを着々と逞しくしたが、サントスにはそうした土台がほぼ皆無であつたといつていい。海外に暮らしていたとはいえ、情報源のレベルが隔絶しているヴォルデにとても及ぶべくもないのである。沈黙をもつて応えるよりほかなかつた。

ヴィルフリート合衆国と親密な関係にある隣国カイル・ヴァーレン共和国は長きにわたつてテロ組織撲滅に血道をあげてきたという経緯がある。ところが、その対決姿勢は必ずしも一貫されたものでなく、実利に供するとあらば間接的かつ巧妙な手段をして内々に協調してしまうという一面を持っていた。ナツシュ社の件にしても、カイル政府は結果的に見て見ぬ振りをした。同国と協力関係を結んだがためにテロ組織から標的視され、多大な犠牲を払いつつも強硬な姿勢を崩さなかつたヴィルフリート合衆国政府とは行き方が違つてしまつている。ロットが指摘した内容には、そういった背景も裏打ちされていた。

頼みの経営幹部連が沈黙させられるという展開に、イゲルは一瞬言葉を詰まらせた。

が、彼もまた若くして巨大企業グループ中枢に食い込んだ、有能な人間である。

咄嗟に反論に用いる事柄を頭の中で整理しつつ、受けて立つ構えを見せると

「しかしですよ、ロット社長。仰ることは理解できますが、過去にアルテミスグループとナツシュ社が謀議関係にあったからといって、それが今日の同社を評価する重要な要素とはならないでしょう」
言い放った。

「企業活動というのは生き物だ。昨日の敵を明日の味方にしていくようにでなければ、いつまで経っても事業拡大など不可能というものです。……第一、同社は四年前に組織改正を実施して体制を一新したではありませんか！ アルテミス事件はそれよりも前の経営陣時代の――」

「そこが重要な点なのですよ、イゲル室長！」

待っていましたとばかりにロットが一段と声を励まし、イゲルの発言を遮った。

「ご指摘のお話について、まずアルテミス社との謀議は地区本部単位で極秘裏に行われていたのですが、しかしながら当時のナツシュ社経営陣はその事実を把握しながら容認しておったのです。組織改正云々についても、経営幹部の首をすげ替えこそしたが新任となつたのは実質、前社長の息がかかった人間ばかりといっている。クレツド副社長、メーレ専務、デゾル常務……どれもこれも、マセイン前社長の側近だった顔ぶれだ。マセイン氏が退いたとはいっても、組織改正とは名ばかりのダミー人事でしかない」

さらに彼は幾つかの事実を挙げ、ナツシュ・マテリアル社の不透明性、それに同社と提携する危うさを激しく衝いた。根拠とする事象が詳細を究めているだけに、一分の隙もない完璧な論旨である。

「――以上、警察機構当局や前会長から得た情報を元に、私が可能な限り調査した内容です。ご異存あると申されるなら、この「辞書のように分厚いファイル」を高く掲げて見せ、「調査書をお貸しいたしますよ。これを読んでいただくのが、手っ取り早いと考えます」

聴いていた系列会社社長連の多くが、驚きと感心の入り交じった表情を浮かべた。

この若造のどこにこれほどまでのバイタリティが秘められていた

のか、そんな顔である。

ロットが代表取締役を務めるストレイア工作所は、ステイレーングループでも最小規模の企業に過ぎない。果然、その存在感は系列会社の中でも極めて薄いものであった。

ところが、その彼が今日になって突然、横暴なワンマン会長サントス率いるグループ経営幹部に猛然と挑戦したばかりか、圧倒的かつ精密な論証によって黙らせてしまったのだ。皆、驚かぬ訳がなかった。

ロットにとって追い風であったのは、系列会社社長連のほとんどがサントスに反感を抱いていたという事情による。海外事業拡大に熱中するサントスは、ヴォルデが我が子のように大切にしていた国内の系列会社を粗略に扱った。どころか、さんざんに絞りとった拳げ句、使い捨てのように片っ端から潰し始めた。もはや国内事業では成算がないという観点によるものだったが、各社にしてみればたまったものではない。怨嗟の声が起こるのも、当然なことであった。が、グループ会社というものは相互の業務協力関係があつて初めて成立するケースが多く、ステイレーンにおいても例外ではなかった。つまり、系列会社はSCC本体の支援がなければ継続運営にも事欠くのが実情だったのである。強引なやり方に腹は立つ反面、後々のことを考慮すれば会長の機嫌を損ねたくないというのが、系列会社社長連の本音でもあった。

今日の会議にしても、ナッシュ・マテリアル社が推し進めるプロジェクトへの巨額の投資計画を、経営幹部側はごく直前になってから一方的に打ち出してのけた。もはやグループ内部の意思統一を図るつもりが皆無であつた証拠といつていい。系列会社の面々にしてみれば寝耳に水であり、馬鹿も休み休み言えと叫ばざるを得なかった。さすがに堪忍袋の緒を切った社長連の数名が怒気を発し、議事が停滞するという事態に陥つたのである。ところが相手は秀才をうたわれた経営室長補佐イゲルときた。古参社長連の相次ぐ罵声にも容易に屈しないばかりかしきりと挑戦し、社長会議はひたすら怒号

ばかりが応酬する修羅場となった。

そこへ思いがけなくもリユードとロットが立ち上がって風穴をぶち開けた。

サントス以下経営幹部連にとっては予期せぬ反乱であり、系列会社社長連は日頃の怨嗟を晴らす痛快な一幕となった。

が、なぜ彼等がピンポイントでナツシュ・マテリアル社について詳細に偵知していたのか、サントスらは衝いておくべきであったろう。つまり、経営上の重要機密事項がどこから漏洩していたということになるからだ。しかしながら完全にロットの雄弁に吞まれた経営幹部陣は、それすらしなかった。疲れ切った表情から察するに、その余裕がなかったに違いない。

返答に窮したイゲルは救いを求めるようにサントスの方を振り返り「サントス会長、何かご意見などございますでしょうか？」

発言を求めた。

が、それからのサントスの沈黙はほとんど記録的であった。

彼は顔の前で手を組んで視線を卓の上に落としたまま硬直し続け、微動だにしない。

会議場内の誰もがくたびれてきた頃、ようやく手元のマイクに手を伸ばし

「……ナツシュ・マテリアル社は地下資源協約締結国各国政府主導の鉱物資源開発プロジェクト協賛企業にも名を連ねているという事実もある。同社との提携は、これを撤回する必要を認めない」

かすれ声で短くそれだけを言うと、再び黙ってしまった。

「……」

トップのコメントとしては些か心許ない内容ではあったが、逆に聴衆は毒気に当てられてしまった。癩癪持ちのサントスが感情に任せて怒鳴り散らさなかったためしが過去になかったからだ。今も、グループ系列会社社長連は彼の大噴火があるものと予期していただけに、却って拍子抜けしたといっている。

声を上げる者はない。

微かなざわめきだけが潮鳴りのようにさざめいている。

議事を仕切っていたイゲルもまた呆然としていたが、巧みに場の雰囲気をとらえ

「と、ともかく、本件をこの段階に至って再考することはカイレル政府及びナツシュ社への信義にもとります。ロット社長からのご意見は追って回答します。――予定の時刻を超過しておりますので、本日の社長定例会議はこれにて」

うやむやのまま、散会宣言を出した。

その一言を待っていたかのように、サントス以下グループ経営幹部は腰をあげた。

そろそろと退席していく彼等の様子を見つめていたリユード。

やがて周囲に人がいなくなるのを見計らってからつと、

「……お見事でしたな、ロット社長。それに彼も、だ。やはり持つべきは良き同志です。まずは第一段階、成功かと」

愉快そうに声をかけた。

が、ロットは携帯端末の画面に目線を落としたまま、浮かない顔をしている。

「経営幹部が本音を漏らすタイミングを今日まで待っていたつもりでしたが、逆に機を逸してしまっただかも知れませんか。――たった今、望まぬ情報がきたところですよ」

「情報？ 何か、あつたかね？」

「ええ。――例のStar-line訴訟の判決が出ました。大方の予想通り、敗訴です。サントス会長はこれを奇貨としてStar-lineの解散に踏み切るでしょう。容易ならぬ事態になりそうですよ」

ちらと背後を見やった。

Star-line代表取締役、セレア・スティーレインの座席が空いている。

「――捜査の進捗状況についての説明は以上となります。各自、事件解決に向けて一層の奮励努力をお願いいたします」

会議終了宣言と共に捜査員達が一斉に席を立ち、出口に向けて殺到していく。

やや遅れて立ち上がったエドはうーんと背伸びをしながら

「やれやれ。めばしい情報はこれといってナシ、か……。厳しいなア」

独りぼやいた。

すると

「エド！一緒にメシにしないか？」

背後から声をかけてきた者がある。

振り返り見れば、ウォレンであった。同じ捜査課に籍を置く一期上の先輩でエドと懇意だったが、班が異なるから滅多に顔を合わせることがない。

エドは微笑して

「ああ、先輩も出席してましたか。今日の会議、なんか耳寄りな話はありませんか？」

「いやあ、ないな。副知事殺害事件もメグル警部殺害事件も、被害者が被害者だからな。そう簡単にはいくまいよ。――ま、まずはメシにしようぜ。お互いの情報交換もかねて、よ」

「賛成です」

二人は連れだって食堂へと向かった。

食券を購入してカウンターでランチプレートのトレイを受け取り、近くの卓に席を取った。

昼時ではあったが、重大事件に関係する会議の直後であるせいか、昼食を摂りに来ている職員の数はいまばらである。二百名を収容できる大食堂はがらんとしていた。

ウォレンは早速、小皿に盛られたサラダを二口ほどで食べてしまつてから

「……で、そっちはどうなんだ？どこまでつかんだ？」

切り出した。

エドはメグル警部殺害事件を担当している。ウォレンはその進捗状況を聞きたいらしい。

「どうもこうもありませんよ。早くも手詰まりです。手がかりが余りにも少なすぎる」

そう前置きしつつ、知っている限りのことを掻い摘んで話してやり「——って感じです。恐らくリン・ゼールあたりのテロ組織が一枚噛んでいるとは思いますが、特定するための材料がない。お手上げです」

パンを千切り、忌々しげに口の中へ放り込んだ。

心底腹立たしげな彼の様子に、カラカラと可笑しそうに笑ったウォレン。

「ははは、捜査課二班の隼と呼ばれたエドがそう言うんじゃ、どうしようもないな。ま、それを言っちゃあ、うちの方もさ——」

彼が所属する捜査課一班は、州都市統治機構本庁で白昼発生したロゼル副知事殺害事件を受け持っている。現場が現場だけに、メグルの事件よりもまだ厄介なのだとウォレンは前置きして

「エドも聞いているだろう？ どうシミュレートしてみても、ロゼル副知事は正面つまり知事が公務に使うデスクの位置から銃撃されたんだ。銃弾は一発きりだが、かなり強力な拳銃だったらしくて、心臓を貫通して背後の壁に刺さっていた。単純に考えれば——」

「犯人はディゼン知事というセンもありですよ？ 知事のデスクに座れる人間なんて、知事本人以外にいないじゃないですか。もっとも、秘書が悪戯で座ったりするかも知れませんが」

エドも警察機構に入って間もない若い頃、捜査課長のチエアにこっそり座ったことがある。

ウォレンは頷き

「俺もそれを疑った。ところがだ、ロゼル副知事の死亡推定時刻、ディゼン知事本人は階下の会議室で主だった幹部達と打ち合わせをしていた。それは同席していた都市統治機構幹部が証言している。

ただ……」

紙の様に薄い肉のフライを切り分ける手を止めた。

「当時、秘書室に秘書が五人ばかりいたんだよ。どれもこれも花のように綺麗なお嬢さんばかりだがな。彼女達はみんな、ロゼル副知事が血相を変えて秘書室に乗り込んできたのを鮮明に記憶している。これが殺害される直前、つまり副知事を最後に見た人々ということになる」

「へえ……。で、秘書達は何と？」

「それがよ——」

エドの声が途端に小さくなり「……五人とも、その時はディゼン知事が知事公務室にいるものだとかかり思っていたらしい。で、ロゼル副知事から知事の所在を訊かれて、公務室にいるって答えているんだ」と言ってから、急に肉を口の中へ放り込んだ。

背後に捜査課の面々がやってきていることに、エドも気付いている。話の内容が内容だけに、ウォレンは人目を憚ったのであろう。

ただ、肉を咀嚼しながらもこともごと

「……正直、証言がどうも噛みあってない。州知事つてのは毎日スケジュールを分単位で管理されてるんだぜ？　そのために美女を五人もはべらせてんだ。強いて美女である必要はないがな。——それはともかく、秘書の与り知らないところで知事が動いていたってのは解せない。どっちの証言を取るかと言われれば、俺はお嬢さん達を信用するね」

なるほど、とエドは思った。

自分がウォレンの立場でも、同じ事を考えるであろう。

「しかし、先輩」

周囲に気を遣っているから、エドの声も控えめになっている。「そうなる」と当然、火薬反応を調べなきゃならんでしょうけど、調べていないんですか？」

敢えて省略されているが「知事について」という含みがある。

「いんや、調べたさ。怒られるのを承知でな。……だけどあのディ

ゼンっておっさん、ツラこそ厳ついが何でも協力しますとか言つて素直に応じてくれたよ。結果はシロ。反応は出なかった。とどのつまり、秘書達の証言はともかく、疑ってもキリがない。——ただ」

「どうしても気になる点が一つある。秘書室にやってきたロゼル副知事が血相を変えていたつて、さっき言っただろ？ それから知事公務室へ向かったということは、知事に対して何か抗議に値する事柄をもっていたとも考えられる。その副知事が直後に知事公務室で殺害されたとなると、話はちよいと穏やかじゃない。……おっと、続きはまたな」

それきり、二人は黙々と食べる事に専念し始めた。

俄かに食堂が混み始めたからだ。

同じ警察機構の人間ばかりであるとは言つても、担当部署以外の人間の耳に入れていい話とそうでない話がある。二人は状況をそれとなく察し、暗黙の了解で情報交換を中断したのであった。

そうして、程もない。

「エド先輩……」

背後からメイファがやってきた。

エドはちらと振り向いて

「メイファか。メシは食ったのか？」

「これから食べるところです」

と言いつつ彼女はエドの隣に腰を下ろすなり、ポケットから透明なビニール袋を取り出して示した。

中には、小さな紙切れが一枚入っている。

「エド先輩、これなんですけど」

「あ？ 何だ？」

メイファいわく、先日エドに連れられて殺害されたメグルの自宅へ捜査に出かけた時のことである。余計な手出しをしてはいけないうと思った彼女はメグル宅の周辺を調べて回っていたが、すぐ近くの家、家庭ゴミの集積所で回収されていないゴミ袋を見つけたのだという。

「その中にこれがあったんです」

是非見てくれと言わんばかりの眼差しである。

が、エドはビニール袋にちらと一瞥をくれただけで

「おいおい、傍にいないと思ったたらゴミ漁りなんかしてたのか。税務局職員じゃあるまいし」

関心なさげに言った。新人らしい目の付け所だが、玄人の刑事はそういう場所を調べたりはしない。事件現場付近や事件発生当日ならまだしも、時間が経過している以上証拠品の類が見つかったりする可能性は極めて薄いからだ。

ところが。

彼女の話には続きがあった。

「それがですね——」

その袋の中のゴミはろくに分別されておらず、そのために業者が置き捨てていたらしい。メイファがよくよく見てみると、デスロアという国内ではあまり流通していない輸入ビールの空き缶が混じっていた。

「いつだったかエド先輩、言っていましたよね？ メグルさんはデスロアのビールが好きだったって」

「あ、ああ……」

確かに、故人の思い出話のついでに口にしたような気がせぬでもない。メイファの若い頭脳は、そんな他愛もない話をしっかり記憶していたようである。

「だから私、そのゴミ袋はメグルさんが出したものじゃないかと思っただんです。で、汚いから嫌だったんですけど中を調べてみまして」
そして、この紙片を見つけたらしい。

メイファの話を聞くよりも食べる方に集中していたエドとウォレンの手が止まった。

「……で？」

続きを促したのはウォレンである。同じ捜査課の人間だから、彼とメイファとは面識がない訳ではない。

「メグルさんの字だと思うんですけど、住所がメモってあります。確認をとってみたら、メグルさんの遺体が発見されたあの廃ビルの住所でした。あと、わずかに筆跡があるんですけど、殴り書きだからちゃんと読めなくて……」

「どれどれ」

俄かに関心を抱いたらしく、ウォレンがビニール袋に手を伸ばした。

彼は咀嚼をやめ、しばらくというものの紙片にじっと目を凝らしていたが、つと顔を上げ

「……おい、どうも『ステイレーン、金の動き』とか書いてあるように読めないか、これ？」

表情がひどく真剣なものになっている。

続けてエドも食い入るような目つきで紙片を睨んでから

「そのようですね。筆跡鑑定をしなけりや何とも言えませんが、発見の状況から見てメグルさんが書いたメモだと思ってまず間違いないでしょう。デスロアの空き缶もさることながら、この癖字に見覚えがあります。——それにしても、ステイレーンって……」

互いに顔を見合わせているエドとウォレン。

その二人の様子をメイファが眺めているという構図が少しの間続いていたが、

「おい、エド！ これって……！」

「ですね！ 新たな手がかりだ！」

いきなり叫んだ。

その声に、周囲にいた職員達が一斉に彼等の方を見た。

が、やや興奮しているエドは構わず

「お手柄だぞ、メイファ！ もっと早く言ってくれば良かったものを！」

「え、あ……。でもでも、エド先輩も忙しいから、ちゃんと調べてから話さないと迷惑だと思って……」

彼女なりに気を遣ったらしい。

「大事だと思ったら、遠慮しないでちゃんと話した方がいいぜ？
こうやって、重大な事柄だったりすることもあるからな。それにしても、よく見つけたな」

ウォレンも褒めてくれた。

「あ、いえ、そんな……」

メイファが照れていると

「よし！ メイファ、来い！ 今からSCCに聞き込みに行くぞ！」
チエアを蹴ってエドが勢いよく立ち上がった。
会議直後にはガタ落ちだったテンションが完全にハイになっている。
る。

「あ、え？ あ、あの、私、お昼がまだ——」

「刑事がメシの心配なんかしてんじゃない！ 食える時に食わない方が悪い！ あとでパンでも買ってやるから我慢しろ！」

大声で叱り飛ばしたエド。無茶である。

が、そういう彼はちゃっかり昼食を食べ終えているのであった。

「あーん！ 待ってくださいよぉ！」

二人はバタバタと慌しく食堂を飛び出して行った。

後に残されたウォレンは独りニヤニヤしながら

「エドのやつ、美人で真面目ないい後輩つけてもらったもんだ。羨ましいねエ……」

『セラアさん、何かコメントを！』

『解雇した社員達と、何かお話をされたのでしょうか？』

大勢のレポーターから差し出されたマイクを押しつけるようにして無言で法廷を後にするセラア。

テレビ画面の中その表情は心なしか、虚ろに見えなくもない。

その、彼女だが——

「……情けない姿ですよ、本当に」

今まさに、目の前で小さくなってうなだれている。

国内外の政財界においてその美貌と聡明さで評判になったセレアであったが、今の姿からかつての彼女はとても想像できない。すっかりやつれ果て、まだ齡三十一だというのに年齢以上に老けてしまった観がある。苦勞は人間を成長させるというが、癒やされない辛苦は人間から加速度的に生気を奪う効果しかもたないらしい。

すぐ傍に座っているシヨコは何となく哀れになり、テレビのスイッチをオフにした。

「……とりあえずお茶、煎れますから」

ちよつとつづけば崩れてしまいそうになっているセレアなど、直視するに耐えない。

そう思い、ソファから腰を浮かせたシヨコ。お茶を煎れるというのは、セレアの姿を見ないようにするための口実でもある。

オフィスを出て給湯室に向かう廊下を歩きながら、止めどなく湧き起こってくる複雑な思いを抑えることができなかった。

今日のステイレーングループ内に渦巻く、混乱極まる事態を招いた原因の一端はセレア本人ではないか、と思うのである。そういうことはさすがに口に出すべきではないにせよ、シヨコとしては正直な気持ちを言えば腹立たしい。

三年前、前会長ヴォルデが逝去した際、後任に彼女を推す声がグループ内に強く上がった。

長年にわたってヴォルデを陰日向で支えてきた姿を多くの社員達が知っていたからである。グループ会社の全般にわたる現状把握、判断力、トップとしての品格等々——彼女がまだ歳若いとはいえ、どれをとっても申し分なかった。

ところが、当のセレアは会長就任を固く辞退した。

「お爺様は生前、よく仰っていました。同族経営ほど愚劣なものもない、と。ですから、孫娘の私が会長となる訳には参りません。グループ内には、多くの有能な方々がいらっしゃるではありませんか」

確かに、ヴォルデはスティーレイングループの草創期に同族経営がもたらす悪弊にさんざんに悩まされた。当時セレアはまだ幼かったものの、大好きな祖父が苦しむ姿は目に焼き付いている。ヴォルデの親族連中が彼の失脚を狙って様々な策謀を仕掛けたのである。彼等による不測の事態を避けるため、彼女は長い期間にわたって海外暮らしを余儀なくされた。これは後にスティーレイン事件と呼ばれる、犠牲者まで出した最悪のスキヤンダルである。

その事情を知るシヨークとしては、彼女の気持ち理解できぬでもない。

理屈としては、もつともであろう。

が、当時のヴォルデと今のセレアでは明らかに立場も事情も異なるという点を考慮すべきであったに違いない。ヴォルデの周囲には隙あらば彼に取って代わろうとする野心を抱いた親族ばかりであったが、セレアは彼の経営理念を根底まで理解し、その実現のために奔走した行動者である。彼女を後釜に据えたところで、同族経営だと批判する方が筋違いでしかない。

しかしながら、セレアはとうとう翻意しなかった。

そういう彼女が犯した最大の過ち、それはグループ内の人事権までも放棄してしまった点にある。会長の座はともかく、せめてグループ経営幹部の地位に留まっておけばある程度の均衡が保たれたものを、それすら辞退した。潔癖といえはいいが、その後のグループ経営に思いを馳せれば、決してそうすべきではなかったといっている。理念理想に固執した結果、サンテスなどという野心丸出しの愚にもつかぬ男にグループ経営を篡奪されてしまったではないか。

今や彼女の地位は一系列会社たるStar-line代表取締役以外の何物でもない。セレア擁立派の策動を恐れたサンテスとその側近によって、彼女のスタンスが一方的に制限されてしまったのだ。当然、グループ本体の経営に関する発言権は一切ない。

拳げ句の果て、サンテスが独断で強行したStar-line組

組織縮小に伴い解雇された元社員から訴訟される事態に至り、セレアは一人その火の粉を被らされる羽目に陥っている。この騒ぎが起こったのは半年と少し前のことだった。

以来、張本人の会長サントスは一切の責任を彼女に負わせる態度をとり、訴訟の進行についてはまるで無関心だという。世間はそうした事情に勘付きつつも、報道する側においては被告側代表であるセレアを弾劾する内容に仕立て上げざるを得ない。ただし、それとて元の元を辿ればセレア本人にも責任がなかったという話にはならないのだ。

その判決がさつき出たと、夜も遅くなっていたが彼女はわざわざ報告にきた。

敗訴。

州裁判所は元社員等原告七名の不当解雇を認めた上で、再雇用の訴えについては棄却したものの、Star-line に対し二億五千エルの慰謝料を支払うよう命じた。解雇通告が突発的かつ一方的なものであり、明確な国家労働法違反にあたるというのがその理由である。

誰が見ても、今のStar-lineの事業規模からいって単独で支払えるような金額ではない。Star-lineはグループ会社専門の警備会社であり、営利活動を行っていない以上収益など存在しないからだ。ただし、グループ本体であるSCCには、系列会社の保護をはかるべく対応策——債務の代理履行——を講じる責任がある。

ところが、州裁判所を出てから会長サントスの元へ直接報告に向かったセレアに、彼は面会すら許さなかったという。代表取締役たる自分で事態を收拾せよ、という意味であるらしい。もはや、SCC本体のフォローは期待できまい。フォローどころか、サントスはこれを口実にすぐStar-line潰しにかかってくるであろう。負債を抱えたグループ会社を処理するには、潰してしまうのが手っ取り早い。

問題は、その負債である。

Star-line 立ち枯れの原因が SCC の要らぬ横槍にあるとはいっても、歴とした代表取締役を戴いている以上、その立場にあるセレアへの責任追及は免れない。SCC がその気になれば、経営責任を盾に取って負債の一部をセレアに負担させるべく訴訟を起こすことも可能なのだ。むしろ、SCC には既にその気配があると、彼女に好意的な顧問弁護士がこっそりと教えてくれていた。

そういう同情派はグループ内部に大勢いるものの、かといって彼等が具体的に手を差し伸べてくれる訳ではない。このち、Star-line の借金だけを押し付けられたまま、一人グループから放り出されるであろう。

ここへきて、セレアは孤立無援の窮地に立たされた。

もはや抛るべき足場はどこにもない。

強いて挙げるならば、ただ一人瓦解寸前の Star-line に踏みとどまって黙々と業務に就いているショーコという存在であった。彼女だけは、セレアに対してどうという愚痴も不満も漏らさなかった。

今となつてはセレアにとって唯一心を許せる人間、といった役回りであつたろうが、ショーコ本人はやや立場を異にしていた。

刻々と不利に傾いていく、Star-line を取り巻く現況。それを冷徹な眼差しでじっと見つめる、いわば観察者の心境だったかも知れない。

ショーコがとりわけ強く思うのは

（セレアさんも変わっちゃったわね。ヴォルデさんが亡くなったのがよほど響いているみたい）

彼女の心境を推察すれば、そうであろう。

両親という人間に恵まれなかったセレアを唯一護り慈しんだのは誰でもない、祖父ヴォルデであった。彼女にとっては天地に等しい存在であつたといつても過言ではない。その祖父を喪い悲嘆にくれている彼女に、グループ経営の重責が容赦なく押し掛かつていった。

悲しみに打ちひしがれながらも、セレアは自分なりに祖父の築いた会社を守ろうと必死に考えた。

そういう姿を知っているシヨールコとしては、大いにセレアを支えてやりたい気持ちがなくもない。

しかし――。

（放り出すものとタイミングを誤ったのよ。セレアさん、捨ててはいけないものを、捨ててはいけない時期に捨ててしまった……）

シヨールコにはグループ経営への発言権など当然ないし理解もできないが、せめてセレアが経営幹部の座を蹴る前に、その胸中を明かしてくれたなら――。

（泣いてでも止めてあげたのに。全て放り出して土壇場になってから泣きつかれても、後の祭りなのよね）

セレアと抱き合い心中をする気になれないのは、これが大きな理由だった。

悪く言うつもりは毛頭なかったが、かといってシヨールコはセレアのカウンセラーではない。そもそも、年齢も立場も下の人間に（メンタルの部分でほんの若干とはいえ）救いを求めるといふ行為自体いかななものか、と思うのである。過去にも何度かよく似たことがあったが、窮地に陥った時に頼る対象として、セレアはシヨールコを選びたがるのである。

隊の運営に関わる話なら、正面から向き合う責任があるといっている。

しかし今日の今、問題の次元はシヨールコの遥か頭上を飛び越え、手の届かぬところにある。それを、一介の中間管理職に過ぎない自分にどうせよというのか。しかも、事態はほぼ万事休している。相談にのって欲しいのはむしろシヨールコの方である。幾許もせずしてStar-lineは消滅し、彼女は路頭に放り出されるのだ。寝酒が飲めなくなったらどうしてくれるんだと、逆に憤りの一つもぶつけてやりたいくらいである。

むらむらと腹が立ってきたが、給茶ポットにお湯を注ぎつつ彼女

は思い返した。

（ま、ヴォルデさんとかサラとか、セレアさんの周りにはいつも誰か介添え役がいたものね。人間、生きてきたようにしか生きていけないものだわ——）

冷静になつて考えてみれば、つまるところそういうことではないかという気がする。

が、そんな分析など今さら何の役にも立つまい。精根尽き果てようとしているセレアにとって必要なのは事態の分析よりも百万の励ましよりも、たった一杯のお茶であるに違いない。

シヨールコは大きく一つ溜息をつく、ポットとカップをトレイに載せてオフィスに戻った。

セレアの前でカップにお茶を注いでやり

「どうぞ。安物ですから、美味しくはありませんけど……」
勧めた。

経費が出ないから自前の茶葉ですけど、とまでは言わなかった。

「ありがとうございます、シヨールコさん」

カップを手に、一口啜るなりセレアは

「ああ、美味しいお茶……」

心の底から安堵したような声を出した。

もしかすると、ここしばらくというもの彼女にお茶を煎れてやった人間は誰もいなかったのではないか——シヨールコはふと、そんな気がした。いかに安物であろうが、他人に煎れてもらったお茶というのはわずかでも心を癒す効果があるという。その昔、Starlineの隊員で事務担当だったブルーナという女性がそんなことを言っていたのを思い出した。

お菓子を与えられた子供のように無邪気な表情をしているセレア。その彼女を、シヨールコはじつと見つめている。

（タイミングは今しかないけど……果たして、言っているものかしら？）

躊躇せざるを得ない。

目の前のセレアはこころしばらく心の休まる暇さえなく、今ようやく気持ちの緊張を解く瞬間を得ているのだ。

が、言わねばならない。

報告を先延ばしにしたが最後、事態を悪化させるだけのことである。

シヨークはすぐに決心すると

「……ところで、総指令長」

セレアはStar-lineの代表取締役兼総指令長の役割も担っている。敢えて、その肩書きで呼んだ。

「はい。どうかしましたか？」

「こんな時に何ですが……一点、どうしてもお耳に入れておかねばならない話があります」

シヨークは内ポケットから四通の封筒を取り出し、セレアに差し出した。

「中身が何であるか、もうおわかりのことと思います」ソファの上で居住まいを正すと「……昨晚、ヨナ、アデン、フィック、エリオの四名が揃ってこれを提出してきました。あたしは隊長として、これを受け取る前に隊員達を慰留する責任があつたかも知れませんが、会社運営がここまで危機的な状況に追い込まれた以上、強いて引き留める理由が見つかりませんでした」

「……」

「……いや、本音を言えば、引き留めてはならないように思つたんです。彼等はまだ若く、前途があります。今ならまだやり直しも効くでしょう。ですから——」

言い終わるのを待たず、セレアは無言で封筒を受け取った。

そのまま膝の上に置いてじっと見つめている。

幾許もしないうち、封筒の上に涙が落ち始めた。

俯いて泣いている。

——申告通り、この封筒「退職願は昨晚、隊員達から受け取ったものである。」

シヨールコは隊員達に余計な心配をかけないよう、訴訟のことはできるだけ口にしないでいた。

が、事が事だけに、裁判に至った経緯も内容も、隊員達は手に取るようにわかっていたであろう。何しろ、原告となつて会社を訴えている人々は、かつての同僚であり先輩達だったからである。深く問いただしたことはなかったが、解雇された連中と連絡を取り合ったり親交を維持している隊員も少なからずいるようであつた。

そんな彼等が、Star-lineの将来を悲観視していたことは想像に難くない。

であるから、揃つて退職願を差し出された時も、シヨールコは至つて平静なまま

「……本当は、もうちょつと頑張つてみない？　つていうのが、上司の役割なのよね。でも、今の隊の状況をみんなわかつていると思うから、敢えて言わないわ。このまま受け取らせてもらうけど——みんな、決意は変わらないわね？」

優しく問いかけた。

ヨナという隊長補佐を務める入隊四年目の女性隊員だけは目に涙を浮かべたが、あとは表情を無にしたまま、各々頷いて見せた。せめて解雇だけは避けたい、という思いの方が強かつたであろう。解雇された社員達の涙ぐましい苦労を、この若者達は知っている。

隊員六名中、四名が退職願を提出。

裁判の結審を待たずして、Star-lineは瓦解したも同然である。あとの二人も、追つて寄越しにくるとシヨールコは予想していた。ヨナ達と足並みを揃えなかったのは、単に仲がよくなかったからである。もっとも新参である二人はどちらも男性隊員だが、何かと一緒に行動することが多く、シヨールコや他の隊員達と打ち解けようとはしなかった。

四人が去つた後、デスクの上に封筒を一通づつ丁寧に並べながら、シヨールコは自分の果たすべき使命が終了したことを思った。

入隊してから足掛け六年。

貴重な青春の歳月を注ぎ込んできたStar-lineが、いよいよ消えていこうとしている。

正直、悲しくはなかった。

むしろ、疲労にも似た思いの方が大きかったかもしれない。

悲しいといえば、三年前に自分の弟分、妹分だったサイとナを送り出した時の方が、何倍もダメージは大きかったような気がする。それを思えば、心の中のこの淡白な感じは何であろう？

ああ、あたし、疲れていたのね――。

すっかり薄汚れてしまったオフィスの壁を見つめながら、思うともなしに思った。

そんな昨晚の自分の心境を思い出しながらぼんやりしているシヨ
ーコの前で、セレアは泣いている。

嗚咽はやがて号泣に変わり、しばらく続いた。

ようやく泣き止んだセレアは振り絞るような声で

「ごめんなさい。本当に、ごめんなさい。私が、お爺様の遺言を守
らなかったばかりに……」

あとはまたしゃくりあげている。

「……」

そういうことが、とシヨーコは悟った。

ヴォルデはこのことあるを見越して、最愛の孫娘に固く遺言して
いたのだ。

どうか私の後を継いで欲しい、と。

しかしながらセレアはヴォルデの遺言に背き、会長就任を辞退し
てしまった。

ただの一度も祖父の言いつけを破ったことのない彼女だったが、
たった一度だけ破ったばかりに招いてしまった取り返しのない
事態。悔やんでも悔やみきれないに違いない。

つい号泣してしまったのは、Star-lineへの惜別の思い
というよりも、自分自身への後悔の念が強かったからであろう。シ
ヨーコは秘かにセレアの判断を批判したが、セレア自身もまた自分

の過ちの根本がどこにあったのかを心の奥底で理解していた。

セレアは涙に濡れた顔を上げると

「ごめんなさいね？ 色んな思いが交差してしまっただけ、抑えきれなくなっちゃいました」

ばつが悪そうに微笑した。

「では……」

「ええ、よろしいでしょう。この退職願はお預かりいたします」

受理された。

が、シヨークには懸念がある。

重ねて言うのも酷かも知れないが、彼女としては念を押しておかねばならなかった。

「ありがとうございます。——しかし、仮にSCCから故障を言い立てられ、先に解雇通告を発されてしまえばどうにもなりません。

この期に及んで隊長として非力であることを痛感するばかりですが、何とかその事態だけは避けたいかと」

先に解雇された七名は「不当解雇」であると裁判所に認定されたが、もしこの六名が新たに解雇通告を受けるとき、その意味合いは異ならざるを得ない。なぜなら、会社事業破綻に伴う解雇は不当にあたらないと国家労働法では規定しているからだ。そういう事態をシヨークは恐れている。ゆえに、何としても今の隊員達については自主退職という形に収めたかった。そうすれば、些少ではあっても退職金がつく。

「シヨークさん、聴いてください」

キツと顔を上げたセレア。

「私はこの命に代えても、六人の隊員の皆さんを解雇などさせません。必ず、自主退職の形に持っていくます。それが、私が果たさなければならぬ使命だと思っています」

言い切った。

その相好には、やや弱々しくも彼女らしい威厳と誠意が漲っている。

「そうですね……ありがとうございます。ならば、もう申し上げることはありません」

ゆっくりと頭を下げたショーコ。

セレアがそうと断言した以上、信じていい。彼女が出来もせぬことを平気で請け負ったりするような人間でないことは、付き合いの長いショーコはよくわかつている。

ともかくも、隊員達の処遇について、総指令長であるセレアと隊長ショーコの意向は一致した。

もう日付も変わっていたが、二人はさらに、隊の今後について打ち合わせをした。

警察機構など関係機関へ警備業務停止の届出を行うと同時に、Star-lineの名において州裁判所へ事業継続不能申告書を提出する。というのは、本部舎施設はじめ機体や大型キャリア等の資産名義はStar-lineとなっており、これらに法的保全を加えなければ負債の抵当として差し押さえられてしまうのである。そうだったが最後、出資母体であるSCCが黙っていないであろう。自分達でとりうる限りの手段を講じておきたい、というのがセレアの意向であった。ショーコとしても異存はない。

ざっと方針のすりあわせを終えた後、急にあらたまった調子で「最後に一つ、聴かせていただけますか？ ……ショーコさん個人は、どうなさるおつもりですか？」

セレアが尋ねた。

Star-lineが多額の負債を抱えたとはいえ、ショーコ個人に法的な責任は発生しない。隊長という職責は規定上中間管理職に過ぎず、経営者ではないからだ。ゆえに負債を返済する義務はないのだが、その代わり——日を置かずして彼女は十中八九職を失う。会長サントスがグループとしてショーコを救済するなど、およそ考えられない話であったからだ。

かく質問したセレアにも、これといって手の施しようなどなかったといったいい。グループ内の人事権を放棄してしまった以上、他

の系列会社への再就職斡旋などはどだい不可能であった。そもそも、それができればStar-lineは訴えられたりしていない。

シヨークが察するに、セレアは個人で何らかの事業を興すことを考えているのであろう。

その場合、もしよければ……という含みが、彼女の質問に込められているとみた。

が、シヨークの腹はすでに決まっている。

「……あたしなら、大丈夫です。CMDのことならちよいと自信ありますし、不況だっていつでも職場を選ばなければ何とかなるでしょう。どうか、あたしのは気にしないでください。それよりも」
真っ直ぐにセレアの目を見つめた。

「——隊員達のことだけはどうか、よろしくお願いいたします」
さっきまで胸中に渦巻いていたセレアへのわだかまりは、大分軽くなっている。

こんにちの事態を招いた原因を自分で自覚していて、自分で決着をつけるつもりならそれでいいだろうという気がしたからだ。

落日編 5

明滅（後書き）

筆者註）本話については、後日加筆・修正する場合があります。

お気に入り登録して下さいの方へ

誠にありがとうございます。篤く御礼申し上げます。

「ここはどこだ……？ 何も見えないが……」

見渡す限り、茫漠たる闇だった。

回りに何があるのかも、自分がどこにいるのかも、まるでわからない。

その時である。

「——レヴォス！ レヴォス！ 私よ！ 待って！ 私を置いていかないで！ お願いだから！」

不意に、背後から自分を呼び止める女性の声がした。

「ケレナ！？ ケレナなのか！？ どこだ！？ どこにいる！？」
何も見えないとわかっていながら、思わず辺りを見回したレヴォス。

すると、背後にうつすらと小さな光がともっていることに気が付いた。

光はみるみる近づいてくる。

目が慣れないレヴォスには太陽を直視したほどに眩しく観じられ、一瞬まぶたを閉じた。

そうして再び目を開けた時、すぐ傍に最愛の——ケレナの姿があった。

「ケレナ！ 無事だったのか！ 大丈夫か？ どこも怪我はないか！？」

「うん、大丈夫よ、レヴォス。私は大丈夫」

彼女の細面な相好が、嬉しげに微笑んでいる。一面の闇の中だというのに、なぜかケレナの姿だけがはっきりと見えた。

「そうか……そうか！」

レヴォスは安堵の余り、思わず彼女の身体を抱き締めた。
いや、正確には抱き締めようとした。

ところが、彼の腕は虚しく宙を舞い、ケレナの身体をすり抜けて

しまった。

「……!？」

何が起こったのか、よくわからない。

驚いてケレナの顔を見やると、彼女は何ともいえない微笑を浮かべつつ、こちらに視線を向けていた。

「どうしたの、レヴオス？ 私のこと、抱き締めてくれないの？ 私を愛してくれているんでしょう？」

どうも雰囲気が面妖である。

この世の者とは思えない、ぞっとするようなおぞましさをすら感じられる。

「ケ、ケレナ……？ 一体、どうしたというんだ？ 俺は今、確かに君のことを抱き締めよう」と――

「だったら、早く抱き締めてよ。さあ、早く……」
にじり寄ってくるケレナ。

ただならぬ様子の彼女に恐れおののいたレヴオスは、思わず後退りしてしまった。

すると、

「……逃げるの？ 私から逃げるの？ どうして？ どうして逃げるの？ 酷いじゃない！ 私のことを愛しているって、言ってくれたじゃない！」

相好を一変させた。

満面に激しい憎しみの色をにじませ、獲物を狙う獣のような目つきをしている。

「お、おい、ケレナ……ちょっと待ってくれよ！ 今の君は、どうもおかしいぞ。普通じゃないみたいだ」

「何を言っているの、レヴオス？ 普通じゃないのはあなたの方。むしろ、私は普通よ。――ほら！」

彼女が腕を伸ばし、レヴオスの肩をつかんだ。

尋常ではない力がこもっている。思わず振り解こうとしたが、振り解けるものではない。

「さあ、一緒に行きましょう！ 私達、いつも一緒だものね！」

言いながら、ケレナの整った顔立ちが見る見る崩れていく。

皮膚や肉があつという間に灰のように吹き散ってしまい、あとには真っ白い頭蓋骨だけが残った。

その顎の骨がカクカクと不気味に上下し

「愛しているわ、レヴオス！ 私は二度と、あなたを離しはしない

……」

「うわああ——」

絶叫しかけたところで、不意に目の前が明るくなった。

跳ね起きたレヴオスの視界に、壁の白さが飛び込んできた。

「はあつ、はあつ、はあつ……」

呼吸が整わない。

ベッドの上で上体を起こしているという自分の状況すら、理解している余裕がなかった。俯いた姿勢のまま、肩で激しく息をしていると

「……あら？ お目覚めになりましたか？」

急に、女性の声が耳に飛び込んできた。

ハッとしてそちらの方を見やったレヴオス。さっきの悪夢がまだ脳裏にこびりついている。

が、そこにいたのは頭蓋骨だけになったケレナではない。

艶々とした長い黒髪をもった、若い女性であった。

薄い小麦色の肌に、柔和そのものの目鼻立ち。やや痛みが目立つワンピース型の衣装を身につけ、肩からは大きな純白のシヨールをかけている。下の衣装がくすんだ橙色だから、シヨールの白さがことのほかよく目立った。彼女は、大輪の花を生けた花瓶を両腕で抱えている。

「あ……」

次の言葉が出てこないレヴオスは、ベッドの上で固まっている。

すると、女性は後ろ手に引き戸を閉めながら

「横になっていらっしゃった方がよろしくて？ まだ、傷が完全に

は癒えていないようですから」

ふわっと微笑んだ。

声が笛の音のように済んでいて、美しい。しかも口調が穏やかだから、耳に優しく響いてくる。

労るような彼女の笑顔と声に、ようやくレヴォスは心地を取り戻した。

「あ、あなたは……？ どうして、私はここに……？」

女性は静かに近づいてくると、ベッド脇のテーブルの上にゆっくりと花瓶を置いた。

と、ほんのりと甘い香りが鼻孔をくすぐった。それが花のものなのか、女性のそれなのかはよくわからない。

看護者用の大きなイスに上品に腰を下ろしつつ、女性は

「私、イルメシア・バドウと申しますの。この街に暮らす者ですわ」
名乗った。続けて

「つい三日ほど前でしたでしょうか？ 第十四地区の廃墟街の辺りで、倒れているあなたを見つけました。身体に大きな怪我をなさっていたものですから、すぐに主人に連絡をとって、この病院にお連れいたしました。——ここですか？ ええ、東地区スティーア病院です」

言葉の一つ一つが丁寧で、どこにも粗野な感じがしない。どこかの富裕層の人間だろうかと思ったが、それにしては着ている衣装がくたびれ過ぎている。あらためて女性の身なりに目をやったレヴォスは、そこでようやく気が付いた。

「大変失礼ですが……あなたはアミュード・レア・ニステイの方ではありませんか？ その、白いショール……」

恐縮しつつ尋ねると、イルメシアといった女性はにっこりと笑って「ええ、仰る通りですわ。私、レア・ニステイに入会していますの。主人はお国がヴィルフェイトなものですから、アミュード教徒ではないんですけれども」

レア・ニステイ。

正しくは「アミユード・レアンドロスト・ニステイル会」という。数年前から活動を開始した新興のアミユード教組織である。数百年にも及ぶアミユード教の歴史からすればほんの今出来な集団に過ぎないが、早くも世界各国の政府から大きな注目を集めていた。主催者はホーラ・デル・メイトという一アミユード教徒の女性だが、彼女は同じ教徒同士が血で血を洗うような抗争を繰り返しているという現実に疑問を抱き、かつ憎悪していた。

「聖なるアミユードが、同胞同士で殺し合うよう命じたもうた筈がない。これはきつと、後世の教徒達が教義の解釈を歪め、教典を改ざんしたに違いない」

そう信じたホーラは、十数年という歳月を費やしてカイレル・ヴァーレン国内、時に近隣諸国を歩き回り、アミユード教に伝わる教典や文書の類を徹底的に調べた。

やがて彼女は、現存する最古の教典と言われる文書の中に、求め続けていた一文を発見する。

『大いなる神アミユードは、万人に等しくその英知と友愛を授けるものなり』

つまり、アミユード教教義の原典において、他教徒、他民族排斥の思想などは存在しなかったということになる。それどころかむしろ「協調」「共生」を説いているではないか。テロ組織リン・ゼーやゴーザ派が好んで掲げる『アミユードにあらざる者を滅せよ』とは、一言も述べられていない。それらはどうも、カイレル・ヴァーレン共和国政府が行った国土拡張政策、いわゆる「聖地収奪」の際、これに反抗して立ち上がったアミユード・チェイン神治合州同盟の指導者が唱えたものであるらしい。民族運動という歴史的経緯が背景にあるとしても、教義とは全く別のものであった。

民族内抗争や世界各地でのテロ行為こそアミユードの教義に反すると確信したホーラは間もなく「レア・ニステイ」を組織し、アミユード教教典を基幹とした宗教的平和運動を開始する。

当然ながら彼女は旧派から異端視され、リン・ゼールやゴーザ派

によつて何度も生命の危機に晒される。

しかし、彼女の平和的主張に共感した各地の女性教徒達が呼応し、民族内抗争根絶を標榜して一斉に立ち上がった。誰もが、血生臭い殺し合いに飽き飽きしていた証左といつていい。レア・ニステイの運動はたちまち国外にまで波及し、カイル政府のみならず世界各国も無視できぬ存在となつていった。

この組織の女性達は一様に純白のショールを着用する。白は「平和」の象徴であり、自分達はその体現者かつ行動者であるという一種の自己主張によるものであつた。

ゆえにレヴォスはイルメシアがレア・ニステイだとすぐに気がついたのである。

自分が搬送された経緯を聞いたレヴォスは、ふと疑問に思った。あの暗い地下室で襲撃を受け、爆破の衝撃で意識を失つた筈であるのに、何故地上で倒れていたのか。

そこまで考えた瞬間、ハツとした。

「あつ、あのつ、倒れていたのは私一人だったのでしょうか？ 周りには他に、誰か——」

「おりませなんだ。あなただけだったのですわ」
ゆるゆると首を横に振つたイルメシア。

「……先日、第十三地区で民族解放武装組織同士の衝突があつたと伺いました。不意を衝いた一方的な襲撃で、襲われた側の組織の方々はほぼ全員が亡くなられたそうです。なんと酷いことをなさるのでしょうか。同じ大地に暮らす、同じアミュードの民であるというのに……」

彼女は遠回しに事情を述べただけだった。

レヴォスの身元をそれとなく察し、明言を避けたらしい。

「そうですか……全員が……」

呟くと、レヴォスの表情が見る見る曇り、やがて——その肩が、小刻みに震え始めた。

自分を除く全員が死亡したということは即ち、ケレナの死をも意

味している。

声を押し殺し、泣いているレヴオス。

傍に座っていたイルメシアは静かに立ち上がると、そっと部屋を退出した。

が、彼女もまた、その美しい瞳に涙を浮かべていた。

アスファルトの路面が夕陽に赤く染まっている。

ふと東の空を見上げれば、もう夜の帳が下り始めていた。

「——エドせんぱーい、まだ回るんですかあ……？」

泣き言を漏らしながら、メイファがとぼとぼとついてくる。

後ろを振り返り見たエドは

「馬鹿野郎。刑事がこれくらいのことにくたびれてどうする。犯人をあげるのが俺達の仕事だぞ。それまでは休みなんかないと思え」

先輩らしく叱責した。

が、かく言うエドもまた、内心では途方に暮れる思いがしなくもなかった。

メイファが手がかりを発見してから二日間というもの、二人はフアー・レイメンティル州に点在するステイレーングループ系列の会社をしらみつぶしに訪問しては聞き込みをするという地道な捜査に明け暮れていた。

国内トップクラスの大手企業グループだけに、会社数だけカウントしても三十近い。

その事業所の数となると、大小合わせてゆうに百は越えていた。ステイレーンが事件に関与しているという決定的な証拠を握つての聞き込みなら話も早かつたろうが、何せ手がかりは例の「ステイレーン、金の流れ」という、メグルが遺した不可解な紙切れ一枚。鑑定の結果、メグルが書いたものにほぼ間違いないという報告だけは得たものの、いかんせん内容が漠然としすぎていた。

最初に二人はN地区のSCC本社ビルへ乗り込んでみたのだが、

応対に出た広報部担当者の男性はゆるゆると首を傾げ

「はあ……金の流れ、ですか……。確かに、当社では日々巨額の資金が運用されておりますが……」

困った表情のままフリーズした。質問が質問だけに、当然であるう。

このままでは話が進まないと思ったエドは

「いやあ、どんな小さな事でも結構なんですけどね、心当たりがあれば教えていただきたいんです。御社を取り巻く状況、そう、例えばテロ組織から何らかのコンタクトがあったとか……」

無理矢理話を仕向けてみたが

「はあ。しかし、そういった場合はすぐに警察機構へ連絡するのが当社の決まりですから……」

至極当然の、模範的な回答を返されてしまった。

結局二人は不得要領でSCC本社を後にせざるを得なかった。

しかしエドは落胆する素振りも見せず、ちよつと考えてから

「……よし。系列会社をことごとくあたってやろう。小さいところを叩けば、何か出てくるかもしれん」

と言つて、車を勢いよく発進させた。

この時点で既にメイファは自分の行為を後悔していた。

（エド先輩に相談するの、もう少し自分で調べてからにすれば良かった……）

SCCの広報部担当者ではないが、こんな短文にも何もなっていない単語二つばかりの紙切れを見せたところでピンと閃く人間などいる筈がないではないか。

——が、もう遅い。エドの刑事魂に点いてしまった火は、犯人逮捕という水をかけるまで消えないのだ。

一度本庁に戻った二人はステイレーン系列企業の事業所を洗いざらいピックアップしてリスト化すると、それを片手に再び本庁を飛び出した。州の僻地・A地区から丹念に一事業所づつ回っていくのである。

しかし、反応はどこも同じであった。

「さあねえ、これだけ見せられても……」

「刑事さん、うちみたいな小さい系列会社あたっても無理だわ。だ
って取引相手は全部身内なもの」

ことごとく、敗退。

十箇所目に辿り着く前に早くもメイファはへとへとになったが、
我慢して先輩に付いていくよりない。

一日目はB地区の途中で終了。残り二十三地区もあるかと思つた
途端、眩暈がした。

聞き込み二日目。

彼女は秘かに警察機構に職を得たことを後悔し始めた。

（やっぱりお母さんの言う通り、州統治機構の試験でも受けておけ
ば良かった……。見たくもない死体は見せられるし夜も遅くまで引
きずり回されるし、ホント最悪……）

胸中百万の文句が渦巻いていたが、億尾にも出さない。出せばエ
ドの叱責が飛んでくるに決まっている。

が、実際のところそのエドも、

（やっぱり、ちょっと早まったかなあ。といつて、途中で止めたら
メイファの手前、まずいよな……）

思い始めていた。

ただし、事件解決につながるような手がかりなど現段階では他に
ない。昨晚本庁に戻った際、捜査課長に状況を報告した時も「その
捜査、是非続行してくれ給え。こちらでも、別なルートから当たっ
てみる」と言われている。上司の命令に切り替わった以上、止める
に止められないのだ。

それでも懸命にC地区、D地区と聞き込みを続け、E地区までや
つてきたところで二日目の日は暮れた。

「よーっし、今日のところは次で最後にするか。ストレン商会たら
いう会社だな」

「さ、賛成……です……」

エドは元気を振り絞ってラストを宣言したが、メイファは隣の助手席でぐったりしていた。

ストレン商会の事業所はE地区の外れ、港湾部にあった。事業所とは名ばかりで、古い倉庫の一角を借りて仕切っただけの粗末な事務所である。

事前に聞いたところ、従業員はわずかに五名。それもそのはずで、同社はグループ内事業整理のため今月を持って閉鎖されることになっていた。主な業務はグループ会社への事務用品等納入で、かつては大いに多忙を極めたらしい。が、外注化によって業務量は激減、ついには閉鎖にまで追い込まれてしまったという。そもそも、所長以下従業員が皆訳ありばかりで、前会長ヴォルデが彼等を救済するために設立した会社であるらしかった。以上は、他の系列会社の人間が教えてくれた事情である。

「すいません、警察機構本庁捜査課の者ですが……」

二人が訪れたとき、時刻は夜も二十一時を過ぎていた。

「はいはい。夜も遅くにご苦労様です。何か、ございましたでしょうか？」

そう言いながらまず出てきたのは、五十代も半ばを過ぎたかという太った男性である。身につけている作業服がはちきれそうになっている彼は所長のホルトだと名乗った。

「こんな夜分に恐れ入ります。……あのですね、ちょっとお聞きしたいことがあります、スティーレイン系列の各会社を回っているのですが——」

例によってエドが用向きを告げ、手がかりの紙片を見せつつ聞き込みをする。

が、ここでも漏れなく予想通りのリアクションが待っていた。

「いやあ、これじゃあ何とも、ねえ……。こんな僻地までわざわざ来ていただいたのに、お役に立てなくて申し訳ないんですけども」

心底申し訳なさそうに詫びたホルト。恰幅のせいかどうか、人柄はたいそう温和であった。

エドもまた恐縮に思い

「いえいえ、却って申し訳ありませんでした。どんな細かい情報でも結構ですから、何かあればすぐに警察機構本庁までご連絡ください。事件解決にご協力をよろしくお願いいたします」

と、辞儀を述べて辞去しようとした。食い下がってあれこれ訊くには、時間がさすがに遅すぎる。

その時である。

「――あら？ メイファ？ メイファじゃないの！ どおーしたのお？ こんな時間に」

背後から若い女性の声がした。

メイファが振り返ると、そこには思いがけなくも親友リナの姿があった。

「あーっ！ リナ！ あれえ、どうしてこんな所にいるのぉ？」

こんな所、とは相当失礼だが、若い女性同士の会話だからホルトもエドも苦笑するよりない。

リナはホルトと同じ作業服を着て、新品のダンボール束を抱えている。それを無造作にどさりと放り出し

「どうしてって、この前食事した時にあたし教えたじゃないの、会社変わるからって。……やだ、メイファったら警察機構職員なんだから、あたしの言ったことくらい覚えておいてよねえ」

と、笑いながら訳のわからないことを言った。

「あ、あれ？ そ、そうだったっけ？ あはは……」

疲れ切っているメイファもメイファで、頭を掻き掻き笑って誤魔化そうとした。

正確には、リナは自分の会社名については一言も言っていないかったのだが――。

「こんな遅くまで大変ねえ。折角だから、コーヒーでも飲んで行けば？ それとも、まだこれからどこか行くところあるの？」

「あ、いや、それは……」

滅多に会えない親友でもあるし、一休みしたいほどに疲労もして

いる。

しかし、先輩のエドと一緒にいる以上勝手に決める訳にはいかない。

どうしたものかと困ったようにエドの顔を見た。

すると

「所長さん達をご迷惑でないなら、別に構わないぞ。今日の捜査はここでお終いだし」

そう言ってくれた。

エドはエドで捜査の都合上、スティーレイン系列の人間に少しでも面識を得ておいた方が後々役に立つかも知れないという思惑もあった。

「じゃ、決まりね。中へどうぞ。せまつ苦しい事務所だけど」

リナはさも自分が所長であるかのように言った。温厚なホルトはただにこにこしている。

「お邪魔しまーす」

ストレン商会の事務所自体はリナが口にした通り、さほどスペースはなかった。むしろ、壁向こうの資材置き場が極端に広く、その気になればサッカーでもテニスでも出来てしまうのだと、ホルトが説明してくれた。もっとも、近いうちに会社を閉めてしまうから、今はもうほとんど資材が残っていないらしい。

事務所の隅にボロボロの応接セットが置かれている。

エドとメイファが腰掛けると、ホルトとリナが煎れ立てのコーヒーを運んできてくれた。

「……で？ 今日は何の用事だったの？ 事件の聞き込み？」

メイファの対面に腰を下ろしつつ、リナが尋ねてきた。

「そうそう、そうなの。ひょんなことからさあ、スティーレインの会社名が見つかったりして……」

掻い摘んで話してやると、

「ああ、この前話してくれた、あの事件ね。メイファが死体見てゲロっちゃったっていうアレでしょ？」

リナは言わぬでもいい事を口にくれた。親友の気の利かなさに、嫌な顔をしているメイファ。

途端にエドのきつい視線がメイファに向けられ

「……まったく。捜査のことは口外すると言っただろう。お前は何もわかってないな」

呆れ返っている。

「す、すみません……」

「でもさでもさ、何か気になるよね、それ」と、リナは興味津々といった顔をして「案外、悪いコトやっちゃってるかも知れないよ？ 前会長の時だったらそんなこともなかったでしょうけど、今の会長といったら人の十人や百人、利益のためなら殺しかねない最低な男だもの」

すらりともくでもないことを口走った。

さすがに、隣にいるホルトが嗜めるかと思われたが

「まあ、彼女の言うのも一理ありますよ。サントス会長の命令なんて、言ってみれば系列の小会社社員を間接的に殺しているようなものです。我々も、今まさに殺されかけていますけどね……」

意外にも、同調の色を見せた。

エドとて現在のスティーレイングループがどういうものであるかを知らぬ訳ではなかったが、一緒になって頷くのはまずい。

「あ、まあ……そんなものですか……」

適当に相槌を打っておいた。

ただ、放っておけばこの二人にグループ経営の愚痴を聞かされそうだと思い

「ところでメイファ。こちらのお嬢さんはお友達なのか？」

隣でコーヒーを啜っているメイファに話題を振ってみた。

「そおでえす。ハイスクールの時から一緒なんです。大学も同じで「そうなんです。メイファったら、この通り真面目ちゃんじゃないですか？ だから、なかなか恋人がでなくて大変だったんですよ。あはは——」

どうやら悪意はなく天然らしいが、彼女を友達にもってしまったメイファはさぞかし苦労したのではないかと、エドはふと思った。この美しすぎる友人は、さつきから涼しい顔で聞き捨てならない発言を繰り返している。

「なるほど。それにしても、会社がこうなってしまうと大変ですね。入社して間もないんでしょう？」

メイファと同期であれば、スティーレイングループに入っただけの新人ということになる。

が、リナはかぶりを振って

「あ、メイファの就職は今年ですけど、あたしは一年早いです。学生採用制度に受かったので」

スティーレイングループほか大手企業にはそういう制度がある。

優秀な人材を早くからスカウトするために設けられたもので、各大学に打診して数名づつ学生を一定期間試用で採用する。そこで適性があると認められかつ正式採用を希望する学生がいれば、卒業後そのまま社員になれるのだ。リナはそれがあつたために、メイファよりも社会人歴が一年長いのである。

エドは感心したように頷き

「ほう、とても優秀じゃないですか。……しかし、それなのにSCC本体採用にならないんですか？」

「いいえ。振り出しはSCC本社総務部でした。でも——」

総務部に在籍中会長サントスからセクハラを受けそうになり、全力でひっぱたいてやったという例の武勇伝を語ったりナ。

「っていうワケでして、ここに異動になっちゃいました。まあ、あんなエロ親父に身体を触られるよりぜんぜんマシですけどねー！

あははー」

「……」

エドは呆然としている。

今どき、こういう若い女性がいたものだろうか。

メイファはちらりと我が先輩を一瞥し

「……こーいうオンナなんですよ。——先輩、独身でしょ？ よかつたらどうです？　すごく美人だし」

わざとらしく振ってやった。するとリナが大真面目に

「エドさんっていうんですかぁ？　背高いしカッコいいですよね。

あたし、今ならぜんぜん空いてますけど」

食い付いてきた。

「あ、い、いや……」

確かに、滅多に見られない美形ではある。プロポーションも抜群とあっていい。

が、ド天然な彼女が放つ嵐のような豪快さにはついていけないだろうという気がしたエドは、返答を曖昧にぼかしておいた。付き合ったが最後、いつかは会長よろしくぶん殴られるに違いない。

「そ、それよりもさあ、リナさん。本社にいた頃、何か耳にした話とかないだろうか？　金の流れっていうキーワードに関わるような話。どんな小さいことでもいいんだけど」

何気なく尋ねてみると

「金の流れですかぁ？　金の流れねえ……金の流れ」

リナは天井を睨みつつぶつぶと「金の流れ」を繰り返していたが、

「……あれ？　そういえばさあ」

ふと、思い出したように手を打った。

「あたしが総務部クビにされる頃だったけど、やたらと海外事業部の人間の出張が多かったのよ。同じフロアだったから知り合いも多くて。で、何かあるのって訊いてみたら、もうすぐ海向ここの資源開発会社と事業提携結ぶから打合せが多いんだって。何でも、SCCがその会社の鉱物探掘プロジェクトだかにすごい金額の出資をするとかって教えてくれたわ。……金の流れって、もしかしてそれのことかしら？」

「へ……？」

「……今、何と？」

エドとメイファ、二人が同時にリナを見た。

判決から数日後。

一人、ファー・レイメンティル州裁判所へと赴いたセレア。

その手に、一通の書類を携えている。

事業継続不能申告書。

その申告主の欄には当然「警備会社Star-line」の名が記載されている。

つまり、破産申請といい。会社の運営を断念して裁判所に管財権を移譲し、外部から直接寄せられるべき法的責任に対し履行制限という保護を受ける。これによりStar-lineは本部舎ほか施設や機体を抵当にとられる不安はなくなるものの、確定した負債そのものの返済義務は負わねばならない。

SCCの保護を受けられる見込みが立たない以上、セレアとしては取り得る手段はこれ以外になかった。破産申請が通れば巨額の負債はセレア個人にのしかかってくることとなるが、あの会長サントスほか側近連中の横槍は受けずに済む。

応対に出た裁判所の老事務員は幾つか必要事項の確認をしたあと、「いや、わかりました。これは責任を持ってお預かりいたします。あとは追って裁判所からの通知をお待ちください。事業所への立入審査と資産査定ほか幾つか手続きがありますが、貴社の事業範囲はグループ内かつ当州に限定されていましたから、それほど手間を要することもないでしょう」

と言つてすんなり受け取ってくれた。

「ありがとうございます。色々と厄介事ばかりお願いして申し訳ありません」

丁寧に頭を下げたセレアに、老事務員は好意的な笑みを浮かべて「しかし、SCCも酷い仕打ちをなさることだ。トップの判断で招いた不祥事の責任を一個人に押しつけておいてあとは知らぬと言う

のでは、開いた口がふさがらないというものです。裁判所職員の私がこういうことを言っただけじゃないかも知れませんが、SCCにはいずれその報いが訪れるでしょう。あなたもまだ若いのだから、決して悲嘆してはいけませんよ」

慰めとも励ましともとれる言葉をかけてくれた。Star-line訴訟のニュースは広く報道されていたから、事情を理解してくれているらしい。

セレアは頷き

「ええ、ありがとうございます。前会長だった祖父も、若い頃は相当な苦勞を重ねたそうでございますから、私もこの程度で挫けてはならないと思っています」

微笑した。

建前のつもりはなかった。

ヴォルデの骨身を削るような数々の辛苦について、セレアは事ある毎に聞いている。時に、絶望するような負債を抱える事態に陥ったこともあるという。

が、いつであつたか彼はセレアに向かって断言した。

「信用を積み重ねておくと、そういう時に思いがけない形で花開くものなんだよ。だから、信用は大切なさ。生きていくことも商売も、人間が一人きりではできないからね」

——裁判所を後にしたセレアは、L地区のStar-line本部舎へと足を向けた。

業務を完全に停止した今、早急に施設を明け渡せるように物品の整理を急がねばならない。隊員全員に残っている有休を消化させているから、本部舎ではショーコー一人が作業に勤しんでいる筈であつた。

念のため弁護士に確認してもらつと、機体ほか本部舎施設の名義はStar-lineで登録されていた。サントスがそれらの処理について横槍を入れてくる可能性もあったが、裁判所に申し立てを行った以上危惧する必要はないとみていい。SCCとして資産を保

全するなら、Star-lineが背負った負債の面倒をみなければならぬ。その責任を放棄したのだから、今後異議を申し立てられるいわれはないのだ。

あと、判決の翌日、残る二人の隊員からも退職願が提出されている。

可能な範囲で後腐れなくStar-lineを解散させる条件は整った。このちは元従業員らに支払うべき慰謝料を用意せねばならないが、これをセレア個人が引き受けるという内容で話し合いを進めている。元従業員らも、セレア個人に対する遺恨はないと述べていることから、交渉はどうかまとまるのではないかと思われた。停留所でバスを待っていると、バッグの中の携帯端末が鳴った。ディスプレイには「ストレイア工作所」の表示が出ている。

何の用事だろう、思いつつセレアは着信ボタンを押した。

「……はい、セレアですが」

『あの、ストレイア工作所のロットでございます。ご無沙汰しております』

「あら、ロット社長。お久しぶりです！」

セレアは急に声を明るくした。

ストレイア工作所とStar-lineは浅からぬ関係がある。経費節減に伴い機体の部品調達に苦心するようになったStar-lineに対し、彼は簡単な部品の製作や修復程度なら、といって何かと便宜を図ってくれていた。そのくせ、ストレイア工作所から出勤要請がかかったためしはなかったから、Star-lineが一方的に借りをつくっていたということになるが。

快活で従業員達の人望も篤いこの若き社長に、セレアはこのほか感謝していた。

『お話は伺っていますよ。今度の一件、SCC経営幹部のやり口には怒りが収まりません。何千という系列会社従業員なんか、切り捨ててもいいと考えている人達ですから』

同情の念を、そういう表現で示したロット。

が、自分にも責任の一端があると思っっているセラは苦笑しながら「お気持ちは嬉しく思います。ですが、一社の長として会社と従業員を守れなかった私がいけないのですわ。今回のことは、私自身の手ぬるさが招いた事態だと思っています」

「まあまあ、そうご自分を責めないように。身内の会社を互いにケアし合うのがグループ経営のメリットなのですから、それを怠ったグループ本体も責任を負わねばなりませんまい。——今、お電話を差し上げたのはそのことに関連があるのですが」

ロットの口調が、俄かにあらたまった。

「ご多忙のこととは思いますが、ちょっと聞いていただきたいお話があるのです。近日中に、どこかでスケジュールを空けていただくことはできますかね？」

朽ちかけた建物ばかりが建ち並ぶ低い街並みの向こう、果てしなく広がる赤茶色の大地。

その地面を、焼け付くような太陽がこれでもかとばかりに照らしている。

一見すれば不毛の地のようだが、数十メートルばかり掘り下げれば埋蔵量数千万トンにも及ぶといわれる地下鉱物資源が手付かずのまま眠っている。つまり、見かけはともかく宝の大地であるといっている。地表部分が耕作に適さないだけのことである。

この国土の大半がそうであるため、国内外の人々は長年にわたり豊富な鉱物資源をめぐって争いを続けてきた。作物が収穫できなくても、鉱物資源さえ売れば莫大な富を手に来るからである。

それらがなければ、血なまぐさい民族紛争や無数のテロ事件などは起きなかったのだろうか。

窓の外をぼんやり眺めながらとりとめなく考えていると、不意にコンコン、と病室のドアをノックする音が聞こえた。

「……こんにちは。お加減はいかがかしら？」

カラリとドアが開き、イルメシアの長い黒髪と美しい相好が見えた。おっとりとした微笑んでいる。

白く無機質な空間のそこだけ鮮やかな花が咲いたようだ、レヴオスとは思つともなく思った。

「今日も暑くなりましたわ。サウス・レムでは三十五度を超えたとか聞きましたけれども」

そんなことを言いながら入ってきたイルメシアは室内の空気を肌で確かめるような仕草をしてから

「ここはきちんと冷房が効いているようですね。この病院にお連れして良かった。ほかの病院は設備が整っていないから蒸し風呂のようですもの」

嬉しそうに笑顔をつくった。

「……」

何か反応しようと思ったものの、喉の奥から声が出てこない。

レヴォスはベッドの上で上体を起こしたまま、うつろな表情でイルメシアを見つめている。

サイドテーブル上の花瓶に活けられた花の具合が気になるらしく、彼女は人差し指で花弁をそっと触ったり撫でたりして確かめていたが、やがて簡易チェアに品良く腰を下ろした。

姿勢を直しレヴォスに真っ直ぐな視線を向け

「先ほど、お医者様に尋ねてまいりました。……一週間前より傷の具合も栄養状態もだいぶ良くなってきたそうですよ？ 私、とても安心しましたわ」

そうか、もう一週間もここにいるのか――。

自分の身体のことよりも、入院していた日数の方に関心がいった。昼夜と時間に関係なく寝たり起きたりを繰り返し、何日経過したのかすらもわからなくなっていた。目が覚めれば死んだ同志達、特にケレナの姿を思い浮かべては涙にくれ、泣き疲れてはまた眠るということばかり繰り返していたのである。

そういう不安定な精神状態でいたせいか、この病院がゴーザ派の連中に襲われたらどうするかなどとは全く考えなかった。というよりも、忘れかけていた。あるいは、身の安全に気を遣わなくなってしまうほどこの病室が余りにも静かであり、かついつも近くにイルメシアの無償の優しさが漂っていたということもあつたかも知れない。どのみちレヴォス自身の神経が知らぬ間に著しくすり減らされていたことだけは確かなようであつた。

ただ、こうした安穏な状況に置かれて日を消すうち、身体の傷はかなり癒されたらしい。

ふと気がついてみれば、入院当初身体のおちこちを覆っていた包帯やガーゼの類がすっかり取り払われ、ほとんど負傷前の健全な肉体を取り戻しつつあつた。

かといって、彼は素直にそのことを喜ぶ気にはなれない。

逆にいつそのこと死んでしまっていた方が幸福だったのではないかとさえ思える。

身体の傷が完治したところで、苦楽を共にしあつた同志達、そして愛するケレナとはもう会えないのだ。唯一の拠り所だったジャック・フェインが潰滅してしまった今、レヴォスは天涯孤独の身になつていたといつてもいい。凶悪なゴーザ派に狙われた以上、ジャック・フェインの親組織であるリン・ゼールに戻つたところでどれだけ生き延びられるであろう。命を惜しいとは思わないが、すでに弱体化しつつあるリン・ゼールの腰抜け共と抱き合い心中同然で死んでいくのは御免だった。

どうせなら——と、レヴォスは思う。

自分から大切なものを全て奪い去つていったゴーザ派に対して単身戦いを挑み、一人でも多くのゴーザ派組織員を道連れにして討ち死にする。今の自分にできることといえればそれしかないように思われた。

実際、この病院にももう、あと幾日もいられない。

迂闊に生き延びようものなら、いつかはゴーザ派の手にかかつてしまう。それよりもいつそ、自分が死んだとゴーザ派の連中が思っているうちに強襲し、戦うだけ戦つて悔いなく散る。武器を調達せねばならないが、それはアミュード・チェイン地域在住のジャック・フェイン支援者である富商に頼めば幾らか調達してくれるであろう。彼は胸中、恩人ウイグや恋人ケレナの元へ逝く決意を固めつつあった。

秘かにそんなことを考えていると

「……ところで、今日は大切なお話がありますの」

横からイルメシアの声がした。

ハッと我に返って彼女の顔を見やると、温和なその容貌にやや真剣な色が滲み出ていた。

光のないレヴォスの瞳をじっと見つめつつ

「数日のうちに、主人がお国に戻るようになりました。私も主人と一緒に、海向こうへ渡ります」

「……」

来るべき時がきたか、とレヴオスは思った。

が、心のどこにも動揺はない。

そもそもイルメシアとその夫という人間の好意にすがってどうかしようというつもりはさらさらなかった。だが、せっかくの二人の好意を踏みにじるような真似をするのも忍びなく、彼等が取り計らってくれる通りに身を任せていただけのことである。世界中から恨みを買ってやまないテロ組織に長年身を置いてきたとはいえ、人非人にまで成り下がった覚えはない。

それで今後どうするつもりなのか訊かれるのだろうと思っていると「あなたも私達と一緒にいらっしやいませんか？——行き先ですか？

ええ、ヴィルフエイト合衆国のファー・レイメンテイルという州にある街ですの。私は一度も行ったことがありませんが、治安もよく穏やかで近代的なところだと主人が申しておりました。主人がそう言うのですから、きっと素敵な街だと思えますの」

少女のように胸の辺りで両手を組み、にこにこしている。

「……は？」

呆氣に取られたレヴオス。

この美しい婦人は突然何を言い出すのだろうと思った。

路傍に倒れていた一介のテロリストを懇切丁寧に介抱してくれただけでなく、よりによって国外の安全圏にまで連れて行ってやろうという。親切にも程があるではないか。

しかも、行き先はよりによってヴィルフエイトのファー・レイメンテイル州ときた。

レヴオスにとっても、またジャック・フェインにとっても因縁浅からぬ土地である。

今から九年ほど前、同州におかれていたジャック・フェインの根拠地が国軍陸団と治安維持機構部隊によって包囲され、双方の間で

惨烈な戦闘が繰り広げられた。この時、国軍陸団との間で停戦協定が成立しかけていたが、治安維持機構側が一方的に攻撃を再開。不意を衝かれたジャック・フェイン側は多数の死傷者を出すに至った。この事件は当局において第一次ジャック・フェイン事件、もしくはDブレイク事件と呼称されている。ファー・レイメンティル州D地区において発生したからである。

彼等は卑劣極まりない治安維持機構、そしてその主管組織である都市統治機構に対し深い恨みを抱き、復讐を誓った。レヴォスもまた、この時の戦闘でたった一人の肉親である兄を喪った。彼の兄はジャック・フェインの主要メンバーだったからである。レヴォスは兄の復讐を果たすため、血の滲むような過酷な訓練を経てジャック・フェインへの加盟に成功した。そして運良く、アミュード・チェイン神治合州同盟自治区へと逃れてきたウイグ・ベーズマンと出会うのである。彼はレヴォスの真面目さとひたむきさを愛し、以後何かと行動を共にするようになる。

後に知った話だが、レヴォスの兄・マティスは戦闘中に負傷したウイグを庇って被弾し、命を落としたという。ウイグはそのことを気にしていてレヴォスに詫びたが、レヴォスはむしろ兄の最期の行動を誇りに思った。

（この人のためなら、命を投げ出すことくらい何でもない。兄の行為は間違っていない。俺もまた、そうありたいものだ）

ウイグという人間の気さくで情の篤い人柄に触れ、レヴォスもそう思うようになっていたからだ。

第一次ジャック・フェイン事件から三年半という歳月を経て、ウイグの統率の元ジャック・フェインは陣容を立て直すに至った。こへきてウイグは、かつて多くの同志達を死に追いやったファー・レイメンティル州政府への復讐を果たすべく、大掛かりな作戦の検討を開始した。作戦はウイグの片腕ともなっていたレヴォスによって精密に立案され、同志達の裁可と賛同を得る。選抜されたメンバーは順次ファー・レイメンティル州へ潜入、アジトに籠って作戦の

決行日を待った。

レヴォスもまたウイグに伴われて同州へと渡るが、彼は次第に不吉な予感を抱くようになる。

ウイグは第一次ジャック・フェイン事件の最中で愛する女性をアジトに置き去りにしてきており、路途彼女の生存を確認するや人が変わったように度を失ってしまったからである。リリアといったその女性は事件後、ステイレーングループ会長・ヴォルデによって保護され、様々な経緯を経てステイレーングループ専属警備会社「Star-line」メンバーとなっていた。アジトに到着後、ウイグは幾度かリリアへの接触を試み、ついには作戦そのものを根底から反古にしかねない事態まで引き起こしてしまう。

その後、やつのことで作戦は発動された。

レヴォスが立案した一分の隙もない計画通りに事は運び、ファースト・レイメンティル州都市統治機構本庁は彼等ジャック・フェインの手に陥ちる。この一報を受けヴィルフリート合衆国政府はもちろんのこと世界中が震撼したが、都市統治機構高級幹部を人質にとったジャック・フェインに対し何ら打つ手を持たなかった。

が、ここで事態は思わぬ方向へと展開する。

第一次ジャック・フェイン事件における都市統治機構の卑劣さを全世界に知らしめるという目的を達したウイグは、リリア——改名してリファと名乗っていた——が所属するStar-lineに対して戦いを挑んだのだ。Star-lineのCMDに搭乗するドライバーは超一級の操縦技術を有しており、そのためにStar-lineは優良警備会社の名を欲しいままにしていたからである。

根っからのCMDドライバーだったウイグはレヴォスに

「是非挑戦してみたいじゃないか。世界一と言われるStar-line機を倒してこそ、俺のドライバー魂が満足するってものさ。そうだろう？」

笑ってそう言ったが、本音は別のところにあった。

彼は四年前にリファを置き捨て生涯癒される事のない深い悲しみ

を与えたことを苦にしており、自ら最期を遂げることで彼女の未練を断ち、新しい人生を歩ませたいと望んでいたのだ。

都市統治機構幹部の横槍によって対決は果たされずに終わるかと思われた。しかし、Star-lineに頼る以外事態を開する術はないと悟った州副知事の決断により、Star-lineは人々の希望を背負ってジャック・フェインに敢然と立ち向かっていく。対ジャック・フェイン戦あることを想定し徹底的に研究していたStar-lineの行動は迅速で、ジャック・フェイン機は次々に沈められた。そうしてついに、ウイグとStar-lineのフォードドライバー・サイは都市統治機構本庁において激突する。リファの悲しみを理解していたサイの怒りは激しく、終始ウイグの機体を圧倒した。ウイグもまた全力で挑んだものの、完膚なきまでにねじ伏せられてしまった。

戦いはそれで終わったが、ウイグが座るコックピット内部で電装系が爆発を起こし、それをもろに浴びたウイグは短い生涯を終えた。その混乱に乗じてレヴォスやケレナほかジャック・フェインメンバーは国外への脱出に成功したのだが――レヴォスはファー・レイメンテイルにおいて兄、そして恩人というかけがえのない人物を二人も喪ってしまった。哀しみに暮れた彼は、生涯二度とかの地に足を踏み入れまいと誓った。

レヴォスの人生に重い影を落とした因縁の土地。

彼としては、素直に頷ける筈がなかった。

「私のような者の身を案じてくださるお気持ちは嬉しく思う。しかし、そのご好意に甘える訳にはいかない。せつかくだが、私は――」
そういう表現で婉曲に断ろうとすると

「いいえ。一緒にいらっしゃってくださいまし。この地にこれ以上、あなた一人で留まっていたはなりません」

ぴしゃりと、イルメシアの強い言葉が返ってきた。

これには驚かざるを得ない。

まるで、死に場所を捜し求めようとしている彼の胸中を読んでいる

るかのようである。

動揺しつつも、自分が何者であるか語って聞かせねばなるまいと口を開きかけたが、イルメシアは発言を抑えるように片手を上げて見せたあと

「……みなまで仰る必要はありませんわ。あなたのお世話をさせていただいているうち、あなたのことが何となくわかりましたの。奇妙にお思いかも知れませんが」

イルメシアの眼差しが俄に深くなった。

「きつとこれも、聖なるアミュードのお導きでしょう。あなたには、この先何かの使命がおりなのだと思います。だから神はあなただけ命をお救いになられたのです。その命を、安易に放り出してはなりません。余計なお節介なのは承知でお話しさせていただきますけれども」

「……！」

口調こそ穏やかだが、言葉裏に凜とした侵し難い威厳がこもっていた。しかも、言葉にはせねどある程度レヴオスの身上を嘘偽りなく認識しているらしかった。彼がテロ組織ジャック・フェインに所属していた人間であり、内心ではこの後、ゴーズ派に復仇を加えつつ最期を遂げるつもりだということ――。

自分の心の奥底まで見抜かれたような気がして、何も言えなくなつたレヴオス。

出会つてからというもののろくに言葉も交わしていないというのに、なぜこの女性はここまでわかつてしまったというのか。

イルメシアからそつと目を反らしたレヴオス。

その強い瞳を正視し続けることができなかった。

しばらく彼は白いシーツを凝視しつつ、どう応答したものかと考えていた。単に自分の覚悟を示すだけでは、逞しい意志をもったこの女性を納得させることなど不可能に思われた。

やがて、ゆっくりと顔を上げると

「お気持ちは嬉しいですが……私は国内外の当局から追われている

身です。渡航に同行などすれば、あなた達に迷惑をかけることになる。申し訳ないが、私は――」

イルメシアの態度が毅然としているから、自然レヴォスも言葉を丁寧にした。はつきりとした理由を示しつつ、あくまでも一緒に行くことはできないという意思を伝えようとした。

が、彼女はふふ、といたずらっぽく笑って

「ご心配には及びませんことよ？　これがあれば、今やどの国家へでも入国できて？」

肩にかけている純白のショールをつまんで見せた。

その意味が、レヴォスにはすぐ理解できた。

アミュード・レア・ニステイは世界各国からその人道的かつ積極的な平和活動を高く評価されている。

その信用度たるや、会員が渡航の際に身分さえ証明できればほとんどの国・地域で入国拒否されないというところまでできている。そうなると悪質なテロ組織などにレア・ニステイの立場を利用されてしまいそうなものだが、しかしながらレア・ニステイのやり方は徹底していた。

会員が海外へ渡航する場合、レア・ニステイ本部から各国外務局や入国管理局へ会員の渡航目的や滞在日数など全ての情報が通達されるのである。これがある以上、レア・ニステイの覆面を被ってカムフラージュなどできたものではなかった。

もう一つ、レア・ニステイは社会慈善活動にも力を入れている。

この活動はカイル・ヴァーレン国内のみならず海外においても活発で、会員達は所用で渡航する度に滞在先の福祉施設や公共施設において何かしらの慈善活動を実施する。しかも、あらかじめその予定や詳細まで通知してしまうから、レア・ニステイ会員を名乗る者が慈善活動を行わないでいれば周囲から自動的に怪しまれることになる。こうした取組の効果は絶大で、レア・ニステイ設立以来犯罪組織などから隠れ蓑に利用されたケースは皆無であった。リン・ゼールやゴーザ派が嫌がる筈である。

そのレア・ニステイの強力な立場と権利を、レヴオスにも与えようとイルメシアは言っている。

確かに、そうなれば国際指名手配犯のレヴオスといえども各国当局は容易に手を出せまい。そもそも彼の人は相は国内外でもほとんど知られていないから、海外に高飛びしたところで身柄を拘束される恐れは少なかったが――。

「そ、そんなことをしてはレア・ニステイに申し訳が立たない！

私とてアミユードの系譜を引く組織に身を置いてきた者です。アミユードの教義を唯一遵守しているといってもいいその組織の名義と立場を自分のために利用するなど、それは聖なる神への冒瀆ではありませんか！」

建前ではない。

レヴオスとて、成り行きとはいえ信仰者の端くれである。信ずる神の代行者である組織を利用するなど、信仰者としてもつてのほかではないかと思うのである。

が、イルメシアは事も無げに

「いいえ、そうではありません。使命を果たそうともせず、せつかく与えられたその生を自ら絶とうとする行いこそ神への最大の冒瀆ですわ。生きていればこそ、人は神に報いることができる。そうはお思いになりませんか？」

「……！」

絶句したレヴオス。

死へ、死へと向けられていた自分のたった一つの退路を、完全に絶たれたような気がした。

イルメシアの一言は、真の信仰者の態度として非の打ち所がなかったからだ。

死んだ人間など、何の役にも立たない。食えるだけ、牛や豚のほうがましというものである。

例え手足を喪おうとも、言葉や五感を喪おうとも、地位や名誉や財産を失おうとも、人間は生きて生きて生き抜いてこそ、果たせる

役割がある。

そこに気付かされたからこそ、レヴォスは反論する余地を失った
といていい。

ふと、恩人ウィグが最期に遺した言葉が脳裏を過ぎった。

『どうか生きて、俺と、四年前に斃れた同志達の思いを、つないで
くれ！ 生き残ることは、何よりも苦しいと思うが——』

そうだった。

ウィグの最期の命令であり、希望。

彼はレヴォスに「生きる」ことを命じた。

否、願っていた。

（俺は…… ウィグさんやケレナの元へ逝くことを、まだ許されない
のか……）

かといって、生き続けたところで自分に何ができるとも思えな
かった。

全てを失った今の彼にとって、生き続けることは巨大な絶望で
しかない。

そんな彼の心情がわかるのか、イルメシアはじんわりと染み入
るような笑みを浮かべ

「海向こうに渡れば、私達の活動に協力していただきたいのです。

社会というのは大勢の人が集まっているだけに醜く薄汚れた部分が
たくさんあります。——でも、絶望して嘆いてばかりいても何も始
まらない。一人でも多くの同志が集まって心を合わせ行動を起こ
せば、それだけ社会が良くなるのです」

「……」

そつとレヴォスの手を両手で包み込みようにしながら「あなた
のように逞しい男性のお力を貸していただければ、レア・ニステイは
今よりももっと素晴らしい活動ができると思いますの。一人一人が
力を合わせて社会を変えてゆくなんで、とても素敵なことじゃあ
りませんか？ そう思えば、レア・ニステイの立場をお貸しすることく
らい、何でもありませんわ。あなたにはまだまだ使命があるのです

もの」

嬉しそうな顔をした。

いつの間にやら一方的にレア・ニステイの活動要員に組み込まれてしまっているような格好になっているとレヴオスは思ったが、黙っていた。この婦人はそういう名目をつくり出すことによって、何もかも失った彼に生きていく方向性を与えようとしているようだったからである。

それはともかく、まさかテロ組織の人間が社会慈善活動の奉仕者になるうとは――。

正直なところ戸惑う気持ちが小さくなかったが、今はこの婦人、そしてその夫であるという人の好意を受け入れるよりない。

「一つだけ、聞かせていただきたい。――なぜ、そのように私に好意を見せてくれるのですか？ あなたは私がどういう者であるか、おわかりになっている筈だ。それなのに……」

「さつき申し上げた通りですわ。全ては聖なるアミュードの導き。あなたがどのような生き方をされてきたのかは問題ではありません。あなたがこれから何をなさるか、ということが一番大切なのですもの」

答えになっっているような言い方だったが、ともかくも彼女としては深く思うところがあるらしかった。もしも彼女に天真爛漫の笑顔とレア・ニステイの身分が伴っていなければ重ねて断るところだったが、ここまで言い切られてしまっただけは断りようがない。

ついでにいえば、イルメシアの誘いは強い信仰心に裏打ちされている。

レヴオスもまた経緯はどうあれ同じ系列の信仰を保っているから、曖昧ながらも彼女に対するある程度の信頼感を抱かなくもない。この心境は同じ宗教者同士でなければ理解できないであろう。

抗弁する意志を喪ったレヴオスは、ふと気になっていた質問を發した。

「失礼を承知でお尋ねしますが、ご主人はその、どういう……？」
「イリオスと申しますの。今はＳＣＣの海外事業統括部におりますけど、今度異動が決まりました。ここへは搬送の時に来たきりですが、毎日あなたのことを気にかけていますわ。とても優しい主人ですの」

長く美しいまつげを伏せたイルメシア。
頬が赤く染まっている。

よほど情愛の濃やかな夫婦であるらしい。
が、そんな彼女とは対照的に、レヴオスは愕然として凍りついた。
（ステイーレインだと……？　俺はどこまでもステイーレインと縁が切れないというのか……？）

「——課長、今……なんと？」

「言った通りだよ、エド君。ＳＣＣへの事情聴取については、今回は見送ることに決定した。これは上の判断だからね、君もその辺をよくよく理解して——！？」

捜査課長モルトはそこで説諭を中断しなければならなかった。
前に立っていたエドが突然、凄まじい形相でデスクを叩きつけたからである。

その衝撃で、山積みになっていた資料の類がどさどさと雪崩を打って床に落ちていく。

「理解できるワケないでしょうが！　ＳＣＣが投資する巨額な金の行き着く先がどこであるか、課長だっておわかりでしょう！？　ナツシュ・マテリアル社は表向き資源開発業者だが、裏の顔はテロ組織の強力なシンパだ。ＳＣＣ経営陣がそのことを知らぬ筈がないでしょう！　これはもう、立派なテロ活動幫助ですよ！　事情聴取だつて生ぬるい、即刻家宅捜索に踏み切るべきです！」

モルトの顔ぎりぎり、ほとんどキスしてしまいそうな距離まで迫っているエド。

精一杯威厳を見せつけようとしていたモルトはすっかり怯えてしまい、ミリ単位で後退りを始めた。

それと気付いたエドはすかさず声を一段と張り上げ

「課長っ！ 課長は悔しくないのですか！？ 警察機構本庁きつてのベテラン刑事をむざむざとテロリストごとき畜生の集まりの手にかけさせてしまったんですよ！？ それでこの「足元でせつせと書類を拾い集めているメイファをびしつと指し「右も左もわからん新人がさんざん苦勞してようやく事件解決への手がかりをつかんだというのに。あなたは部下の苦勞を踏みにじろうつていうんですか！？ それでも警察機構本庁捜査課の課長ですか！？」

頭上から落ちてくるエドの罵声を聞きながら、ほんのりとした喜びを感じているメイファ。

（エド先輩、私の苦勞を課長に力説してくれるなんて……！ ちょっとだけ、報われたかも）

そこまでは良かった。

――が。

「今行け！ すぐ行け！ 令状とってこい！ すぐにだ！ じゃないと承知しないぞ！」

こともあろうに、エドはモルトの胸ぐらをつかんで揺さぶり始めた。

完全に頭に血が上ってしまったらしい。

「エ、エド君！ やっ、やめないか！ ここは一つ、冷静に話し合おう！ 冷静に！ なっ！？ 君も警察機構の人間なんだから――」

「やかましい！ 冷静もクソもあるか！ さっさと令状の手続き取れ！」

「せんぱーい！ 落ち着いてくださいよお！ 課長の首締めちゃダメですう――」

慌てて書類の束を放りだし、エドを制止しにかかったメイファ。

「止めるんじゃない、メイファ！ こいつはテロリストだ、テロリスト！ リン・ゼールから幾らもらった！？ ええ！？」

エドの怒りは凄まじく、メイファが割って入ったところでどうにもならなかった。

捜査が後手後手に回っている組織への不満や、毎日の過酷な捜査活動で神経が著しく磨耗しているということもあつたのだろう。

「先輩つてば！ もう、止めてください！」

「エ、エド君、首、首が……」

三人の揉み合いはややもしばらく続いた。

そこへたまたまやってきたウォレンが

「おい、エド！ いい加減にしないか！ 課長を締め上げたって事件の解決にやならんだろうが！」

一喝したため、ようやくエドは大人しくなった。

さもなければ、モルトは絞殺されてしまっていたかも知れないが――。

半泣きになっているメイファから事情を聞いたウォレンは

「……それは、課長。立場はよくわかりますが、しかし我々現場の人間が納得できる内容ではありません」エドとメイファ、二人に代わる代わる視線を向けてから「彼等が毎日血の滲むような苦勞をして捜査にあたっていることは、この私がよく知っています。せめて二人を労う意味において、多少の説明が伴っても罰は当たらないと思います」

切々としたウォレンの言葉に、モルトは黙って耳を傾けていたが「ならば、話そう。三人とも、これから私が話すことはくれぐれも口外無用にしてくれ給え。本来聞かせてはならない内容だが、それを話すということが私の君達への信賴の表れだと思ってもらえればありがたい」

先刻の一件は不問に付す、ということなのか、モルトはそのことには言及しなかった。

彼はしわくちやになったネクタイを直しながら、

「……私とて、メグル君の仇を討ちたいという思いは君達と一緒にだからこそ、S C C への事情聴取に踏み切るよう、部長を通じて総

監へ上申したのだ」

メグル殺害の一件は警察機構組織に対する重大な侮辱であり挑戦といっている。果然、警察機構本庁では投入しうる限りの捜査員を動員し、被疑者確保に全力をあげる姿勢をとった。

が、手がかりが極めて少なく、捜査は難航する様相を見せた。

そこへ、たまたまメイファが発見したメモ紙からステイレーンという新たなキーワードが捜査線上に浮かび、エドとメイファはステイレーングループ系列各社をしらみつぶしに聞き込みして回った。

死んだメグルが遺した「ステイレーン、金の流れ」という短い文章。

それはどうも、SCCによる海外企業への巨額の投資を意味しているようであった。

調べてみると、なるほど怪しい。

SCCと協力関係にあるカイレル・ヴァーレン共和国の企業「ナツシュ・マテリアル社」は過去に裏でテロ組織に資金提供を繰り返しており、各国の当局からマークされている、いわば札付きであった。

しかもSCC側では巨額ともいえる投資をトップである会長サントスと側近だけで極秘裏に、かつ一方的に決定した形跡があり、それと気付いたグループ会社社長連中からさんざんな突き上げを食らったという。

不可思議な点はまだまだある。

折からの不況と実効性の薄い海外事業偏重で経営が行き詰まりつつあるSCCが、なぜこのタイミングで巨額の投資など行うのか。国内では中小規模のグループ会社が次々と消滅しつつあるというのだ。

それに、SCCからの投資によって進行される鉱物資源探掘プロジェクトだが、バックにはカイレル・ヴァーレン政府もついており、SCCの他にも巨大企業が数社参画している。正真正銘一大事業で

ある点疑いを入れる余地はない。

ただし、その投資額が大きな割にＳＣＣ側にもたらされる利益が甚だ不明瞭なのである。

メイファが親友のリナを介して秘かに探りを入れてもらったのだが、ＳＣＣ本体の誰もその内容を知らないという驚くべき事実が判明した。会長サントスが極端なワンマン経営者という事情も大きかったであろうが、それにしても一社の命運を賭して実施される事業計画の見込みを社員が全く知らないというのは、余りに粗雑すぎる。穿った見方をすれば、公に出来ない事情があると受け取られても仕方がないのだ。

証拠となる材料は少なかったが、それでもエドは確信を深め（これはＳＣＣが裏で一枚噛んでいると思っただけいな。サントス会長が海向こうで本腰を据える前に、本社に踏み込む必要がある）

そのようにモルトに報告した上で、ＳＣＣ経営陣から事情聴取を行うよう進言した。

モルトは頷き、捜査部長を経由して総監まで通じた。彼等も、モルトの上申に前向きな態度を示した。

ところが。

「……国家公安機構から待ったがかかった。理由は明らかでないが、総監のお話では、どうやら合衆国議会のとある大物議員の差し金らしい。今回のプロジェクトに警察機構は手出しをするな、ということなんだろうね。何やら重大な含みを感じるが、我々の力ではこれ以上どうすることもできない。——どうだろう、エド君。少しは答えになったかね？」

「合衆国議会議員、ですと……？」

エドは呆然とした。

捜査の妨害者は思わぬところにいたのだ。よりによって、政府関係者ではないか。いかに警察機構本庁総監といえども、太刀打ちできるような相手ではない。

これにはウォレンも息を呑み

「で、では課長、メグル警部殺害事件は、このあとどうすれば……？」

「捜査は続行するよりあるまい。ただし、事件解決への道筋は絶たれたといってもいいだろうね。——遺憾だよ、ウォレン君。極めて遺憾だ。しかし、我々にはどうすることもできない……」

そう呟くように言って、不愉快そうに表情を険しくしたモルト。震える拳に、悔しさが滲み出ている。

その刻限、セレアは依頼された通りI地区にある「ストレイア工
作所」の事務所を訪れていた。

彼女を入り口まで出迎えたロットはにこにこしながら

「ようこそ、我が牙城へ。お忙しい中お越しいただき、恐縮です」

彼の背後には、副社長ほか数名の社員達が居並び、セレアに笑顔を向けている。ロット以下全員作業服姿だが、汚れていないそれを着ている者はいない。というよりも、トップであるロットの顔が機械油に汚れて真っ黒であるというのが面白い。

「いいえ、久しぶりにお邪魔させていただくので、楽しみにしておりましたの。——ここだけは、あの頃からずっと変わっていませんね。とてもいい職場ですわ……」

若きロット社長率いるこの会社は従業員の数こそ三十人足らずだが、州市統治機構が指定する優良企業の一つにも選ばれており、社員達は皆活き活きとして働いている。誰もが、快活で柔軟、情熱と行動力に満ち溢れた我が社長を愛しており、心の底から慕っていたからだ。取引先は大手から中小まで様々、しかしながらその信用度は抜群に高い。こうした背景もあって、ワンマン会長サントスですら迂闊に手を出すことができなくなっているといっている。

元々前会長ヴォルデ時代に設立された会社で、彼の側近だったロットが経営手腕を見込まれて託されることとなった。ヴォルデ存命の頃はセレアも何度か訪れたことがあるが、彼が逝去してからというものの経営陣を退いたこともあり、訪問するのはしばらくぶりのことであった。

「さあ、狭くて汚い事務所ですが、中へどうぞ。今日は、セレアさんに是非お会いしたいという方々が勢ぞろいしておるのです」

「私に……?」

セレアは妙な気がしたが、ともかくもロットに導かれて事務所の

中へ足を踏み入れた。

小さな事務所は事務員用のデスクが幾つかと応接セットだけでスペースが埋まっており、なるほど狭かった。じっとしていることのできない社長であるから、彼自身のデスクなどというものは存在せず、一日のほとんどは隣接している工場で作業しているという按配だった。彼の顔が汚れているのはそのためである。

応接セットに案内されるのかと思っていると

「では、こちらをどうぞ。安全には最大限気をつけているつもりですが、自分の身は自分で守るのが一番です。足元と頭上にはくれぐれもお気をつけください」

といってロットが差し出してきたのは、黄色い作業用ヘルメットであった。

「はぁ……わかりました……」

工場の方へ連れて行かれるらしい。

何かなんだかよくわからないながらも、素直にそれをかぶったセラ。

すると、女性社員達がきゃつと歓声を上げ

「まあ！ 綺麗な女性は安全帽をかぶっても似合いますね！ 私なんて、男と間違われるのに」

「あらあら、それはユリさんが遠慮会釈なく男性達をどやしつけるからでしょ？ 安全帽のせいじゃないわよ」

どつと爆笑が起きた。

陽気で茶目つ気の多い社員達である。

セラも自然と相好を崩し

「皆さん、とても素敵ですわ。こんなに活き活きとして、輝いていらつしゃるんですもの。本当に、素晴らしい職場ですね。今日はお招きいただいて、私も元気をいただけたような気がします」

ちらりと、五年前のStar-lineメンバー達の姿が脳裏を過ぎった。

「こんな社員達ですみません。ただ、本当に気のいい人たちばかり

なんです」

苦笑いしているロット。

「わかりますわ。ロット社長のお人柄なのでしょう。私もこういう雰囲気は大好きですから」

愛想ではない。

祖父ヴォルデがステイケリア重工でスパナを振るっていた頃も、確かにこんな感じだった。これが理想的な職場の姿であり、セレアはいつもそうありたいと願ってきた。ステイレーインググループ全盛期はこういうグループ会社が数多くあったものだが、今では幾つ残っているであろう。全て、あのワンマン会長サントスが破壊し、社員達から笑顔を奪い去ってしまった。

「では、こちらへどうぞ。うるさい所で申し訳ないですが」

ロットは先に立って歩き出し、事務所奥のドアを開けた。

途端に、凄まじい機械の稼働音やら耳をつんざくような金属音が飛び出してきた。

作業場はちょっとした体育館ほどの広さを有しており、大型の機械が幾つか据え付けられている。機械部品の加工を生業としているから、それらはプレス機だったり研磨用の機械なのであった。あちこちでやはり作業服姿の社員達が、真剣な表情で作業にあたっている。

受注が多く多忙な工場であるにも関わらず、思いのほか整理整頓されている。歩行、運搬用通路がきちんと確保されているから、足元に気を遣う必要はなさそうであった。

「これがうちの作業場です！ C M Dメーカーからの受注が引きもきらないものでして、ここしばらくは毎日フル稼働ですよ！ 忙しいったらありやしない。とはいえ――」

何よりも社員の安全第一が重要であるから、作業環境のあり方はうるさく指導しているのだと、ロットが説明してくれた。ただ、機械の音がやかましく、彼はほとんど怒鳴るようにして喋っている。

先導しつつ、機械や作業工程について簡単な説明を加えていく口

ット。

後に続くセラアは、はいはいと従順に耳を傾けつつ

（ロット社長、今日は会社見学のつもりでお呼びしてくれたのかしら？ でも、まだこういう元気なグループ会社があって良かった。少しだけ、安心できたかも……）

胸中、思うともなしに思った。

彼女が心血を注いできたStar-lineこそ消滅したが、一方ではこのように頑張っている会社もある。その点、祖父ヴォルデの志を健全に継ぐ者達がいてくれたことは心強い思いがした。

二十分ほどかけて、ロットは工場内の一通りの作業を説明してくれた。

最初に案内してくれた機械のところまで戻つてくると、彼はつと足を停め

「さて……と。そろそろ、いい頃だ」ちらりと腕時計を一瞥し「…

…実は、今日お招きしたのは、別に我が社の設備をご覧戴きたかったからではないのです。多少時間に余裕ができましたので、こうやってご説明させていただくことにしたんですけれども。私の拙い説明をご清聴いただき、ありがとうございます」

「はあ……」

「では、こちらへご足労いただきましょうか。本当にお見せしたいのは、この奥です」

壁際を伝って、工場の奥へ向かって歩き出した。

ロットが何を企図しているのかセラアには全くわからなかったが、黙って付いて行くよりない。

大型作業機械が並んでいるスペースよりもさらに奥側には、納入を待つ製品が詰まったダンボール箱が堆く積み上げられ、ちよつとした倉庫のようになっていた。普段は用事がないということなのか、そのあたりに社員達の姿はなかった。

建物内部の位置関係でいえば左奥の隅、ということになるのであるのか。

真新しい段ボール箱の壁が途切れ、そこだけ小さい空きスペースが設けられている。

その光景を目にしたセレアは、思わず足を停めて棒立ちになった。「……ようこそ、セレアさん。このようなむさ苦しい場所へお呼びした無礼を、どうかお許してください」

そう彼女に声をかけたのは、CMDメーカー「ステイケリア・アイヴィル重工」の元社長で、祖父ヴォルデの親友とっていいイーファム・ヘッズマンであった。セレアにとっては第二の祖父といってもいい人物である。

が、彼だけではない。

イーファムの周りには何人ものスーツ姿の男性達があり、彼女の姿を認めるや一斉に目礼や会釈を送ってきた。

業務用システム開発会社「ストラン・ネットワーク」社長ライト・フエーン。

不動産業「ステーリア・グランド社」社長ウード・ダム。

大規模小売店「スターショップ」代表取締役社長チェン・アイラ。

ステイケリア・アイヴィル重工取締役兼セカンドファクトリー工場長ロン・パーム。

工業用機械製造メーカー「ストウルド精機」代表取締役社長リュード・ヴォイク。

ざっとこれだけでも十分そうそうたる顔ぶれだが、一同の片隅で品良く立っている中年男性の姿を目にした途端、セレアは呆然とした。

ステーレイングループの金庫ともいえる「ステーレイン・セントラル・バンク」頭取マッセ・リライドヘルザ。

サントスに真っ向から物を言える、数少ない人間の一人とっていい。この男がいなければ、ステーレイングループはとうの昔に瓦解していたであろう。

さらには――。

「先日は、大変失礼いたしました。何せ、事は極秘を要したもので

すから、現会長派として通さなければならなかったのです。暴言の数々、平にご容赦ください」

そう言って丁寧に頭を下げた者がいる。

SCCグループ経営推進室室長イゲル・ミックスデア。

セレアこそ欠席したが、先のグループ社長会議で経営幹部側の急先鋒としてリユードはじめロットやその他社長連と舌戦を繰り広げるなど、紛れもないサントス派としてグループ会社各社から憎悪されている人物である。会長を後ろ盾とした彼の容赦ない攻撃によって、これまで会議の席上セレアは何度も屈辱を味わわれていた。だからといって彼女がイゲルを憎むことはなかったが、それでもサントス会長の腰巾着なのだろうという認識はもっていた。

その若者が今、自分に向かって深く低頭し、心から謝罪の言葉を述べている。

「イ、イゲル室長？ それに皆さん、これは、一体……？」

黄色いヘルメットを被ったままフリーズしているセレア。

ロットは一瞬悪戯っぽい笑みを浮かべたが、すぐ生真面目な表情に戻って

「……ようやく、あなたをお迎えすることができました。我々はヴォルデ前会長の意志を受け継ぐ者達で結成した有志会、といったところでしょうか。ずっとこの日を、待ち続けておりました」

すると、頭取マッセがにこやかに微笑みながら

「ロット社長。もう、その呼称は必要ないかと思えますよ？ 先ほど、予定通りイリオス氏がカイル・ヴァーレンから帰国された旨、連絡が入ったのですから。——たった今からヴォルデ会長有志会、ではなく『新生ステイレーングループ』と名乗った方がよろしいかと」

大きなデスクの端に置かれていた今朝の新聞。

その一面記事の見出しを目にしたディゼンは、露骨に眉をしかめ

ていた。

『アミュード・レア・ニステイインターナショナル、近く国際国家連合より平和表彰』とある。

世界中に慈善団体や平和活動組織は無数にあるが、全世界政府により結成された国際国家連合から組織が直接表彰されたケースは万に一つもなかったといっている。それだけに、レア・ニステイの成長と活動は群を圧していた。

（余計な真似を……。女は寄って集るとすぐこれだ。偽りの理想社会など夢見おって……）

内心で舌打しつつ、チェアに腰を下ろすと

『——おはようございます、ディゼン知事。カイレル・ヴァーレン観光振興局理事、ナイデル様と仰る方からお電話が入っておりますが……。いかがいたしましたでしょうか？』

内線の通話ランプが点滅し、スピーカーから秘書の声が流れてきた。

「おはよう、ミルサ君。大事なお客様だからね、つないでくれ給え」
『かしこまりました』

回線接続のランプが点灯するのを待つて、ディゼンは受話器を取り上げた。

「……私だ。こんな朝早くから電話とは、珍しいじゃないか」

そう切り出すと、受話器の奥から

『何を悠長な。すっかり知事ボケしてしまったのではあるまいな？
メモは見たのだろう？』

ややかすれた、トーンの低い男の声が届いた。多少口早である。

ディゼンはチェアに座り直しながら「ああ、見たよ。警察機構の一件だろう？ あれならシュヴァルトが議員特権を行使して寸前で差し止めた。問題あるまい」ぐいっと背もたれに体重を預けるようにした。

『それで事を収めたと思っているのなら甘いぞ、ディゼン。どこでどう漏れたか知らんが、一部メディアが嗅ぎ付けてきた形跡がある。

メディア・レイメンティルとかいう雑誌らしいが、先日からロゼルの件でしつこくまとわりついていたというではないか。点と点に過ぎないものを、無理矢理にでも線に仕立て上げる連中だ。これが記事にされればディゼン、貴様とてタダでは済むまい？」

「ああ、あの雑誌かね……」

大して気にしていない風の返事を装ったが、一瞬ぎくりとせぬでもなかった。

そもそもメディア・レイメンティルという月刊誌は政治家や芸能人のスキャンダルばかりを追いかけていることもあり、品の悪さで定評があった。取材を受ける側からは毛虫のように忌み嫌われていて、度々訴訟沙汰にもなっている。一度狙われたらとことん食いついて離れず、しつこいのがその理由らしい。

が、しつこいだけに、時として水面下の大きな事件やスキャンダルを暴いてしまう場合がある。

彼等に狙われたがために、結果として失脚した政治家や世間から姿を消した芸能人は枚挙に暇がない。

先日、ロゼル殺害事件について同誌の記者を名乗る中年女性が頻繁に取材を申し込んでいた。ディゼンは全て門前払いを食わせたが、すると今度は都市統治機構本庁職員や関係者、ついには知事秘書にまわりつき始めたのだ。

記事としては根拠に薄い憶測ばかり並べられていたが、それでもあからさまにディゼンに対し疑いを向けた内容となっていた。例の女性記者もタダ者ではないらしく、関係者から聞き集めた事柄を巧妙につなぎ合わせ、ディゼンがロゼルを殺害する動機が十分成立するという体を構成していた。

都市統治機構本庁広報課ではメディア・レイメンティル社に対し嚴重に抗議すると共に、名誉毀損で告訴も辞さない旨伝達した。このことあって「ロゼル副知事殺害事件の闇」と称する連載記事は中断された。編集長の腰が砕けたのであろう。

よつやくうるさい虫を追ひ払ったと安堵したのも束の間、今度は

警察機構が動き始めた。

ロゼルの件に直接関連する事柄ではなかったが、ベテラン警部殺害事件に関して捜査線上にSCC本社の動向が浮上し、そのためSCC経営幹部数名に事情聴取を行うというのである。この情報を得たディゼンは旧知の合衆国議会議員を介して国家公安機構に対し差し止めを要請した。警察権力の行き過ぎを防止するという観点から、合衆国憲法にはそのような定めがある。ただし、これは合衆国大統領と合衆国議会議員にのみ特権として認められている。

ディゼン個人はSCCはじめ会長サンテスと大して利害関係が深い訳ではない。

が、SCCによる巨額投資が頓挫されると間接的に支障が生じるため、やむなく口を利いてやったままでのことである。要はSCCが金さえ吐き出してくれば、警察機構の搜索を受けようと潰れようと、知ったことではない。

それが、漏れたという。

事もあるうに例のメディア・レイメンティル誌というではないか。

（これは捨て置けないな……）

ディゼンはちよつと考えてから、さあらぬ体を装いつつ

「なに、造作はあるまいよ。方法は手荒になるが、連中に思い知らせてやるいい機会じゃないか。余計なことに首を突っ込むとろくな結果を招かないという教訓をな……」

「また、人を貸せというのか？」

「そうだな……相手は非力な中年ババア一人だ。二人もいれば釣りがくる」

「わかった。詳細を寄越せ。あとはこつちでやる。——ただ、もう他に余計な虫がいらないかどうか、念入りに洗っておけよ？ この前の刑事もそうだが、同じ手段を何度も繰り返せばいずれは露顕するぞ。人間一人消すくらい、手間のかかる事もないんだからな」

そう言い残し、電話は一方的に切れた。

受話器を置いたディゼンは小さく溜息を漏らし

（まったく。どいつもこいつも、自分の身が一生安全だと信じている馬鹿者揃いだな……）

ふと、足元のゴミ箱に目線がいった。

先月号の「メディア・レイメンテイル」が捨てられている。

ブレーカーの電源を落とすと、オフィスの中は一気に暗くなった。夕焼けの残光が申し訳程度に窓際を照らしているが、あと少しすれば完全に夜の帳が下り、闇に支配されてしまうだろう。

私物でパンパンに膨らんだバッグを肩に担ぐと、ドアから出て行くとしたシヨーク。

「……」

ノブに手をかけたところでつと足を止め、振り返ってみた。

デスクから書棚から全て搬送されてしまい、すっかり空っぽになったオフィス。今後は州裁判所の管理下におかれるから、シヨークが足を踏み入れるのはこれが最後である。

かれこれ六年という歳月をここで過ごしていたのだ。不規則な泊まり勤務が多かったから、どちらかといえば社宅である宿泊棟よりもこの本部舎にいた時間の方が長かったかも知れない。

シヨークならずとも、女性にとって二十代前半というのは貴重な時代である。

それを全て、ステイレーングループもといStar-lineに捧げてきたということになる。もう二度と、戻ってくることはない。

かといって、そのことをどう言うつもりはなかった。

自分なりにやるだけのことはやったと思う。自分の技術を愛し引き立ててくれたヴォルデに、及ばずながらも多少は報いたつもりでいる。

結果として最後に状況が彼女に味方しなかったただけのことで、それと満足感とは別の話だという気がする。衰退しゆくStar-line

ineを、最後まで逃げずに支えきった。まずまず、十分ではないか。

セレアは密かにグループ会社を回って就職先を探してくれたらしいが——シヨコ自身、もはやステイレーシンググループに留まりたいという意志はなかった。ヴォルデ亡き今、身勝手な俗物ばかりの経営陣に支配されたこの巨大企業には何の未練もない。

それよりも、少しだけ自分自身に休暇を与え、それからまた新たにやっていきたいと思う。

CMDメンテの技術も然り、着々と培ってきたものは、決して消えることはない。

ここは青春の墓標などではなく、スタートライン。何もかも、これからが始まりだと思えばいい。

（お世話になったわね。……さよなら、Star-line）

立ち去ろうとした瞬間、オフィスの中で第一期のメンバーが大騒ぎしていた光景を思い出し、胸の奥がずきりと痛んだ。

彼等はそれぞれ自分の歩むべき道へと進み、そこで生きている。

またいつかチームを組もうと誓って皆去っていったのだが、その約束が果たされることはあるまい。

（ま、それはそれよね。Star-lineだけが還るべき場所じゃないんだし）

思い直し、オフィスのドアを閉めた。

最後にハンガーや本部舎内の各所を一目見てから立ち去ろうかと思ったが、メインブレイカーを落としているため照明を点けられないことに気が付いた。

己の迂闊さに苦笑しつつ、何度通ったかわからない正面通用口を抜けて外へ出た。

入り口のドアを閉め、最後の施錠をする。

（あれ？ この鍵って、裁判所に持っていかなきゃいけないんだっけ……？）

そんなことを考えながら振り返った時である。

少し離れた位置に、人影が二つばかり立っている。

辺りはすでに暗くなっているから、目を凝らしてみてもよく見えない。

すると、人影がこちらへ向かって近づいて来た。

誰か、と思う間もなく

「……よう、嬢ちゃん。お疲れさんだったな」

「どうやら間に合ったようですね。——ショーコさん、いや隊長」
声を聞いて驚いた。

第一期隊員で整備長を努めたりベル・オード、そしてフォワード
ドライバーのサイ・クラッセルであった。

どこでどう嗅ぎ付けたのか、ショーコが本部舎を引き払うという
この日を目掛けて駆けつけてきたらしい。

「サイ君、リベルさん……！ どうして、ここへ……？」

絶句しているショーコ。

リベルは暗がりの中で「ニッ」という独特の笑みを見せ

「ったりめエじゃないか。あんなだけ苦楽を共にした元上司のお見送り
だぜ？ こないワケにやいかなだろうがよ」

「……ですね。本当はナナも来たがってたんですけど、昨日からリ
ノが熱を出しちゃって。俺一人になっちゃいましたけど、そいつは
勘弁してください」

笑っている。

所詮、隊の最後は独りで迎えるしかないかと思っただが、思いがけ
ず馳せ参じてくれた仲間がいた。

こんな形で報われるなんて――。

そう思った途端、ショーコは目の前がぼやけて見えなくなった。

「サイ君……リベルさん……！ あたし、あたし……！」

止め処なく涙が溢れてきて、始末に負えなくなってしまった。

どれだけ隊が逆風に晒されようと、総指令長のセレアが泣き崩
れようと、断じて涙は見せずにやってきた。それだけに、湧き上
がる万感の思いは抑えきれなかった。

「泣かないでくださいよ、ショーコさん。そういや、ショーコさんが泣いているところなんて一度も見たことがありませんでしたねぇ」
「ああ。嬢ちゃんはいっつも、きりつとしてたモンなあ。あんたア、立派だったよ。俺達はみんな、嬢ちゃんのお陰でここまでこれたんだし……」

リベルの声が途切れた。見れば、彼もまた貰い泣きしている。すぐに手の平でごしごしと乱暴に顔をこすり「……年取ると、トンと涙もろくなっていけねえや。俺が泣いてちゃ、嬢ちゃんに申し訳が立たねえよ。なあ、ボーズ？」

面目なさそうにしている。

そんな彼の姿に、ショーコは泣きながらもやつと笑顔をつくった。
「ありがとう、おじさん。あたし、Star-lineで良かったって、心の底から思ったよ。こんなにいい仲間めぐり会えたんだもの。終わり方こそ残念だったけど、何にも後悔してないの」

「そうそう、仲間といええ、なんですが……」ふと思いついたように、サイは携えていた大きな封筒を差し出した。「これを、どうぞ」
「……？」

ショーコが開けてみると、中に入っていたのは――

『お疲れ様でした、ショーコさん！ あたし、もうちょっとしたらそっちに戻りますからね！ ぜーったい、飲み連れて行ってくださいよ？ あ、でも飲み過ぎたらイヤですからね！ ユイ・エルドレスト』

『ありがとね、ショーコちゃん！ ゆっくり休んでね？ 仕事しなくなったらいつでも連絡ちょうだい。会長を説得しちゃうんだから！ リファ・テレシア』

『今までお疲れ様でした、ショーコさん。これからはゆっくりお話しできますね。リノとサイと、三人でいつでも待ってますから。』

ナナ・クラッセル、リノ・クラッセル』

『世界一の隊長さん！ 本当にお疲れ様！ まだまだこれからですからね！ これからも主人と共に応援しています！ ブルーナ・セ

ルラ」

『今の私があるのは全て隊長のお陰です。しっかりと訓練を積んで、立派なドライバーになってご覧にいきます。ありがとうございます！ シェファイ・ヴィルレーア』

『たくさん雷落とされたティアです。あの時はホント怖かったです。でも、あれのお陰であたしも成長できました！ またいつか、あたしを叱ってくださいね？ 叱られないあたしになってなければ、ですけど……。ティア・エレイド』

『また、お会いしたいです。Star-line最後の日に行きたかったんですけど、ごめんなさい。風邪をひかないようにしてください。私は元気ですから。ミサ・セヴィス』

メンバー一人一人からのメッセージカード。

ご丁寧なことに、皆それぞれの趣向で撮影した写真が添えられている。

ミサだけは相変わらず何を言いたいのがよくわからなかったが、それはいい。

一番最後のカードは、盟友サラからのものだった。

『シヨーク、私が一番尊敬する人。どんな時でも支えてくれて、助けてくれた。ずっとずっと、忘れないから。これからは、自分の幸せを探すのよ？ あなたはたくさんの人を支えてきた分、幸せになる権利があるんだからね？ 本当に、ありがとう！ サラ・フレイザ』

それぞれの思いが込められたメッセージ。

皆、駆け付けてくることはできなくともこうして見守っていてくれたのである。

「みんな……！」

もう、堪え切れなかった。

その場にしゃがみ込み、顔を覆って泣き出したシヨーク。

「おいおい、あらためて泣き出すヤツがあるかい。そんなに泣かれちゃあ、なあ……」

からかうように言ったりベル自身も、涙で顔をくしゃくしゃにしている。

サイもまた目頭を熱くしたが、込み上げてくるものを振り払うようにつと天を仰いだ。

一面、濃紺の空。

その暗いキャンバスに一筋、星がずっと流れて消えていくのが見えた。

こうして——ステイレーングループ専門警備会社「Star-line」はこの夜、全ての使命を終えたかのようにひっそりと消滅した。

翌朝、この件について報じた新聞はただ一紙のみであった。

落日編9 急変

「ただ今戻りました——」

オフィスに入って行くと、それと気付いたウォレンが手を挙げ

「おう、二人ともお疲れさん！ 何かわかったか？」

声をかけてきてくれた。

「わかったっていえばわかったような、わからないといえばわからないような…… ですかね？」

と、エドの返答は要領を得ない。表情がやや疲れている。

ウォレンは苦笑し

「わーったわーった……。つまり、あれだろ？ 裏ではつながっているような気がするが、今ひとつ証拠がつかめない。そういうことだろ？」

「ご名答です。さすがは先輩だ」

エドの背後にはいつものようにメイファが付き従っている。

顔色が優れない。足取りが心持ちふらついている。

ピンときたウォレンは

「よう、嬢ちゃん。なんだア、また死体見てビビったかあ？ それじゃあいつまで経っても美味いメシは食えねえぞ？ この商売、肝が太くないとやってられねえんだからな」

からかい半分に呼びかけてやると

「……食事の話はしないでください。思い出すと気持ちが悪くなります。私、せっかく耐えて帰ってきたんだから——やっぱり、ダメです」

手で口を押さえるなり、バタバタと走って行ってしまった。現場から戻ってきて緊張感が解けた瞬間、急に胃の中からくるものがきてしまったようである。

そんな彼女を呆れたような顔で見送っているエド。

「まったく、仕方のないヤツだな……。こんなんじゃ警察機構職員

失格じゃないか」

彼の呟きを聞いたウォレンは

「まア、まだ新人のうちだし、大きな心で見守ってやれよ。俺だって、死体なんか何度見たつていい気持ちはいねえさ。人間だろうと動物だろうと、な」

と、どこまでも大らかである。

「それよりも、よ」エドの袖をくいくいと引つ張って傍のチェアに座らせ「……まずは、どんな案配だったか教えてくれないか？ 聞き込みに出かけるつもりだったんだけど、お前達が帰ってきてからにしようと思つて待つてたんだよ」

自分が担当しているロゼル副知事殺害事件に関係する情報がないかどうか、確認したかったのである。同事件もまた、メグル殺害事件同様八方塞がりになっている。

「課長にまだ報告してないんですけど、相手が先輩ならいいでしょう。状況はですね——」

早朝、警察機構本庁捜査課に遺体発見の一報が舞い込んできた。

現場は都市中心部にほど近いO地区繁華街の裏通り、遺体は四十代と思われる女性だという。

捜査課長モルトの指示により、エドはメイファを連れて現場へ向かった。

通勤時間帯ということもあり、事件現場付近はかなりの人だかりができていた。それをかき分けるようにして中へ入っていくと、先に到着した鑑識局の人間が現場の検分を開始したばかりであった。当然、遺体はそのままにされている。

「朝早くにお疲れ様です。Cブロック所轄O地区北署所属のテック・ロウ巡査であります。本庁捜査課の方でありましょうか？」

二人に気付いた巡査の一人が声をかけてきた。年の頃は三十に少し足りないといった感じだが、所作、雰囲気ともベテラン巡査のようになんか堂々としている。

「お疲れ様です。本庁捜査課のエドとメイファです。よろしくお願

いします」

ピツと敬礼した。多少こういう場に慣れてきたと見え、エドが横目で見てみるとメイファも自然な敬礼ができている。

「それで、状況はどんなものでしょう？ 中年の女性、とだけ聞いているのですが」

「ええ、四十代前半と思われます。額に銃創がありました。他殺と断定してよろしいでしょう」

射殺と聞いて、メグルのことをちらと思い出したエド。

「なるほど。身元はわかりましたか？ 遺留品などは……」

「まだ身元は特定できておりません。遺留品が発見されていないのです。被害者の服装はラフでなくカジュアルな感じのものでしたので、外出途中で被害に遭った可能性があります。そうすると、強盗目的の犯行という見方もできるかと思います」

テックの物言いはきびきびとしていて無駄がない。

つまり、外出の最中だったとすれば金品の入ったバッグなどを持ち参している可能性が高く、それが無いということは犯人に持ち去られているかも知れない。強盗目的、と彼が口にしたのはその意味である。

エドは頷き

「わかりました。では、見せていただいてもよろしいでしょうか？」
申し出た。

瞬間、メイファが嫌な顔をしたが背後にいるからエドにはわからない。

テックに案内された遺体発見現場というのは、商業用ビルとビルの間、人が二人並んで通れるかどうかという暗く狭い小路であった。あちこちに空き缶や紙クズが落ちていて薄汚ない。通りに面したこちら側から入っていくと、行く手には建物が立ち塞がっていて袋小路になっている。

通り魔的な犯罪にはありがちな場所だな——思いながら、エドは奥へと進んでいく。

鑑識局の職員がしきりと撮影しているから、幾度となくフラッシュの光がビルの谷間に明滅している。

遺体は、小路のかなり奥にあった。

被害者の女性は、白いパンツスーツ姿である。なるほど、テックが教えてくれたようにカジュアルな服装といていい。

足をこちら側に向け、横倒しというよりも、上半身を捻るようにして半仰向けの状態で倒れている。

鑑識局職員は二人が近寄ってきたことに気が付くと、撮影を止めて軽く敬礼した。

エドも敬礼を返しつつ

「お疲れ様です。本庁捜査課の者です。被害者の状態だけ、確認させていただいてもよろしいでしょうか？　すぐに終わりますので」「わかりました」

小路は狭い。

二人は鑑識局職員とすれ違うようにして入れ替わり、遺体の傍へ寄ってみた。

屈み込み、被害者の相貌をじっと見つめているエド。

前頭部やや右寄りに銃創がある。その一発で仕留められたらしく、他に外傷はない。不自然な身体の捻り方から察するに、背後から声をかけられ振り向いたところを銃撃されたように思われる。

年の頃は報告どおり、四十過ぎとみて間違いはなさそうであった。ただ、明るい色に染められた頭髮や身につけているアクセサリなどから、この女性が多少若作りを心がけていたことが窺える。しかしながら、施されたメイクはごく薄い。口紅などは唇の地の色に限りなく近く、一見すれば塗っているのかどうかも疑わしくなるほどである。

服装はじめ身なりは悪くないにも関わらず、必要最低限のメイクしかしていない。

これは被害者の職業に関連性があるものとエドはみた。工作上、自分自身を魅せる——例えば化粧品販売員のような——必要がない、

もしくは汗をかく頻度の高い職業に就いている女性の場合、薄いメイクになりやすい。

が、そのあたりは身元が判明すれば併せてはつきりするであろう。検分しておくべきことは他にもある。

「……メイファ。彼女はここで殺害されたか、あるいは別の場所で殺害されてここへ運ばれたか？——どっちだと思う？」

不意を衝いて課題を与えてみた。

これには、理由がある。

彼女は背後で顔を青くして突っ立っているばかりで、遺体を近くで見ようともしなかった。

エドは軽く腹が立ったが、気が付けばメイファはメイファで気分が悪くならないよう「……真っ白、真っ白、頭を真っ白に」と必死に呟いている。以前エドに言われたことを忠実に実行しようと、自分で自分に暗示をかけているらしい。

確かに、先日メグル殺害現場へ連れて行く時に「死体を見る時は頭の中を空っぽにしておけ」と言った。脳内（あるいは胸中かも知れないが）で死体と人間をリンクさせて認識すると、たちまち嫌悪感が先立ってしまい、この前のメイファのようにたちまち吐く羽目になる。だから、何も考えるな、というのがエドが駆け出しの頃に身につけた術である。

が、メイファは警察機構に入って日が浅く、死体に対する免疫がまだ十分ではない。自分で自分に言い聞かせたところで、効果はないであろう。

そこで職務上必要な推測を作業としてやらせることで適度な緊張感を誘発し、余計なイマジネーションに陥る隙をつくらせないようにしたのである。

「え……殺害された場所、ですか……？」

急に質問を浴びせられ、戸惑っているメイファ。

「そうだ。死体がここにあるからといって、ここで殺害されたとは限らないだろう。お前なりにどう考えるか、それを聞きたい」

「そうですね……」

腕を組んで考え始めた。

エドの思いつきである。メイファは先輩の質問に答えねばなるまいと、そちらの方に意識を集中させている。

やがて

「ここで、殺害されたと思うんですけど……多分」

ほう、とエドは一声し「何で、そう思ったんだ？」重ねて質問した。

「だって、ですよ？」

メイファは死体の頭部の方を指し

「血の流れたような跡があります。他所で殺害されてここへ運ばれてきたのなら、血痕はできないんじゃないでしょうか。それが理由ですが……」

恐る恐る答えた。

ほんの少しばかり沈黙してから、エドは「ふうっ」と溜息をつき

「……ちよっと、違うな」

「違いました？　じゃあ、この女性は……」

「まあ、待て。答えが違うとは言っていない。——血痕はできないんじゃないでしょうか、じゃなくてできないんだ。お前の言う通り、この女性はここで殺害されている。自信を持って言え」

思わぬ回答にメイファは一瞬きよとしたが、すぐにほっとした表情を浮かべた。

遠まわしに褒められたのが嬉しかったのであろう。

が、彼女の秘かな喜びなど興味がないという風に、エドは再び死体を眺めつつ自分の推理に集中し始めた。

（それにしても、射殺とは穏やかじゃないな。それも、頭を至近距離から躊躇なく一発だ。どうやら犯人は最初から殺すつもりでいたのだらう。銃弾が脳天の真ん中に刺さるように撃っている以上、こいつは——）

銃で人を殺すことに慣れている者の仕業とみていい。

そういう人間というのは、ごく限られた人間である。

闇組織の者、もしくはテロリスト。

ヴィルフリート合衆国刑法では拳銃の所持を禁じているから、よほどのことがなければ銃の扱いに慣れるなど不可能なのだ。

とすれば、通り魔あるいは物取りの犯行でないという可能性が出てくる。

この女性は何らかの理由により命を狙われることになり、そして殺害された。

状況はそう物語っている。遺留品がないのは、簡単に身元を割り出させないようにするためであろう。

——それから二人は所轄の職員に混じって現場付近を調べていたが、ほどなく女性の身元が判明した。

ケイ・バレンシア、四十三歳。

メディア・レイメンティル社に勤めており、ベテランといっているほど記者歴が長いという。

「メディア・レイメンティル社？ この短時間でよくそこまでわかりましたね」

情報をもたらした巡査に向かって言うと、その巡査は

「それがですね、つい先刻同僚を名乗る女性から搜索願が出されたようなんです。届出があった行方不明者の人相とよく似ているので確認を依頼したところ、身元が割れました」

ケイは昨夜二十三時近くに、O地区の自宅へ戻るためN地区にある職場を出たという。

が、深夜零時過ぎ、その同僚が仕事上確認すべき事柄があつて本人の携帯端末へ連絡を試みたが、ケイは出なかった。その後数度にわたりかけてみるものの、やはり同じ結果であつた。

仕事に熱心、というよりもほとんどのめり込む様になっているケイゆえ、職場からの電話に全く出ないことに同僚は不審を抱いた。しかも、最初の電話は呼び出し音が鳴ったにも関わらず、二回目以降は電波不通のメッセージが流れたことから、同僚はいよいよ怪しん

だ。

しかし、もしかしたら仕事の疲れで眠ってしまっているかも知れないと考え、夜が明けるのを待って再び連絡してみた。

それでもつながらなかったため、警察機構へ通報したという顛末らしい。

「待つてください」

一通り事情を聞き終えたエドが手を上げた。

「今のお話ですが、同僚の方は確かにケイさんの安否を気遣ったかも知れない。しかし、一晚連絡がつかなかったからといって、すぐに警察機構へ搜索願を出すでしょうか？ 嫌な言い方かも知れませんが、やや短絡的過ぎるような印象がある。もしかすると、すぐに搜索願を出すに足る理由があったという風には考えられないでしょうかね？」

傍にいるメイファは内心、我が先輩の感覚の鋭さに驚いている。

エドの言う通り、携帯端末が広く普及したといっても、一日や二日連絡が取れなくなるようなケースはざらにある。身近なところでは、親友リナがそういうタイプであった。メイファが記憶している限りでは、最長で十日間ほど音信不通になったことがある。

もっとも、その理由は「大好きになった男性に告白しようとしたら、恋人がいたからショックで誰とも会いたくなくなった」そうだが――。

若い巡査はなるほど、と感心した様子を見せつつも、すぐ困惑した表情になり

「そうかも知れませんが。しかし、その、私にはどうすることもできないんですよ。それを確かめるのは地区統括本部署か、本庁の捜査課の方をお願いしないと……」

言われてみて、それもそうだとエドは思った。

下部組織であるエリア署に所属する一巡査に推理を力説したところで、言うべき相手を間違えている。

そのままN地区のメディア・レイメンティル社へ寄って事情を聞

いても良かったが、エドはひとまず本庁へ戻ることにした。モルトへ報告した上で、捜査に関する指示を仰いでからにしなければならぬ。

「なるほど、な——」

エドから状況を聞いたウォレンは一瞬俯いて考え込むようにしたが、すぐに顔を上げ

「……エド、その搜索願を出してきた同僚とやらの名前は聞いたか？」

「ああ、聞いてありますよ」懐から手帳を取り出し、メモしたページをめくると「——アンジェラ・スーン。メディア・レイメンティル社取材部に籍をおいているそうですよ。殺害されたケイも同じ取材部ですね」

名前を聞くや否や、もうウォレンは立ち上がっていた。

「先輩？　もしかして、メディア・レイメンティル社に行くつもりですか？」

「そのつもりだ。犯人の手口からみて、あるいは俺達が抱えている二つの事件と何か関連しているかも知れない。ダメでもともと、もし手がかりがあれば拾い物さ」

行動力のある先輩である。

エドも頷き

「待つてください。先輩の意見に賛成ですから、俺も行きます。その前に——」

「課長に報告しつつ、ゲロってる嬢ちゃん待ちだろ？　……いいさ。若い娘が反吐まみれで歩きたあ、見られたモンじゃないからな」

「……ホント、あんな後輩で面目ないです」

エドは課長モルトに現場で見てきた状況を報告しつつ、メディア・レイメンティル社へ聞き込みに行く許可を請うた。

モルトは即座に許した。

だけでなく

「君の言う通り、背後関係が気になるところだ。正式に搜索願が出

されている以上、遠慮は要らん。可能な限り、聞き取ってきてくれ給え。もし新しい情報があれば、別の人間も出す。その際は、速やかに連絡を寄越すように」

とまで言ってくれた。

しかし、続けて「それにしても、メイファ君には困ったものだな。刑事が死体恐怖症では、仕事にならんじゃないか……」苦笑している。

「す、すみません……。私の教育が足りないようです」

詫びているところへ、モルトのデスクの電話が鳴った。

「捜査課のモルトです。ああ、お疲れさん。——何？ 本当か？ わかった、すぐに課の者を行かせる」

受話器を置くなり、鋭い視線がエドに向けられた。

「エド君、メディア・レイメンティル社へ出向くのは後でも良さそうだ」

「は？ と、言いますと？」

「今、下の受付に女性が保護を求めて駆け込んで来たらしい。その女性はアンジェラ・スーンと名乗っているようだ。——確か、君の報告にも同じ名前が挙がっていたな？」

「——現在のところS C C経営陣から正式なコメントは出ていませんが、同社からの投資が凍結された場合、ダイラルド・プロジェクトのスタートに重大な支障が生じるのは必至とみられています。同プロジェクトの監督会社を請け負うナツシュ・マテリアル社側は、寝耳に水な話で大変遺憾であるが状況の推移を見守り、その上で適切な手段を講じたい、としています」

そこまで読み上げてから、女性キャスターは次の原稿を取り出した。

画面が切り替わり、どこかの都市の今の様子が映し出されている。
(ロット社長と皆さん、本気なのね……)

ソファに腰掛け、その映像を呆つと眺めているセレア。
パジャマ姿のまま膝の上に頬杖をついている。

ロットほかヴォルデ派の行動は驚くほど迅速であった。

サントス以下経営陣に対して自分達で究明した事実を突きつけ、グループ廃滅施策と揶揄された海外への巨額投資を凍結、とまでの結論にはなっていないが、少なくとも再考という方向へ押し込んでしまったのだ。こういう議論があつたのかは明らかでないにせよ、SCCが即座に公表した以上サントスの腰は相当砕けているとみていい。セレアが眺めていたテレビニュースは、それを報じていたのである。

三日前、I地区にあるロットの会社「ストレイア工作所」の工場に招待された彼女を、思いも拠らぬ事態が待ち受けていた。

思いを同じくする系列会社社長連が結束してSCC現経営陣、つまりは会長サントスを退任に追い込み、衰退しきつたステイレーインググループを再生させるというのだ。

そして、その企てにセレアも参加して欲しいと要請されたのである。

「ちょ、ちょっと、待つてください！ それではクーデターも同じではありませんか！ 現企業経営法では背任行為にあたります。グループ再生どころか、警察機構の摘発を受けるのでは――」

彼女は慌てたが、落ち着き払ってロットは言う。

「もちろん、ただ叛旗を翻すというだけではそうなるでしょう。しかし、我々には堂々たる切札があるのですよ。ついさっき、それは確実なものとなりました。もはや、警察機構に睨まれる心配はありません。摘発を受けるのはむしろサントス会長の方なのですよ」

「サントス会長が……？」

ここでイゲルが「立つたままではなんですから、どうぞこちらへ」と言って折りたたみ式チェアを取り出し、セレアにすすめた。

そうしてロットは突然のことで困惑している彼女に、計画の全てを洗いざらい語って聞かせたのである。

——そもそも現会長・サンテスは生粹のスティーレイングループの人間ではない。

今を遡ること八年前、まだStar-lineが設立されるよりも前になるが、ヴォルデは生産資源の安定確保を図るべく海外企業との提携拡大と強化を模索していた時期がある。グループ自体が海外へ進出するとなると大幅な出資を伴うが、他社との事業提携であれば大規模に海外拠点を設ける必要もない。その点において、ヴォルデはどこまでも内治主義であつた。

この時、提携を結んだのがクレイザ州に本拠を置くトーランド商事である。

主に輸入業を手がける同社は大手というほどの会社規模ではなかったが、海外事業者としては国内老舗といつてもよく、特に第二次C M D開発競争時代には各メーカーから大口契約が引きも切らず舞い込み、たちまち巨利を博すこととなつた。

その後同社による資源の輸入代行は順調に行われ、ステイケリア・アーヴィル重工はじめスティーレイングループ各社は十分な恩恵にあやかることができた。ただ、取引額の増大に伴い事務手続きに困難が生じ始めたため、ヴォルデは主な輸入先であるカイル・ヴァーレン共和国首都中心部に事業所を置くことに決めた。現海外事業統括部の前身である。

しかしながらトーランド商事は提携当時の社長が逝去するに及び経営姿勢に柔軟さを欠くようになる。

後任の社長は何かと消極的で、極端な保守主義者であつた。折しも同社を取り巻く環境は逆風そのもので、新手の商社が続々と誕生して事業拡大のチャンス虎視眈々と狙っている。国内に地下資源をもたないヴィルフリート合衆国であるから、製造業の成長が著しければ当然付帯して生じうる現象ではあるのだが、時のトーランド商事社長はそのことを念頭に置かなかつた。これが、命取りとなる瞬間に足元をすくわれたトーランド商事は経営不振に陥り、ついには倒産に追い込まれた。

このことあるを見越していたヴォルデは、すでに次の手を打っていた。

グループ内の各メーカーが生産に支障をきたすことのないよう、トーランド商事の現地事業所を買収する方向で動いていたのだ。生産体制が一定の軌道に乗っている以上、新規に事業提携を結ぶよりもこちらの勝手を知っている現地を手中に収める方がリスクが低いと判断したのである。

果然この方策は図に当たった。

トーランド商事倒産後もスティーレーインググループはさほどの支障もきたすことなく生産ラインを安定させることに成功する。全て、ヴォルデの慧眼によるものであった。

ところで、この時買収されたトーランド商事の現地事業部はスティーレーイン海外事業部の管轄下に置かれることとなった。部署名も現海外事業統括部と改称され、事実上海外部門の拡大、発展という結果をみた。

サントスをはじめとする現SCC経営陣もといサントス取り巻きの連中は、トーランド商事現地事業部の人間であった。同社の倒産により路頭に放り出され去就に迷うべきところを、半ばヴォルデによつて救われた格好になったのである。ただしこのことは単にヴォルデの温情というだけでなく、サントス以下合併組が高い交渉力、それに行動力を有していたことも背景にある。落日のトーランド商事をぎりぎりまで支えきったその実力を、ヴォルデは高く評価したのである。

実際に海外事業統括部となつてからの彼等の働きは目覚しく、翌年にはグループ連結決算で過去最高の経営黒字を計上するに至る。第二次ジャック・フェイン事件があつた次の年のことであり、ヴィルフエイト国内はテロ組織の活動が沈静化していた。その影響によりカイレル・ヴァーレン国内でも治安が安定化すると踏んだサントスはヴォルデに大規模な事業拡大をすすめ、頃はよしと判断したヴォルデがそれを了承した。この策は図に当たり、スティーレーイング

ループに莫大な利益をもたらした。こうした目まぐるしい働きを見せた海外事業統括部は一躍注目を浴び、特にその中心的存在だったサントスはグループ内だけでなく広く部外にも知られることとなった。

――が。

早くもヴォルデは見抜いていた。

（彼の活躍は、確かに否定する余地などない。しかし、些か野心が強めな側面も否めまい。これは後々、ステイレーングループにとって良からぬ災禍となるかも知れない）

そう感じた彼は、側近の若手幹部育成に力を入れると同時に、セラに対して自分の後継者たるよう示唆する。体調が思わしくなくなっていたヴォルデは、自分の人生に終焉が近づきつつあることを悟っていた。そして恒久磐石なグループ経営維持のために手を打っておかねばならなかったからだ。

しかし、そうした願いも虚しく、ヴォルデ逝去後グループはちょっとした内紛状態に陥る。

誰もがヴォルデの孫娘・セラこそ後釜であると思っていたのだが、彼女はその話を断固として固辞する。ヴォルデの薫陶を受けた若手幹部達が泣訴するも意志は変わらず、会長の椅子は空席のまま数ヶ月が経過した。

一方、サントスは旧トーランド商事時代の側近らを動かして人事部に息をかけると同時に、経営者の血族世襲がいかに害悪であるかを、ほうぼうで唱え始める。セラの経営者としての素質を疑問視（時期尚早すぎる、という意味において）していたグループ会社社長連、それに経営幹部の一部が同調し、その流れはやがてサントスを会長後任に、という機運に発展していく。誰もが彼の功績を認めていたからである。唯一ヴォルデに近い立場と発言力をもちセラ擁立に賛成する人間としてステイケリア・アーヴィル重工社長イーファム・ヘッズマンがいたが、この時期彼は悪性の癌を患い闘病生活を余儀なくされていた。病床で話を耳にしたイーファムは激怒し

たが、手の施しようがない。回復に努めつつ、頹勢挽回の時を待つよりなかった。

その後多少の混乱はあったが、結局サントスはスティーリンググループ二代目会長に就任する。世間は彼がグループ内部で人望を集め推戴されたものと受け取ったが、何のことはない。会長後任人事のどさくさに紛れて会長の座を篡奪したまでの話である。

が、多くの社員達が危惧した通り、所詮サントスは巨大企業を統べる経営者の器ではなかった。

極端な外向主義者の彼は海外事業を偏重する一方、国内の中小グループ企業を次々と圧迫していく。寄せ集められるだけの資本を集約し、海外事業に投下しようと目論んだのである。強引という表現すら生易しいと思えるようなやり方にグループ会社はあちこちで悲鳴を上げ、事態はほとんど收拾が困難な状況に陥った。犠牲となったグループ会社の一つが、シヨーコ率いるStar-lineであるといったいい。

ヴォルデが予見した通り、サントスは自分の恩人である彼に何一つ感謝の念など持ち合わせていなかった。ヴォルデが高齢であることをいいことに、隙あらばその座を手中にしようと狙っていたのだ。

これは事実で、のち放胆にもサントス派を装って彼に近づき、スパイの役割を果たしたイゲルがサントス自身の口から聞いている。ヴォルデは甘い、食うか食われるかがビジネスの世界だ、と。

「——と、いうことです。彼はかなり早い段階から、グループ経営陣の中核に刺さり込んでやろうと企図していたのですよ。まったくとんでもない男です。自分がの上がることしか頭になかったんですから。大勢のグループ者員達が路頭に迷わされる訳ですよ」

ロットの話の途中、イゲルが憤慨しながら言った。

ただ、セラアはそうした事情についてまったく無知だった訳ではない。

あくまでも、ヴォルデの親族である自分が跡を襲うことなどあつてはならない、と思い続けてきたからこそ、一グループ会社の代表

取締役という立場に甘んじてきたのである。その結果、ステイラー
イングループは明日をも知れないまで経営が傾いてしまったのだが
――。

「まあ、そのあたりの話は、今はよろしいでしょう。彼の傍若無人
を止められなかった我々にも責任の一端はあるというものです。――
――それよりも、今回の我々の行動が決して背任にはあたらないとい
う根拠を、はっきりと理解していただくのが先決でしょう」

やや興奮気味なイゲルを宥めるようにしつつ、ロットは話を続け
る。

「実は、ほぼサントス派で占められていると思われた海外事業統括
部の中に良識人がおりまして、この人物が大手柄だったのですよ。
彼がいなければ、我々もこうして旗揚げすることは叶わなかった――
――」

会長サントスがほぼ強引に推し進めた、ナツシュ・マテリアル社
による地下資源開発プロジェクトへの巨額投資。

ここで、一人の人物が登場する。

イリオス・バドウ。四十を少し過ぎたばかりだが、その名はグル
ープ内部に広く知れ渡っている。

というのも、若くして頭角を現した彼はグループ経営推進部に籍
を置き、グループ会社経営安定のために奔走した経歴が長い。彼の
施した適切なサポートやコンサルタントによって窮地を脱したグル
ープ会社は少なくなかった。このため、多くのグループ会社がイリ
オスという男を信頼し、敬愛さえしていた。

しかし、イリオス自身は自らの功績を誇るということがなく、ど
ちらかといえば慎み深く目立つところの薄い人柄であった。もう少
し自己主張が強ければ、あるいはサントスを差し置いて会長に推戴
されていたかも知れない。こういう性格であったため、サントス派
経営陣から疎まれるようなこともなく、新体制移行後も彼はS C C
本体かそれに近い部署をあてがわれた。

ほどなく、イリオスに辞令が下る。

カイル・ヴァーレン共和国首都エル・ヴィド・ヴァーサルに事務所を構える海外事業統括部部长。事実上、海向この現地を仕切るトップである。

サントスの会長就任に伴い彼に近い連中はこぞってヴィルフエイト合衆国へ渡っていたため、その後釜ということらしかった。多少穿った見方をすれば、イリオスならばサントス派経営陣の忠実な手先となつて動くであろうと期待されたといえなくもない。

半月後、言われた通りにカイル・ヴァーレンへ渡航したイリオス。

しばらくというものの黙々と現地の業務を遂行していたが、ある日彼の元に親展で書面が届く。

差出人は会長サントスであつた。

『カイル政府肝入の地下資源開発プロジェクトに参画の方向で検討している。ついては、監督会社ナツシュ・マテリアル社との交渉と調整、ならびに開発予定地区の視察を早急に実施されたい』

要は、現地責任者として動いておけという指示である。

大掛かりなプロジェクトへ参入するにあたつて重要な役回りを与えられたことに、最初イリオスは素直に喜んだ。事が順調に運べば、カイル国内におけるSCCの事業シェアは大幅に拡大され、かつ収益率も飛躍的に高まるであろう。意気込んで行動を開始した。

しかし、内実は彼の期待を裏切るものであつた。

実際の開発事業に対してSCCが入り込む余地などなく、よくよく調べてみればSCCは単に巨額の開発資金を投資する、スポンサー程度の立場に過ぎない。カイル政府が躍起になつて行つた資金集めに、体よく乗せられただけの格好であつた。投資の見返りがどれほどのものであるのかもよくわからない。

半ば落胆したイリオス。

ここへきて彼は、SCCの将来に暗い予感を持った。

（なぜこんな収益性の薄いプロジェクトに巨額の投資などするのだらう？）これでは、国内資本を丸々海向こつへ放り投げるようなも

のじゃないか。ヴィルフリートではグループ会社が苦しい経営を迫られているというのに。会長はいつたい、何をお考えなのだ……」それでも担当者として責任だけは果たさねばなるまいと、彼はカイル北部の開発予定地区の視察に出かけた。手元には、ナツシュ・マテリアル社から入手した広域の図面がある。

地下資源開発とはどのつまり、大規模な地下鉱物採掘と云うていい。

予定地のほとんどは土着の地主が管理する土地である。カイル政府がそこを借り受け、鉱物の採掘量に応じパーセントかが時価換算で現金にて地権者に対して支払われるという契約になっている。SCCは採掘資金を出すだけだが、せめてその実効性だけでも調査しておくべきだと考え、イリオスははるばる辺境の地まで赴いたのである。

首都から数百キロ離れたその北部地域はアミュード・チェイン神治合州同盟の本拠地に近い。リン・ゼールなどテロ組織の人間が跋扈している地帯であり、非常に危険な場所でもあった。このため、イリオスはカイル国軍陸団北部方面部隊の兵士に交渉し、道案内と警護を引き受けてもらった。

国家の兵士といえども、金次第で動くのがカイルという土地柄である。

たつぷり報酬をもらった兵士は上機嫌で「どこへでも案内してやるよ。どこへ行きたいんだ？」と、ハンドルを握りながら尋ねてきた。この地区で生まれ育ったらしく、たいていの道ならわかる、と言う。

道路はほとんど舗装されておらず、しかも国軍が使っている車両も相当古い。後部座席のイリオスは何度も天井に頭をぶつけながら「助かるよ。行きたいのは、この地域なんだが……」

地図を差し出した。ナツシュ・マテリアル社の担当からもらったものである。

機嫌が良かった兵士は、その地図を見るなり露骨に眉をしかめ

「……あんだ、正気かい？ 何だつて、こんな所へ行こうとするんだ？ あんたが連れて行けと言っている場所がどこだか、わかってるのかい？」

妙な事を言う、とイリオスは思った。

確かに、これから向かう地域はテロリストがひしめく危険な地域であるということは、彼も十分承知している。そのために屈強な国軍陸団の兵士に同行してもらっているのだ。

すると、助手席に座っていたもう一人の兵士が苦笑しながら

「よせよせ、わからないから連れて行ってくれと言ってるんだよ。

——いいかい、あんだ？ この先、北西の一帯はあの凶暴なゴーザ派の連中がうようよしている地域だぜ。この地図に書き入れてある『パド・ルッタ・ハオライン』ってのはそのあたりの地主でさ、熱狂的なゴーザ派信者で後援者なんだよ。奴らが手にしている銃を買う金は、こいつの懐から出ているといってもいい。あんだは今、地獄のと真ん中へ連れて行ってくれと、俺達に頼んでいることになる」

「ああ、そういうことだ。あんたらの会社が出した金でカイルル政府はパドの土地をほじくり返すんだろが、結果的にそれはパドの財布を膨らまし、さらにはゴーザ派が高性能な武器を手に入れることになる。で、あんたらの国を襲うんだ。……いいのかい、それであんたらの政府は何も言わないのか？」

イリオスは驚愕した。

というよりも、激しい戦慄を禁じえなかった。

兵士達の言う通りならば、今SCCがやろうとしていることは間接的なテロ組織幫助ではないか。

しかも、よりによってその相手は世界でもっとも凶悪なゴーザ派ときた。

ナッシュ社が意図的にそう計画したのか、それとも偶然そうなったのかはわからない。ただ、この事実が世間に知れたが最後、SCCに未来がないことだけは確かであった。自分が知らないうちに、

事はあらぬ方向へと向かっていったのだ。業務指示を忠実に遂行しようとしていただけのイリオスとしては、恐怖せざるを得ない。

「そ、それはこのエリアだけなのか？ それとも――」

助手席の兵士は地図のあちこちを人差し指で叩きながら

「こことここ。ここもそうだ。……ああ、この地主もだ。こりゃ、ゴーザ派支援者の土地ばかりじゃないか。本当に、このまま先へ進むのかい？ どうする？」

念のためイリオスは、ゴーザ派ではないという地主の元へ案内してもらった。

顔が日焼けですつかり黒くなった老地主は話を聞くなり血相を変え「何？ そういうことだったのか！ ならば私は土地を貸さんぞ！ ゴーザ派の連中が何をやったか、お前にも見せてやろっじゃないか」

いきなり左腕をまくった。

やせ細った上腕に、かなり大きな傷の縫い跡が残っている。

息を飲んだイリオスに、老地主は

「奴らが金を無心にきたことがある。断った途端、ナイフでばっさり、さ。神に従わぬ者には罰を与えるなどとほざいておったが、聖なるアミュードはこんな真似などせんわい！ 聖典のどこに同胞をナイフで斬れなんて書いてある！？ どうだ、あんた？ これでも奴らに金を出すというのか？」

感情的にまくし立てた。

（そうか、そういうことだったのか……。私は危うく、テロリストに加担するところだった……）

激しい衝撃を受け、そのまま首都へ戻ったイリオス。

数日考えた末、ナッシュ・マテリアル社の担当に頼んで地主との契約書の写しを手に入れた。意図を悟られぬよう「本国の本社から確認のため契約書を寄越すように指示があつた」と言っておいた。その他幾つか証拠書類が揃った頃、本国へ極秘に連絡を入れた。相手はあのイーファム・ヘッズマンである。

調査した全容を伝えたうえで「このままではステイレーングループは瓦解します。どころか、国家公安機構の追及を受け、経営陣以下グループ会社も無事では済まないでしょう。私は何としてもそれだけは回避したいと思っています。サントス会長には何の恨みもないが、彼に舵取りを任せておけば取り返しのつかないことになる。どうか、ご助力を願いたいです」

ちらりとグループ会社社長や社員達の顔が脳裏を過ぎった。

必死の訴えに、イーファムは即座に快諾し

「いや、イリオス君、よくやってくれた。あと一步遅ければ、何千もの社員を路頭に迷わすところだった。こっちは志を分かった同志達が結集している。その書類を持ってエル・ヴィド・ヴァーサルを離れてもらえるかね？ 怪しまれぬよう、私の方で手を打っておく」

「ヴィルフエイトに戻れと仰るのですか？ それは構いませんが、業務に依らずして渡航するとなれば、本社や周囲から疑いの目で見られる可能性が……」

「だから、私の方で手を打っておくから心配ないよ。——それよりも、今日から自宅の荷物をまとめておいてくれ給え。君の奥さんには申し訳ないが、君達夫婦の身の安全を第一に考えた上での方法をとりたい。多少の不便をかけるが、決して悪いようにはしないよ。任せてもらっていい」

引越しの準備をしておけという。

イリオスは面食らったが、よくよく考えてみれば、これからやろうとしていることは立派なテロリスト対策なのだ。勘付かれてしまつたら、命はない。自分はまだしも、妻イルメシアにもしものことがあつては取り返しがつかない。彼女とは異動して間もなく知り合い、結婚した。イリオスは美しく聡明なイルメシアを心から愛しており、彼女もまた温和で物静かな夫をこの上なく慕っていた。

数日して、イリオスの元に一通の辞令が届いた。

『イリオス・バドウ、ステイケリア・アーヴィル重工出向を命ずる。』

取締役兼セカンドファクトリー副工場長の任を与える」

仰天したイリオス。

どんな魔法を使ったのか、イーファムはSCCをして公式に本国へ召還させるように謀ったのだ。

そして――

「ついさつき、イリオス氏がファー・レイメンティルに到着してまっすぐステイケリアのセカンドラボへ入られたと連絡がありました。もちろん、重要な書類を携えて、です」

リユードがにこやかに告げた。

彼等グループ再生派の計画は、そこまで綿密であった。

「そ、それでは……」

セレアの目が大きく見開かれている。

「お察しの通りですよ、セレアさん」

小型コンテナに腰掛けていたウオードが立ち上がった。

「我々はこれから、SCC経営陣に対して事実関係の究明を要求しに参ります。これだけ手持ちのカードが揃えば、サンテスに言い逃れる術などありません」

「そういうことで」一歩前に進み出たロツト。「この計画が成功したあかつきには、我々はグループ再生のために奔走しなければならぬ。それ以外に、衰退しきったステイレーンを救う方法がないのです。本音を言えば、あなたに三代目の会長をお願いしたいところだが、強い信念をお持ちである以上無理強いはできないと思っています。ゆえにご了解をいただければ幸いなのですが……」

柔和だった筈の彼の眼差しが瞬間、戦闘的に光った。

「――あなたの代わりとして、イリオス氏を会長に擁立することに、ご理解いただけますでしょうか？」

（イリオスさんを……か）

彼の人となりは、セレアもよく知っている。

才気溢れるようなタイプではないものの、イリオスの人望をもつてすればステイレーングループの立て直しもあるいは可能である

ような気がしなくもない。黙っていれば、グループはサンテス一派によって瓦解させられてしまう。選択肢は二つに一つもないのだ。ただ、ロットらのやり方が企業倫理的な観点からしてありなのかどうか、セレアには判断がつかなかった。企業経営とはどこまでもクリーンを保たねばならないと、彼女個人は思っている。

考えがまとまらぬまま、ぼんやりとテレビ画面を眺めているセレア。

Star-lineがなくなってしまった今、彼女を必要としているグループ会社はどこにもない。

ふと、シヨコ顔が思い浮かんだ。

（もしもロット社長達の思い通りに事が運べば、Star-lineを再組織できるのかしら？ 事実上はテロ組織に対抗するのも同義だし、警備専門チームの存在は必要になる筈だわ……）

最後の最後までStar-lineに尽くしてくれたシヨコを守ってやれなかったという自責の念がある。

イーファムの尽力によりステイケリア・アーヴィル重工に話がまとまりかけたのだが、シヨコは丁重に辞退した。

「あたしには、Star-lineしかなかったんです。それがなくなっちゃった以上、今はもうどういう情熱も持てない。同じCMDの仕事だからっていても、前向きにやっていける気がしないんです。折角のお話をホントに申し訳ないんですが、あたしは……」

そう言い残し、セレアの元を去って行ってしまった。

今頃彼女はもうしているのだろう。

最後の寂しそうな笑顔が浮かんできた途端、胸の奥がずきりと痛んだ。

（できることなら、どうにかしてあげたいんだけど……）

目線だけはテレビに向けられているものの、セレアの意識は全く別のところにあった。

と、その時である。

『臨時ニュースをお伝えします！ たった今入った情報ですが、N

地区にあるメディア・レイメンティル社社屋において爆発があった模様です！ 詳しいことはまだわかっていません。繰り返しますが、先ほど午前十時過ぎ、N地区にあるメディア・レイメンティル社社屋において――」

「……え？」

慌てたように口早に原稿を読み上げる女性キャスターの声に、セラアの意識はいきなり引き戻された。

彼女の瞬きが止まっている。

エドが駆けつけてみると、メディア・レイメンティル社付近の混乱は言語に絶していた。

同社が位置するO地区は都市中心部から近いということもあり、近代的な中高層ビルが立ち並ぶ、普段は閑静なオフィス街である。メインストリートも広く整備されているから、朝夕の退社時間帯を除けば繁華街のように人通りでこったがえすようなことはほとんどなかった。

が、今は違う。

メディア・レイメンティル社社屋を取り囲むようにして無数の警察機構車両や救急搬送車が乱雑に停められており、それらが規則的に放つ回転灯の赤い光がやたらと目に刺さる。社屋に面した通りは通行規制が布かれ、夥しい数の警察機構職員達が人や車両の進入を制している。張り巡らされた赤い立入禁止テープの向こう側には大勢の人だかりができ、背伸びをするようにして恐々と覗き込む者があちこちに見受けられた。

車道側から見れば、通りからやや引込んだような具合で七階建ての社屋がある。

一面ガラス張りという洒落たデザインの建物だったが、正面入り口付近が無残に吹き飛び、小型のCMDが堂々と入っていきそうな大穴が開いている。爆発が起こってから間もないせいか、辺りにはまだうつすらと煙が流れており、そのために肉眼で中の様子までは確認できない。

かなり遠くにまで四散しているガラス片や外壁の破片。爆破の凄まじさが知れるというものである。

たまたま通りかかった際にそれらを浴びてしまったのであろう、路上に倒れている者が何人かいる。灰色のアスファルトが鮮血に染まっており、余りにも生々しい。

急ぎ車から降りたエドは眼前に広がる地獄絵図に一瞬呆然としたが、すぐに社屋の方へと近寄って行った。まずは状況を確認しなければと思ったのである。

ちょうど反対側には、完全武装した警察機構特殊部隊が到着していた。隊列を組み、大型の硬化シールドを構えつつ社屋に突入しようとしている。

と、吹き飛んだ正面入り口に人影が現れた。

辺りに一瞬、緊張感が漂う。

「……た、助けてくれ！ 爆破にやられた！ 誰か、救急搬送車を——」

人影は、メディア・レイメンティル社員と思われる中年の男性であった。額から激しく血を流しており、頭を押さえるその腕もまた真っ赤になっている。足元がふらつき、今にも倒れそうになっている。

「しつかりしろ！ すぐに病院に連れて行くからな！ 気を確かに持つんだ！」

口々に叫びながら、特殊部隊の隊員達が駆け寄っていく。

男性は時を移さず運ばれてきた担架に乗せられ、そのまま救急搬送車に収容された。

彼だけではない、あちこちでそういう場面が展開されている。

これでは、まるで戦争じゃないか——エドは思った。

数限りない殺人現場を見てきた彼も、一度に多くの人々が無差別に傷つけられ、血を流しているという光景を目にするのは初めての経験であった。自然、戦慄を禁じ得ない。

それでも警察機構職員として何か働かねばならないとすぐに思い返したが、連続爆破の危険確認を行うべく特殊部隊が今まさに突入したばかりである。安全が確認されるまでの時間、エドに出来ることは何もなかった。彼の仕事はあくまでも犯人逮捕に向けた捜査だからである。

やむなく携帯端末を取り出し、メイファに電話をかけてみたエド。

彼女は本庁に残してきた。

爆破の一報を受ける直前、殺害されたケイの同僚と名乗る女性が助けを求めて駆け込んできたからその対応を任せただが——本音を言えば、メイファに死傷者が多数発生した爆破現場など見せたらどうなるかわからない、という理由の方が強い。捜査課長モルトも同じことを思っただのであらう、敢えてエド一人に対し

「エド君、すぐに〇地区へ向かってくれ給え。アンジェラなる女性からは、私とメイファ君で話を聞いておく。何かあったら、連絡を寄越すんだ。くれぐれも、無茶はしてくるなよ？」

そう指示した。

本庁を飛び出してからそれほど時間は経っていない。

ゆえにアンジェラからはまだどういう詳しい話も聞き出せていないであらうが、とりあえず様子だけでも聞いておこうと思ったのである。

『はい、メイファです』

「メイファ、エドだ。現場に到着したところだ。——アンジェラとかいう女性の様子はどうか？」

『あ、先輩！ どうもこうもないんですよ。会社が爆破されたって聞いた途端、すっかり怯えてしまって口も利けなくなっちゃったんです。課長とかサミーさんが対応していますけど、このままだと、ちよっと時間がかかるかも知れませんよ？』

そうだろう、エドは思った。

アンジェラが警察機構にケイの搜索願を出したのは、職場からである。

とすれば、その後彼女は何か身の危険を感じることがあり、職場を飛び出して警察機構本庁へ駆け込んできたと考えて間違いはない。それから間もなく職場が被害に遭ったことを思えば、身がすぐんでしまうのは当然であらう。あと一歩遅ければ、アンジェラもまたケイ同様殺害されていたかも知れないのだ。

恐らく、この爆破はアンジェラを狙ったものとみて外れではある

まい。さもなくば、メディア・レイメンティル社そのものに対する強烈な悪意ゆえの犯行か、どちらかであろう。

ただし現時点では犯人がケイやメディア・レイメンティル社を狙った理由が判然としていない。マスコミがテロリストの標的にされる場合、大抵は記事に対する遺恨か、あるいは不利益が生じる可能性のある記事を差し止めるよう脅迫しているとみていい。テロ組織がマスコミに対し直接的に金銭を要求するケースは従来皆無であり、さらにいえば事実を公表される恐れがある以上、恐喝する相手に選ぶべきではない。そういう時は、大手金融機関やメーカーを狙うのが常套なのだ。

（と、すればだ）

頭を忙しく回転させているエド。

アンジェラが喋れない以上、彼女から詳しい聞き取りはできない。しかしながら、捜査を有利に導く糸口ははつきり見えている。一刻も早く容疑者を特定するためには、今手につけられることをやっておいた方がよい。

どう伝えたものかと瞬時に事柄を整理しつつ

「メイファ、頼みがある」

『はい、先輩』

「直近に発行された分までの、メディア・レイメンティル誌を集めておいてもらいたい。で、その中からテロ組織とか犯罪組織に関連した記事がないかどうか、探しておいてくれ。庁舎内の資料室にも、過去のものが何冊か保管されている筈だ」

『あ、はい。わかりましたけど……』メイファはちよつと言ひ洩りつつ『資料室にない月のは、どうしたらいいんですか？ 書店にでも問い合わせればいいんでしょうか？』

「書店って、お前……」

月刊誌の類など、売れ残ったものはひと月と経たずして返品されるに決まっているではないか。

そのくらいの事もわからないのか、とつい怒鳴りそうになった。

が、今日の今で自分の神経も尋常でなくなっているのだと思い返し
「いいか、メイファ。まずはメディア・レイメンテイル誌の流通経
路を洗い。印刷会社から書店に流れるまでの間に通っている業者が
幾つかある筈だから、そこに問い合わせるんだ。爆破騒ぎさえなけ
れば、目の前のメディア・レイメンテイル本社に乗り込んで過去発
行分を全部閲覧させるところだったんだがな。この混乱じゃ、それ
も無理だろう」

口早に指示してやった。

やっと自分がやるべき捜査の段取りが理解できたらしく、メイフ
アは急に声を明るくして

「わかりました！　すぐにやってみます！」

「頼む。今、特殊部隊が本社内の安全確認にあたっているから、許
可が取れ次第俺も中を見させてもらう。課長にはそう報告しておい
てくれ」

電話をきった。

踵を返し社屋の方を見やったが、まだ目立った動きはない。

何か情報はないかと近くにいたＣブロック所轄の地区北署の職員
に話しかけてみたところ、現在進行中の安全確認作業について教え
てくれた。

中には多数の社員が残されているのだが、もし避難経路に爆発物
が残っていれば二次被害が発生してしまう。そのため、特殊部隊の
確認作業が終了するまでは迂闊に動かないよう、警察機構からメデ
イア・レイメンテイル社側へ連絡がなされていた。もともと、社屋
の普請自体は耐震構造で十分な強度が確保されているから、多少の
爆破くらいではびくともしない。

「……なるほど。それなら上層階にいる社員達の安全は問題なさそ
うですね」

エドが頷くと、中年のその職員は目線を社屋に向けたまま

「こそこそと爆弾仕掛けておいて爆破させるなんて、もはや時代遅
れもいいところですよ。頑丈な近代建築を破壊しようっていうんな

ら、C M Dとか大型作業車みたいなもので突っ込んでやらなくちゃ。巻き込まれた市民こそ気の毒だが、犯人も大したことはありませんなあ。いつまで同じ手口を繰り返すのやら」

呆れたような口ぶりで言った。正々堂々とやれ、とても言わんばかりである。

苦笑しかけ、慌てて顔の筋肉を引き締めたエド。事態が事態だけに、一瞬たりとも笑ったりする訳にはいかない。真面目な表情をつくろいつつ

「ま、実際にやられたらたまったものじゃありませんがね。C M Dなんかで突撃された日には」ピツと大穴の開いた正面入口を指し「あんなもので済まないでしょう。その昔、ジャック・フェインが都市統治機構本庁でC M Dに乗って暴れた時なんか、復旧に数ヶ月を要したっていいますしね」

「違いありません。私も、やや不謹慎だったかもしれませんがね」
中年の職員は軽く詫びた。が、エドにとってその発言にはもう、さして興味がない。

と、職員が腰のバンドにつけている携帯端末が静かに唸りだした。彼はバンドから外して耳に当て

「ボルソですが。……はい、現在南2 C 4 L、メディア・レイメンテイル社前にて待機中であります。はい、はい……え？ テック巡查ですか？ いえ、班が別ですので、今日はまだ……はい、はい」
エドはぼんやりと社屋の方を眺めているが、ボルソの声だけは耳に入ってくる。

どうやら、O地区北署に所属する巡查の所在がつかめないらしい（朝のこともあるし、とどめにこのドタバタだからO地区管轄の職員さんも大変だな——ん？ テック巡查？）

エドはふと思い出した。

今朝、ケイ・バレンシア殺害現場に出動してきていた巡查ではなかったか。

まだ三十歳になるかならないかという年の頃ながら、真面目そう

な男性であつた。今頃は件の捜査に追われてあちこち駆けずり回っているのかも知れない。

そんなことを思つた時である。

一人の男性が反対側から、群衆の立ち入りを止めている立入禁止テープをくぐつてメディア・レイメンティル社屋の方へと近づいていくのが見えた。

一瞬制止すべきだと思つたが、よく見れば衣装が警察機構職員のものである。

同社は安全確認中のため、半径数十メートルにわたつて特殊部隊以外は近寄れないことになっている。当然余計な人影などはなく、社屋前の四車線道路は掃いたように何も無い。

エドもまた万が一の事態を考慮して間隔を広くとつた位置にいる。そのため、入り込んできた職員の顔がよく見えなかったのだが――
「あ、あれ？　ちよつと、待つてください。あれ…… テック巡査じゃないか？」

電話中のボルソといった中年巡査が急に声を大きくした。遠目が利くらしく、社屋に近づこうとしている人物をテック巡査であると認めたようである。

「おい！　テック！　どこへ行くんだ！　そつちは今、立入禁止だぞ！」

聞こえていない筈はないのだが、テックらしい人物は歩みを止めようとしなない。

「――おい！　聞こえないのか！　テック！　近寄るんじゃない！　テック！」

懸命に怒鳴っているボルソ。

しかし、エドはその鋭い直感で、とうの昔に異変を察している。明らかに、目的の場所へ向かつて歩いている人間の足取りではない。

ややふらつくような、挙動不審の者によく見られる状態。しかも、制服の上着が全体的に不自然な膨らみ方をしている。

（こいつは——！）

思った瞬間、反射的に身体が動き、地を蹴って走り出していた。テックのすぐ近くには、待機している機動課特殊部隊の人数がいる。

彼等も一様に不可解な顔をしているが、相手が警察機構の人間であるせいか、制止するのを躊躇っているようである。

「その機動課！ そいつから離れるんだ！ その男は——」

まだ言い終わらぬうちに、つとテックの足が停まった。

次の瞬間エドは、轟音と共にテックの首が宙に高く跳ね上がっていくのを見た。

足元に落ちていた空き缶を拾い上げ、片手に提げている大きなゴミ袋の中へ放り込む。

そこでふと、レヴォスは顔を上げた。

本来美しかるべき公園の芝生だが、数もわからぬくらいのゴミが酷たらしいほど散乱している。全部拾い終わる頃には日がとっぷり暮れているであろう。

（本当にこれを全部回収するつもりなのか……？）

軽く目眩がしたが、少し離れた位置でやはり同じ作業に従事している老婆の姿を目にすると、文句を言う気も失せてしまった。幅広な歩道の清掃を受け持っているその老婆はゴミを拾うだけでなく、行き交う通行人一人一人に「ご苦勞様でございます」と丁寧に頭を下げている。ほとんどの通行人が一瞬不思議そうな顔をするものの、彼女の姿を一目見るなり納得したような表情を浮かべていくのだった。

作業着のような衣服の上から、真っ白なショール——アミュード・レア・ニステイ会員の証——を肩に羽織っている。その認知度は驚くべきものがあり、この都市の誰もが同会がいかなる活動を行っているのか、よく知っていた。同じアミュード組織に身を置いていた

レヴォスといえども、さすがにレア・ニステイがここまでの発展を遂げているとは予想もしていなかった。

（しかし、変われば変わるものだ。数年前にはアミュードとついただけで世界中から諸悪の根源のように忌み嫌われたものだったが……）

今昔の思いがせぬでもない。

が、正確には時代が変化したというよりも、レヴォスの潜伏生活が長すぎた、といった方が正しいのかも知れなかった。

——彼がアミュード・レア・ニステイ会員の身分を借用してヴィルフェイト合衆国ファー・レイメンティル州に渡ってきたのは二日前のことである。

イルメシアに渡航の話を持ちかけられてから数日後の深夜、突然彼女が病院を訪れてきた。

気配に気付いて飛び起きたレヴォスに、イルメシアは悪戯っぽい笑みを見せて

「ゴーザ派じゃありませんわ。私です、イルメシア。ご安心なさって」

湿り気を帯びた独特の美しい声でそつと囁いた。

レヴォスはホツとして

「あなたでしたか。しかし、こんな時間にどうしたんです？」

「昼間では人の目につきやすいかと思ひまして。お休みしていたところ申し訳ありませんが、今から私と一緒においで下さいな。——

病院ですか？ ええ、こつそり院長さんとお話はつけてありますからご心配なく。荷物の一式はあとで夫が取りに参りますわ」

くすくす笑っている。密かにこの企てを楽しんでいるらしい。

なんとも用意周到なことだと思つたが、よくよく考えてみれば彼女の言い分は正しい。

白昼堂々顔を晒してこの一帯をのし歩けば、いつゴーザ派の連中に見つかつて襲われなとも限らない。別に戦つて殺し合つても構わないのだが、それでは目の前にいる親切な婦人、それにその夫と

いう人物に取り返しが付かない迷惑をかけてしまう。彼等に危害が及ぶような事態だけは、命に代えても避けねばならないと思う。

「わかりました。今は、あなた方に従います」

イルメシアは彼のために衣服を持参してきてくれていた。

それに着替えると、盗賊のように足音を忍ばせつつスティア病院を後にした。

宙天に月はない。

街自体国土の僻地に近いから、もう長い間ろくに開発の手が入っておらず、街灯すら設置されていなかった。ゆえに下界は一面闇の世界であつたが、目が慣れていくレヴォスにとっては何でもない。こうなると、却ってイルメシアの足取りの方が覚束ないのであつた。やむなく彼女の手を取って引いてやりつつ

「……どちらへ？ 私は夜目が利く。足元がよくないですから、誘導します」

告げると、イルメシアは闇の中できやつと少女のような声を上げて笑った。

「あら、なんだか駆け落ちするみたいですね。ちよつとだけ、ドキキしましたわ。夫に怒られてしまいかも知れませんが」

「それで、方角はどちらへ？」

「南側へ二キロほどですの。古い二階建てで、ヨーフランセ協会と看板のかかった建物がありますから、そこへお願いします。さつきも病院へたどり着くのに一時間以上かかってしまいました」

そうだろう、レヴォスは思った。

かつては石畳が敷かれていたようだが、周辺の砂漠から吹き付けられる砂が年々堆積したらしく、今では車の走行にも適さないような状態になっている。迂闊に歩を進めれば、足を取られて転倒してしまうであろう。しかもイルメシアはメッテルというこの地方独特の履き物を履いているようなのだが、形状はほとんどサンダルといてもいい。こんなものを履いて二キロもの距離を歩いてきたのかと、呆れるような思いがしたレヴォス。もつとも、この地方の女

性は裸足同然でどこまでも歩くから健脚かつ美脚が多い。逆に、余分な肉付きのある女性働いていない、あるいは怠け者であるとして低く見られたりする。

焼けるように暑い日中とは違って変わり、夜の空気がひんやりと冷たい。涼しいというよりもむしろ寒かった。

不必要に広い通りの左右には、背の低い朽ちた建物が続いている。時間が時間だからどの建物にも明かりや人の気配などはない。

街全体が息を潜めてしまったように沈黙に包まれていた。

夜目が利くレヴオスは一軒一軒に細心の注意を払いながら歩いていく。ゴーザ派など過激派武装組織の連中が目を光らせていないとも限らないからである。手を引かれつつ背後に行くイルメシアがそんな彼の気遣いなど知る由もないのだが、知れば手放して喜ぶであろう。彼女にとってこれ以上の護衛はない。

五感を鋭敏に研ぎ澄ませているものの、どこにも邪な気配など感じられない。

やや安堵しかけたレヴオスは、かねて抱いていた疑問を口にした。

「……イルメシアさん。ひとつだけ、伺っておきたいのですが」

「はい。なんででしょう？」

返事をした彼女の声の調子は、歌うように朗らかである。

「首尾良くファー・レイメンティルに渡航できたとして、そこで私は何をすればよいのでしょうか？　ご一緒させてもらえるのはとても有り難いと思っているが、かといって目的もなく無為に日を消すような毎日など、私には耐えられない」

正直な気持ちであった。脳裏に、無念の死を遂げた同志達、それにケレナの姿がある。

が、イルメシアは事も無げに

「あら、願うことは山ほどありましてよ？　ご心配には及びませんわ」

「山ほど？」

「ええ、山ほど」

何が山ほどなのかと思ったが、その時はそれきり質問しなかった。アミュード・レア・ニステイの活動であるからには、慈善活動に関する事なのだろうと察しはついていたからだ。

そうしてファー・レイメンティルに着いてから知らされたのだが「山ほど」とあるという作業の一つがこのゴミ拾いだった。

朝、指定されたS地区の中央公園へ赴いてみると白いシヨールをまとった女性が大勢集まっており、陽気に喋ったりして笑いさざめている。一団には男性も混じっているが人数は僅かで、しかも老人ばかりであった。レヴォスもそうだが、男性はシヨールの変わりに左腕に白いバンダナを巻きつけている。

まだ相応に若いレヴォスの姿を見るなり、女性達は老いも若きも嬌声を上げ

「まあ！　こんなに素敵なお男性がいたのね！　知らなかったわあ」

「あなた、新入会者の方ね？　レア・ニステイによくきてくれたわねえ。聖なるアミュードもお喜びになっているわよ。一緒に頑張りましょうね？」

口々に声をかけてくれた。皆、えらく好意的である。

「は、はあ……」

思い切り戸惑ったレヴォス。

生まれてこの方、こんなにも陽気で朗らかな集団に囲まれたことなど一度もなかったからである。女性達からあれこれと質問攻めに遭ったが、しかし誰も彼の素性について尋ねようとしない。一瞬奇異な感じがしたが、レヴォスはすぐに勘付いていた。

この場にいる人々の多くが、恐らくは複雑な事情を抱えているのだろう――と。

各々の過去や素性に触れること自体タブーであるという訳ではあるまい。

が、そういうふうにもならないことを気にするよりも、自分達の信じる神のために働くことこそ無情の喜びであるととらえ、日々互いに励ましあいながら行動する。いわば、未来に目を向けつつ自分

達の出来る範囲で現実を変えていこうという前進主義者の集団であるといっている。

ほどなく、イルメシアが姿を現した。

彼女はレヴオスを見つけると子犬のように走り寄って来て

「おはようございます。朝からお疲れ様ですね。今日も一日頑張りますよね？」

人懐こい笑顔を見せた。

「はあ。……それで一体、今から何を？」

「これをお渡しいたします」

軍手と透明なゴミ袋の束を差し出した。

——ゴミ袋？

固まっているレヴオスにイルメシアは

「あなたにお願いする最初の活動はこの中央公園の清掃ですね。市民の皆さんが憩う場所だというのに、このように」片手で付近をぐるつと示し「ゴミや吸殻が散乱していて酷い状態です。都市統治機構地区統括支所にも苦情が多いのだそうです。それならば、私達でも力になれると思ひまして」

そうすることがさも当然であるかのように言った。

「……」

返す言葉もない。

神の名を借りて殺戮に明け暮れている連中がいる一方、神の名を高からしめんとやらでも地域清掃に励んでいる人々がいる。公園を清掃したところで団体表彰されるでもなし、しかも無償どころか処分のための経費までかかるというのにだ。

呆れるような思いがしたが、周囲の人々を見ればいかにも楽しそうである。

「さあ、綺麗にするわよ！ 明日から朝のウォーキングが楽しみだわあ」

「本当にそうね。汚れたままにしておくからいけないのよ。綺麗にしたほうが、却ってゴミなんか捨てなくなるのよね。人間の心理っ

て面白いわね」

そういう女性達の様子を眺めているうち——妙なことに——レヴォスは「まあいいか」と思い直している自分に気がついた。集団心理といったものなのかどうか、どうやら取り巻いている空気に自然と馴染みつつあるではないか。

そういう己の心の変化に加えてもう一つ、レヴォスを驚かせたことがある。

頃はよし、とみたイルメシアが

「はい、それでは皆さん、ご注目願いまーす！」

一団に向かって大声で呼びかけた。

すると、ざっと五十名以上いる会員達はぴたりと私語をやめて彼女の方に向き直った。

「おはようございます！ 私、本日からS地区地区長を務めさせていただきます！ 先日は、イルメシア・バドウと申します。先日、カイル・ヴァーレンから参りました。どうぞ、よろしくお願いします」

挨拶すると、彼女をぐるりと取り囲んでいる会員達が一斉に拍手を送った。

前の方にいた一人の中年婦人が

「あらあ、遠いお国からはるばる、ようこそいらっしゃいました。イルメシアさんのような若くて元気な方を遣わしてくださるなんて聖なるアミュードはなんてお優しいのでしょうか！ 私達も元気になりますわ。これからよろしくお願いしますね？」

声をかけた。

すると、他の会員達は誰もが心底同調しているかのようにこここで大きく頷いている。とても世辞や愛想には思われない。輪の後方に立っているレヴォスはほう、とつい感心していた。

イルメシアはにこにこしながら

「本日、ここに新入会の方がいらっしゃいます。私と同じく、カイル・ヴァーレンからおいになったレヴォス・ラーンさんです。」

皆さん、温かく迎えてあげましょう！」

いきなり振ってきた。

誰のことなのかすでにわかっている女性達が、ほとんど同時にレヴオスに目線を送る。突然注目を浴びる羽目になり呆然と突っ立っている

「テイバース、アル、ダウラ、リド、ラ、ジア、アミュード！」

合唱のように全員が声を合わせ、そう唱えた。

アミュード教発祥の地で生まれ育ったレヴオスにはその言葉の意味がわかっている。

聖なるアミュードの元に馳せ参じた心良き友に、大いなる祝福を——と言っているのだ。世界公用語が普及した現代ではほとんど死滅しつつある、古代アミュード原語である。それを、これだけの人数が澱みなく発せるといふ事実自体、奇跡といってもいい。単に暗証しているだけでなく、使い慣れていなければそうそう発音できる言語ではないからだ。

歓迎の言葉をかけ終えると、再び大きな拍手が鳴り響いた。

どの顔にも好意的な笑みが浮かんでいる。

驚くやら照れくさいやら、レヴオスはただただ頭を下げているようない。

「では皆さん、本日の活動について、お伝えさせていただきます——」

作業の段取りや各自の担当範囲について説明し始めたイルメシア。人懐こい口調ですらすらと説明を加えていく彼女の姿を目にしたレヴオスは、やはりそうだったか、と独り納得していた。

イルメシアはまだ若い身ながらも、レア・ニステイ組織内に大きな存在感を有している。

最初にそのことに気付いたのは、スティーア病院から抜け出した例の日である。

——ヨーフランセ協会なる看板のかかった建物に無事辿り着いた彼は、夜明けと共にイルメシアの夫・イリオスが運転する大型トラ

ツクに同乗し、カイルル・ヴァーレン共和国西部にある大きな港町へ向かった。サバナグ・ローティというその街は早くから交易によって栄え、今ではカイルル国内第二の都市といってもいい程の規模を誇っている。

そこから海路ヴィルフエイトへ渡るのかと思ったが、案に相違した。

「ちよつと遠回りになりますけど、一度この街へ入った方がいいと夫の会社から指示がありました。夫は会社の命で帰国するんですが、そのことを快く思わない方達がいいますのね。そうしたら、会社のさる上役の方が、サバナグ経由でエル・ヴィド・ヴァーサルに入った方が撒きやすいでしょうってわざわざ考えてくださったんです。一度サバナグへ潜り込んでしまえば、例え現認されたとしてもすぐに目を欺けるという理由のようですけど」

トラック後部座席のシートにもたれかかりながら、なるほど、とレヴォスは思った。

二千五百万人という巨大人口を抱えるサバナグは世界でもっとも交通網が発達した都市であり、首都エル・ヴィド・ヴァーサル直通の高速鉄道もある。人ごみに紛れたまま秘かに列車に乗ってしまえば、サバナグを出たことすら気付かれない可能性が高い。

ステイーレインの内部にはなかなか味な策略を思いつく者がいるらしい。

独り可笑しがっていると、

「……ですが、理由はもう一つありますの。あなたにとってはむしろ、そちらの方が大切な事なのかも知れませんが」

助手席のイルメシアが振り向きざまそんな事を言った。

「私に大切な事……？」

訝しげな表情をしたレヴォス。かつてジャック・フェインの活動が活発だった頃はサバナグにも幾つか拠点を構えていたものだが、今となつては旧知の者もなく、心当たりなどない。

と、イルメシアの眼差しが俄かに深くなり

「ええ、とてもとても、大切なことですの。今回は本当にタイミングが良かったですね。あと数日ずれていたら、上手くいかなかったんですもの。——今日はこれからまず、真っ直ぐにその場所へご案内します。今晚泊まるホテルへはその後向かうことにしましょう」

落日編 11 邂逅

巨大な港湾都市・サバナグ。

カイレル・ヴァーレン共和国首都エル・ヴィド・ヴァーサル
の北西に位置し、都市間の距離はおよそ二百キロほど離れている。

版図にすれば都市の西側は南北に中立海峡が横たわっており、海
向こうへ渡ればそこはもうヴィルフエイト合衆国である。高速船な
らば半日程度で着いてしまうほど、両国の位置は近い。

街並みに目を転じれば、ジャック・フェインが本拠としていた地
区、あるいはレヴォスが療養していた街などとは隔世の差がある。

見渡す限り現代風建築のビルが無数に林立し、その谷間を縫うよう
にして空中軌道交通システムや高規格道路が網の目よろしく張り巡
らされている。足元には計画的に整備されたグリーンベルト、広域
緑地帯がそこかしこに目立つ一方、水運で栄えた都市らしく人工河
川が街中に走っている。水の街、といってもいいかも知れない。

サバナグ中心部に入ると、イリオスは一軒の小さなカフェの前で
トラックを停めた。

周囲を高層ビルと高速道路に囲まれ、それらによって天を遮られ
ているため日当たりが悪い。カフェの建物自体大分古びていて壁な
どもすっかりくすんでいるのだが、それでも眺望だけは良さそうで
あった。カフェの向こう側は幾つかの人工河川が合流するポイント
らしく船舶がしきりに往来し、目線をその向こう側へやればほど近
い位置に港湾の中央ターミナルが見える。沿岸部は特に景觀に配慮
されているのか、どの建築物の外装も工業的な無愛想さなどなく、
むしろ絵画にしたいくなるようなノスタルジックな雰囲気をもし出
している。それが大きな海、そして青い空とよくマッチしているで
はないか。

トラックから降り立つと、潮の香りがふわりと柔らかい。

港湾部ではどちらかといえば磯臭さが鼻を突くものだが、巨大な

緑地帯の植物達がそれを緩和しているのであろう。風向きが変わった途端、たちまち潮から森の匂いに变化した。

レヴォスは周囲の光景をしげしげと眺めながら

（しかし、しばらく見ないうちに随分発展を遂げたものだ。最後にこの街へ来たのはいつだったろうか……）

記憶を辿ろうとしたが、思い出すことができない。この数年間というもの、あまりにも多くの出来事があり過ぎたせいかも知れない。代わりに恩師・ウイグの笑顔が脳裏を過ぎり、胸の奥がずきりと痛んだ。

「長旅、お疲れ様でした。ここの用件が終わればすぐホテルへ参りますからね。今日の宿はワールド・スタンダードでファーストランクのホテルですよ！」

カフェの入り口前に立つイルメシアに呼びかけられた。

ハツと我に返ったレヴォスは彼女の方へ歩み寄って行きつつ

「別に私は、小さなビジネスホテルでよい。華美なホテルというのは、どうも性に合わないのです」

「よいではありませんか。大きくてサービスの良いホテルに泊まれば、心身ともに癒されると思いますの。昨日までは小さな病室にいらっしやっただからです。——それに」

他愛もない悪戯をした幼い少女のような笑みを見せ「……私も、そのようなホテルに泊まるのは初めてですの。だから、とても楽しみなのですわ」

「……」

ならば仕方あるまい、とレヴォスは納得した。この若く美しい婦人は恐らく、そういう豪華な旅行などした経験がないに違いないと思った。地方のアミュード教徒、特に女性にはそういう者が多い。ほとんどが持たざる者——経済的貧困層民——にカテゴリされるのが大きな理由であり、ファーストランクのホテルどころか一度も土地を離れることなく一生を終える人間も少なくない。

つと傍らの古い建物へ視線を向け

「私の用事というのは、このカフェなのですか？」

尋ねると、イルメシアはゆったりと頷き

「ええ。お入りになれば、全ておわかりになります。席はそうすわね……一番奥がいいのではないかしら？ シェムレット川を通る船がよく見えますのよ。私が大好きな席ですの」

彼女は以前訪れたことがあるらしい。

その説明だけでは何の意味があるのかよくわからなかったが、レヴオスに他意はない。言われるがまま、カフェの中へ入ろうと思っただけである。

コンクリートを固めただけの踏み段に上がり錆の浮いたドアの取っ手に手をかけようとする

「一時間ほどしましたら、またお迎えに上がりますわ！　しばらく海を見ていなかったものですから、海の方へ行つて参ります！　今日は晴れていて良かった！」

はしゃぐように言つて、トラックの助手席に乗り込んだイルメシア。

ヴォン、とトラックのエンジンが唸り、ハンドルを握っているイリオスが「行つて来ます」というように笑顔で手を上げた。そうしてトラックは海岸の方へ走り去つて行く。すぐに車影は遠くの角を曲がつて見えなくなった。

見送つたレヴオスは、そろつとカフェの中へ足を踏み入れた。

中は暗い。

全体的にブラウンの色調で統一されており、年数を経た木材部分が味のあるレトロな雰囲気と匂いを放っている。外観とは打つて変わり、思いのほかお洒落な内装であることにちよつと驚いたレヴオス。チェアやテーブル、その他調度品の一つ一つに品がある。あたかも、空間そのものがコーディネートされているといえるかも知れない。

入り口の正面に小さなカウンターがあり、左手が客席である。カウンターの通路を挟んだ壁側には背の低い棚が置かれ、品の良いコ

ーヒーカップが幾つか、出番を待つように並べられている。

ふと奥へ目をやればなるほど、イルメシアが言ったように大きな窓際の席が設けられているではないか。窓の向こうはすぐ河だから、まるで水上に浮いているような感じがしなくもない。

他に客の姿はなかった。

というよりも、さつきから観察しているとどうもこの辺りの区域には商業施設が一軒もないらしい。そのせいか、まるで人影を見ないのである。車両の一台すら通行しない。もつとも、頭の上の高速道路になら無数に走っているであろう。下界——天空へと伸びた大都市の足元のことを、多くの人はそう呼ぶ——もこれだけ整備されているにも関わらず、非常にもつたいたないように思われてならない。市民達は税金を無駄遣いするなと騒がないのであろうか。

ちよつと迷つてから、道路側のもつとも暗い位置にあるチェアに腰を下ろしたレヴオス。

ジャック・フェイン時代に身についた用心深さが心身の奥深くまで沁み込んでいて抜けそうもない。どうしても、窓際は危険だと思つてしまうのだ。ただ、折角勧めてくれたイルメシアに悪いと思い、向きだけは河が見えるようにした。つまり、道路に背を向けて座っている。本音を言えば、それですら落ち着かないのだが——。

ふとテーブルに視線を落とすと、天板の上はキズ一つない。窓から差し込む陽光をそのまま反射してしまうほどに美しく、丁寧に磨きこまれていた。

何かオーダーしなければならなかったが、メニューらしきものがどこにもない。

が、よくよく考えてみれば金銭など全く持っていなかった。アジトを襲撃されて負傷し、そのまま病院へ担ぎ込まれて今に至る訳だから、金銭どころか自分の持ち物は一つない。今身に着けている衣服としてイルメシアが用意してくれたものである。失つて困る物はこれといってなかったが、強いて挙げれば愛用していた拳銃だけはやや悔やまれる。それに恩師ウィグ、恋人ケレナと共に三人で撮つ

た写真が一枚。あれだけは、この世界のどこを探そうとも戻ってこないのだ。

誰か店員はいないものかと、カウンターの方を見やった。

すると、河寄りに取り付けられている木製のドアが音もなく開き

——小さな老婆が一人、出てきた。

長い白髪を背中の一つに束ねている。相好には歳相応に深いシワが何本も刻まれ、日焼けなのか肌が人並み以上に黒い。ただし目じりが物柔らかに軽く垂れ、小さな口元は品良く結ばれているから、温和、あるいは高貴といった印象をレヴオスは受けた。

背が低いためカウンターの陰になつてよく見えなかったものの、ファンジエという女性アミュード教徒がよく着用する衣装をまとっているらしい。上下に分かれていて、前をボタンではなくバスローブのように重ね、上からレビなる帯状のもので結ぶのである。アミュードでは過度な派手さは忌まれるため、女性達はファンジエとレビの色の組み合わせによってのみ、お洒落を楽しむしかない。老婆のそれは地味なダークグリーンであった。

ただ、老婆は肩から純白のショールをかけている。レア・ニステイ会員らしい。

メニユーは、と声を出しかけて、そのまま停止しているレヴオス。特に理由はないのだが、瞬間的に、余計な事を話しかけてはいけないような気がしたのだ。

彼女が放つ不思議な雰囲気呑まれたせいかも知れない。

どこにでもいそうなアミュード教徒の老女だというのに、侵し難い奇妙な徳のようなものを漂わせている。仮に頭の狂ったゴーザ派の連中が飛び込んできても、彼女に向かってトリガーを引く事は躊躇われるであろう。良い例えではないが、そういう空気である。

その老婆。

レヴオスに軽く会釈したあと、ポットを火にかけてお湯を沸かし始めた。

煮立つまでの間、ゆっくりとした手つきでフィルターに茶葉を詰

め、糸で結んだ。次にカップと皿を用意し、煮立ちきる前のお湯を注ぎ込み茶葉の詰まったフィルターを浸ける。片手で糸をつまみ十ばかり数えてからそろりと引き上げる。湯気と共に、香ばしいお茶の香りがツンとレヴォオスの鼻孔を刺激した。

どこかで嗅いだ事のある香りだったが、茶の類に詳しくない彼には銘柄などわからない。

それをトレイに乗せて運んできた老婆。

レヴォオスの前に静かに置き「……どうぞ、お召し上がりください。ノース・レム西部コロイア・ナック産のミサミ茶でございます。香ばしい風味の中に漂う微かな甘みが特長ですが、お口に合うか、どうか」

勧めてくれた。

物言いに、王族出身かと思ってしまうような気品が溢れている。

一瞬、レヴォオスは呆氣に取られたが、つと我に返り

「ありがとうございます。……しかし、今私は一銭も持ち合わせがない。このお茶をいただいても、代金を支払えないのです」
そう言っただけでは不十分だと思い

「このカフェには、その、知人に来るように言われたので来たのです。ですから、何がなんだかわかっていないのです。お客でなくて、非常に申し訳なく思っています」

付け加えた。

が、老婆はにっこりと穏やかな微笑みを見せ

「いいえ、そのお茶は是非、あなたに飲んでいただきたくてお出ししたのです。お代など、とんでもありません。——さ、冷めないうちにお召し上がりくださいませ。温かいお茶は身と心を内側から癒してくれる効果がありますよ。私はいつも、一息つきたいときはまずお茶をいただくのです」

「はあ。……では」

勧められるままカップを手に取り、一口すすってみた。

老婆が説明してくれた通り、茶葉を軽く煎っているのか鼻の奥を

ずっと撫でるような風味の主張があり、あとからじんわりとしたほのかな甘さが舌全体を包み込む。それでいて、どこにもしつこさがない。確かに、思わず「ああ」と声を出してしまいそうになる。

つと老婆の方へ目をやると、彼女は数歩離れた位置に立って好意的な微笑を向けてくれていた。

レヴォスはカップを皿に戻しながら

「仰る通り、とても美味しく感じました。このように上品なお茶を味わったのはすごく久しぶりのことです。有り難く思います」

丁寧に礼を述べた。

「それはようございました。ミサミ茶をお出しするか、それともカナハ・ティーにしようかと考えていたのです。若い方なのでサンテロ・モカというコーヒーが良いかとも思ったのですが、ミサミ茶で正しかったようですね」

相手を見て出すものを選んだという。

初めに顔を合わせてから茶の準備をするまで、三十秒と経っていなかった筈ではないか。

これはいよいよただならぬ人物だと直感がレヴォスにそう告げている。一介のレア・ニステイ信者であるにしては、あまりにも雰囲気の違いすぎる。

彼は背筋を伸ばして姿勢をあらため

「……大変失礼ながら、お伺いしたいのです。私がここへ連れて来られたのには、何か理由があったのでしょうか？ あなたはレア・ニステイの方で、私をここへ連れてきた人もレア・ニステイだ。そしてその方は先日、私にレア・ニステイに入会するように言った。私が今ここにいることとそのことは、何か関係があるのでしょうか？ あなたに尋ねていいものかどうか、わからないけれども」

思った通りをそのまま口に出しているから、上手くまとまらない。要は、ここがレア・ニステイの活動拠点で自分は入会審査でもされるのか、と訊いている。

問われた老婆は、カウンターのの上にトレイを置き、ゆっくりレヴ

オスの方へ向き直ると

「……あなたはジャック・フェインにいらっしやったレヴォス・ラインさんでしょう？　もし、間違っていたら大変申し訳ないのですが」

微笑と共に言った。

「……！？」

身体全体で驚いているレヴォス。

いつの間に、そんな情報が伝わっていたのか。

その疑問を発する前に、老婆が口を開いていた。

「驚かせてしまったのなら、御免なさいね。あなたのお兄さんはマデイス・ラインさんとおっしゃって、同じくジャック・フェインに入っていらっしやった。私は昔、孫のイオッソから聞いたことがございます」

「……」

そういうことが、とレヴォスは納得がいった。

確かに兄・マデイスはかつてジャック・フェインメンバーだったが、十年前、ヴィルフリート合衆国ファー・レイメンティル州D地区にて勃発したD・ブレイク事件——別名、第一次ジャック・フェイン事件——に巻き込まれ、リーダーのウイグを庇って闘死した。同時期のメンバーに、マデイスより幾つか年上のイオッソなる青年がいたことも、レヴォスの記憶にはある。イオッソもまたマデイスの後を追うようにして、治安維持機構部隊の放った銃弾に斃れたという。

彼とは一度だけ会ったことがある。レヴォスが十八歳の時だった。アミュード・チェイン神治合州同盟勢力地域にあつてテロ組織リン・ゼールに加盟し、ゲリラ戦闘員として各地を転戦していたその最中、たまたまヴィルフリートから帰還してきていたマデイス、それにイオッソと出くわしたのだ。戦闘が休止状態にあつたから、レヴォスは二人と共に数日を過ごすことができた。

ジャック・フェインの中心メンバーとして活躍していた二人は最

近の情勢や今後の活動について語ったあと、リーダーであるウイグ・ベーズマンのことを話し始めた。

その口振りは心酔といってもよく、盛んにウイグを激賞した。聞いているうちに自分もジャック・フェインに入りたいと思ったレヴォスだったが、同組織はリン・ゼールの中でも特に卓抜した身体能力や技術を持つ者しか加盟が認められていない。だから到底無理だという意味の言葉を吐くと、イオツソが彼の肩を叩き

「やりもしないうちに諦めてどうする。君には幅広く戦局を捉えることが出来る視野と、そこから攻勢をかけていくための作戦を立案できる能力があるじゃないか。ジャック・フェインには凄い連中が山ほどいるが、レヴォス君のように緻密な作戦計画を立案できる人間は皆無といっている。俺達はまた海向こうでひと暴れしてくるが、ウイグさんには君のことを話しておくよ。あの人は素晴らしい人なんだが、どこか適當すぎる場所があつていけない。だから、君の力が必要だと思う。……なあ、マデイス？」

大いに励ましてくれた。

そう口で言うほど簡単なことではあるまいと思ったが、それでもイオツソが全力で激励してくれたのは嬉しかった。何度も言われているうちに、ひよっとすると選抜審査を受けてもいいかも知れないと思い始めたりした。

それからほどなく、イオツソとマデイスは再びヴィルフエイトへと渡って行ったが——レヴォスにとって、それが二人を見た最後となった。

一年経たぬうちに例の第一次ジャック・フェイン事件が起こり、そこで二人は落命してしまったからである。

たった一人の家族を喪い、激しく悲嘆したレヴォス。

ただ、マデイスとイオツソは彼に新たな縁を遺してくれていた。治安維持機構の包囲を破ったウイグは単身、満身創痍になりながらアミュード・チェインへ逃れてきた。傷を癒すと同時にジャック・フェインの立て直しを開始したのだが、一報を耳にしたレヴォスは

矢も盾もたまらずメンバー選抜審査に手を上げた。幾つかのテストを受け、運動能力では他者よりやや劣ったものの、彼の冷静で緻密な分析能力が高く評価され、レヴォスは念願叶ってジャック・フェインメンバーになることができた。このあたり、死んだイオッソの予想通りになったといっている。

ウイグ復帰後初の全員召集があり、そこでレヴォスを一目見た彼は「そうか。君が、マデイス君の弟さんか……」

呟くように言っただけ、ただただ落涙している。その場はそれだけだったが、一メンバーに過ぎなかった兄のために涙をこぼしているウイグの姿に、マデイスやイオッソが彼を激賞していた意味がわかったレヴォス。この人のためなら、確かに死ぬるかも知れないと独り納得した。ジャック・フェインへの入隊を果たして良かったと思う一方、兄の戦死という事実が悲嘆から誇りへと変化していた。

その後ウイグは何かとレヴォスを目にかけてくれたが、どうやらマデイスやイオッソがくれぐれもよろしくと頼み込んで死んでいっただけの話、様々な方面から耳にした。

といって、彼等の口利きとウイグの罪悪感だけで今の状況が出来上がった訳ではないと、レヴォスは思っていた。最終的にジャック・フェインメンバーの座をつかみとったのは自分自身なのだ。ただ、それを後ろから支える機縁を遣してくれた兄やイオッソに感謝するだけのことである。

そのイオッソ。

今日の前にいる老婆の孫だったという。

「あの子が亡くなる半年前のことでした。ヴィルフリートから手紙をくれたのです。心の優しい子でしたから、私の健康を気遣ってくれておりまして、それからもう一つ――」

老婆は染み入るような笑みを浮かべ

「後輩の弟さんにもし会うことがあれば、よろしく頼みます、と」
「……！」

言い知れぬ感動が五体を突き抜けた。

当時、リン・ゼールの先鋒となってヴィルフリート合衆国で活動していたジャック・フェインのメンバー達は、今日死ぬか明日死ぬかという熾烈な毎日の中に身を置いていたのである。

にも関わらず、そのように身内ばかりか赤の他人のすぎない自分の心配をしてくれている者がいたという。この衝撃は、レヴオス自身になってみないとわからない。

呆然としている彼に、老婆は続けて

「イオツソの両親はノース・レムで農園を営む穏やかな夫婦でした。それがある日、アミュード・チェイン神治合州同盟掃討作戦で侵攻してきたカイルル国軍陸団の兵士によって殺されてしまったのです。一人ぼっちになったイオツソを私が引き取りましたが、あの子はずっと政府や国軍に強い憎しみを抱き続けておりました」

領土拡張という野心を民族融和なる口当たりのいいキャッチで覆い隠し、カイルル・ヴァーレン政府は強大な軍事力をして周辺地域の強引な統合に乗り出した。テロ組織殲滅を名目に掲げながらその実、各地ではカイルル国軍が無辜の民を大量に殺戮していた。このうち北部の小国ノース・レムでは政治的内紛から勃発した小競り合いが大規模戦闘に発展、十五万人ともいわれる住民が無残にも命を奪われた。これをノース・レム内戦といい、結果としてカイルル・ヴァーレン共和国の版図は書き換えられることとなった。が、カイルル政府は住民虐殺の事実を隠蔽し、アミュード・チェイン神治合州同盟テロ組織の仕業であると主張し続けた。

この暴挙に憤激したアミュード教徒らは次々と武装組織に加盟、カイルル・ヴァーレン全土で組織的なゲリラ戦、あるいはテロ行為が活発化した。

「イオツソも、私が止めるのを振り切ってテロ組織に身を投じてしまいました。それでも事あるごとに私の身を案じてくれておりましたから、本当に心の優しい子だったのでございます。——そして、同じ地区に暮らしていて秘かにイオツソを恋い慕っていたのがイルメシアでした」

ようやく、点と点がつながり始めた。

レヴォスは、イルメシアは単にレア・ニステイ会員であるというだけでなく、少なからず何かを知っており、その彼女もまた深い事情を抱えているのではないかと推測していた。さもなくば、路傍で倒れている見知らぬ人間に対して並々ならぬ好意を寄せられる筈がない。

「それでは……彼女は私だと知って、このように何から何まで世話をしてくれたと？」

「あの子があなたを救ったのは、聖なるアミュードのお導きでございました。お導きがなければ、イルメシアがあなたを介抱することなかったのではないかと思います」

つまり、倒れていたレヴォスをイルメシアが発見したのは神の導き——それを人は偶然と呼ぶが——であるという。

老婆はさらに付け加える。

「……ただ、彼女から知らせを聞いて、もしやと思いました。神治合州同盟勢力域南部といえばジャック・フェイン本拠地。そこでアミュード系武装組織同士の抗争があつて、襲撃された側はほとんど全員がお亡くなりになったと聞いていたのでございます。何と酷い事をなさるのかと、胸が張り裂けそうになりました。ところが間もなく、生存者らしき男性を一人助けたとイルメシアから連絡があったのです。お歳の頃や様子を聞き、あるいはレヴォスさんではないかと思つたのでございます」

このあたり紛らわしいのだが、ウイグ亡き後のジャック・フェインリーダーをレヴォスが継いでいるという事実は、大抵のアミュード系組織なら認識している。ゆえに、そういう事情も含めて、老婆はイルメシアの話から生存者がレヴォスではないかと推測したのである。

老婆いわく、イルメシアはマデイス、レヴォス兄弟について面識があつた訳ではない。レヴォスとて、彼女の存在など全く知らなかった。

しかしながら武装組織に加盟したイオツソとその後何度か接点があり、彼の口からジャック・フェインやウイグ、そしてマデイス兄弟について聞いていたらしい。最近になって初めてレヴォスという人物を見たにせよ、彼女にしてみれば全くの他人には思えなかったのである。

「そういうことでしたか……」

ミサミ茶を口に含んだレヴォス。やや、冷めかけている。

窓の外を見やると、舷側の低い小さな荷物船が左から右へと流れてゆく。

とつこつ、考えてみた。

とりあえず老婆の話によって、今日に至るまでの経緯は何となく理解できたように思われる。偶然という要素——彼女は神の導きというが——があるにせよ、幾つかの事情が複雑に重なり合うことによって、結果的にレヴォスはこうしてこのカフェでお茶を飲んでいる、ということになる。そこまではいい。元の元を辿ればウイグやイオツソ、そしてマデイスらの彼に対する愛情が働いているといつても過言ではなく、そうであるなら今の状況を受け入れる気にもなれるというものである。

しかし、と一方で思わなくもない。

これから先を、どうするべきなのか。

イルメシアは彼に「海向こうに渡れば、私達の活動に協力していただきたいのです」と言った。そのために、レア・ニステイ会員の立場を与えるとまで言い切ったのだ。あと幾日もしないうちにイリオス夫妻に付き従ってカイレル・ヴァーレンを発たねばならないが、そうするとそれまでにレア・ニステイ会員になるべく（されるべく、といった方が正しいのだが）何らかの手続きがあらねばならない。

イルメシアに尋ねるのが手っ取り早いのだが、彼女は夫と共に海を見に行ってしまうている。あるいは、ここに彼一人を残していったのはこの老婆に全て訊け、という暗示なのか。

頭の中を忙しく回転させていると、そんな彼の思惑を読み取った

かのように老婆が言う。

「……あなたはこれから、異郷の地へと渡られます。そこでは、多くの困難、そして多くの争いがあなたを待つことでしょう。ですが、あなたにはどんな逆境をも跳ね返していく強靱な意志、それにたくさんの方々がいます。どうか、あなたのお力を聖なるアミュードへ捧げていただく訳には参りませんでしょうか？」

まるで未来が見えているみたいな言い方をする、とレヴォスは思った。

しかし老婆はただ静かに微笑んでいるに過ぎない。あたかも、最初から彼の答えがわかっていているかのようである。

話の内容に関心を引き摺られてつい忘れてしまっていたが、思い返せば十五分前に初めて会った時からこの老婆には不思議な雰囲気があった。熱心で純粋な信仰者には時々こうした人物がおり、そういう人間に接するたびに宗教とは本来こうしたものではないのかと、レヴォスは何度も思ったことがある。今までテロ組織としてさんざんに活動してきた自分が考えるのも何だが、宗教が殺人の行動原理の中核をなすこと自体大きな誤りではないのかと思う。

動物に宗教が存在しないように、宗教とは人間独自のものである。それというのは、人間は信じることなくして生きることができない存在であり、生きていくためには信じるという行為が不可欠である。信じることを止めてしまえば水の一杯も飲めなくなるではないか。

ゆえに、誤った宗教や思想を信じてしまえば、その人間のみならず人類全体に巨大な不幸をもたらすのではないか、とまでこの男は考えている。不幸な生い立ちを背負ったがためにやむなくテロ組織などに身を置いたりしたもの、そもそもその不幸を生み出したのはアミュード教の数派が引き起こした数々の血生臭い民族紛争のせいだといったいい。誰だつて、人を殺したり傷つけたりすることなく普通に生活できることが一番の幸福なのである。

一方、無制限の欲望にとらわれた権力者達がアミュード教徒土着の土地を侵略していったという歴史的背景を考えれば、やはり人間

には宗教という人間性を極限まで追求した真理の存在がなければならぬのかも知れなかった。カイルル国民は金に目敏いと他国民から言われるが、都心部に暮らす国民の多くは豊かさを享受した反面、信仰というものに目を向けなくなってしまった。節操を失ったように見られるというのはつまり、信仰という重大な基軸を捨てたがゆえに派生した人間性の喪失、といえるであろう。

ともあれ、レア・ニステイ会員のこの老婆。

レア・ニステイという組織に入会すればこうなるのか、そもそもアミュード教とはこういった人間性を助長する教義であったのか、それはレヴォスといえどもわからない。

しかしたった一つだけいえることは、神という絶対的かつ不確かな存在への忠誠が他者への善良なる奉仕という行為一点——あくまでも、自我を見失うことなく——に集約される時、人間は限りなくその神に近づくに違いない。この老婆しかり、イルメシアにしてもそうである。

元よりレヴォスに選択肢などありはしないし、レア・ニステイの立場を与えられたからといって社会奉仕活動に全力で打ち込めるものとはさらさら思っていない。今の自分は状況によって作られているものとしか考えられなかったからだ。

ただし、少なくとも——自分に無償の施しを重ねてくれたイリオス・イルメシア夫妻に対して及ばずながら報いたいという気持ちだけはあつた。その反面心の奥底には、同志の命を奪ったゴーザ派の連中に自動小銃と白刃をもって報いてやりたい衝動が今もなくなはないが、イルメシア、そしてこの老婆の口からアミュードというもの、を全身で語られる時、どうにも抗弁に足る根拠が自分には皆無であるように思われてしまつたのであつた。

そういう胸中に蟠る複雑な心境を、とりとめのない言葉でぽつぽつと語つたレヴォスは

「——今の私にあなた達のように純粋な信仰心を求められても、恐らくただの一滴も出てこないでしょう。それがレア・ニステイの入

会条件であると仰るなら、私にその資格はない。組織も行き場も喪った今の私にできることなど何一つあるとは思えないが、このままではあの善良な婦人と夫に対して申し訳が立たない、それだけのことです。ですから、私の力がどうか、アミュードへの忠誠がどうか、そういうことは私には――」

「レヴォスさん」

老婆はすつと片手を挙げて、彼の言葉を遮ると「我らが聖なるアミュードは過ぎたるにおわさず、ただ将来にあつて万人に等しく光明を授けん。将来におわす我らが神に捧ぐべきは、ただ奉仕あるのみ――こういう一節が最古の教義原典の中にございます。この言葉聞いたことはおありでしょうか？」

「いいえ……」

「でしょう？　後世の導師の方々がこの一節をお読みにならなかったがために、いつしか教義そのものが歪められて伝わってしまったのです」

老婆はにっこりと微笑んだ。が、すぐに凜と表情を引き締め

「聖なるアミュードが過ぎたるにおわさずただ将来にあつて、というのはつまり、私達が将来に向かって生きていくことを意味します。そうでしょう？　過去に向かって生きていける人間など世界に一人もいらつしやいませんもの。……そして『ただ奉仕あるのみ』これが一番大切なところです。奉仕というとか重たい感じがしますが、即ち行動せよ、ということなのです。その行動が他者のためであれ、という意味から奉仕と一言で表現されたのでございます。――この教義の通りならばレヴォスさん、あなたにはレア・ニステイに入会する十分な資格がおりなのです。なぜならば、五体満足で行動することができなのですもの」

教義を語る老婆の言葉はすらすらと流れて澱みなく、しかも明確である。レヴォスはアミュード教義についてここまではっきりと言いつける人物に未だかつて会ったことがなかった。

「……」

「過ぎたことは取り戻せませんが、将来に向かって行動することはできる。そしてそれがアミュードの真の教えなのでございます。――ですからレヴォスさん、この度の一件であなた一人が助かったことは、大きな意味があるのです。まさしく、聖なるアミュードがあなたに『生きよ、生きて行動せよ』と仰っているのですよ。こんな不思議なことがございましょうか？ もしあなたに少しでも聖なるアミュードに報じたいという気持ちがあればなら、どうか、私達にそのお力をお貸しください。よくよく、お頼み申し上げます」
丁重に頭を下げた老婆。

レヴォスはただただ、呆然としている。

この老婆の教義研鑽の深さを思い知ったというだけではない。
胸中、ハツと思い当たってしまったのである。

「あ、あの…… 大変失礼ですが、あなたは、もしかして……」
「はい」

上体を起こした老婆は、人の良さそうな柔らかな笑みをその相好に浮かべた。

「申し遅れましたが私、アミュード・レアンドロスト・ニステイル会を主催させていただいております、ホーラ・デル・メイトでございます」

「……！」

レヴォスは度肝を抜かれていた。

今日の前にいる温和で上品な老婆こそ、世界で百万人を超える会員を擁するアミュード教系巨大組織の主催者だったのだ。驚かざるを得ない。

驚きのあまり身じろぎもしないレヴオスの肩に、ホーラはそっと片手を置いた。

老いて皺だらけであり、あちこち傷跡が絶えない。

それでもその手は丸く柔らかく、そして不思議な温もりを感じさせた。

彼女はじんわりと染み入るような笑みを浮かべ

「……私は今、あなたという方に巡り合わせてくださった聖なるアミュードに深く、深く感謝しています。それに、あなたの命をお助けくださったことも。——人は、生きねばならないのです。生きてこそ、人はその大いなる価値を生み出すことができる。死んでしまえば、何一つこの世界を変えることなどできないのです」

「……」

この奇妙な感覚は何であろう。

アミュード教に関わる人間には数も知れないほど会ってきたというのに、ホーラのように慈愛を感じさせる者などただの一人もいなかった。恩師ウイグも恋人ケレナも彼にとって大切な人ではあったが、彼女のようにではなかった。本当の意味での信仰者とはこういうものののかと、思うともなしに思っているレヴオス。

ホーラは続ける。

「あなたに心からお願い申し上げます。どうか——生きてください。大切な方を亡くしてまで生き続けることは死ぬよりも辛いこととお察しいたします。私もたった一人の孫を喪っていますから、少しばかりですがお気持ちはわかるつもりです」

目に涙を浮かべている。

「……でも、嘆いても悲しんでも、亡くなった方は戻らない。辛いですが、しかし将来へ向けて一歩踏み出せるからこそ、人は強い生き物だと思います。信仰とは、神にすがって助けを請う行為ではあ

りません。神をわが心の支柱として、その支柱を崩さぬために私達自らが戦うことなのです。戦うからこそ、私達はその神に近づくことができるのです。申し上げるまでもありませんが、戦いとは殺し合うことではなく、我が心に巢食う傲慢や絶望を廃するための行動です。――私達が亡くなった方のためにできること、それはこの世界をより良く変えてゆくことだと思ふのです。彼等の生きた証が、後世にいつまでも輝き続けることができるように……」

彼女の声が、まるで胸中へ直接語りかけられているかのように深く低く静かに、しかし確実な響きとなって胸の奥へと広がってゆく。それは限りなく優しく温かく、レヴオスの心を穏やかに潤し始めていた。

大切な人を奪われ、自らも極限の日々に身を置いていくうちに、彼の心は死せる大地のように干上がり、乾ききっていたのだ。

いつの間にか、レヴオスは気付かぬうちに――ぼろぼろと涙をこぼしていた。

「私は……私は……」

何か言葉を発さねばならないと思うもの、ぐっと胸が詰まって言葉が出てこない。

感動というものとは違う。

ただ静かに、そっと、ほんの僅かに、心の深い部分に軽く触れただけなのである。

しかしその瞬間、レヴオスはそれまでの何もかもが取るに足らなかったと思えてしまうほど、とてつもなく大きな何かを感じた。感じた途端に堰を切ったように涙が溢れ出した。人はその大きなものを、慈愛と呼ぶのかも知れない。

大丈夫ですよ、というようにホーラはぼんぼんと数度肩を叩き「私には、わかります。あなたはこの先、たくさんの人々を救っていかれる方なのです。そうでなければ、聖なるアミュードがあなたの命をお助けになる筈がないではありませんか。……さあ、自信をもってお行きなさい。世界を変えゆく使命を戴いたあなたのためな

らば、私は喜んで自由の翼をお渡しいたしましょう」

そう言って彼女が取り出したのは、純白の大きな布であった。

隅にARN——アミュード・レア・ニステイのイニシャル——と小さな刺繍が入っている。

レア・ニステイ会員であることの印。純白は平和、協調を意味する。女性はショールだが男性はバンドナ状のものを与えられ、頭や腕に巻いたり、あるいは胸ポケットに入れたり、身につけるやり方は人それぞれである。男女とも形状は正方形のものだが、建設、創造を象徴している。

これを身につけている限り、世界中で入国を拒否されることはまずないといつていい。

その信用性たるや、パスポート以上であるかも知れなかった。一見すれば何でもない白布だが、ARNの刺繍は一枚一枚が人の手によるもので、アミュード教が発祥したごく一部の地域にのみ伝わる特殊な技法が用いられている。よって、おいそれと偽造できるものではない。各国の入国管理局はこのことをよくわかっていて、偽造を試みた者は不審人物として入国を拒否する。こうした対応には一理あり、レア・ニステイの身分を偽る者は大抵がアミュード・チェイン絡みのテロリストだったりするのだ。

が、真正正銘のレア・ニステイ会員が入国を求める時、管理官は最大の敬意を払い、かつ心からの歓迎の意を示す。

ホーラが「自由の翼」と表現したのは、そうした背景に裏打ちされている。

そもそもレヴォスはジャック・フェイン所属員として国際指名手配の身であるのだが、ホーラの慈悲によって正式にレア・ニステイ会員となった今、ヴィルフェイト合衆国にも渡航が可能となった。同会の飛躍的な発展を重視したヴィルフェイト政府は、特別入国資格付与事由なる特例措置を設けた。結果、レア・ニステイが身元引受人かつ保護管理責任を負うことで当該属人の前歴を問わず入国が許可されるようになったのである。この動きはヴィルフェイトのみ

ならず、世界中に広がりつつある。

といって、特例対象者が入国後に反社会的行為を行ったという事例は皆無であった。いかなる者であれ、レア・ニステイの思想に感化されるとたちまち社会への奉仕精神が高揚して活動に身を投じていくのだが、このことは同時に人間的な理性の発動促進に通じているのかも知れない。

ともあれ、レア・ニステイという組織の保護によってレヴオスに行動の自由が保証された。

身動きもせずに滂沱と涙を流していたレヴオス。

差し出された白布を、そつと両手で押し頂くようにして受け取りながら

「……ありがとうございます。長くテロ組織にあって殺し合いを演じてきた私ごときに何ができるか、今はわからない。しかし少なくとも、私を支え励ましてくれた方を裏切るような真似だけはすまいと、たった今、心に決めました。――」

満面の誠意を漲らせ、ホーラにそう誓っていた。

——その白布は今、彼の左腕に巻かれている。

貴重な物品ゆえ、街の清掃などするのに身につけていったら汚れてしまうのではないかと思っただが、社会貢献活動をする上での汚れならば名誉あることなのだと、イルメシアが教えてくれた。

ただ、ホーラとのあの邂逅がなければ、レア・ニステイへの加盟が認められていてもこうして清掃活動に加わる気にはならなかったかも知れない。多くの人を助けるためにアミュードがその命を守りたもった、そう言われてしまえば、ゴミ拾いだろつと便所掃除だろつとやらねばならないような気がした。

それにしても、とレヴオスと思う。

（何てゴミが多いんだ、この街は……）

拾えど拾えど、キリがない。

都市の乱れは人心の乱れといわれる。五年前にこの街へ潜伏していた時はこんなに汚かっただろうかなど考えながら、レヴオスは

一つ、また一つとゴミを拾い集めていく。

ふと向こう側へ目をやると、他の女性会員達は皆で何かの話題に興じながら、楽しそうに作業している。その点、レア・ニステイの活動はいかにも女性に向いているといえるかも知れなかった。男はどういう訳か、大抵の場合黙々と作業に集中しがちである。

しばらく続けているうちに、公園内中央にある噴水広場までやってきた。

とてつもなく広いその広場は一面に化粧石が敷き詰められ、適度な段差が設けられているから散策途中の老人や子供を連れた母親、それに晴れた日の昼時になれば近隣の会社に勤める社員達がランチをしに集ってくる憩いのスペースであった。今時分はまだ午前中の早い時間帯ゆえ、人の姿もまばらである。

のんびりと座れる環境が整っているせいか、ポイ捨てされた煙草の吸殻が非常に多い。

紙巻の煙草は雨によってぐちゃぐちゃに四散し、折角綺麗に整備された広場の化粧石をひどく汚してしまっている。それらを丁寧に拾い集めていると、ふとウイグのことを思い出したりした。

（そういや、ウイグさんもよく煙草を吸っていたな。所構わず吸殻を放り投げるから、アジトの床がこんな風になってしまっていた……）

彼の腹心であり嫌煙家のレヴォスはよく大真面目に苦情をぶつけたものである。

が、今になってみれば、頭脳明晰かつ人望篤いウイグにもそういう欠点があったのかと思うと、何だか可笑しみを覚えるのである。レヴォスから容赦ない指摘を食らうとウイグは、いつも決まっていればつが悪そうに苦笑しながら頭を掻いていた。

噴水広場をぐるりと一周しつやつたのことで吸殻を回収し終えたレヴォス。

ふと目を上げると、さらなる脅威が彼を待ち構えているではないか。

広場の隅に設置されている屑物入れ。

鉄網を円柱状に加工したタイプの屑物入れはゴミで溢れ返っている。一杯になってもなおゴミを置いていく者が絶えないのか、上へ上へと積み上げられていて見苦しいことこの上ない。こぼれ落ちた紙くずやら空き缶が地面に散乱している。朝を迎えた繁華街のゴミステーションが、よくこういう状態になっている。

「……」

呆然としているレヴォス。

一日や二日ではこうはならない。恐らく、業者の回収がないまましばらく放置されていたのであろう。

憤りを通り越して呆れてしまった。都市統治機構地区統括支所の清掃局は一体全体何をやっているのか。これでは市民の税金が全く有効に活用されていないといって過言ではない。率直にそう思ったレヴォスの感覚はすでにテロリストのそれではないのだが――しかし彼はそういう自分に気付いていなかった。

山のようなゴミを前に、さてどうしたものか、と考えていると

「……おにいちゃん」

背後から不意に声がした。

振り返ってみると、そこには四、五歳くらいと思われる、小さな男の子がいた。やや茶色がかった金髪にくりつとした瞳をもった、可愛らしい子である。

レヴォスに向かってお菓子の紙くずを差し出し

「ゴミ箱に入らないの。これ……」

公園の清掃を担当している係の人間だと思ったのであろう。レヴォスはサンタクロースのように、大きなゴミ袋を担いでいるのだ。

一瞬、何を言われているのか理解できなかったが、すぐにそういうことかと頓悟した彼は

「あ、ああ……わかったよ。ありがとう」

紙くずを受け取り、ゴミ袋の中へ放り込んだ。

目的を達したと思ったのか、男の子はその場から走り去りかけた

が、すぐに引っ返してくるなり

「それからね」レヴオスの服の裾をくいくいと引っ張り「トイレ、どこ？」

尋ねてきた。

「トイレ？ ああ、トイレならこっちだよ……」

こうなると公園の管理人も変わらない。もしもこの光景をイルメシアや他の女性会員達が見ていたら、とても微笑ましく思っていたであろう。が、彼女らは今近くにいない。作業にのめり込み過ぎたレヴオスは、集団からかなり先行してしまっていた。

左手で男の子の肩を抱いて庇うようにして、そちらの方角へ案内しようとした。右肩には、パンパンに膨らみきったゴミ袋を担いでいる。

と、ゴミ箱から十歩ばかり離れた瞬間であつた。

ゴンツ、と背後で突然、爆発のような金属が弾け飛ぶような、大きな音がした。

あつという間もない。

全身の感覚に違和感を感じた刹那レヴオスは、ほとんど反射的に我が身で男の子を庇うようにして押し倒しつつ、地面に伏せていた。

ジャック・フェイン時代に身につけた危機感知能力が今でも生きている。

直後、背中や後頭部を一瞬、焦げたような臭いの黒い風が掠めていく。

敷石に頬擦りしながらもレヴオスは、それが仕掛けられた爆発物によるものだと思っていた。さもなくば、こうも強烈な爆風など生じたりはしない。

数秒の後、素早く跳ね起きてみると——一帯には黒煙が立ち込め、舞い上げられた紙くずが花吹雪のようにひらひらと落ちてきている。鉄製の屑物入れは花のつぼみが開くようにして放射状に引き裂かれ、中に入っていた筈のゴミは十メートル四方にわたって飛び散っ

ていた。格子状に編まれていたとはいえ、頑丈な鉄の屑物入れを破壊するほどの威力である。爆発物はそれなりに強力なものであったと思われる。

ただし、仕掛けた場所が悪すぎる。犯人によほど知恵がなかったのか、あるいは強い無差別殺傷の意図がなかったのか。どちらにせよ、不幸中の幸いだったといつていい。時間帯が悪ければ、少なくとも負傷者は免れなかった。

近寄るのは危険であるため、その場から屑物入れの方を注視しているレヴォス。

副次的な爆発がないとも限らない。
すると

「……ふえええん！」

男の子がにわかに泣き出した。

爆発に驚いたのか、レヴォスに押し倒されたのが痛かったのか。が、至って冷静になっている彼は男の子を抱き抱えて起こしてやりながら

「おお、よしよし。痛かっただろう？　ごめんな。だけど、もう大丈夫だ。男の子だろう？　泣いたらカツコ悪いぞ？」

優しく声をかけてやった。

男の子はいよいよ火がついたように泣き始めたが、かといってレヴォスの元から逃げようとはしなかった。優しく労われ、ようやく泣けるだけの心地を取り戻せたようであった。念のため全身を眺めてみたが、どこも怪我はなさそうである。

「——サム！　サム！　どこなの！　サム！　返事をして！」

間もなく、どこからともなく悲痛な女性の声が聞こえてきた。

途端、男の子は

「ママ！　ママーっ！」

と、泣きながら母親を呼び始めた。

「サム！　サム！　無事なの！？　サム！」

母親らしき女性が姿を現すまで、時間はかからなかった。

噴水の向こう側からレヴオスよりやや年下と思われる女性が駆け寄ってくると、男の子は「ママァッ！」と叫びつつダッシュで走って行く。

「サム！ ああつ、良かった！」

抱き合っている母子。

二人の様子に目をくれながらゆっくりと立ち上がったレヴオス。その相好には自然と、安堵の表情が浮かんでいる。

（良かった。まさか、ジャック・フェインの頃の訓練がこんな形で役に立つなんてな）

自嘲気味に思ったが、しかし悪い気はしない。むしろ、晴れ晴れとした爽快な何かが胸中を満たしつつあった。

（それにしても……）

随分と性質の悪い悪戯をする者がいる。

そう思いつつ何気なく足元に目線を落とすと、彼が担いでいたゴミ袋に、小さな破片が幾つか突き刺さっていた。吹き飛んだ屑物入れのそれであろう。拾ったゴミで膨らんでいたからクッションになってくれたらしい。これがなければ、破片はレヴオスの肉体を直撃していたに違いない。

「……」

妙に不思議なものを感じたが、よく考えれば奇跡はそれだけではない。

あの男の子の存在にしても然りである。

彼が戻ってきてトイレの場所を尋ねてくれなかったら、屑物入れの傍に立っていたレヴオスは爆発の衝撃や破片を正面からまともに受けてしまっていた筈であった。偶然が偶然を呼び、結果として彼の身は守られていたのである。

さらに——一応自分の身体を確認してみたレヴオスは、驚愕のあまり絶句していた。

「……！？ これは……！」

左の上腕、巻きつけられたレア・ニステイ会員の印である白布に

も、金属片が食い込んでいるではないか。小さいが鋭利なものであり、衣服一枚程度なら切り裂いて下の肌をも傷つけてしまいかねない。

それを、白布が防いでいた。

ぐるぐると巻きつけてあったために厚みが増し、金属片の貫通を許さなかったのだ。もしも白布がなければ、目にも止まらぬ速さで飛んできた破片はレヴオスの腕に深く突き刺さっていたであろう。

よりによってその部分に命中すること自体、奇跡以外の何でもあるまい。

やや呆然となりながらも、レヴオスは思わずにいらなかった。
（聖なるアミュードよ……あなたは、そこまでして私に使命を果たせと仰せであるのか？ 多くの同志達の犠牲によって生き長らえている、このつまらない存在である私に……！）

一瞬、訳がわからなくなった。

しかし、そんな彼の元にそそくさと寄って来たサムなる男の子の母親が何度も頭を下げつつ

「ありがとうございます！ 本当に、ありがとうございます！
もしあなたがいなかったら、この子は無事ではなかったと思います。何と、感謝を申し上げてよいのやら……」

感に堪えない、といった面持ちで激しく礼を述べた。ほとんど泣きださんばかりである。

「あ、いや。別に、私は何も……」

身体が勝手に動いただけのことだと思い、反応に困っていると

「……ありがとうございます」

男の子からも礼の言葉をもらった。

レヴオスは静かに片膝を付き、男の子の目線まで屈みこむと
「怪我がなくて、良かったな。外で遊ぶ時は、危ない物があつたら近づかないようにね」

美しい金髪の頭を撫でてやった。無意識のうちに、相好がほころんでいる。

「うん！」

母親の傍へ戻ってすっかり安心したのか、嬉しそうにはにかんで見せた男の子。

その笑顔が網膜に映った時——自分の中で何かが芽吹いたように、レヴオスは感じていた。

具体的にどういうものであるか上手く言い表せないものの、それはしかし確実に、彼自身の背中を力強く後押ししてくれている。

生き続けることの意味が、少しだけわかったような気がしたレヴオス。

そこだけはどれだけイルメシアやホーラから促されても、レア・ニステイの社会奉仕活動に加わってみても、なかなか理解できずにいた。というよりも、心情として割り切れなかったという方が表現として正確かも知れない。

しかしたった今、僅かながらも垣間見ることができた。

たった一人の、小さな男の子を救うことによつて。

（俺にはまだ、やれることがある。俺のような男でも、人の一人くらは助けられることができる。ウイグさんやケレナの元へ逝くのは、それをやってからでも遅くはない筈だ。——そうでしょう？ 聖なるアミュードよ）

あたかも、そうだ、という答えであるかのように、強くも温かい日差しが彼の上に降り注いでいる。

「おはよう、みんな」

「おはようございまーす」

朝の都市統治機構本庁二十五階、秘書室。

秘書室長ジュリアが入っていくと、部下の秘書達が一斉に挨拶を返してきた。皆、すでにデスクに向かって仕事を始めている。

自分のデスクに書類の束を置いたジュリアは、ふと

「……あら？ ランシアがいないわね。お休みかしら？ 誰か、連

絡受けてる？」

誰へとなく尋ねた。

彼女を含めると、部屋にいるのは四人。秘書室は五人体制であるから、一人足りない。

パソコンのモニタを見つめていた三人の秘書達は顔を上げてジュリアの方を向いた。

「いえ、連絡は受けていません。昨日は室長、ご出張だったので報告が遅れましたが、ランシアは昨日も出勤してきておりません。今朝はユノが電話をしてみてくださいなのですが……」

手前右の席に座っているミルサという女性が言った。

すると、彼女の前のデスクにいるユノは

「はい、私が何度かかけてみたんですが、いずれも電波不通のメッセージしか流れませんでした。いつもは電話に出ってくれるんですけど」

戸惑ったような顔をしている。

ジュリアは立ったまま軽く首を傾げ

「変ねえ。彼女、仕事はちょっと雑なところがあるけど、無断欠勤するようなコじゃないと思ってたのよね。——カーヤは何か聞いてない？」

ミルサの隣、入り口にもっとも近い位置に座っているカーヤ。

彼女はレンズの大きなメガネをくいくいと中指で押し上げながら「私も、特に聞いてはいません」とまで言ってから、ふと思い出したように「……あ、でも」

「でも？」

「一昨日の退社後、ランシアさんに誘われて食事に行っただけです。で、お酒を飲んだんですけど、酔いが回ってきたランシアさん、私に妙な質問ばかりしてきたんですよ。ディゼン知事は好き？とか、今の仕事に満足しているの？とか、あとはそうですね……」

カーヤは天井を睨むようにして懸命に記憶を辿っていたが、やがて「ああ、ロゼルさんが亡くなったことをどう思うか、って最後に訊

かれた記憶があります」

確かに妙な質問だと、ジュリアは思った。

故人のことをどう思っていたか、というなら質問の意図は明白である。

しかし「亡くなったことをどう思うか」というような訊き方は普通しないであろう。それではまるで、ロゼルの死に不審を抱いているかのようなニュアンスがある。

例の事件から一ヶ月。

警察機構による必死の捜査が続けられているにも関わらず、有力な手がかりは発見されていなかった。知事ディゼンは事件の三日後、彼女ら秘書をはじめ都市統治機構職員全員に対し

「ロゼル君の非業の死を悼むと共に、このような民主社会を脅かす卑劣な恫喝に決して屈してはならない」

という、檄にも似た訓示を発している。

さすがはディゼン知事だ、と賞賛する職員も多かったが、最も事件現場に近い位置にいた秘書達は動揺を隠せなかった。死亡推定時刻の直前、全員がロゼルの姿を見ていたからである。しかもその時彼は珍しく激した様子で秘書室に飛び込んできたあと、真っ直ぐ知事公務室へ向かっている。そのまま、帰らぬ人となった。

警察機構の事情聴取でもジュリア以下全員が証言した話だが、当時秘書室にいた五人が五人、ディゼンは知事公務室にいるものと思っていた。彼のスケジュールは彼女達秘書室によって分刻みで管理されており、知事公務室を出る際はトイレ以外、必ず誰かが同行することになっている。であるから、ディゼンが警察機構の事情聴取に対して説明した「別室で打ち合わせを行っていた」という話自体、まったく寝耳に水であった。仮にロゼルが知事公務室で殺害されなければ、彼によって秘書室全員叱責を食らっていたに違いない。

後になって警察機構から証言の食い違いを聞かされたジュリアなどは

「そんな馬鹿なこと、ある訳が……」

と、絶句した程である。

彼女は三十六歳。若い女性ばかりが揃えられた秘書室にあつては跳び抜けて年長といつていい。

それというのも、都市統治機構秘書室勤務歴十四年になる彼女は篤実な精勤ぶりをかわれ、四年前に秘書室長に昇格したからである。秘書業務は華やかな反面ハードであるため、長続きするケースはごく少ない。そういう職場にあつて、黙々と業務を遂行する上に性格が温和なジュリアは重宝されたのである。

仕事に綿密さを期す彼女であるから、まさかディゼンが自分達の与り知らぬところで動いていたとは、夢にも思わなかったのだ。もっとも、事件から少し経った後、ディゼン自ら「済まないことをした。君達にきちんと伝えておくべきだったな」と直接詫びを入れている。

ゆえに、多少割り切れぬものを引き摺りつつも、秘書室としてはロゼルの一件は警察機構の手に一任し、気持ちを切り替えてこの都市のために業務にあたつていこうと全員で確認しあつたのである。管理者であるジュリアは、若い部下達が事件の衝撃と悲しみを乗り越えて頑張ろうと決意してくれたことを何よりも嬉しく思っていたが、カーヤの話を聞く限りにおいて、必ずしもそうではなかったらしい。

彼女の言う通りだとすれば、ランシアは今も事件に対して秘かに疑問を抱いており、もしかするとそのことが引き金となつて欠勤しているという見方もできるのである。

ランシアは現秘書室メンバーの中ではカーヤの次に年齢が若く、キャリアも浅い。しかしながら五人の中ではずば抜けて容姿端麗で頭の回転が早く、事柄を理解する早さにおいては先輩ながらおとり屋のミルサを凌駕していた。ただしその分早とちりも多く、ジュリアをして「仕事はちよつと雑」と言わせしめているのであった。そういう彼女であるから、心情的に納得できていない部分があるのだらうと思い、ジュリアは

「わかったわ。ランシアには私から連絡を入れてみるようにするから、みんなは普段通りに業務を進めて頂戴。彼女が担当していた部分で急ぎのものは、場合によっては悪いけど各人に代行してもらうかも知れない。忙しいところ申し訳ないけど、よろしくね？」

「はい！」

三人は素直に返事をし、またパソコンの画面に向かった。
ジュリアも、チェアに腰掛けようとして

「……あ、一つ大事な連絡があったのを忘れていたわ」

カタカタと小気味良く鳴っていた三つのキーボードがぴたりと静かになった。

「ディゼン知事から伝言ね。SCCの一件があつて、カイレル・ヴァーレンとの関係が難しくなりつつあるそうなの。それで知事も国家統治機構やSCC本社と重要な電話とかやり取りが多くなるから、公務室に入る前には一度確認して欲しいって。下からの取次ぎについても同様ね。——いいかしら？」

「はい！」

再び、三人の手が忙しく動かされ始めた。

ジュリアは携帯端末を手にとると、メモリからランシアの番号を呼び出して通話ボタンを押した。

何度か呼び出し音が聞こえたあと、

『おかけになった番号の端末は、現在通話できる状態にありません。あらためておかけ直しただくようお願いいたします。……おかけになった番号の端末は——』

電波不通のメッセージが繰り返し流れている。

終了ボタンに指をかけてから、ふと不安を覚えたジュリア。

（まさかとは思うけどランシア、変な事件に巻き込まれたりしていないかしら？　カーヤに向かって言った話を、他所でも喋っていないとは限らないわよね……）

ここ最近、メディア・レイメンティル社の記者を名乗る女性から取材を申し込む電話が頻繁にかかってきていた。ディゼンの指示に

よってそれらはすべて断っていたのだが、二日前、その女性記者が他殺体となって発見されたというニュースが流れた。

しかも同じ日の午前、今度はその同社本屋が爆破され、死傷者を出す事態になった。

かつ事件発生直後、よりによってその現場で一人の警察機構巡査が自爆、付近に展開していた機動課特殊部隊隊員数名が負傷する騒ぎまで起きている。

警察機構では自殺した巡査がテロ組織に関与しており、女性記者殺害やメディア・レイメンティル社爆破についても何らかの関係があったものと疑っているが、その後新しい情報は報じられていない。メディア・レイメンティル誌は数度にわたって都市統治機構の闇と題した記事を掲載し、度々訴訟沙汰になっている。

殺害された女性記者が執拗に取材を迫っていたのも、ロゼル殺害事件に絡んでのことだろうと、ジュリアはじめ秘書室の者達は考えていた。

が、その女性記者は何者かの手によって命を奪われ、しかも同じ日を境にランシアの行方もわからなくなっている。彼女は行方をくらました日の前日、ロゼルの不審死に対して疑問を抱いているかのような発言を残している。

点と点が妙に符合して見えるのは、果たして気のせいなのか。

ジュリアは内心、言い知れぬ胸騒ぎを覚えた。

「——もしもし？ 私だが」

『……ディゼンか。この前から大分しつこく鳴らしてくれていたな。何をそんなに焦っている？』

「私からの電話がわかっていながら取らなかったのか！」

相手の怠慢に怒りを覚えたディゼンは思わず怒鳴りかけたが、すぐに声のトーンを落とし

「……何という真似をしてくれたんだ。貴様等の浅はかさには呆れて物も言えんよ」

『浅はか？ 何のことかな？ メディア・レイメンティル社の件か？』

「この期に及んで白づくれるのも大概にしる。女性記者を排除しろとは言ったが、誰があそこまでやってくれと頼んだ！？ 貴様等が暴走してくれたお陰で、州全域に非常警戒令を発される始末だ。恐らくは明日の州議会で監視ネットワークシステム再稼働も決議される。貴様等は自分で自分の首を絞めているというのが何故わからない！」

どさりとチェアに腰を掛け、反転して窓の方を向いた。

まだ昼前だというのに外はどんよりと暗く、窓ガラスに雨粒が止め処なく当たって折角の景色をぼんやり曇らせている。

電話の向こうで、やや間があった。

『……フツ、ハハハハ』

不意に、低い男の声が俄かに笑い出した。

「何を笑っている？」

『いやさディゼン、ゴーザ派の訓条は覚えているか？』

「馬鹿なことを。忘れる訳があるまい」

『なら、あれで良からう。不手際は己が命と血肉をもって神に償うべし、さ。あのパッサたらいいう男、警察機構にタレ込んだ同僚の始

末を思いついたまでではない。が、爆破騒ぎまで引き起こしたというのに、当の女社員にはまんまと逃げられたじゃないか。独断専行しておいてしくじりやがったんだよ。それでこのこと指示を仰いできたから、例の訓条を思い出せと伝えてやっただけだ。——何、余計な口が一つ閉じられただけのことじゃないかね？』

ゴーザ派組織において訓条なる規律——神に宣誓するという形式の——は、絶対である。

幾つもの規律規範からなる訓条のうち最後に述べられている一文、これこそ恐るべき心得であった。不始末をやらかしたものは自分の生命をもつて償え、という意味であり、この一文のためにどれだけの組織員が無造作に命を放り出したか、わかったものではない。

ディゼンとしては、黙らざるを得ない。

電話の相手が何を言わんとしているか、すぐに勘付いていたからだ。

彼は声を上ずらせながら

「組織は、組織は……私にもそうしろというのか？」

尋ねた。心なしな表情が、苦しげに歪んでいる。

『言っている意味がわからないな。訓条はあくまでも心積もりであつて命令ではない。パッサにしろ他の連中にしろ、自分の意志で神に命を捧げただけのことだろう。誰も死ねと命じた訳じゃない。違うかね？』

詭弁だ、と言い掛けたが、相手の男はそれよりも早く

『ま、お前さんには死んでもらっちゃ困る。くれぐれも、懷に爆弾詰めて治安機構なんかに出かけたりするなよ？ それこそ大迷惑だからな』

可笑しそうに言つた後、すぐに声の調子をがらりと変えた。

『——そんなことより、SCCで何が起こっている？ お前さんの方で何か情報はつかんでいないのか？』

唇を噛んだディゼン。

その話を持ち出されるのはある意味、死ねと言われるに等しい辛

さがある。

数日前、SCCは突如として、カイルル・ヴァーレン共和国における大規模地下資源開発プロジェクトへの投資を見合わせる旨発表した。理由は「昨今の著しい業績低下に伴い、国内グループ企業再編を優先させるため」とされているが、これは会長サントスが従来強行し続けてきた海外事業拡大転向路線に反している。中小グループ企業をさんざん圧迫し消滅させてきた経緯を踏まえれば、そのことは誰の目にも明らかであった。

一報を受けたカイルル政府や海外プロジェクト関係者は仰天したが、ヴィルフエイト合衆国政府はじめファー・レイメンティル州都市統治機構もまた大いに慌てた。SCCからの巨額投資が頓挫すれば、プロジェクトの進行そのものに多大な支障が生じてしまうのである。しかも同プロジェクトはカイルル政府肝煎りであるため、約を違えることによつて最悪、国家レベルでの対外問題にも発展しかねない。ヴィルフエイト合衆国政府が動？したのは当然であった。すぐに大統領府からディゼンの元へ直接連絡が入り、サントス会長以下SCC経営幹部より直ちに聞き取り調査を行うよう要請があった。彼もその必要性は十分に承知している。時を置かずして事情説明を要請する旨の書面が、州知事名にて送付された。

ところが。

翌日送られてきたSCC本社からの回答は、ディゼンが思わず呆気にとられたほど、味も素っ気もない内容であった。

「SCCとしては、グループ内部の経営状況を鑑みて今回の決定に至った。州都市統治機構への詳細な説明は、十分な必要性があるものと認識していない」

ほとんど喧嘩腰といったいい。余計な口を挟むな、と言わんばかりの態度ではないか。

これにはディゼンも激怒した。SCCには貸しがある。

つい先日、ナッシュ・マテリアル社とテロ組織の関連性を疑った警察機構本庁はSCCに事情聴取を行う構えを見せた。国家統治機

構関係者からいち早くこの情報を得たディゼンはさる大物合衆国議会議員を動かし、国家公安機構を通じて警察機構本庁に圧力をかけさせた。警察機構がSCCをマークしてしまえば、ナッシュ社の内情はもちろん、メグル警部殺害の一件にまで大きな手がかりを与えてしまいかねなかったからである。ただし、あくまでも警察機構による捜査の手を払い除けるのが狙いであつた以上、SCCに恩を売るのは筋違いであるといつていい。げんに、陰でそういう策動があつたという事実をSCCの誰一人知らないのだ。

意図してそうなつた訳ではないのだが、気付けばSCCはディゼンらゴザ派にとつてもカイル政府にとつても、死活を握るアキレス腱的な存在となつていた。SCCにそっぽを向かれれば、何もかもがぶち壊しになってしまう。

そして今まさに、事態は恐れていた方向に動きつつある。

が、そんなディゼンの焦りとは裏腹に、側近の下僚達は口を揃えて「突つ返されたのも当然です。カイル政府は国益に関わるから文句の一つも言いたいでしょうが、そもそもこれは民間主導で進められたプロジェクトです。カイル政府公認といつても、おこぼれが欲しいばかりに後付けされたお墨付きに過ぎない。カイル政府がよくやる手口じゃありませんか。国家統治機構は外交問題だとか騒いでいますが、根底は民間企業同士の約束みたいなものですから、今さら国や州が出て行つたところでSCCこそいい迷惑でしょうね。国や我々が最初から面倒みてやつていたんなら話は別ですが」

と、むしろ事情説明の要請には冷ややかな態度を見せた。

そう言われてしまえば、ディゼンとて抗弁の余地はない。客観的に事柄を整理すれば、事実上は下僚達の言う通りなのである。国家同士の付き合いが悪くなるから考え直してくれ、と頼んでみたところでSCCにしてみれば知つたことではないのだ。例えるならば、親同士の友好関係を保つために子供に金を出せと言っているに等しい。しかしその親は今まで子供の面倒など何一つみておらず、しかも子供の金を当てにして騒ぎ立てているのはよりによって向こうの親な

のだ。子供が不貞腐れるのも当然である。

が、今後どうなるかは別にせよ、州都市統治機構の立場としてはせめて事情だけでも把握しておかねばならない。

ともかくもＳＣＣに対して事情説明に応じるよう引き続き要請せよ、とディゼンは命じたのだが――ＳＣＣからは色よい返事を得られないまま数日が経過している、という状況だったのである。

「ＳＣＣには何度も事情説明を求めているさ。だが、一向に応じる気配がない。経営陣が内部分裂を起こしているためだと報じているメディアもあるが、あるいはその可能性もある。事情が事情だけに、我々州政府としてもこれ以上介入する術を持たんのだ。こればかりは私の責任でもあるまい。そう責めてくれるな」

溜息をつきつき、懇願するようにディゼンは言った。

すると、電話の向こうの男もまた大きく溜息を漏らし

『お前は本当にお気楽だな。お前はそれで済むかも知れんが、ＳＣＣが出す筈だった金の行方を知らぬ訳でもあるまい。現地の地権者共に金が渡らなければ、我々の計画にヒビが入ってしまうんだぞ？だからこそ、こちらとしても穏やかではいられないと言っているのだ。――悠長なお前に一つ、重大な情報を教えておいてやる』

男の声が一段低くなる。

『……どうも、カイル駐在のＳＣＣ海外事業統括部で急な人事があったらしい。それまでダイラルド・プロジェクト現地担当者だった男が、突如そっちに召還されている。ナッシュ・マテリアル社にいます。こつち側の人間からもらされた情報だ。確報だろう』

「ＳＣＣが？　どういうことだ、それは？」

『まだわからん。が、直後にＳＣＣから投資凍結が発表されているところをみれば、偶然とも思われない。その男、何かに気付いたのかも知れん。そしてその人事が本社発令である以上、ＳＣＣ本社も一枚噛んでいると思っていだらう。ナッシュにいる付き合いのあった人間いわく、誠実で業務熱心、むざむざミスを犯して呼び返されるような男ではないとのことだ。いいか？　ＳＣＣの動向にはく

れぐれも注意を怠るな。もしかすると、この後大きな動きがあるかも知れん』

ありうべきことだ、ディゼンは思った。

現会長が就任してＳＣＣとなつて以来、最近まで統治機構組織に対して強気な態度に出た試しなどなかったという。これは企業関係の事情に詳しい下僚の話である。

それが突然、手の平を返したように強硬な姿勢をとり始めた。

貝が殻を閉じたようにして沈黙を決め込んでいるから詮索の仕様がなないものの、極秘裏で大掛かりな人事を進めていると推定したところで外れではあるまい。判断材料は極めて少ないものの、今ある情報を総合すればそういう結論が導き出せる。

「……わかった。やれるだけのことはやってみる。だから、電話くらは取つて欲しいものだな」

同意を示しつつも軽く皮肉をぶつけてやると、男はちよつと黙つてから

『こちらから送り込んだ人間に失態があつたのは認める。今は事件が立て続いて上手い具合に混乱しているようだが、直に警察機構が動き出すだろう。ロゼルの一件といい刑事を始末した件といい、ちよつと人目につき過ぎたようだ。事態が打開するまでの間、警察機構と治安機構の目を逸らすために命知らずを何人か、それに機械を送り込んでおく。……何、お前さんに迷惑はかけんよ。お前さんは動かせるものは動かして、ＳＣＣを何とかしてもらいたい。どうしても力が必要だというなら、相談には乗つてやる』

「そいつは止せ。それこそ騒ぎを大きくするだけだ。——聞いたところだと、リロビアの方が梃子搦っているのだろう？　何とかかなりそつなのか？」

『拙いな。レア・ニステイが仲介に立つた結果、昨日共同声明が出されちまった。アミュードとベグーモ教会が手を取り合った以上、我々がリロビア連邦で活動する根拠は喪われたといつていい。連中、こうなることを期して水面下で交渉を進めていたのさ。やられたよ。

リロビアにはもう足場がない。リロビア国軍もゴージャ派潰滅作戦に向けて動き出したらしいしな』

リロビア連邦は、カイルル・ヴァーレン共和国の南東に位置している。

古来ベグーモなる宗教を国教としていたが、カイルル・ヴァーレン紛争によって大勢のアミュード教徒が逃れてきて定住するに及び、両教徒間での対立が激化した。ゴージャ派はこれに乗じて勢力域を拡大すべくリロビアにおいてテロ行為を繰り返してきたのだが、大義名分としてアミュード教徒の保護、安寧を掲げていた。

しかし近年、レア・ニステイの尽力によって両教徒は和解の道を模索し始め、ついに共存共栄を主旨とした共同声明まで発表するに至った。リロビアで活動する根拠を奪われてしまったゴージャ派にとって最大の痛手となったことは言うまでもない。

彼等の凄惨極まりない手口を憎悪していたリロビア政府は、共同声明と同時に国軍によるゴージャ派潰滅作戦を発動させた。和平の脅威となるゴージャ派を駆逐すべく、手ぐすね引いて機会を待っていたのだ。

しかも同政府は根回しがいいことに、宗教紛争解決の兆しが見えた時点から世界主要国家に対し、友好条約締結を打診していた。リロビア軍主導での血生臭い他民族弾圧が繰り返された結果、各国は国交を拒絶し続けていたのである。が、リロビア政府の方針が百八十度転換された今、もはや国交を拒絶する理由は消滅したといっている。この後、友好条約締結の動きは加速度的に進んでいくに違いなかった。

男は、そのことには余り触れようとはせず、よろしく頼む、と短く結んで電話を切った。

手にしていた携帯端末をデスクの上に置いたディゼン。

（やれやれ。事態はよほど深刻らしいな。ゴージャ派きつての戦略家と呼び名の高いあの男の完璧なシミュレーションが、たかが婆さん一人の力で破綻してしまっただけだから……）

チエアの背もたれに寄りかかったまま、しばらく沈黙していた。すると、秘書室からの内線通話ランプが点灯し

『ディゼン知事、ＳＣＣ経営推進室室長イゲル・ミックステア様からお電話が入っております。いかがいたしますか？』

よりによつて、ＳＣＣからである。

「ＳＣＣ？ 何だつて、このタイミングで」

しかも、聞いたことのない名前の人物であつた。

解せない、といったように眉をしかめつつもディゼンは

「カーヤ君か。つないでくれ給え。大切な電話だからね」

『畏まりました』

回線接続のランプが点灯するのを待つて、受話器を取り上げた。

「……もしもし、知事のディゼンですが」

名乗ると、受話器の奥から若く快活な男性の声が届いてきた。

『公務でご多忙のところ、大変申し訳ございません。私、ＳＣＣ経営推進室のイゲル・ミックステアと申します。本日は折り入つて知事のお耳に入りたいお話がございまして、お電話を差し上げた次第です』

えらく歯切れがよく、声は大きいが決して不快な感じはしない。

ディゼンは電話の相手に微かな好意を覚えつつ

「ほう、それはご苦労様です。して、お話とはどのような？」

『はい、昨今世間をお騒がせしております、ダイラルド・プロジェクト投資の件です』

『——と、いった次第ですよ。セラアさんには報告が遅れてしまつて申し訳なかつた。どうかここは一つ、この年寄りの顔に免じて許してやってください』

「はあ……」

コードレスの受話器を握り締めたまま、固まっているセラア。電話の相手はイーファム・ヘッズマンである。

彼は旧ヴォルデ派によるステイレーングループ再生計画の進捗について事細かに説明してくれたのだが――その緻密かつ豪胆、電光石火ともいえる手の打ち方に、話を聞かされたセリアはただただ呆然とする思いだった。

ロットが社長を務めるストレイア工作所に招待され極秘計画を打ち明けられたあの日、彼女の与り知らぬところすでに事は始まっていた。

イリオスが帰国した翌日、彼がカイレル・ヴァーレンから持ち帰ってきた重要資料を携えたイーファムらは、会長サントス以下現経営陣の元へ直談判すべく乗り込んだ。会議の場は自然、サントス派對旧ヴォルデ派という構図が出来上がってしまったている。

結果からいえば、旧ヴォルデ派は終始サントスらを圧倒した。

特別会議と称する直談判はS C C本社の一室にて行われたが、やってきた旧ヴォルデ派メンバーを一目見るなりサントスの顔色が変わっている。

「イ、イゲル君！ 君は、何故……そちら側の席にいるのかね？」

彼にとって忠実な部下どころか、グループ内からサントス派急先鋒という悪評まで頂戴していた筈の男である。サントスが我が目を疑ったのも無理はなかった。

イゲルは表情を消したまま、サントスの頼りない視線を真っ向から跳ね返しつつ

「何故って会長、将来にわたるステイレーングループ繁栄のためですよ。そのためにはどうすればいいか、本日は大いに論じさせていただきたいと思います。もっとも」

言葉を区切り、ニヤリと笑った。「……テロ組織のような反社会的反人道的行為を平気でやらかすような連中とは明確に一線を画すことこそ、今の我々にまず必要な行動であると断じますがね」

すでに対決の火蓋は切って落とされている。

イゲルはダイラルド・プロジェクトにおける地下資源開発予定地域の広域図面を配布し

「ただ今お配りしたのは、開発予定地地権者分布図です。ざつと五十軒近い土着の地権者がおりますが、このうちの実に三十九軒、氏名が赤字になっている地権者につきましては熱狂的なゴーザ・ディミニイ信奉者、もしくは長年にわたる後援者であることが判明しております。これが何を意味しているか、会長にはお分かりいただけると思いますが」

「……」

のっけから破壊力抜群のプレゼンテーションである。サントス派からは声もない。

（イゲルさんも人が悪い……。最初からこれを出すなんて）

彼の隣に座っているロットは可笑しくて仕方がなかったが、笑うべき場面ではない。必死に笑いを堪えている。

イゲルの雄弁は次第に熱を帯びていく。

「ゴーザ派といえば世界各国治安当局が恐れる最悪のテロ組織であることは皆さんご承知の筈です。ナツシュ社との提携当初、なぜこの事実気付かなかったのでしょうか？ 無論、我々SCCから投資された巨額の金が彼等に渡るとは限らない。しかし、どのみちプロジェクトの進行によって彼等地権者の手に莫大な権利金が落ちることだけは確かだ。そしてその金が最終的にどこへゆくのかも」

ドン、と拳で卓を打った。

「……これはもう、立派なテロ活動幫助です。カイレル政府高官はナツシュ社はじめ参画企業から十分に甘い汁を吸わせてもらっている以上、見て見ぬフリを決め込むのは当たり前ですよ。イリオス氏が現地住民から言われたそうですよ。お前らが出した金はめぐりめぐってテロ組織の武器となり、その武器はやがてお前らの国を襲うんだ。それでいいのか——と。実に穿った表現じゃありませんか」

「口を慎み給え、イゲル君！ 我々がテロ組織に加担するなど、ありうべき話ではない！」

堪りかねたように咆えた者がいる。

SCC常務取締役アラン・ルー！

サントスの腰巾着と言われている男で、海外事業部時代からの腹心といっている。

「仮に現地の地権者がゴーザ派信奉者だったとしてもだ、だからといって即テロ組織に金が回るなどというのは短絡的すぎるだろう。そんなものは仮説に過ぎんよ。馬鹿馬鹿しい！」

些か感情的になっている彼は、吐き捨てるように言った。

が、そういうアランに対し、正面に座っているリユードが物静かな口調で応じた。工業用機械製造メーカー「ストウルド精機」代表取締役社長である。

「……確かに、イゲル君が述べたことは仮説の域ですよ。しかし、そうなる可能性が高いとわかっていて巨額の投資を強行し、結果的にゴーザ派に金が流れたならばどうします？ 警察機構は間違いなくSCCの捜査に踏み切りますよ。それに、イゲル君が言った通り、我々が投資しようがするまいが、開発予定地が決定されている以上、地権者に金が落ちることは必定です。つまり、ダイラルド・プロジエクトそのものがもはやテロ組織を幫助するような性格を帯びてしまっているといえるではありませんまいか」

つとサントスの方に体の向きを変えた。

「——サントス会長、苦渋のお気持ちは十分理解できますが、今をおいて決断の時はありません。判断が遅れてしまえば、やがて世間是我々を嘲笑するどころか憎悪の目で見るでしょう。どうか、賢明なご判断を」

どこまでも冷静なだけに、侵しがたい威厳がある。

サントスは卓の上に両肘をつき、顔の前で手を組んだまま身じろぎもしない。その視線はずっと卓の一点に注がれ続けている。

それから両者の間でいくつか応酬があったが、サントスら投資推進派に利がないことは誰の目にもあきらかであった。彼等はカイル政府の心証や契約不履行によるSCCの社会的信用性といった話を持ち出してしきりと抗弁を試みたが、いずれも枝葉末節の議論に過ぎない。リユードが口にしたように、SCCがテロ組織を幫助し

た——結果としてであれ——と世間に認識されてしまえば、それでは終わりなのだ。仮に、地権者の大多数がゴーザ派だったという事実をカイル政府が口を噤んで黙っていたにせよ、マスコミにでもリークされてしまえばどうにもならない。

血気盛んなイゲルはこれでもかとはかりに弁じたて、経営陣に巨額投資の撤回を迫った。一中堅幹部が経営幹部を徹底的に追及するなどという行為は、本来の組織的倫理からいえばあり得ない。が、事はそういうおざなりな建前で済まされなくなっている。犯罪組織の片棒を担いでしまった時点で、企業そのものが反社会的集団たりうるのだ。

次第に無力化していくサントス派重役らの姿を目にして、独り口ツトは考え続けている。

（そもそも会長がナツシュ社の裏事情を無視して独断で専決してしまっていた以上、イゲルさんが抱えるまでもなくこの議論はこちらが勝つに決まっている。といって、ここで経営陣を完膚なきまでに粉砕してしまうのは得策ではないような気がする。果たして、ここで切札を出したのかどうか）

彼は手帳を取り出して短く走り書きすると、隣席のイーファムにそつと差し出した。

それを目で読んだイーファムは軽く頷き、なおも抱えているイゲルを制止した。

「……そろそろいいでしょう。経営幹部の各々には、我々の微衷が少なからずご理解いただけたものと思っっている。言うまでもなく、今回の投資は我々を災禍に叩き込みこそすれ、将来的な利益をもたらすことは何一つないでしょう。それでもなお強行するというのはあれば、こちら側としても最後のカードを使わねばならないが、お互いに穏便に事を運ぶという観点でそれは望ましくないと考えている」

「何のことかね、イーファム君。言っている意味がよく、わからないのだが」

副社長レッツ・ヘイトが呻くような声を出した。

イーファムは微笑を浮かべ

「それを言わせようというのですかな？ 私は敢えて、譲歩したつもりなのですが」

「譲歩も何も、我々にはやましいことなどないと言っている。これ以上、いい加減な発言は止してもらおう。奥歯に物を挟めたような言い方など、君らしくもないんじゃないか？」

それは、とアランが言いかけたが、すでにイーファムは一枚の資料を手に喋りだしてしまっている。

「——三年前、ヴォルデ前会長が逝去された後、当時の海外事業統括部長だったサントス会長、それにレッツ氏以下社員数名がナツシユ社幹部と内密に会合をもたれていたようすな。これは一度ならず数回にわたって行われていた形跡がある。少して帰国すると、すぐにG地区東エリアのプレミアム・タウンに大きな邸宅を購入されている。そういえばレッツ副社長は、同じタイミングでヴァン・フォーミユラ社最新モデルの高級車をお買い求めでしたな。……皆さん、カイレル常駐時代はさぞかし質素な生活を心がけられたものとお見受けしますが」

「……」

沈黙したレッツ。

しまった、という胸中の焦りが、そのまま顔に出てしまっている。サントス派もとい投資推進派はとどめを刺されたような格好になった。

あとは、議論も何もない。

全員の視線が、座の中央にいるサントスに注がれている。

「……わかった」

ややあつて、彼はゆっくりと姿勢を正した。

「ダイラルド・プロジェクトへの投資については、これを保留する。ナツシユ・マテリアル社はじめ関係機関には、至急そのように連絡してもらいたい。マスコミへの発表は決定事項のみを伝達し、詳細

な説明は後日追って行うものとして欲しい。――以上だ」

それだけを言い、退席したサントス。

すっかり気を喪い、長身の身体が一回り小さくなったように見えなくてもない。

こうして無益な巨額投資を据え置かせることに成功した旧ヴォルデ派の面々だったが、やるべきことは他にもあった。

『凍結を打ち出せばカイル政府や州統治機構が騒ぎだす。そういう事態はとうの昔に想定しておりましてね、これはスティーレイン・セントラル・バンクのマッセ頭取からお知恵を拝借したのですが――』

イーファムは愉快そうな調子でセラに言う。

案の定、SCCが投資凍結を発表して間もなく、ファー・レイメンティル州都市統治機構より事情の説明を要請する文書が届いた。サントスの突然の翻意に狼狽した経営陣は体裁も何もあつたものではなく、敵である筈の旧ヴォルデ派メンバーに対し対応策の検討を請う始末であつた。

イーファムらも、そこは抜きなく準備してある。

州政府が焦り始めるのを待ってイゲルは、ディゼン知事に直接連絡を入れた。

『条件？』

イゲルの説明を聞いたディゼンは不思議そうな声を出した。

「そうです。当方としては無碍に約を違えるつもりは毛頭ありません。しかしながら、背後にテロリストの影が見え隠れしている以上、事態がはつきりしなければ到底投資に応じられるものではない。知事にはご理解いただけるでしょう？ ファー・レイメンティルを代表する企業がテロ組織に資金を拠出したとあつては知事ご自身、国家統治機構はじめカイル政府に対して合わせる顔がないではありませんか」

彼が提示した条件はそれほど複雑なものではない。

地下資源採掘予定地の一部変更、およびSCCによる投資全額を

もって採掘工事に要する機器、資材に充てよという内容である。複雑ではないが、プロジェクトを根底から考え直せといっているに等しく、ナツシュ・マテリアル社やカイル政府が聞けば激怒するであろう。そこまで制限されるいわれはない、黙って契約に従って金を出すのがそちらの役割だろう、と。

しかしながら、イゲル達は彼等カイル側の弱みを巧みに衝いている。

今回の投資凍結がテロ組織との関与を疑ったためだと公表した時点で、窮地に立つのはSCCではなくカイル政府やナツシュ社側なのだ。意地の悪いことに、SCCは未だ投資凍結に関わる詳細を関係機関はじめマスコミに対し一切説明していない。全てはSCCの匙加減一つ、という状況であるといっている。

仮にSCCを除外してプロジェクト着手を強行すれば、資金面で大きな支障が出る。

かといってSCCを怒らせれば、世間に晒されていないカイル共和国が抱える裏事情が露顕してしまうことになる。

事を穩便に収めるには、どう転んでもSCC——正確にはマッセの知恵だが——の申し出を飲むよりないことは火を見るより明らかであった。ただしその場合、ゴーザ派にとって大きな痛手は免れない。当てにしていた金は一銭たりとも彼等の懐に転がりこんでこないのである。

（おのれ、ステイレーン！　よくも小細工を弄しおって……！）
電話の向こうではディゼンの腸が煮えくり返っているのだが、イゲルの知ったことではない。

では州都市統治機構ならびに国家統治機構におかれましてはよろしくご検討の程を、と涼しく言って受話器を置いたイゲル。

今後カイル政府やナツシュ社がどう結論付けるか、それは目に見えている。

——ダイラルド・プロジェクト着手延期と計画全体の見直し。
その内容に問題がなければ、額を縮小した上で応じてやればいい、

というのがマツセはじめ旧ヴォルデ派メンバーが立てた見通しであった。最終的に投資に踏み切れるならば、カイル政府への信義を損なうことにはならない。元の元をたどれば、金に汚いカイル政府高官、それにテロ組織との関与をひた隠していたナッシュ社幹部の撒いた火種なのだ。多少の火傷くらい負ってもらっても罰は当たらないでしょう、そう言っただけで笑ったのは頭取マツセである。

こうしてステイレーングループは眼前の危機を脱することに成功した。

が、話の締め括りに、イーファムはセレアに言う。

『ですがセレアさん、本当の戦いはこれからですよ。あとしばらくはサントス氏を泳がせておきますが、最終的には舞台からお引取りいただかねばならない。それに、今回の我々の行動はカイル共和国を根城としているテロ組織に対する宣戦布告にも等しい。恐らく、穏便には終わらないでしょう』

そこで一度黙ったイーファム。

やや間をおいた後

『……そこでセレアさん、私からお願いがあります。大変申し訳ないのだが今からしばらくの間、奔走していただきたいのです。必要なモノは全て用意して差し上げるつもりだが、如何せん我々の力では本当に必要な人材というものは用意できないのですよ』

イーファムはやや申し訳なさそうに、しかし楽しそうな声で笑った。

一瞬、彼が何を言わんとしているのか理解に苦しんだセレア。

しかしその直後、彼女はこれから始まるうとしている驚天動地の計画を聞かされることになる。

<落日編 了>

落日編13 急所（後書き）

ここまでS2Sをご覧ください、誠にありがとうございました。
篤く篤く、御礼申し上げるものです。

事柄が激しく錯綜し、書いている筆者も思わずブレそうになりました。恐らく多少のブレは残してしまっておりますが、平にご容赦願う次第です。

ここまでは序盤です。今後の展開につながる布石を打っておきたく、これだけの紙数（ネットでは文字数）を費やさせていただきました。またしばらく、お付き合いをお願いするばかりです。

2011.5.1 筆者 北野鉄露

閑話休題・挿画

これは本文ではありません。

次話より新章へ移行となりますが、その前にここで初めての試みを許されたいと思います。

みてみんにおいて、拙作「Star-line」の登場人物のイメージほぼそのままのイラストを描かれていた方がいらつしやり、あまりのクオリティの高さに惚れ込んでしまいました。

筆者から作者様へイメージイラストとして拝借できないか伺ってみましたところ、快く承諾してくださいましたので、有り難く本作において掲載させていただくことにいたしました。

以下、若干のコメントをつけてご紹介させていただきます。二点あります。

イラストご提供：葵翔様

なお、イラストの著作権は葵翔様に属します。
転載、複製等著作権に触れる行為のないようお願いするものです。

その1)

> i 3 0 3 1 5 — 3 4 0 5 <

女性らしいもの柔らかさと穏やかな感じが伝わってくるイラストです。

このようなイメージの容貌をもった登場人物として
セラ・ステイレーン（1stシーズン時代）

イルメシア・バドウ

上記の二人が挙げられます。

どちらも作中において設定されている年齢がやや高いため、そのまま一致するということにはならないかも知れませんが、筆者としてはセレアのイメージが強いです。穏やかな面立ちとふわりとしたヘアスタイルが、いかにもセレアらしいのです。

こういう美しくて優しげな上司をもったStar-lineの面々は希有の幸福に恵まれたといつていいでしょう。

その2)

> i 3 0 3 1 6 — 3 4 0 5 <

こちらは一見ボーイッシュな雰囲気を漂わせつつも、その1とはまた違った女性らしさに溢れていると思います。どこまでも女性特有の雰囲気を巧みに表現しているところに、葵翔様の卓抜した描画技術を感じるものであります。

拝見した瞬間、すぐに思い浮かべたのは

ナナ・フィリス(1stシーズン時代)

ユイ・エルドレスト(1stシーズン時代)

この二名ですね。

どちらかといえば1stシーズンでは、ユイは多少子供っぽい一面があり、見た目にも元気な少女、という設定を考えていました。そうすると、このイラストにさらに適当なのはナナということになります。1stシーズンにおけるヒロインといってもいいでしょう。天才ドライバー・サイをずっと支え続けてきたナナは、こういう感じの子だったんですね。

上のイラストの感じは、始動編2で初登場する場面のイメージそのままです。想定していた彼女の容貌や服装にぴたりと符合します。ちなみに、結章でサイからプロポーズされた時には髪を長く伸ばしています。

サイがつかんだ本当の幸福は、Star-lineに入隊して収入を得たことよりも、彼女と結ばれたことだったのではないでしょうか。筆者としてはそのように想像します。

グレードの高い素敵なイラストをお貸しくださった葵翔様、ありがとうございます。

葵翔様の作品は、みてみんなにおいて閲覧することができます。

再生編1 暇な人々

ショーコ・サクがようやく手に入れた、自由な日々。

最初の数日間には真昼間から自宅でビールをあおりつつ、ぼへーっとテレビを眺めて過ごした。

（ホントに、ウソのようにヒマになったわね。ま、収入もなくなっ
てしまったけど……）

それはまあいい。

今の今まで稼ぎ貯めてきた金がある。よほど悪さをしなければ、あと数年間は毎日寝て暮らせるであろう。

しかし、とショーコはふと思う瞬間がある。

あの地獄のように忙しかった日々は何だったのであろう。全てを投げ打ってまで彼女が守り抜こうとしたものは、あつという間に消えていつてしまった。それを思うと、瞬間的に虚しさが込み上げてくることがある。自分の中では完全に割り切ったつもりだったが、時々やりきれない気持ちになるのはどうしたことであろう。だが、今さらどうにでもなるものでない。この結末を選んだのは誰でもない、自分自身なのだ。

そういうモヤモヤを紛らわせてくれるのは酒とテレビくらいなもので、あとはこれといってない。友人らしい友人もいないから、どこかへ遊びに行きたくても行きようがなかった。そう考えると、これまでの自分は本当に仕事一筋人間ではなかったのかという気がしてくる。

ぼんやりしていると、不意にたった一人の友人の顔が脳裏を過ぎっていった。

（ああ、カレンのヤツ、今頃どうしているかしら？ 何度も手紙く
れてたんだっけ。たまには差し入れでも持って、面会に行つてやる
うかな。ウイスキーのボトルってワケにやいかないと思うけど……）

その友人だった女性は、凶悪事件の主犯として逮捕され、服役中

である。刑務所に入れられて冷静になった途端人恋しくなるものなのか、しきりと手紙を送って寄越してきていた。文面にはいつも、たまには会いに来いと綴ってある。

会っていないといえば、セレア。

退職に伴う幾つかの手続きをとる際に打合せをしたのが最後だったような気がする。彼女は今、どうしているのであらう。ステイレーングループで唯一の居場所であったStar-lineが消滅した今となつては、シヨコだけでなくセレアとて放り出されてしまっているのではないかと、ふと気になったりした。

が、こうなつてしまえば彼女との接点など皆無に等しい。結局は雇用者、被雇用者の関係に過ぎなかったのかも知れない。あれきり、電話の一本も寄越されることはなかった。

ただ、シヨコがStar-lineを去ってから程なく、ステイレーングループはにわかにもスコミを騒がし始めた。カイレル共和国内資源探掘プロジェクトへのSCCの巨額投資計画が突然一方的に凍結されてしまったらしく、テレビの報道番組は昼夜その一件を報じ続けている。しかし、その判断を下した会長サントス自身は一向にカメラの前に姿を現さず、加えてSCCから何のコメントもない。いよいよ憶測が憶測を呼び、SCC内部に深刻な内紛が生じているのではないかと報じるメディアもあつた。事実はその通りであり、セレアはその渦中に巻き込まれているという訳なのだが、今はただの退職者に過ぎないシヨコがそうした事情を知る由もなかった。

彼女としては、この期に及んでSCCが潰れようと砕けようと知ったことではない。

強いていうならば、あの傲慢で陰険でついでにドスケベな会長に對してざまを見る、と思っただけのことである。サントスといえバリファが秘書を務めているのだが、聡明な彼女は然るべく立ち回るに違いない。その点、何の心配もしていないシヨコ。

——そんなある日のこと。

相変わらずすることもないまま、ソファに転がって雑誌を読んでいると、玄関の呼び出しベルが鳴った。

「はいはいはい。新聞なら間に合ってますけど……」

どこぞの訪問セールスなら居留守を使おうと思いいながらのぞき穴から表の様子をうかがうと、ちらりと小柄な人影が見えた。

「シヨールコさん！ ナナです！ リノもいますよー！」

「ちょこしゃーん！ リノだよー！」

ドア越しの聞き知った声に驚き、喜び勇んで開錠しようとしたシヨールコ。

が、ハタと気がついた。

すっぴんで髪はボサボサ、Ｔシャツにパンツというあられもない格好。これはさすがに二人に見せられたものではない。

「ナナちゃん！ ちょ、ちょ、ちょーっただけ、待っててね！ すぐに開けるから！」

「はい」

つんのめるようにして部屋の奥に飛び込んでいき、ありあわせの服を身につけた。

「お、お待たせ……！」

手ぐしで髪を直しつつドアを開けた先にいたのは、幼い女の子を抱いた若い女性。

ナナとその娘、リノ。

Star-line 第一期の隊員である。シヨールコにとっては部下であると同時に、愛する「妹」的な存在でもあった。

五年前に組織の一次改変があった時、他会社へ異動する権利を放棄して踏みとどまってくれた。そのタイミングで同じくStar-line 隊員でフォワードドライバーのサイ——二人は幼馴染みだった——と結婚したのだが、三年前の二次改変の際、妊娠を理由に退職した。その後数ヶ月して生まれたのがリノである。この愛くるしい幼女は大らかな父と母をもったせい、表情が豊かな上にやたらと人懐こい。

「急にどーしたのよ!? 来るなら来るって、連絡くれればよかったのに」

「そうしても良かったんですけどねえ。きっと、毎日裸みたいな格好でゴロゴロしているだろうと思って、わざと連絡しないで来てみたんです。案の定でしたね」

くすくす笑っている。

「……」

自分というものの性格を完全に読まれていたシヨコ。しまった、という顔をした。

が、幼いリノがじーっとこっちを見ているのに気付くと、途端に相好をくしゃくしゃにして

「リノたーん! 元気だったー!? ちょっと会わないうちにうんと美人になったねえ! ママも美人だもんねー」

「ちょこしゃんもびじんだよ! だーいすき!」

リノは母の胸からシヨコの腕の中に飛び込んだ。抱きついたり頬擦りしたり彼女の大きな胸に顔を埋めたり、大変な喜びようである。

シヨコはリノのなすがままにさせていたが

「ささ、入った入った。ここんとこ好き勝手に生きていたから、ちょーっち汚れているけどね」

「お邪魔しまーす」

中へ一歩足を踏み入れたナナは啞然とした。

ちよつと汚れている、どこの騒ぎではない。足の踏み場もない状態ではないか。服が無造作に脱ぎ散らかされ、その隙間にはビールの空き缶やらテイクアウト食の包み紙が放り投げられている。よくもまあ派手に汚したものである。引越してきてまだひと月と経っていない筈ではなかったか。

「ちょこしゃん! おへや、きたないよ!」

リノから舌の回らない言葉で容赦ない指摘をくらったシヨコは、ばつが悪そうに笑いながら

「え、えへへ……ごめんごめん。掃除しようかなーって、思ってたところだったんだ……けど……」

「おそうじしなきゃだめでしょ!」

「はい。すみませんでした」

そんな二人のやりとりを仕方なさそうに眺めていたナナは

「しょーがないですねえ。……リノ、ショーコさんに遊んでもらってなさい。ママは今からこのお部屋を掃除するから」

シャツを腕まくりしている。

「え……そんな、いいよ。掃除くらい、あとでするし……」

「今掃除しないと、あたしの座る場所がないんです」

昔からそうだったが、ナナには容赦というものが塵ほどもない。

「……」

——それから二時間ばかり、洗濯をしたりゴミをまとめたりと、ナナはテキパキ働いていた。

その間、リノを相手に遊んでいるショーコ。

本当は、もっと早く会いたかった。

が、彼等の家庭という敷居をまたいではならないような気がして、今の今まで自分から訪問していくのを躊躇っていたのである。直感の鋭いナナは、そんな彼女の心情に気付いたのである。不意ではあったがこうして訪れてきてくれたことが、ショーコは無性に嬉しかった。

部屋の中が見違えたように綺麗になると、ナナはお湯を沸かし始めた。

「そのフォー・ラ・ドウ・パーラーでケーキを買ってきましたんで、お茶煎れますね。さすがにショーコさんでも、ケーキ食べながら缶ビールは飲まないでしょ?」

悪戯っぽい笑みを浮かべている。

するとリノも

「のまないでしょ?」

母の真似をした。

「やあね、二人共！ あたしがそんな、年中無休の飲んだくれに見える？ 朝から飲んだのは最初の一週間だけだからね！ 今はもう、日中は飲んでないわよ。そりゃあ、夜は寝酒くらい飲みに行ったりするけどさ……」

「わかってますよ」

キッチンカウンターの向こうで腰に両手を当てて立っているナナ。その表情が、天使のように優しくなっている。

「ここしばらくSCCがどれだけ大変だったのか、サイから聞いて全部知ってます。あれだけグループを守るために戦ったショーコさんに対して、SCC本社がどういう態度でいたのかも。——この六年間、飲みたいのを我慢して仕事してたんですから、しばらくは飲みたいだけ飲めばいいじゃないですか。あたしが言いたいのは、健康にだけは気をつけてくださいね、ってことです」

老母を労わる子供のような思いやりに、思わずほろりとしかけたショーコ。

が、リノの前でそれはカッコ悪いと思い、無理矢理ニカツと笑って見せた。

「えへへ、ナナちゃんったらすっかり大人になっちゃって！ そんなに気イ使われちゃ、まるであたしがすごく歳くつたみたいじゃないのよ」

「それってあたしもトシだったことですよ？ ショーコさんとは二つしか離れてないんですから」

「……」

——ともあれ、お茶の用意ができた。

まだ三歳のリノは、自分で思うようにケーキが食べられない。

フォークで小さく小さく切り分けながら、一口づつ食べさせてやっているショーコ。

「美味しい？」

「うん。ちょこしゃんのケーキ、おいしいよ」

「リノちゃんってば。あたしが作ったんじゃないよー」

ナナはそんな二人を微笑ましそうに眺めていたが、ふと

「シヨールさん、幼児保育施設の保育員とか向いてるんじゃないありません？　今までＣＭＤばかり触ってましたけど、意外と適ってるんじゃないかしら？」

そんなことを口にした。

シヨールはリノの口の周りをウェットティッシュで拭いてやりながら

「そうでもないのよ。リノちゃんは別格。こうやってあたしみたいな人間を無邪気に慕ってくれるから、愛せるの。でも、好き勝手に暴れまわるガキ共相手に毎日暮らしていたら、ストレス溜まって寝酒の量が増えていくだけね。そういう意味で、どうせ毎日力才合わせるならＣＭＤの方がよほどいいわ。体調管理が難しくて面倒くさくて目を離せないっていう点では子供みたいなモンだけど、それでも」

リノの小さな体を抱き上げてやった。「……好きなのよ、あれが。だから、ここまで来れたと思っているの。そうじゃなかったら治安機構の時みたいに、とつくのとうに辞表叩きつけて辞めていたわね」
彼女に抱っこされたリノは、胸に顔を埋めて大人しくしている。

やや眠そうであった。

「あたしは、さ」

言ったきりしばらく言葉を選んでいたが、やがてゆっくりとナナの方へ顔を向け

「……今思えば、みんなに迷惑かけっぱなしだった。ティアとかリファとか、後ろから刺されてもおかしくなくらいに当り散らしたりしてたもの。副長とか隊長とかやらせてもらったけど、根はただの整備員なのよね、リベルさんみたいに。人の上に立ったり、人をまとめられる柄じゃないって、自分で思ってるんだ。——だから、Star-lineがなくなる日、みんなからメッセーজカードもらってすごく嬉しかった。あんなにひどいあたしだったのに、わざわざ労ってくれるんだもの。つい号泣しちゃったわよ、サイ君とリ

ベルさんの前で」

その、メッセージカード。

立派なパネルに入れられ、壁に飾ってある。

写真の一枚すら飾ることのなかったショーコがこういうことをするのは珍しい。よほど感激したのだらうと、一目見た時ナナは思った。ショーコ自身、自分を人の上に立てない人間だと自嘲しているが、その彼女の下で六年間、延べ三十人も部下達が指示命令に服して働いていたのだ。末期の頃になると離反する者も現れはしたが、それはショーコ本人への反逆ではない。Star-lineを管轄していたステイレーングループという組織、そしてその首脳陣のやり方に異議を唱えたのであって、その証拠に彼等はショーコとのやり取りにおいては至って冷静かつ好意的であった。

Star-lineを去るにあたり、彼女に向かって「私は隊長に対しては何の恨みもありません。最後に、それだけはお伝えしておきたかった」そう述べた隊員が何人もいたという。その話はめぐりめぐってサイの口からナナに伝わっていた。

膝の上にカップを置き、両手で丹念に撫でながらショーコのとりとめもない言葉を黙って聞いていたナナ。

どう言ったものかとしばらく考えていたが、つと壁にかかったメッセージカードのパネルに視線をやった途端、そこに的確な表現を発見することができた。

ナナはにこつと人懐こい——かつてショーコが愛した——笑顔を見せて

「でも、ああやってショーコさんを慕う人達は今も間違いなくいるんですよ。六年の間にショーコさんが築いたものは、Star-lineという組織じゃなくって、組織がなくなっても続いているみんなの信頼なのかなって思います」

ああ、そうか。

煎れてもらったお茶を飲み下しつつ、ショーコは素直にそう思った。

Star-line時代は目先の自分しか見えていなかったが、
ようやく心に余裕ができた今、ストリートに他人の言葉に耳を傾け
られる自分になったような気がする。

「……ありがと。そう言ってもらって、何もかも報われたような気
がする。Star-lineにいてホントに良かったって、心の底
から思えるわ」

彼女の胸の中では――遊び疲れたのか、リノがすやすやと気持ち
よさそうに寝息を立てていた。

うとうとしていると、不意にコンコン、と病室のドアをノックす
る音が聞こえた。

「はい……」

返事をしてやると、ドアがカラリと開き

「せんぱーい、メイファです。お見舞いに来ましたよ」

「おう、メイファか。お前今、忙しいんじゃない……」

言いかけて、固まったエド。

見舞い客はメイファ一人ではなかった。

「エドさん、お加減はいかがですか？」

そこにはもう一名、長身の美女がいた。メイファの親友、リナ・
フィットナーである。

「先輩が入院したって教えたらリナ、どうしてもお見舞いに行きた
いって言うから連れてきちゃいました。病室にこもってたら目の保
養に困るでしょ？ 穴が空くまで見つめていいですから」

「そおですよあ！ 私のこと、好きだけ見てください！ どうせ
なら、思い切り抱き締めてくれてもいいんですよ？ エドさんにな
ら私、抱かれてもいいんです！」

ずいぶん思い切った台詞をぶちまけた。

「あ、いや、それは……」

美女に好かれて悪い気はしないものの、彼女には天然系かつ豪快

という特性が備わっている。それを思うと、どうもぞつとしない。迂闊に付き合ってもしようものなら、いつかS.C.C会長のサンテスよろしく、引っぱたかれるのではあるまいか。

「私、先輩の好きなパン買ってきました。お金なかったんで、これで勘弁です」

メイファは警察機構本庁近くにあるベーカリーショップのカレーパンとサンドイッチを買ってきてくれていた。エドが好きだと言っていたのを覚えていたらしい。

「お？　気が利くな。パン屋のパンは贅沢のうちだぜ？」

メディア・レイメンティル社爆破事件の現場で起きた自爆騒ぎにより、軽傷を負ったエド。念のために要検査ということで、課長モルトの命により無理矢理数日間入院させられる羽目になった。が、そもそも怪我の具合は大したことがなかったため、食事制限は設けられていない。

三人でパンにかぶりつきつつ

「捜査の方はどうだ、メイファ。あれから何か喋ったか？」

何気なく、気になっていたことを尋ねてみると、

「先輩、第三者の前で捜査の情報を喋るなって、私のこと叱りましたよね？　それなのに、今聞こうっていうんですか？」

メイファの目つきが刺すようになっていく。

今更ながら気付いたが、この娘は記憶力がそれなりに優れているらしい。エドが何気なく喋ったことでもちゃんと覚えていて、言った彼が忘れかけた頃に彼女の口からポツと出てくるのがまあるが、そのほとんどはエドに逆襲を仕掛ける場合であり、そういう意味では性格が執念深いだけなのかもしれない。

「馬鹿だな、お前は。口を閉ざして絶対に喋るなとは言っていないだろう。これはいい、これは駄目って、お前の中で情報を重要度別に選別して、喋ってもいいと思った内容は話して聞かせる。それが刑事にとって大事なことなんだ。何でもかんでも秘密にしちまったら、聞き込み捜査なんかできなくなるだろうが」

馬鹿呼ばわりされたのが癪に障ったのか、ムツとした顔をしているメイファ。

口を尖らせて

「せっかくお見舞いにきてあげたのに、馬鹿なんてひどいじゃないですか。そういうこと言っんなら私、課長とかウオレンさんに先輩の秘密、喋っちゃいますからね？ 課長から言われて先輩のパソコンを立ち上げたんですけど、花っていうフォルダを見つけたんです。エド先輩、柄にもなくお花なんかに興味あるのかなあって思って開いてみたら、何十枚ものはだ——」

「わーかった！ 悪かった、俺が悪かった！ 謝る！ だから黙秘しろ！ 頼む！」

形勢は逆転した。

ベッドの上で正座して頭を下げているエドを、上から冷たい眼差しで見下ろしているメイファ。

そんな二人をリナはにこにこして眺めながら

「お二人、すごく仲いいですよねえ。あたし、エドさんみたいな先輩をもったことがないから羨ましいです。なのにメイファったら、エドさんの足が臭いとかすぐカツコつけたがるとか、あたしに悪口ばかり言っんですよ。それだったら、エドさんをロープで縛り上げてからトランクに押し込んであたしにくれればいいのに」

春風のように爽やかな口調で凶悪なテロ発言。

エドとメイファは啞然としている。

「私、足が臭いなんてひとつとも言っていないんだけど……」

「ロープで縛り上げてトランクに詰めろって……」

——リナの一撃で文句を言う気も失せたメイファは、あらためてエドが入院した日以降の捜査の状況について触れた。

職場を襲った二重の惨劇に、完全に疎みあがっていたアンジェラが、警察機構本庁による徹底した保護体制のお陰でやや心地を取り戻したのか、翌日になってぼそぼそと証言を始めた。

〇地区で殺害されたケイ・バレンシアはこしばらくの間という

もの、都市統治機構本庁秘書室へ執拗に取材を申し込んでいたという。その執拗さたるや不倫相手の自宅へ電話するような熱中ぶり、アンジェラはじめ職場の同僚達は何をそんなにこだわることやある、と不思議に思っていたらしい。が、ケイはメディア・レイメンティル社きつての敏腕記者でもあり、もしかしたらスクープがかかっているのかも知れないと反面では取材の成功を期待する雰囲気もあった。

アンジェラは日頃から彼女と仲が良かったが、まったく思いもかけないタイミングで取材の狙いについて聞かされることになる。

「あたしはね、アン。ロゼル副知事を殺したのは、あのディゼン知事だと睨んでるの。考えてもみてよ、おかしくない？ ロゼル副知事は知事公務室に入ると言い残して、その直後に殺されたのよ？ あんなに嚴重に警備された場所で、外部から不審者が入ってくるなんて絶対にありえないわ。ディゼンは絶対、何かを隠している。あたしはそれを世間にぶちまけてやりたいのよ」

殺害される二日前の夜、アンジェラはケイの自宅に招かれ、二人でワインを飲んだ。

初めは職場の悪口や世間話に興じていたが、酔いが回ってきた頃、突然ケイがそんな話を口にし始めた。いきなり何よ、と問い返すとケイはアンジェラに酔眼を据え

「だって前にさ、あたしが担当だった都市統治機構の闇って記事を書き、あいつらは権力で差し止めやがったのよ！ 何が事実無根だったの。きつちりかつちり取材する、それがあたしの入社以来のポリシーだったのにさ。人を嘘つき呼ばわりして。都市機構の連中なんか、金と女にまみれた汚らしい男の集まりよ。だから五年前、ジャック・フェインにしてやられたんだわ」

ワインボトルを傾け、グラスにどぼどぼと注ぎ込んだ。そのままケイは、水でも飲むようにして一気に飲み干してしまった。

いつになく激しい酔い方の彼女を、奇妙に思いつつ見つめているアンジェラ。

ケイの怒りはわからなくもない。彼女の取材が徹底していることは、誰よりもアンジェラがよくわかっている。が、横暴な都市権力はケイにガセ記者の烙印を押すことで無理矢理事態を収めたところか、謝罪文の掲載まで要求してきたのである。腰が引け切った上司は、彼女にそれを命じた。

都市統治機構に対するケイの憤激は、もはや復讐を思い立つまでに沸騰しきっていたらしい。

が、まさか実際にその拳に及ぼうとは、アンジェラは予想もしていなかった。連日都市統治機構へしつこく電話を入れていたのは、その復讐を実施するための下準備だったのだ。よりによって、州のトップである知事を狙い打とうという。聞いたアンジェラは彼女の大胆さに驚くよりも戦慄を禁じえなかった。悪くすれば、ただでは済まないのではあるまいか。

まだ飲み足りないというのか、ケイは新しいボトルを出してきて自分のグラスに注いでいる。

「ケイ、このくらいにしておきなさいよ。そんなに飲んだら、明日の仕事に響くじゃない!」

止めたが、ケイは聞かず

「いーのよ! 明日はねえ、まっすぐ取材に出るから、社に戻るのは遅くなるって編集長に言っというて! だからちょーっとくらい飲んだって、かまやしないのよ」

「そうは言ってもねえ……酒臭い記者が押しかけていたら、先様が迷惑するでしょうに」

呆れたように言っていると、途端にケイはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「ま、取材というのは口実ね。本当は取材じゃないんだよね。——言ってみれば取引よ、取引」

「はあ? 取引?」

訊き返したが、ケイは笑っているばかりで詳しく教えてくれなかった。

翌日、彼女が職場に姿を現したのは夜の二十時過ぎであったように、アンジェラは記憶している。

「お疲れ様。取材とやらは上手くいったの？」
声をかけると、

「あら、アン！ 今朝は大丈夫だった？ あたし、ちょーっとツラかったわあ。さすがに飲みすぎたかもね。……あ、でも今の気分は悪くないわね。ってか、むしろ絶好調ってトコね」

珍しいくらいテンションがハイである。

思った以上の収穫があつたらしい。

アンジェラは一緒に喜んでやる風を装いつつ

「そう。それは良かったじゃない。じゃあ、いい話が聞けたのね？
どんな感じだったの？」

さりげなく探りを入れてみた。

ケイは髪を後ろで束ねて仕事に取り掛かる準備をしながら

「……まあ、今にわかるわよ。しばらく鳴かず飛ばずでやってかなくちゃならなかったけど、それだけの価値はあるんだから」

小さく笑みを漏らしたが、やはりそれ以上口にしようとはしなかった。

鳴かず飛ばずでやっていかねばならないとはどういう意味なのか。アンジェラは疑念を抱いたものの、直接尋ねることは憚られた。

それからというもののケイは、ボイスレコーダーに記録した内容をひたすら文字に打ち直す作業に没頭していた。仕事を邪魔されると極端に機嫌が悪くなるのを知っている同僚達は誰も声をかけなかった。

針が間もなく午後二十三時をさそうとしている時計、そしてチェアから立ち上がったケイをほぼ同時にアンジェラは目にしている。
「さつて、と。長丁場になりそうだから、一度家に帰ろうかしら。アンはまだやってくの？」

「私はあと少しやってから上がるつもりだけど……大変なら、手伝おうか？ ケイってば、かなり根詰めてやってるじゃない」

労いを込めて言うと、彼女は髪を解きながらにこつと微笑して
「あー、ありがと。でも、大丈夫よ。こればかりは、あたしがやらなきゃ駄目なのよ」

じゃ、ちよつと戻るからと言ひ残し、出かけて行つたのだが――
これがケイを見た最後となった。

五時間後、彼女は変わり果てた姿となって発見される。

「……で？」

「でつて、何ですか？」

「いや、だからさ、そのあとアンジェラはどうして会社から逃げ出したんだ？ 身の危険を感じるような何かがあったから、警察機構に駆け込んだんだろ？」

相変わらず、エドの頭脳は回転が早い。

「ああ、それなんですけど――」

その後アンジェラが業務上の確認事項があつて電話をかけたにも関わらずつながらなかった、という部分まではすでに警察機構も承知している。

午前零時過ぎ、彼女は〇地区の自宅へ歸つた。ケイの自宅があるのと同じ地区である。

締め切りスケジュールに関わる重要な確認だったため、就寝前あるいは起床後にも何度か連絡を試みたものの、一向にケイと通話ができない。最初は疲れて寝ているのかと思つたが、仕事人間のケイはベッドに潜っていたとしても大抵電話には応じる。怪しんでいるうちにふと、妙な取材の一件を思い出すのである。

（もしかしてケイ、裏の人間と会つたのかしら？ 確か、言ってみれば取引だとかいう妙な言い方をしていたわよね……）

事件を疑つたアンジェラは職場へ出てケイの在非を確かめた後、警察機構緊急応答センターへ電話を入れる。

緊急応答センターでは通報者の現在地を特定の上、その地区の所轄署へ連絡する仕組みになっている。一報を受けた〇地区統括本部署では東西南北各エリアを管轄してるエリア署にケイの搜索を指示

した。

が、警察機構による搜索は必要なかった。

アンジェラの搜索願より早く、〇地区繁華街にて女性の他殺体が発見されていたからである。被害者の人相や特徴がアンジェラからの申告とほぼ一致したため、ケイ・バレンシアと特定された。エドとメイファはちょうど現場にいたため、その報に接している。

が、その間、事態は別の場所でも進行していた。

ケイが出社してきていないがどうか確認するべく、いつもより早く会社へ向かったアンジェラ。

彼女はケイの不在を知るとすぐに警察機構へ連絡したのだが――
少しして、警察機構職員を名乗る男性から何度か電話がかかってきた。

うち一本は明るい男性の声で、「〇地区統括本部署捜査担当、ブラン・ノイと申します」と名乗った上で、残念ながらケイが変わり果てた姿で発見された事実を告げ、追って警察機構本庁捜査課より詳しいお話を伺いにあがりたいのですが、と彼女に了解を求めてきた。悲報に愕然としたアンジェラだったが、ブランの落ち着いた説明と心遣いに、辛うじて心地を保つことができた。

ところが、それからほどなく、またも電話が鳴った。

さつきとは違う男性の声で「警察機構の者ですが」と名乗ったのだが、なぜか属人名を口にしない。その男性はかなりの早口で、メディア・レイメンティル社の所在地やアンジェラ自身の素性といった、およそ被害者に関する情報とは別のことばかり尋ねてきた。

その電話には素直に応じたが、切ったあとで妙な胸騒ぎを覚えたアンジェラ。

（今の人、本当に警察機構の職員かしら？ 何か、様子が変わった……）

思っているうちにまた電話が鳴り、受話器を取ると今しがた喋ったばかりの男性であった。

『先ほど確認し忘れたことが何点あったので、お聞かせいただき

たいのです』

アンジェラの返答を待たず、一方的に自分の質問をぶつけてくる。それも「ケイは最近どういう記事を書いていたのか」「あなたは今、どういう紙面の担当か」「ケイとは普段付き合いがあるのか」などと、露骨に核心を衝く類の質問である。

これにはアンジェラも腹を立て「先ほど、追って本庁捜査課の方がお見えになるのでその時にお話いただけますかって言われたんですよ？　どうして今喋らなくちゃならないんです？　私は同僚を喪って悲しんでいるのに、よくそんな訊き方ができますよね！　あなた、本当に警察機構の方なんですか！？」

感情的にまくし立てた。

すると

「……」

物も言わず、一方的に電話は切れた。

受話器を手にしたまま、アンジェラは呆然としていた。

（この男の人、絶対に警察機構職員なんかじゃない……。明らかに、私か会社を狙っている……。！　もしかして、テロリストか裏組織の人間なんじゃないかしら！？）

怖気が立った。

瞬間、いても立ってもいらなくなり、会社を飛び出すとその足で警察機構本庁に駆け込んだ。

「なるほど、な……」腕組みをして聞いていたエドはうむと頷き「その電話をした奴が恐らく、テック・ロウという巡査だったんだろうな。お前も覚えているだろ？　俺達が現場に到着してすぐに会った巡査だよ。理由はなんともわからんが、ともかく通報してきたアンジェラをも消す必要があったんだろう。そう考えれば、メディ・ア・レイメンティル社爆破は彼女を狙ったことで、その後テックが自殺したのは彼女を殺すことに失敗したから、という見方ができる」

事柄を整理しつつ道理に沿って組み立てて見せたエドの推理力に、

メイファは舌を巻いた。

「はい。テック巡査はすごく誠実そうな人に見えたんですけど……」
「人間、見てくれじゃわからねエよ。ウォレン先輩だって、警察機構バツジがなけりや見ようによっちゃただのチンピラにだって見えなくもない」

言いかけて、ふと傍にいるリナの顔が目に入ってきた。

この女性も見てくれは素晴らしく美しいが、先日来容貌とは裏腹のろくでもない発言ばかりかましてくる姿を何度も目撃しているが、本人の手前、その点については黙っておいた。

「テックの野郎、何をどう上手く誤魔化したか知らないが、よりによって警察機構に潜り込んでいやがったんだ。——そのあたり、何かわかつてるか？」

「それがですね、自殺したテック巡査なんです、半年前にカイル・ヴァーレン警察機構首都管轄本部と州警察機構との間で行われた交換研修制度でこっちにやってきていた人らしいんです。カイル警察は事実関係を確認する、と回答したまままだ何も言ってきてません。ですから、詳しいことは……」

「そんなこつたろうと思った。要はザルだったんだろう、向こう様の職員採用制度が。さもなきゃ組織のどこかに関係者が紛れ込んでるってこつた。揃いも揃ってどうもならん連中だな、カイルの奴らは」

呆れ半分、憤り半分といった調子でぼやいたエド。

しばらく天井を睨んで考え込んでいたが、ふとメイファとリナの視線に気付くと我に返ったように

「いやさ、夢に出てくるんだよ。あの巡査の首が飛んだ瞬間がな。警察機構に入って色々とエグいものは見てきたが、生きている人間の首と胴体が離れるのを見たのは初めての経験だったな。首から下はバラバラに吹っ飛んだつてのに、首だけはちゃんと残りやがるんだ。いやはや、人間の身体ってとは意外と脆いもので——あ？ どうした、二人とも？」

ふと見やると、二人は顔を青ざめさせ、手で口を押さえている。

「せ、先輩…… ちょ、ちよつと、失礼します！」

「あのっ！ 私もっ！」

宣言するなり、バタバタと勢いよく病室を飛び出して行ったメイ
ファとリナ。

いつもの症状が出たらしい。

「ったく、しょうがないヤツだな……」

——数分後。

「……で、何でしたっけ？ 人間の首って簡単に飛ぶんでしたっけ？ それって、酷いですよねえ、あははー」

「……」

たった今吐いてきたことも忘れたかのように、あっけらかんと笑っているリナ。

「ちよつとリナ、それ、笑い話じゃないんだけど……」

隣でメイファは呆れ返っている。まだ顔色がすぐれない。

彼女は手帳を取り出してペラペラとめくりながら、他にエドに伝えるべきことはないかと探していたが

「ああ、あとケイさんが殺害される前日に誰と会って何の話を聞いたのか、それはまだわかっていません。文書に打ち直したというデータもボイスレコーダーも見つかってないんです」

「だろうな。ケイが持ち歩いていたとすれば、永遠に発見は無理だ。犯人が持ち去っている筈だからな。——それよか、アンジェラが知っている限りのこと、どんな小さなことでもいいから訊き出すんだ。彼女が身の危険を感じて逃げてくれたのは不幸中の幸いだった。存外、グツと真相に近づいたような気がする」

「わかりました」

「ところで……」エドは話題を変えるべく、ふと思い出したことを口にした。「リナさん、今はスティーレインを辞めたんでしょう？ 今は何を？」

彼女と初めて会ったのは、ストレン商会なるスティーレイングル

ーブ系列の小さな会社であった。

あの後間もなく、ストレン商会は閉鎖されてしまっている。横暴な会長・サントスの差し金である。もともと、リナがそこへ飛ばされた理由というのが、そのサントスを思い切り引っぱりたいからなのだが――。

「私ですかあ？　今、免許を取りに教習所へ通ってるんです」

「免許？　普通車両免許ですか？」

「いえ、C M D特殊機一級免許です」

つらつと言つてのけたリナ。

エドとメイファは啞然としている。

何が楽しくてこの女は特殊機一級免許など取得しようとしているのか。

C M D特殊機一級免許。

国軍陸団C M D部隊、治安維持機構、あるいは大企業専属C M D専門警備会社等々、C M Dでの喧嘩を商売にする人間が取得するような免許である。おいそれと取得を目指す馬鹿はいないと言われている。

そもそもC M D免許は四種類に分類されており、一般稼働三級、一般二級、一般一級、そして特殊機一級。特殊機というのは、端的にいつて「完全人型機」を指す。三年前にC M D稼働資格法の改正があり区分名称が若干変更されたものの、制度そのものは長い間変わっていない。

理論上、限定された作業のみを目的に稼働させる場合、機体が完全人型である必要はない。作業に適した形態であることこそ望ましく、特に土木作業など足場の悪い場所で稼働させるにはずんぐりとした下重心安定仕様が最適とされている。完全人型では重心に安定性を欠き、悪くすると転倒して搭乗者が受傷する恐れがあるからだ。あるいは消火作業や特殊救命作業に用いられる機体ならば、作業用アームならびにマニピュレータ制御がより繊細かつ高出力化されたタイプが好ましい。

が、C M D同士で戦闘を演じる場合、殊に近接戦目的となれば話はがらりと異なる。

砲撃戦を想定した機体の場合は重火器使用時にかかる反動を考慮し、土木作業用C M Dと同様下重心安定仕様が適している。しかし俊敏性が要求される索敵強襲行動にあつては、動作の鈍重な下重心安定使用機では話にもなにもならない。といって、脚部ばかり発達させた多足仕様高機動規格機——これは主に、国軍陸団の偵察機に採用されている——が不適なのも事実である。なぜならば、一秒でも迅速に相手に接近しつつ速やかに仕留めることが目的である以上、近接戦に堪えうるアームの存在も合わせて不可欠だからだ。稼動中のC M Dを停めるには銃器で撃ち抜くよりも、本体に搭載されている電導系を一撃するか股関節部に強いダメージを与えるのが最良である。つまり、砲弾を撃ち出しながら走るだけの戦車のような機体では、相手のC M Dを迅速に停めることはできない。

以上の点を総合的に検討すると、近接戦闘に適したC M Dの形状は完全人型機がもつとも望ましい、という結論に至る。逆に、完全人型機の有効な使い道は喧嘩以外にないといっても、あながち外れではない。

そういう物騒なC M Dに乗るための免許が「特殊機一級免許」なのである。

ゆえに、リナのような若い女性が取得したいと言い出せば、周囲の人間が驚くのも無理はないのだ。

「つてかさあ、特殊機免許なんか取つてどうするつもりなのよ？」

何か就職の当てでもあるワケ？」

「いや、これといって」

あつさりと首を振つたりナ。「どうせ取るなら、と思っただけよ。当てなんかないわ」

と言つてから、つとエドの顔をまじまじと見つめ始めた。

「……でも、今決めたわ」

「何を？」

「私、治安維持機構に入ります！　CMD部隊のドライバーになって、エドさんの仇を討ちます！」

「はあっ！？」

エドを恋うあまり、とうとうこの女もおかしくなったかとメイフアは思った。

「リナあんた、何言ってるの！？　免許取り立ての人間なんか、治安機構に入れてくれるワケないじゃん！　それに女性のドライバーなんて、採用してないわよ？」

メイフアの言う通りであった。

治安維持機構に入隊するためには、まずは治安維持大学を受験して入学しなければならず、それでもCMD部隊に配属されるかどうかは適性や成績が大きくものをいう。なりたいたいという子供のような衝動が通用する世界ではないのだ。

たしなめたが、リナはまるで聞く耳を持たず

「ううん、私、入るもん！　絶対に入隊して、テロリストを片っ端からやつつけるの！　エドさんに怪我させるなんて許せない！　死刑よ、死刑！」

彼女の判決では、エドに怪我を負わせた者は万死に値するらしいが、その犯人はすでにこの世にないのだが――。

「あ、あはは……。まあ、気持ちは嬉しいけど……。ねえ」

エドは笑っているしかない。

その笑いが完全に乾いている。

再生編2 遊泳する悪魔

港湾一帯を支配していた静寂と闇は、にわかに近付いてきたけたましいエンジン音と回転灯の光によって切り裂かれていた。

「各車両に通達します！ A小隊とB小隊、直ちに機体を起こして付近の警戒にあたりなさい！ C小隊はA、Bの両小隊と連携を保ちつつ大破した機体から負傷者の搬送作業に着手すること！ 各隊、賊の二次的な襲撃があることを想定しつつ行動して頂戴！」

握ったマイクに向かって口早に指示を飛ばしたサラ。

すると、間髪を容れずして各小隊から了解の返事が寄越されてきた。

「サラ統括長、我々はどちらに回りましょうか？」

タイミングを見計らったようにして、ハンドルを握っているリド副統括長が尋ねる。

「そうね、岸壁の方へ寄せてもらおうかしら？ 最後に機体稼動反応があつたのは東寄りの海側みたいなの。さっきから沈黙しっぱなしだから、とても無事だとは思えないけど」

「了解です」

頷きつつリドはハンドルを小刻みに右、左ときつた。何かを避けたいらしい。

「……パーツ？」

「ですね。あれはうちのじゃなかった。殴り合いの弾みで吹っ飛んできたか、さもないや逃げる途中の落とし物でしょう。港湾課の連中が大人しくやられたとも思えませんしね」

恐らく後者だろう、サラは思った。

治安維持機構港湾ブロック中隊はテロ組織など犯罪組織の活動を水際で食い止めるべく、屈強な猛者達が配属されている。不意打ちをくらって潰滅させられたにせよ、賊を無傷で帰すとは思えなかった。怪我の一つや二つ、負わせているに違いない。

「今通つたの、南第三倉庫のあたりだったかしら？ 後で拾つて警察機構に引き渡しましよう。すぐにどこの機体が判明すると思うの…… さすがは港湾課の面々だわ。転んでもタダじゃ起きないもの」

多少の感心をこめて言うと、リドは軽く笑つて

「了解ですよ。もつとも、賊の連中がわざわざ引き取りにやつてくるとも思えませんかね」

軽口を叩いた。いつ襲撃されるかわからない状況だというのにえらく落ち着いている。

つられて苦笑を漏らしながらも、サラの目線は前方の闇に注がれ続けている。中隊の先頭を走っているため、物陰に潜んでいる賊にでも出くわしかねないからだ。二十四時間体制で稼働している中央ターミナルとその付近を除き、夜間船舶の離着や作業がない埠頭にまともな照明設備はない。頼りは特殊装甲車の前照灯、それに車上の投光機のみである。

犯罪組織は湾岸のこうした状況を巧みに利用して裏取引や密輸に及ぶケースが多い。警察機構管轄の湾岸公安課が常時取り締まりにあたっているものの、次第に凶悪化していく犯罪組織の活動摘発には、大きな危険を伴うようになっていた。薬物や禁輸製品ならまだしもCMDがらみとなると、生身の警察機構職員ではまったく手に負えない。

そこで二年前、都市統治機構は治安維持機構の大幅な組織改編を実施し、従来の五ブロック中隊に加え新たに港湾ブロック中隊を新設した。海岸部に面した五地区——列挙するとE、J、O、T、Yの五地区——を所轄とする中隊である。

この組織改編は実務本位に考案されたもので、各ブロック中隊間において迅速かつ複合的な支援が可能となっている。例えば、E地区所属の小隊が緊急支援要請を発報した場合、A地区からD地区までを所管としているAブロック中隊、それに隣接するJ地区の小隊がE地区小隊支援のために出動することとなる。少なく見積もっても二個小隊四機のCMDが応援に駆け付けてくるといふ状況を想定

すれば、この仕組みは相当有効であるといっている。逆に、新規でC M D四機を相手にしなければならぬ犯罪者にとって、無事に逃げおおせること自体極めて至難の業となる。

加えて、AからEブロックの中隊では一個小隊あたり二機のC M Dで編成されているのに対し、港湾ブロック中隊では一個小隊につき三機のC M Dがあてがわれている。一度に三機のC M Dを稼働させることができるというメリットはことのほか大きく、二機での活動と比較すると連携行動における機性能性が飛躍的に向上する。犯罪組織の跋扈を阻止すべく都市統治機構がいかに港湾地区の治安を重視したかがよく理解できるというものである。この点、都市統治機構も無能ではない。

ところが今夜、その港湾ブロック中隊の一つ、J地区小隊から緊急支援要請発報が入った。サラが率いるBブロック中隊の支援対象地区である。彼女が知る限り、港湾ブロック中隊設立以来緊急支援要請が発報されてきた試しはない。状況が甚だ不明瞭であるものの、事態を重くみたサラは麾下の三個小隊に出動を命じた。合計六機、重厚すぎる救援といっている。

現場へ急行しつつ途中で何度も連絡を試みたが、J地区小隊からの応答はない。サラは最悪の事態を想像したが――到着してみれば案の定、倉庫群の一郭で大破して転がっている機体を発見した。首や腕が無惨に引き千切られ、装甲があちこちひしゃげている。相当手ひどく打撃を加えられたものと見ていい。機体ばかりか、後方支援を役回っている装甲車などは倉庫の壁にぶち当てられて原型を喪っているではないか。周辺に隊員達の姿はなく、一見ただけでは安否はわからなかった。

目を覆いたくなるような惨状に思わず息を呑んだサラだったが、そこは彼女も場慣れしている。すぐに持ち前の冷静さを取り戻し、例の指示を下すに至るのである。

ほどなく彼等の乗る特殊装甲車は海に突き当たった。

右手は資材が大量に積まれていて行き止まりだが、左手には車両が楽に通行できるだけのスペースが続いている。リドは黙ってハンドルを左へ回した。

直後である。

「……リド、停めて頂戴！」

いきなり叫んだサラ。

同時にタイヤが甲高い音を上げてコンクリートの路面をこすり、特殊装甲車は急停止した。

ブレーキを踏む方に意識を集中していたリド、ギアをニュートラルに落としてつつ目線をあげるなり

「うわ！ 何だこりゃ？」

驚きのあまり声を上げていた。

——埠頭の先に向かって点々と、大破したCMDの残骸が散乱している。

首、胴体上部、胴体下部、上腕、下腕ほか両脚と、これ以上分解できないという単位まで細かく破壊されているではないか。都合、二機分。よくよく見てみればその中には、破壊された特殊装甲車やトレーラーのパーツも混じっている。

「あれ……うちの機体よね？」

サラが恐る恐る尋ねると

「そのようにしか見えませんが。白とスカイブルーのカラーリングが施されたCMDなんて、治安維持機構港湾ブロック中隊以外にはないと思いましたか」

そう答えたきり、リドもまた沈黙してしまった。

眼前に広がっている光景は、言葉を失わしめるほどに凄惨すぎるのである。

二人は我を忘れたように黙りこくっていたが、ややあつて無線機が短く唸り

『こちらC小隊ファーストバック、ミスです。Nセンサーによる探知を行いましたか、付近に賊の機影は発見できません。つきまし

ては、これより負傷者の搜索と収用に着手します。緊急搬送隊の現場立ち入りを許可していただけますか？」

スピーカーから判断を求める声が飛んできた。

ハッと我に返ったサラは慌ててマイクに手を伸ばし

「こちらサラよ。警察機構の同道を条件に許可します。間違っても単独で来ないように、念押ししておいて頂戴。賊が本当に去ったのかどうか、今のところ確証はないわ」

『了解。今から緊急搬送隊および警察機構にそのように連絡いたします』

通信を切ったあと、不意に苦笑いを浮かべたサラ。

「……いやあね、私ったら。呆然としている場合じゃないわよね。部下がテキパキ働いているのに、指揮官がぼんやりしてちゃ締まらないわ」

長く垂らした前髪の下の額をカリカリやっている。

普段は厳格な上官が垣間見せた愛嬌に、リドは好意的な口調で「そうでもありませんよ。危険が潜んでいるかもしれない区域を先頭に立って乗り込んできている訳ですからね。むしろ、中隊の士気は」ガチャリとシートベルトを外した。「……高まっていると思いますよ」

言いながら、ドアを開けようとしている。

「ちよっと待って。車から降りてどうするの？」

「ええ。これから先はパーツが散ってますから、タイヤで踏めばパンクしてしまいます。A小隊かB小隊の支援を待ってちゃ時間がかかりますから私がさっさと行って、直接状況を確認できましょう」
豪胆な青年である。

万全を期してCMDでゆくべき所へ、生身で踏み込もうとしている。

サラはシートベルトを外すと携帯無線機を手に取り

「私も行きます。二人の方が、早く状況を把握できますから」

「しかし、統括長……」

「この先は埠頭の突端で行き止まりよ。賊が逃げずに倉庫に潜んでいるとも思えない。それより、まずは詳しく状況を確認しなくちゃいけないでしょう?」

リドが運転している最中、指令センターから送信されてきた広域マップで付近の地理は確認している。確かに大きな倉庫群が続くものの逃げ道がない以上、行く手に賊が留まっている可能性は低い。降りて歩いたところで大した危険があるとも思えなかった。

ドアを開けて車から降り立ったサラ。

海から吹き付けてくる風が露わな両腕にひんやりと冷たい。

潮臭いのは当然だが、都会育ちのサラにはあまり馴染めない臭いであつた。

辺りは夜空の闇をそのまま地上に落としたかのように暗く、視界は十分でない。特殊装甲車の前照灯と車載投光機の光があるものの、強すぎるそれはビームのように真っ直ぐ遠くまで飛ぶだけのことで、広範囲を照らすのには適していない。

前方に目を凝らしつつ

「……さっきやられていたのとその機体、合わせて三機よね?

E地区小隊とO地区小隊がいないわ。間に合わなかったのかしら?」

ふと疑問に思い、独り言のように呟いた。

聞こえていたリドは頷き

「ですね。各地区小隊基地の距離からいけば、我々より早く到着できない筈がない。ちよつと面妖だな」

「各小隊には、緊急支援要請発報は間違いなく飛んでるのよね?」

「飛んでいます。うちの通信システムのログを見る限り、それは確認できます」

おかしいこともあるものだと思つた。

彼女が率いるBブロック中隊がはるばるG地区から駆けつけてくるのに対し、E地区小隊やO地区小隊は隣接する地区への出動であるから、先に到着していなければならぬ。位置関係からいえば、両小隊は緊急支援要請発報を受信してから遅くとも二十分以内の到

着が可能なのだ。

もつとも、出勤してくる途中で渋滞に巻き込まれるケースは皆無でないものの、中心部から遠く離れている上に夜も遅い時間帯である。出勤経路が一般車両の混雑で閉ざされていたとはとても考えにくい。

となれば、何らか――あまり大きな声では言えないような――の事情によって出勤遅延した、ということになる。状況が状況であるだけに、管理者である小隊長以下懲罰ものであろう。

そういうタイミングで

『――こちら中央指令！ Bブロック中隊、応答してください！』

無線機の受信ランプが点灯し、スピーカーから若い女性の声が聞こえてきた。

「きたきた。きつと、遅刻の言い訳ですよ」

軽口を叩きながら車内に戻ったリド。無線機でやり取りを始めた。その間サラは独り、大破した機体の傍まで寄ってみた。

言語に絶する惨状ではあることに変わりはないが、まずもって安堵したのは本体搭乗部、コックピットハッチが開いていて中が無人だったからである。周囲のキャリアや装甲車にも、隊員達が取り残されている気配はない。賊機の凶暴さに危険を感じ、潰される前に退避したのであろう。任務放棄といえはそういう言い方もできるが、無理に立ち向かった挙げ句原型も留めないような形で殉職されるよりははるかにマシといっていい。

それにしても、とサラは思った。

やり口が猟奇的以外の何物でもない。

こういう場合、推定しうる犯罪者側の目的や心理はほぼ限られている。機体や設備を完全に破壊して物的損失を大きくし、組織単位で打撃を与えることによって復旧に時間を要させる。あるいは、治安活動において高い実力を有する組織を完膚なきまで痛めつけ、逆に自分達の方がハイレベルであるという事実を突き付ける示威行為つまりはデモンストレーションの性格の行動である。

治安組織側としては迷惑も甚だしいのだが、こうなると事は厄介である。

取り押さえの利かない野獣が大都市に放たれたのと同義だからだ。今後の先行きに不安を覚えつつ、側面を無残に潰された頭部を見上げていると

「サラ統括長！ 凶報ですよ！」

特殊装甲車の方からリドがすっ飛んできた。

「当該事象発生時刻前後、E地区北第四埠頭とO地区中央埠頭においても同様の襲撃があった旨、中央指令センターから一報がありました。両隊とも所属不明機による不意打ちを受けて潰滅、O地区小隊では多数の負傷者が出た模様です。——そりゃ救援に來ない訳ですよ。同じ時間にやられてしまつてたんですから」

やや、度を失っている。

「何ですつて！？ 同時多発！？」

一驚したサラ。声が裏返つてしまっている。

「そんな重大な事態が発生しているなら、どうして一報をくれなかったのよ？ 私達がブロック統括本部を出動してから三十分以上経っているのに」

やり場のない疑念と苛立ちが口調に現れている。

リドは逆らわずに

「確かに中央指令センターからの連絡はありませんでしたね。——ただ、我々が緊急出動してから到着までの間通信が途絶えていたところから推測するに、同時多発のためにセンターが混乱をきたしていた可能性があります。不測の事態に直面して、よほど慌てたのでしょう」

「だとすれば、随分平和ボケした中央指令ね。オペレーターの訓練がなつちやいないわ」

任務よりも給与と休暇ばかり気にしたがる若い女性オペレーター連中の顔を想像して思わず罵ってしまったが、今は彼女らを罵倒しても意味がない。

「じゃあ、E地区とO地区の方は？ それぞれ担当ブロックの中隊は向かったのかしら？」

「そのようです。ま、今から到着したところで我々同様、呆然とするしか手が無いでしょうけど……」

ぼんやりしていたら隊員達にどやされるわよ、と釘を刺してから、各小隊に一報を入れるよう命じたサラ。離れた位置で任務にあたっている彼等が、今もなおE地区小隊とO地区小隊の支援があるものと信じている可能性が高いからである。サラは大破した機体の周辺を忙しく動き回り、負傷者がいないかどうか念のため再確認していく。

——それから程なく、静寂に支配されていた埠頭はにわかに騒がしくなった。

何台もの警察機構車両が続々と到着し、職員達が現場検証を開始したのである。

制服姿の職員に混じって一人だけ、スーツ姿の男性がいる。

彼はサラの姿を目にするなり、大股でつかつかと近寄ってきて「指揮官の方でいらっしゃいますか？」

「はい。治安維持機構Bブロック統括長で、サラ・フレイザと申しますが」

「初めまして、私は警察機構本庁CMD専任捜査課のライド・ゼスと申します」

名刺を差し出してきた。

こんな時に名刺の交換もないだろうと思ったが、相手は別組織の者である。非礼になつては良くないため、サラもまた名刺を渡しておいた。

「早速現場の検分を開始させていただいております。私もCMD課には四年ほど在籍していますが、いやはや、ここまで酷いのは初めてのように入います。実に卑劣な犯行ですね」

型通りの世辞でも述べているようだが、口調に落ち着きがあり、聞いていて不快になるような感じではない。むしろ、相手をも冷静

にさせつつやり取りを円滑に進めようとするタイプの人間ではないかとサラは思った。

「ええ。正直なところ、私もここまでののはちょっと……。現場検証の方、よろしくお願いいたします。我々には無傷の機体もありますから、必要があれば声をかけてください。お手伝いいたします」

「ありがとうございます。では、少し時間をいただきましたでしょう」と言つて、パーツが散乱している方へ行ってしまった。

そうして彼は三十分ばかり鑑識課の職員達と共に動き回っていたが、やがて戻ってくると

「サラさん、ちょっとよろしいでしょうか？」

捜査の様子を眺めている彼女に声をかけてきた。いちいち丁寧な男である。

「はい。何か、ございましたか？」

ライドは埠頭の海寄りの方角を指して現場検証の途中経過について簡単に説明をしたあと

「——という点から、今のところ結論は一つしか導き出せません。

賊の機体は恐らく、港湾ブロックJ地区小隊を潰したあと、そのまま海へ飛び込んだ可能性が高いと思われます」

やや困惑気味にそう告げた。

最も新しいと思われるC M D特有の足跡——対地加圧歩行跡という——が海の方を向いており、その位置からどう推定しても海中に落下したとしか考えられない、という。ところが潰滅させられたJ地区小隊機の残骸はいずれも岸壁上に残されている。つまり海にダイブしたのは賊機の方、という結論にしかない。警察機構では念のため岸壁上の退路についても調べているが、対地加圧歩行跡は発見できないという。潰されたJ地区小隊のそれがないのは当然だが、賊機が陸路撤退したとすれば、岸壁上のどこかに引き際についた対地加圧歩行跡が発見されねばならない。見当たらないとなればライドが主張する通り、海から逃げたと断定せざるを得ないのだ。

「海へ逃げた、ですって!？」

サラは顔色を変えた。

「何かの間違いじゃありませんか！？ 水中稼働仕様の完全人型C
MDなんて、現在はまだ試作開発段階なんですよ？ ちゃんと海中
も調べたんですか？」

勢い、ライドを詰るような口調になってしまっている。

人型と言い切っているのは、格闘戦が演じられた形跡に由る。完
全人型機でなければ、CMDをこつも残酷に破壊することは到底不
可能であるからだ。

が、彼は落ち着いた表情のまま

「もちろん、調べています。ダイバーを潜水させての捜査はこれか
らになります。Nセンサーによる一帯の機影探知を行った限り、
沈んでいる機体は確認できません。となれば」軽く苦笑いして見せ
「……泳いで逃げた、としか考えられないじゃありませんか。どこ
かへ泳ぎ着いたか、あるいは溺れてしまったのかは定かじゃありま
せんが」

冗談めかしく言ったが、サラは笑わない。

「あ！ じゃあ、船舶に搭載して持ち去ったという可能性は？ こ
の闇ですから、あるいはそれも――」

「残念ながら、そのセンは薄いと思われます」

ライドは手にしていた数枚の紙に目を落としつつ

「乱闘の状況から推定して賊は少なくとも二機以上で行動していた
と考えられますが、二機を越えるCMDを搭載できる船舶となれば
そこそこのサイズが要ります。まだ完全に確認できてはいません
が、二十時以降にこの南第三埠頭から船舶が離岸したという情報は
今のところありません。というよりも、今日はこの岸壁に停泊して
いた船舶自体いなかった可能性ががありますね。州港湾管理局からは
そのように報告がきています」

船舶を離着させる場合、事前に港湾管理局へ届出をしなければな
らない。

無届、というのも仮説の一つになりうるが、ライドが言う通り、

CMDを搭載できるサイズの船舶となれば当然人目につく。港湾管理局が黙って看過する筈がないのだ。

「……」

思いつく限りの仮説を否定されたサラは沈黙せざるを得ない。

彼女が主張した通り、ヴィルフリート国内において水中での稼働を前提とした機体の開発はなおも試作の段階を脱しておらず、市場には一機たりとも出回っていない。もっとも、海底探索用や海難救助機など用途が特化された水中稼働仕様機は存在するが、耐水圧や水中航行時における水流抵抗抑制といった機能性、あるいは乗員の緊急時脱出機構搭載といった点から、言うまでもなく人間の形とはかけ離れた形状になっている。海中行動にあつては、人型仕様など不応の限りといつていい。最先端技術の粋を結集したCMDの宝庫といつていい世界各国の国軍でも、未だ机上のプランに終始しているのが実情なのだ。

しかしながらそれが何者かの手によつて極秘で開発され、しかも犯罪に利用されたとあれば事は重大である。治安維持機構や警察機構港湾課による従来の港湾警備体制を根底から覆されてしまうからだ。

ライドはやれやれ、といった面持ちでサラに向かつて

「ま、辛うじて死者がなかったのは不幸中の幸いでしよう。貴隊にとっては不名誉でしょうが、警察機構内部でも今回の事件はかなり重大視されることになると思います。何と言つても、海を泳ぐCMDなんて、今までお目にかかったことがありませんからね」

慰めるように言い、その場を離れていった。

——その後、潰滅させられた港湾ブロックJ地区小隊の隊員達が姿を見せた。A小隊とB小隊の面々が、車両に乗せて連れてきたのである。

幸いなことに三名のドライバーを含め、隊員全員が無事であつた。不意を衝いた襲撃のためほとんど応戦する間もなく、退避するのが精一杯だったと彼等は口々に語つた。唯一、後方警戒にあたつてい

た一機だけが直前に賊機の稼働を確認、遭遇を待つて反撃を試みたが及ばなかったという。

それはいい。

ただ、サラを戸惑わせたのは、数名の隊員による目撃証言である。「海に？ それ、間違いないの？」

「ええ、間違いありません。賊機は一号機と二号機を破壊したあと、岸壁から海へ滑り込んでいったんです。あれは落ちた、とかいう雰囲気じゃありませんね。自ら海へ入ったとしか見えませんでした。水面を打つ音だけでなく、水飛沫が上がったところも見ています」

と、隊員の一人は当時の模様を仔細に述べた。

不意打ちで潰されたのを悔しく思い、せめて後の捜査に役立つようにと危険を承知の上で様子を觀察していたらしい。かつての治安維持機構であれば我先に退避するような人間しかいなかったが、最近ではこういう種類の隊員も少なくない。そういう点において、組織の世代刷新は大きな意味を持つものであろう。

「そう。危ない中をありがとうね。……もう一つだけ訊いておきたいんだけど、賊機は人型機だった、ということ間違いないかしら？」

サラの問いに、その若い隊員は大きく頷き

「間違いなく、人型機です。そいつがいきなり海に飛び込んだから、余計にびっくりしたんです。しかもですよ——」

機体の装甲が異様に厚く、一回りも大きく見えたという。

「大きいって、機体高長がTZLよりも上背だったの？」TZLとは、J地区小隊に配備されている機種である。標準的なサイズを有しており、どちらかといえば見た目スマートな機体といっていい。

「いえ、何というか、その……TZLを普通の人に例えれば、賊機の形状はまるでボディビルダーみたいだったんですよ。そのせいかどうかはわかりませんが、パワーが桁違いでしたし」

例えば面白く、適切である。

彼が何を言わんとしているのか、すぐに理解したサラ。

そうした重装を施されているにも関わらず、進んで水中に飛び込んだ不可解さを伝えたいらしい。たださえ水压下での稼動は容易でないというのに、厚い装甲を鎧ったまま海へ入るなど、世界中のCMD業界の常識から甚だしく逸脱している。いうなれば、身体中に重りをつけて入水自殺を図るにも等しい行為なのだ。げんに、各地の港湾開発地区工事現場では、バランスを崩した機体が海に落下してドライバーが死亡するという事故が後を絶たない。

が、今夜のケースでは事情が異なっている。

自決するつもりだったならまだしも、海中に沈んでいる機体はないという。

つまり、ライドが推測した通り——何らかの手段により、海中を移動して逃走を図ったとしか考えられない。

「前代未聞、つてやつかしら……？」

想像を超えた状況を目の当たりにしたサラは、絶句するよりない。

結局この夜、E、J、Oの三地区において発生した同時多発襲撃により、港湾ブロック中隊はCMD九機大破、負傷者八名という損害を出した。

それ以上に社会を震撼させたのは、襲撃を行ったとされるCMD——推定十機——がことごとく、海から逃走したという事実であった。このニュースはヴィルフリート国内のみに留まらず、世界各国において報じられた。犯行声明はなく、容疑者の足取りは全くつかめない。

連日CMD業界の関係者がテレビや新聞に登場してコメントを寄せたが、どれも推測の域を出なかった。共通しているのは、完全人型機の水中航行は現段階の革新技術の粋を集めてしてもほぼ不可能に近い、と述べた上で、それが犯罪組織の手で可能にされたこと自体社会への重大な脅威であるという意見であった。この点、サラが現場で感じたことと大差ない。

その、サラ。

事件から二日後の夜、G地区治安維持機構Bブロック中隊本本部にある統括長室から一本の電話を入れていた。

「——ええ、ええ、そういうことですから、こちらの心配は要りません。本部総指令長からは内々に承諾をもらっていますので。——はい、それで結構です。お忙しい中ご面倒をおかけして申し訳ありませんが、どうかよろしくお願いいたします」

受話器を置くと、ふうつと大きく一息をついた。

やや疲れの色が滲んでいるものの、その表情は暗くない。

（こういう時は、その道の方々にお願いするのが一番よね。何度も助けてもらった実績もあるし……）

再生編3 再生の鼓動

空の青はどこまでも果てしなく、清らしいばかりに澄み切っていた。一流れの雲すら見当たらない。

大きなウィンドウを突き抜けて降り注いでくる陽光。壁や天井、床に配された白がそれを跳ね返して目に痛いほど眩く、ちょっとしたコート程の広さをもつ室内は照明が要らぬほどに明るかった。

奥の方はカウンターを境に事務室となっていて、机に向かったり電話を取ったり、せかせかと忙しく立ち働く男女の姿がある。カウンターにはチェックの柄の制服を身につけた若い娘が二人、並んで座っていた。受付担当だが、人が来ないから仕事もない。

一人はとても眠たいらしく、しきりと生あくびを噛み殺してばかりいる。

すると、隣にいるメガネをかけた娘が不意に彼女の脇をつんと突いて

「……ねえルミ。あそこの窓際のソファに、女の人が座っているでしょ？」

声を潜めて耳打ちした。

「あ？ ああ、うん、いるわね」

ルミといった女性は返事をしたものの、興なさげであった。なおも眠たそうな顔をしている。

するとメガネ娘、

「あの人、多分セラ・ステイレーンじゃないかしら？ 前にテレビで観たのとすごく似ているし、着ている物が高価そうだから間違いないと思うんだけど」

興味津々といった顔つきで言うと、半分閉じかけていたルミの目が急に大きく見開かれた。

「え、うそっ！？ あのセ——」大声を出しかけたが、ハツとしたように手で口を押さえ「……セラさん？ そんな有名な人が、ど

うしてこんなところに来ている訳？　C M Dの免許でも取るのかしら？」

「さあ？　それはわからないけど、もうずっとあそこに座って教習の様子を眺めているみたいなのよね。何かあるのかしら……？」

——その、窓際の女性。

二人が推測した通り、セレアであった。

上品な仕立てのノースリーブワンピースを着て大きなサングラスをかけている彼女は一見、有名女優かアーティストに見えなくもない。

かれこれ一時間ばかり、ソファに浅く腰掛けて背筋を伸ばし、窓の外を注視し続けている。

彼女の視線の先、遙か離れた位置には二機の白いC M D。

人型機だが、頭部は形ばかりのもので、小さなメインカメラを装甲で覆った程度の造りに過ぎない。向かって右の機体の胴体には黒字でA、左の機体にはBと大きくペイントされている。両機は十歩程度の距離を空け、向かい合って佇立していた。

と、少ししてどこかでホイッスルの音が高く鳴らされた。

途端に両機は地を蹴って走り出す。

一直線にAに向かっていくB。

しかし対するA、機体の動きがやや鈍い。踏み出す足取りにも軽くぎこちなさがある。

たちまち間を詰め切ったBはAをとらえようと、右腕を伸ばした。その腕が触れようとした瞬間、Aの機体全体がぐわつと揺れた。

まるで倒れそうな勢いのまま、右斜め前へよたと踏み出していく。突き出されたBの腕が虚しく宙をつかんだ。

が、Bのドライバーは落ち着いているらしく、左脚を踏み出したところで機体はしっかりと踏ん張って停止した。間髪を容れずそこからすぐに体勢を立て直し、バックステップを踏むような感じでAの方へ向き直ろうとした。教習機ゆえスムーズとはいかないが、それでも動きの流暢さはAを圧倒している。

ところがA。

一步、二歩とよるめきつつ勢い余ったのかどうか、ほとんど横走りでもするようにしてBから離れていつてしまった。当然左脇で踏みとどまるだろうと予測するBにしてみれば、想定外の動きであることは言うまでもない。Aの姿を見失い、機体の動きに迷いが出た。その時である。

セレアから見て左へ左へと流れていたA機のふらつきがぴたりと止まる。

止まったと思った途端、B機に向かって踏み込んだ。間合いは多くない。

たちまち懷に飛び込んだAはBの胸部に左腕をかけつつ、すれ違うようにして右側へ出た。上手い具合に、バランスをとるために前へ出したAの左脚がBの後膝関節部にかかっている。さっきまでの頼りないふらつきが嘘のような、機敏で無駄のない動作である。見違えたA機の素早さに、さすがにB機は対応できない。

そこまですれば、あとは誰でも勝負の結果を言い当てる。

微動だにしなかったセレアが思わず、身を乗り出すようにした。

ぐい、という一押しで背中から地面に倒れこんだB機。

すかさずホイッスルが鳴り響く。勝負あった、という合図である。決して鮮やかな勝利とはいえないA機。しかし、巧みにB機の手をくらませつつ一瞬の隙を衝いてからの動作は並みのドライバーが出来るものではない。果たして、良か否か。

ふうつと大きく息を漏らしたセレア。

その彼女の傍に、頃合いを見計らってつと近寄って行った者がいる。

「……ご挨拶が遅れまして申し訳ありません。クセイア教習所ファースト・レイメンティル校校長のバツ・ライマンでございます。どうぞご贔屓に」

頭髪をすっかり失った、中年の大男である。プロレスラーだと紹介しても十分通る。

セレアはサングラスを外しつつソファから腰を上げ

「ステイレーン・グループのセレア・ステイレーンです。本日は急なお願いを聞いていただきましてありがとうございます」

ゆったりと頭を下げた。

バツはセレアの艶やかさにちよつと驚いた顔をしたが、すぐに相好を厳つくした。

「本日予定している教習生の実機を用いた模擬格闘戦訓練は以上です。一通りご覧になったかと思いますが」苦笑を浮かべ「どの生徒も、まだまだ教習時間が不足しております。ひどいになると、自機の脚につまづいて転倒するものもある始末でして……」

口振りに謙遜は感じられない。自分の教習所の生徒は皆出来が悪いと率直に思っているらしい。

が、同調して苦笑いするでもなく、セレアの表情は自然に明るい。「いえ、必ずしもそういうことではないと思いましたわ。確かに、中にはまだ不慣れな生徒さんもいらつしやいましたし、皆さんまだ練習の時間が必要でしょう。——ですが」

形のよい瞳がバツに向けられた。

「大きな可能性を秘めた生徒さんもいらつしやるようです。私の目には、そう映りました」

「ほ？ それはまあ、どの生徒にも可能性はあるでしょうが……」

彼女が何を言わんとしているのかつかみかねているらしい。

セレアはその美貌をやんわりと緩めると、窓の外を指した。

「もしも差し支えなければ、今模擬戦を演じたA機の教習生の方とお話させていただけます？ バツ校長さんはどのようにご覧になったかわかりませんが、私には非常に興味深い戦いぶりでした。月並みな表現をお許しいただけるのであれば、私はあれをセンスと呼びます」

「は、はあ。当方は一向に差し支えありません。すぐに生徒を呼びますので、少々お待ちを」

言い捨てておいて、事務所の方へ引つ込んでいったバツ。

偉い人の考えることはわからん。
そんな戸惑いの表情が彼の顔にある。

「——うん、うん、そりゃまあ、そうだけども。……でもよ、ミサ？　ラッセ教授が研究しているのはあくまでも水圧下における駆動機関への影響がどうか、っていうテーマであって、イコール水中航行がどうのってハナシじゃないのよ。多少の参考にはなるかも知れないけどさあ」

暗い室内に、若い女性の声が反響している。

携帯端末を片手に喋り続けながらも、時折片手で長い前髪をつまみでは枝毛を探す。と思えば、白衣の下から伸びているすわりとした脚を思い出したように組み替えたりしている。ほかには誰もいないためか、やたらとリラックスしながら通話していた。

「うん、それはわかった。明日にでも訊いてみて、使えそうな話が出てきたらメールで連絡する。——っていうかさあ、どうしてこの話があんたのところに持ち込まれてんの？　治安維持大学にもCMD工学研究機関の一つや二つ、あるじゃないよ。——あ？　そうなんだ。サラさんから、か。ふーん……」

頷いてから、つと遠い目をした。

表情がゆるゆると懐かしそうな風に変化していく。

「サラさんもすごいよねえ。国内の治安機構中隊でも特に優秀な部隊だっというじゃない。あのぐつだぐだのBブロック中隊をそのままで立て直したんだもんね。あたし達、そんなすごい人の下で働いたなんて、信じられな——」

不意に、デスクの上の電話機が鳴り出した。

彼女はちらと一瞥して

「あ、ミサごめん。外線かかってきちゃった。また連絡するから。じゃあねえ」

携帯端末を切りつつ、もう片方の手で受話器を取った。

「はいはい、こちらネガストレイト州立大工学部C M D機械工学科、カーラ研究室です」

「……あ、遅い時間にすみません。私はシェルヴァール州立大学工学部C M D総合科ベノ研究室研究生のユイ・エルドレストと申しませんが」

相手の名を聞いた途端、やや胡乱くさげだった女性の顔がパツと明るくなる。

「あーっ、ユイ！？ あたしよ、ティア！ やだ、こんな時間にどこしたのお？ 男に振られた？」

のっけからハイテンション。

電話の向こうでユイは一瞬詰まったが

「男運がないのはあんたも一緒でしょ、ティア。……最近どう？ 元気だった？」

「生きてたよお！ 課程は全部終わったし、C M D技術開発世界学会もなんとか切り抜けたし、ちょーっとヒマ入ったのよね。こっちに来る用事ないの？ たまには遊びにくれればいいじゃん」

大声で喋りながらチェアの背もたれに踏ん反り返ったティア。

受話器のコードが目一杯伸びてしまい、電話機が引っ張られている。

ユイはくすりと笑って

「ティアも相変わらずね。やることはやるクセに、遊び好きなんだから。ま、それもいいかなと思って、電話しようと思ってただけど……」

口調がどこまでも落ち着いている。

ユイ・エルドレスト。

ティアと同じく、十七歳という若さながらStar-line第一期を支えたメンバーである。創設前からステイレーングループに所属していたから、隊員であった期間はティアよりも多少長い。

二人は五年前の第一次組織改変でStar-lineを去り、それぞれC M Dの造詣を深めるために大学へ進んだ。当時ステイレー

イングループでは若手社員が学ぶ機会を確保するため、社員留学制度の充実に力を入れていたのである。ティアはネガストレイト州立大学、ユイはシェルヴァール州立大学を選んだ。どちらも国内最高峰の学府といいいい。

性格の違いから、Star-line時代は犬猿の仲だった二人。派手好きで遊び好き、何かと問題隊員だったティアに対してユイはどこまでも仕事熱心で、業務に関する事柄とあれば例え相手が上司でも容赦なく食って掛かったりした。当然いい加減なティアにもその矛先は向けられ、ぶつかった回数枚挙に暇がない。

が、Star-lineを去るにあたり、ショーコの仲裁によって二人は和解。共に成長を誓い合い、仲良く揃って本部舎を後にした。

その後、別々の州にいるためなかなか会う機会は持てなかったものの、折をみて互いに連絡をとりあったりしていた。どちらもCMD駆動機関という同じ分野について学んでいるため、何かと話題に事欠かないのである。Star-lineに所属していた頃も、二人は同じくメンテナンス・キャリア担当、つまり機体の整備を受けていたりした。

何か言いかけて、ちよつと言葉を切ったユイ。

間を置いて喋り出した彼女の声は低くなっている。

「……あのさ、ティア。こんな時間に電話したのはね、込み入った話があったからなのよ」

「込み入った話？」

「ばたばたさせていた脚がぴたと止まった。」

「そう。まずは遠まわしに言わせてもらうけど……あたしがネガストレイトまで遊びに行く必要はないかも知れない、ってこと」

「うん、それってさ」頷いたティアの顔から表情が消えている。「

……もしかして、ファー・レイメンテイルで落ち合いましたよ、ってハナシ？ 違っていたら聞かなかったことにして欲しいけど」

「そういうことになるかしら？ 一緒に遊ぶ時間は山ほどとれると

思うのよね。……もつとも』

そこでようやくユイの口調から緊張した感じが抜けた。

『——あっちに戻れば、前みたいに忙しくなっちゃいそうな気がするんだけど』

前みたいに、がことさらに強調されている。

「ふっ」

ティアは笑い出した。

「なーんだ！ どうも、お互いに同じ話を聞いてたみたいね。——だったら、話は早いわ。あたしの答えは今、決まった。ユイが受けるなら、受ける。それだけよ」

『なあに、それ？ あたし任せてこと？』

電話回線を挟んで、ひとしきり笑いあった二人。

笑い止むと、ユイは改まった調子で言う。

『あたしはね、ティア。今の自分があるのは、何もかも、ヴォルデさんのお陰だと思ってるの』

今となってはその人本人に報いることは出来ないけれども、もしたった一つでもできることがあるのなら、躊躇わずにやろうと思う。都市の平和とグループ社員全員の幸福を願っていたヴォルデさんの恩に報いるために今の自分ができること。それが何なのかって考えてみたら——。

「……言うまでもないわ、ユイ。オール了解。あたしも一丁、のつてやろうじゃないの」

そう受話器に向かって言ったティア。自然と不敵な笑みが浮かんでいる。

「小難しい話はナシよ。あたしも、あの頃のチームに戻るなら、って思ったけど、それはちよつと違うと思った。あたしはあたし。他の人がどうこうじゃないのよ。あたしもヴォルデさんとかみんなに色々してもらったから、今度は成長したあたしがみんなに返していくの。それでいいじゃん」

『ティア』

ユイがくすくす笑っている。

『他の人がどうこうじゃないって、たった今決断をあたしに任せたんでしょ？ 言っていることとやっていることが合っていないわよ？』

「あ、それもそうか」

また爆笑。

笑いながら、ティアは思った。

ユイの言う通り、この先に待っているのはかつてのような壮絶な日々かも知れない。

しかし——時間を経て、自分は変わることができた。もう、あの当時の自分ではない。

であれば、あの頃以上にもっともっと、色々なことができるのではあるまいか。

チームはがらりと変わってしまうだろうが、少なくとも一人、苦楽を共にできる親友が傍にいる。それだけで十分ではないかという気がする。環境や状況が違ったとしても対応できる自分になることを成長というのだ。成長できているなら、やれないことはない筈——。

じゃあそういうことで、と約を交わし、受話器を置いたティア。デスクに向かうと、すぐさまマウスを手にパソコンを操作し始めた。

画面に、メール送信フォームを開き、膨大な送信先リストから宛先アドレスを探し出してクリックする。

送る相手は——『セラ・スティーレイン』

コンコン、と遠慮気味にノックする音がして、ドアがゆっくりと開いた。

「あの、社長——って、リベルさんもいましたか。LEFのメンテ、一通り終わりましたんで、納品前のチェックをいただきたいんですが……」

戸口から顔を覗かせつつそう言ったのは、ショートカットが良く似合う女性であった。

活き活きとした瞳の下、頬のあたりが油で黒く汚れている。一見少女のような幼さを感じさせるものの、少女と呼ぶにはやや年齢を過ぎていて、そんな面立ちをもっていた。

背を向けて立っていたリベルは、振り返って彼女の姿を認めると「お、イーチェ。すぐに行くから、ちょっと待ってもらえるか？」

威勢よく返事をしてやった。

イーチェといった女性は微笑とともにこっくりと頷く。

そのまま立ち去りかけたが

「……あ、イーチェ。話があるからちょっと来なさい」

リベルの向こう側、デスクを挟んで座っている壮年が呼び止めた。

「はい……」

そそくさと入室してきてリベルと並んで立ったイーチェ。薄汚れ、古びた萌黄色の作業服を身につけている。潤滑油でもこぼしたのか、右脚の腿から膝にかけてじっとりと濡れて色が変わっていた。

壮年——社長——は居住まいを正しつつまっすぐにイーチェの顔を見て

「あまり、固くならないでくれ。肩の力を抜いて聴いて欲しいんだが」

声音を優しくして話しかけた。

が、そうは言われても社長の前である。

「はい」と返事をしつつも、彼女はCMDのように直立不動の姿勢を崩さない。いかにも緊張した面持ちで、わが上司の目線に耐えている。それに内心、これから何を言われるのかという恐れもある。

「リラックスしとけよ。トラム社長の話は悪い話じゃないんだぜ？ 来月から給料が上がるってんだからな。喜ばしいだろう？」

冗談めかしくリベルが言っていると、イーチェは「えっ？」という驚きの顔で彼を見た。

「まあまあリベル、給料が上がるかどうかは別の話だから、そう期

待をもたせるようなことは言いなさんな」嗜めたトラムだったが、続けて「……ま、恐らくそうなるだろうがな」

今度は、イーチェの頭上に「？」が点滅している。

ちゃんと仰ってください、とても開き直って訴えればよさそうなものだが、この若い娘はそれをしないのであった。ただ突っ立ったり、トラムの話の続きを待っている。どうにも素直というか、真っ正直な性格であるということがわかる。

トラムは仕切りなおすように表情を引き締めたあと、いきなり

「混乱しないよう、端的に言おう。——実は、近くステイレーングループ系列の新会社が発足するのだが、そこにイーチェ、お前さんを推薦したいと思っている」

切り出した。

デスクの左端に積んであった書類を手にとって目を走らせながら、彼は言う。

「急な話でびっくりしただろうが、リベルの旧知のさる重役からの依頼なんだ。本当はリベルに来て欲しいみたいなんだが、リベルは娘夫婦のこともあるって、このD地区から離れない。それよりもここですつと頑張ってくれているお前さんを是非推してやりたいって言うんだよ。——もちろん、仕事はCMDのメンテナンスが主だ。それ以外にもやることはあるようだが、ま、うちでやってた仕事とほとんど代わらないと思っていいだろうな」

言葉を切ると、リベルが後を引き取って

「お前さんなら、立派に務められると思うんだ。ここへ来たときやずぶの素人だったのに、独学でCMD整備士二級免許まで取ったんだからな。お前さんは若いし、これからもっと伸びるよ。こんな場末の」

言いかけて、ちらとトラムを一瞥した。

場末、とは言葉が過ぎたと思ったからなのだが、その場末の会社の社長であるトラムはただ苦笑いしている。

「整備工場なんかで終わって欲しくないんだ。だから、もっと活躍

できる場に出してやりたいと思ったのさ」

「……」

目を大きく見開いたまま固まっているイーチェ。

どうやら、何のことやら話が飲み込めていないらしい。

「あの、それって…… ということでしょうか？ 私に、どこかの会社へ行けと……？」

「行けとは言っていない。行ってみないか、と勧めている」

トラムは頷いて見せた。

「悪いが、会社名についてはまだ明かせない。色々と込み入った事情があつて、今はまだ公には出来ないようなんだ。——ただ、天下に鳴り響いたステイレーン系列の会社だから、入社して間違いなということだけは保証できる。どうだい？」

打ち出し方がちよつと乱暴だったかな、と傍でリベルは思つたりした。

が、このイーチェなら胸を張って推薦できると心の底から確信している。

——Star-lineを退職後、幼くして亡くなった孫娘の墓掃除を毎日欠かさずしながら、気ままに暮らしていたリベル・オーダ。

そんな彼のCMD整備士としての腕前を知っていたトラムが、自分が営む小さなCMD整備工場で働かないかと声をかけたのが二年ほど前、Star-lineを辞めてから一年後のことである。

彼はリベルがStar-lineへスカウトされる前に勤めていた建築会社の元上司であり、よき理解者でもあった。その厚意の最たる例として、リベルが家庭内のごたごたによつて娘・レイサから絶縁されていることを知ると、何一つ益するところなどないというのに、父娘の仲が復旧されるようにと東奔西走したりした。彼の尽力により、リベルはレイサと日常的に連絡を取り合えるまで関係を回復することができた。その恩義に報いるべくリベルは、再び作業着に袖を通すことにしたのだ。

彼が働き始めてから程なく、トラムの工場——ガーデット整備工場——に、一人の少女が雇われることになった。名をイーチェ・マクラインといい、まだあどけなさの残る十七歳。大して広くもない工場内をきよろきよろと見回している彼女の衣服はくたびれきつていて、いかにも生活の困難さを表しているかのようである。

何でこの子を？

尋ねたりベルに、トラムは

「……イーチェのおふくろさん、女房の遠い縁戚なんだ。俺も、身内を理由に働き口の面倒をみるなんてのはまっぴら御免なんだが、母子家庭で生活が相当苦しいらしくてな。しかも、よ」声を潜め「——その親父さんつてのが、どうやらリン・ゼールだかジャック・フエインの組織員だったみたいなんだ。そいつ、詳しくはわからないが何かの事件に巻き込まれて死んじまったらしいんだよ。どうせ籍なんか入れてないだろうから、法的には親でも何でもないと思うけどな」

テロリストの子、か——思わず胸中で呟いたりベル。

遺された恋人とその子——今日の前にいる——が、これまでどんな苦勞を背負って生きてきたかは想像に難くない。

父親の身元が定かでない上に、よりによってテロリストである。その子が誕生したからといって出生登録などもつてのほかであり、市民として認知されない以上生活保障はじめ社会福祉制度の恩恵にあやかすることはできない。ばかりか、どこまでも人目を憚りつつ暮らしていかなばならないのだ。市民生活を脅かすテロリストなどは人間の端くれとも思われておらず、白眼視されている。その血縁者であるというだけで社会的に排除されたり、ひどいものになると日常的に暴力を振るわれたりするケースもあるという。

ただ——そういった不遇の環境下に生まれてくる子供達が一向に減少しないのは、その母親達の生き方に起因する場合も少なくない。貧困層出身者の女性達は（一般的な傾向として、だが）より経済的余裕をもった男性を求めるようになりがちなのだが、懐具合が豊

かであることを誇示するような男に限って、大概是白日に顔を晒せないような所業に及んでいることがままある。

テロリストなどはその最たるもので、シンパから回されてくる資金は豊富だから、いきおいその振る舞いは豪奢となる。うっかり心を奪われて男女の関係にもつれ込み、身籠りでもすればそれが最後であるといつていい。どう転ばうと、その将来に幸福な家庭などは存在しない。テロリストの男はいずれ法の裁きか、あるいは組織の命令によって存在自体を抹消される運命にあるからだ。遣された女にその後の生活のための保障などある筈もない。

イーチェの母親もまた然りなのではないかと、リベルはふと思った。

それというのは、イーチェの身なりを見れば一目瞭然なのだ。年頃の娘の服装としては、あまりにもくたびれ過ぎている。

——といって、彼女自身に何の罪もないこともまた事実であろう。

しかも、まだ若い娘である。テロリストの落とし子だからといって、社会的制裁を受けねばならないような言われはどこにもない。むしろ、被害者として同情されるべきであるといつていい。

トラムもそういう考えであるらしく

「彼女を一人前の整備士として育ててやれば、我々も少しは社会の役に立つてこった。——どうだ？　彼女に仕事を教えてやってくれないか？　幸い、ごく真面目な子みたいだしな」

頼み込んだきた。

「なるほど、な……」

さてどう接したものかと思ったが、ふと娘のレイサのことが脳裏を過ぎった。

最も多感で親のケアが必要だった時期に彼がそれを与えてやらなかったがために、彼女を長い間苦しませてしまった。事情は異なるものの、イーチェもまた心に傷を負っている。他人の娘であるとはいえ、同じ轍を踏むような真似をしてはならないと思う。

リベルはちよつと考えてから彼女の傍へ近寄つて行くと

「……嬢ちゃん、C M Dは好きか？」

声をかけてやった。

彼女が飽きもせずにC M Dの方ばかり眺めていたからである。

「好きかどうかわかりませんが……」

そこまで口にしてからややしばらく、彼女は考え込んでいた。

やがて、ゆつくりと顔を上げ

「——人間と違って、自分で怪我も病氣も治せないんですよ？」

だから、人間がすっかり診てあげなくちゃいけないのかなあと思っていますが……」

おずおずと言った。

「よし！」

いきなり大声を上げたりベル。

キヤップをかぶり直しながら

「嬢ちゃんの言う通りだ。こいつらは自分で自分の面倒なんかみれやしねえんだ。だから、俺達がいる。それがわかりや十分だ。C M Dをいじる権利があるってモンだ。——ついて来な。一から全部教えてやらあ」

この男に小難しい思想や概念などはない。

あるのはただ、C M Dに対する愛情と整備への情熱のみとっていい。

が、暗に彼は——人間もまた然り、自分で自分の面倒をみなくてはならない——という意味も、言外に込めたつもりである。C M D整備士としての哲学、といつていいかも知れない。

イーチェはぼかんとしていたが、彼がそれとなく示した好意に気付くと微笑を浮かべて

「……はい！ よろしく願います！」

元気良く返事をしてリベルの後に付き従った。

以来、二年。

彼女はめきめきと成長を遂げた。

トラムがにらんだ通り仕事ぶりは至って真面目で、気が付けば特殊な技術を要する電装系の部位を除けばほぼ一人で一機丸々メンテナンスできるまでになっていた。リベル、それにイーチェという得難い人材を得たガーデット整備工場は日増しに実績を伸ばし、噂を聞き付けた大手建設会社から大口のC M D保守整備契約を持ち込まれたりもした。

果然、日々多忙を極めるようになった、そんなある日のこと。

夜、独り日課の晩酌を楽しんでいたリベルの携帯端末が鳴った。

「——もしもし、夜分にすみません。セラアですが」

電話の向こうから、懐かしい声が聞こえてきた。

「おお、嬢ちゃんかい。久しぶりだな。色々大変だったみてエだが、元気そうだな」

「はい、リベルさんもお変わりなさそうですね」

彼女の顔を見たのは、三年前の退職日が最後だったような気がする。それ以来セラアに降りかかってきた身を削るような艱難辛苦も、リベルはテレビや新聞の報道でちゃんと知っている。彼女に対して直接どうこうすることはなかったが、その下にいるシヨークには、何度か助け舟を出してやつたりもした。

互いの消息について二、三当たり障りのない話をしたあと、セラアは調子をあらため

「実は、折り入ってリベルさんをお願いがあるのです。——C M Dのメンテナンスに長けた方をご紹介ただけでないでしょうか？ 欲を言えば、リベルさんご自身にお声掛けしたいところではありますけど、近況を伺った限りそうもいかないみたいですので……」

そのように依頼してきた。

「人の紹介？ C M Dに触れる人間をかい？」

ぐいっとウイスキーのグラスを傾けた。飲み方は常にロックしかない。

何でまた、といいかけてリベルは言葉を飲み込んだ。

最近、俄かにスティーレイングループの動きが慌しくなりつつあ

る。カイレル・ヴァーレン共和国における資源開発プロジェクトへの投資を凍結してからこの方、あれだけ盛大に進めていた系列会社の合理化をぴたりと止めてしまったばかりか、現サントス会長の息がかかった経営幹部の首が次々とすげ変わっていくのである。

かつて所属していた組織のことだけに、関心は大いにある。

これはもしかすると——と思わなくもなかったが、それを突っ込んで尋ねるのは野暮というものである。今はもう、彼はステイレーンの人間ではない。

するとセラアは、そんなリベルの胸中を読んだのかどうか

『申し訳ないのですが、今はまだ、はつきりと申し上げられる段階ではないのです。——ただ、ここへきて組織自体が大きく変化しつつある、ということだけはお話できます。それに伴って、どうしても人が必要なのです。どういう意味であるのか、リベルさんにはお察しいただけるとと思いますが……』

含みのある言葉を口にした。

それを聞いて、自分の直感に間違いがないと確信したりベル。

「一応、訊いておこうか。ステイケリアにいるボーズにはあたってみたのかい？」

『ええ、サイ君にもお願いはしてあります。サイ君はサイ君で二つ返事で引き受けてくれましたが、その、彼は』セラアはくすりと笑い『こういう話はやっぱりリベルさんに相談しなくちゃ始まりませんよって、言うんです。整備士のことはやっぱり整備士に、だそうです』

いかにもサイらしい、とりベルは独り笑みを漏らした。

かつての天才ドライバーは、彼の整備士としての腕を今もなお無条件で信頼してくれている。良き後輩であり、息子同然でもあるサイの希望とあつては、引き受けない訳にいかないではないか。

咄嗟に頭の中で人選すると

「……わかった。深くは訊かねエ。数日、時間をもらおうか。目処がついたら連絡するわ」

そうして次の日の朝、こっそりトラムに相談を持ちかけた。

トラムはそもそも人が良い上に、視野の狭い男ではない。

「ほう、それはまた朗報だ。天下のステイレーンに人を送り込めるとは、我が工場にとつて一世一代の名誉じゃないか。是非、そのように持つていきたいものだな」

と、手放して賛同してくれた。

社長兼工場長の承諾を得たりレベルは何度かセリアに連絡を取り、待遇や手続きについて粗漏のないよう詳しく話を聞いた。そして今日、当のイーチェに打ち明けた、という次第なのである。

彼女は表情を消したまま、トラムのデスクに視線を落として考え続けている。

ややあつて

「……あの、お話はすごく有り難いと思います。でも、私は、私を雇ってくれたこの工場にまだ何もお返しできていません。ですから、他所の会社に移るとかそういうことは……」

ぽつりと言った。

正直な遠慮の気持ちだが、言葉尻に滲み出ている。

「何だ、そんなことかい」

トラムは笑い出した。

「お前さんという人材を送り込めること自体、うちの工場にとっては名誉以外の何物でもないんだよ。この業界は縦にも横にも繋がり強い業界でね、優秀な人材を輩出したとなればそれこそ大いに注目を浴びるのさ。——ただ、まあ」チエアの背もたれに体重を預けながら「最後はお前さんの気持ちだからね。無理に、とは言わないよ。行けばお前さんの腕前は飛躍的に上がるだろうけどね」

「あと、何も死ぬまでいろつて話じゃない。ステイレーンの人事は二年おきくらいであるから、嫌だと思ったらその時は戻ってくればいい。やり様は幾らでもあるぜ」

補足してやつたりベル。

戻ってくればいい、という一言を耳にしてイーチェが反応した。

「いいんですか？　また戻ってくるなんて、そんな虫のいい話……」
そこでトラムはにやにやと笑って見せる。

「まあ、やってみないとわからんよ。案外、居心地が良くなってしまわないとも限らんしな。あんまり、今から決めてかからない方がいい。はっはっは——」

「……」

恥かしそうに俯いたイーチェ。

これで決まりだな。リベルは思った。

この娘はいずれ、ステイレーングループになくってはならない人材になる、そんな気がする。

同じく貧困層の出ながら卓抜したCMD操縦技術を駆使してこの都市を守り抜いた、あのサイという青年と同じように。

技術を大切にする者は、逆に技術によって身を立てられていくのかも知れない。

そういう意味では、リベルも一緒とっていい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0711o/>

Star-line Second Season

2011年9月23日03時33分発行